明治学院大学機関リポジトリ
http://repository.meijigakuin.ac.jp/

Title	明治学院歴史資料館資料集 第07集 ： 昭和三〇・四〇年代の明治学院事情座談会
Author(s)	明治学院歴史資料館
Citation	
Issue Date	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/1297
Rights	

Meiji Gakuin University Institutional Repository
http://repository.meijigakuin.ac.jp/

明治学院歴史資料館資料集

第７集

―昭和三〇・四〇年代の
明治学院事情座談会―

明治学院歴史資料館

昭和30年代座談会風景

昭和40年代座談会風景

明治学院歴史資料館資料集　第七集

明治学院歴史資料館

序文

明治学院歴史資料館館長　辻　泰一郎

本書は、昭和三〇年代（一九五五―一九六四年）と昭和四〇年代（一九六五―一九七四年）における明治学院の大学および中高における学院生活の実情を当時学生・生徒として在学していた卒業生の報告と座談のかたちで記録にしたものであり、明治学院歴史資料館資料集第七集として発刊するものです。

昭和三〇年代は、敗戦後の疲弊した日本がようやく経済的な復興に向けて離陸をし、経済成長の波に乗って行く時期であり、政治的には東西冷戦を反映して国際情勢の緊迫も見られ、わが国でも自由民主党と社会党との二大政党の対立構造のなかで日米安保条約改定問題で岸内閣が退陣するなど大きく揺れることがありましたが、国内的には概ね比較的平穏な状況のうちに国民の生活水準が上がり、国民生活にゆとりと希望が見えてきた時代でありました。こうした未来に対する明るい気持ちは教育のなかにも反映され、多くの若者が大学へと進学していく時代、いわゆる大学大衆化の時代を迎えたと言えます。

これに続く昭和四〇年代は、まさに日本経済の高度成長期にあたり、日本の社会に大きな変化を引き起こし、東西の冷戦構造のなかでベトナム戦争や日米安保条約再改定などの問題が若者たちの間で大きな政

治的関心を呼び起こした時代でもありました。大学もまた、進学熱の一層の高まりとともに、大きく拡大を遂げた時代でもあり、いわゆるエリートたちのための象牙の塔から普通の人々のための高等教育機関に変身した時代でもありました。大学教育の在り方の根本的な変化のなかで、昭和四〇年代中頃大学では、あるいは授業料値上げや大学の管理運営の在り方、さらには、安保・外交問題等をめぐり、学生たちによる異議申し立てが生じ、激しい学園紛争が起きたことは、周知の通りであります。

本学院もまた、こうした社会の動きに対応をしてきました。武藤学院長のもとに、従来からあった明治学院高等学校に加えて、昭和三八年には東村山高等学校を設立し、さらに昭和四一年に白金にあった明治学院中学校を東村山に移転して、同地において中高の一貫教育を行うことにしました。また、大学においては同時に大学の規模拡大の道を選択し、昭和四〇年に文学部から社会学部を独立させ、文学部にフランス文学科を増設し、昭和四一年には法学部法律学科を新設し、時代の趨勢に応えました。そしてその後まもなく各地で生じた学園紛争の波は、立て看板撤去問題を契機に明治学院大学にも波及してまいりました。

もともと、ミッションスクールとして少人数教育を理想として掲げる本学において昭和三〇年代末から昭和四〇年代初めにかけての急速な規模拡大は、学院の発展の姿を示すものであると同時に、少人数教育の理念との間の齟齬と軋轢を意味するものでありました。

こうした全体的な状況のなかで、学園紛争が生じたときに、キリスト教主義大学である本学院においては、まさにそのキリスト者の使命をめぐって異議申し立てによってさらに先鋭化したのでありました。いわゆる大衆団交や教室や研究棟であるヘボン館封鎖などのあと、大学のロックアウトによってようやく事態が変わり、授業体制の正常化が図られましたが、学園紛争の火種はその後もくすぶり続けたのであります。

時節はめぐり、今や明治学院は、一八六三年のヘボン塾創設から二〇一三年に一五〇年目を迎えることになり、目下、学院では一五〇年史の編纂作業が進められております。その編纂作業のための史料的素材提供の一環として、歴史資料館では『明治学院歴史資料館資料集第五集—戦前・戦中・戦後の明治学院—』(二〇〇八年)を発刊し、当資料館として、これによってカバーされた昭和二〇年代に続けて、大学紛争を間に挟む昭和三〇年代と昭和四〇年代についても、同様に、中高大の学院事情を記録化する必要性を認識し卒業生たちによる座談会形式での各自の実体験の報告と対談を企画し、昭和三〇年代については二〇〇八年一〇月三一日に、また昭和四〇年代については二〇〇九年一〇月三一日に行われた座談会のテープを原稿に起こして、必要な補正を加えて出来上がったのが本書であります。

こうした座談会の意義ある記録化のため参加者の人選においては、特に事務局が鋭意努力してそれぞれ適任の方々にお願いしご参加いただくことができました。

すなわち、昭和三〇年代に関しては、とりわけ学院に学ばれ、学院の教壇に立たれた先生方にも加わっていただいたことにより、生徒・学生、および、教員という二重の視点から学院の生活を語っていただくことができました。

他方、昭和四〇年代の明治学院を語る場合、企画の過程では、様々な問題がありました。それは、事態の重さとその影響の大きさとからいって大学紛争を抜きにして大学事情を語ることは考えられなかったからであります。しかし、大学紛争を語ってもらうにふさわしい卒業生をどのように選ぶのか、選んでも座談会の出席を引き受けていただけるのか、立場の違いから座談会自体が成り立つことになるのかなどなど、この企画には最初から難問が付きまとっていました。しかし、事務局の用意周到な人選の結果、学部のバ

ランスや大学の状況とともに中高の事情を語ることのできる卒業生七名の方々のご出席をいただくことができ、それぞれから在学中の学院事情について貴重なお話をうかがうことができたことで、解決されました。

ご多用中のなか、資料集の座談会の企画にご協力賜わった方々に、この場を借りて深甚な感謝の意を表するものであります。

なお、座談の記録化という本資料集シリーズにおける第一次史料の扱いの一貫性の観点から、座談会のなかで出てきた人名やその他の固有名詞に関しては話し手の責任において実名をそのまま記載するという編集方針を立てることといたしました。もとより名誉棄損等の発言はなされていない、という前提に立ってのことであります。

もとより、昭和三〇年代と昭和四〇年代の明治学院事情がこれで網羅されているとは言い難いといたしましても、学生・生徒の立場から見た実際の情景がこのようなかたちで記録にとどめられることの意義は少なくないと思われます。

また、森井眞・金井信一郎元学長の回顧談を本資料集に収録させていただきました。これまでの明治学院の歩みを顧み、今後を展望する上で、示唆に富む内容となっております。貴重な時間を割いて、私どものために語って下さった森井眞先生、金井信一郎先生に心より感謝を申し上げます。

本資料集第七集の企画、連絡ならびに校正等事務的な作業一切を精力的に果たされた歴史資料館事務局の小杉義信氏とこれを手助けしていただいた櫻井真梨子氏に対して、編集代表者として厚く御礼申し上げる次第であります。

目次

序　文……明治学院歴史資料館館長　辻　泰一郎　1

昭和三〇年・昭和四〇年代の明治学院事情座談会……1

昭和三〇年代の明治学院事情座談会……3

二〇〇八年一〇月三一日（金）於：明治学院記念館二階会議室

昭和四〇年代の明治学院事情座談会……101

二〇〇九年一〇月三一日（土）於：明治学院記念館二階会議室

昭和三〇年・昭和四〇年代の学院点描……197

元学長回顧談……205

大学在職中の思い出……森井　眞　207

二〇〇七年六月二三日（土）於：『明治学院一五〇年史』編集会議室

戦前・戦後の自分史……金井信一郎　247

二〇〇七年一一月三日（土）於：『明治学院一五〇年史』編集会議室

昭和三〇年・昭和四〇年代の明治学院事情座談会

現在、明治学院では発信文書として学内文書・学外文書ともに西暦表記を用いている。これに従い、昭和三〇年代・昭和四〇年代を西暦表記すると一九五五年〜一九七四年までの二〇年間となり、『一九五五年〜一九七四年の…』と表記しなければならない。しかし、本資料集では一つの時代区分の表現として『昭和三〇年代・昭和四〇年代の…』として表記させていただいたことをご了解いただきたい。

今後、時代の証言として『昭和五〇年代』『昭和六〇年代』さらに『平成』へと各『時代』を学院ですごした諸先輩がたの声をとどめていくことも資料館に課せられた大切な役割であるということができる。

昭和三〇年代の明治学院事情座談会

二〇〇八年一〇月三一日（金）開催

＊必要に応じて注を付させていただいたが、一般的事項については『日本大百科全書』（小学館）（オンラインサービス）等を利用させていただいた。

＊昭和三〇年代・四〇年代を通して大学のキリスト教団体として盛んに活動したサークルに「S・C・A」があった（『明治学院百年史』四八九頁）。名称については昭和三〇年度における文化団体（第一部）として「S・C・A」（前掲四六四頁）、一九七五年学生自治会公認団体として第一部学友会文連会「基督教学生会」（前掲四九九頁）、第二部サークル連合会文化団体委員会「S・C・A（キリスト教学生会）」（前掲五〇〇頁）と記載され、また冊子表紙（『荒野の声』第八号一九五七年発行）は「明治学院大学基督教学生会」と記しており一様ではない。座談会出席者により呼び方も一様でないが、発言者のママとさせていただいた。

昭和三〇年代の明治学院事情座談会出席者

大学関係

【文学部関係】

中村（鈴木）克子氏　昭和三一年三月　大学　英文学科卒業

村上文昭氏　昭和三四年三月　大学　英文学科卒業
昭和五二年三月　大学院　文学研究科英文学専攻修士課程修了

【経済学部関係】

西村建紀氏

昭和三八年三月　大学　経済学科卒業

遠藤慎也氏

昭和三一年三月　明治学院中学校卒業
昭和三四年三月　明治学院高校卒業
昭和三八年三月　大学　経済学科卒業

伊東慶彦氏

昭和二六年三月　明治学院中学校卒業
昭和二九年三月　明治学院高校卒業
昭和三三年三月　大学　商学科卒業

【社会学部関係】

稲本誠一氏

昭和三七年三月　大学　社会学科卒業

坂根信義氏

昭和三九年三月　大学　社会学科卒業

中学・高校関係

陶山義雄氏

昭和二七年三月　明治学院中学校卒業
昭和三一年三月　明治学院高校卒業

歴史資料館

辻泰一郎先生　館長

司会　原　豊

昭和三〇年代の明治学院事情座談会

二〇〇八年一〇月三一日開催

原　よろしゅうございますか。こちらが明治学院歴史資料館館長の辻泰一郎先生でございます。法学部の教授でございます。一言最初にご挨拶をお願いしたいと思います。

辻　どうも皆様初めまして。今、紹介にありました、今年からこの明治学院歴史資料館の館長をおおせつかっております、辻泰一郎と申します。法学部に所属しています。今日は、本当に皆様にお目にかかれて光栄です。皆様それぞれ、お仕事などある中でお忙しいところ、この資料集のための座談会に足をお運び頂きまして大変ありがたく、感謝申し上げる次第です。ちょうど今日は、大学のほうでは学園祭の準備にあたる日で、学内がちょっとごたごたしていますが、大学の正門前のいちょう並木も今ちょうど銀杏の実が落ち始めまして、秋の風情が一段としてまいりました。このいちょう並木のある場所で、今日もそうなんですけれど、よく絵を描く人達のグループも来て、記念館やチャペルをスケッチする姿がここ最近毎日のように見られます。それからまた、芝生越しに、この記念館の景観がとても素晴らしいということで、これまたスケッチの画材になっているみたいです。最近では、全国の高校生も明治学院大学のキャンパスに修学旅行の一環として、見学に来てくれるようになってまして、我々の資料館にも立ち寄ってくれるということがあります。白金のキャンパスは、この全体のキャンパスの改築の構想が完成して、大体一〇年近くになってきたと思いますが、学生ばかりでなくて、そういった外部のお客様方にも楽しんでもらえる

ような全体、非常に落ち着いた佇まいになりまして、私ども学院に勤務する者としても、嬉しい思いがしています。大学では、今現在大学院・心理学研究科の新校舎の建設を、高輪警察署の近くで進めていまして、さらにこれから教育環境が整う、そういう予定になっています。今日皆様にお集まり頂いた趣旨は、原さんからもお話がいっていることと存じますが、歴史資料館の資料集の第七集として、昭和三〇年代の明治学院事情、具体的に教育活動、それから学生生活、それから先生方の思い出等々、そうした証言を記録として残すために、皆様方からの貴重なお話を伺って、あるいはお手持ちの資料なども持ち寄って頂くために、席を設けた次第です。現在学院では、来る二〇一三年の学院創立一五〇周年目に向けて、『明治学院一五〇年史』の編纂に鋭意取り組んでおりまして、いわば正史、正しい歴史といいますか、正式な歴史といいますか、正史としての学院史が書かれることになりますけども、しかしそうした学院史が、正史が扱う記事というのは、どちらかというと学院の公的、制度的な発展とか、重要な決定事項とか行事とか、あるいは重要人物の事跡などが盛り込まれて、個別の卒業生が学院時代に仲間と過ごした色々な思い出とか、交友関係とか、あるいは師弟関係、などという点については、必ずしも充分に紹介されることにはならないかと思います。しかし考えてみますと、その学院の教育とか、その学院の雰囲気とか、それからまた学院の教育理念から培われる、そうした学院の精神の浸透といったようなことは、実際は、各卒業生が皆心の中で感じ、また卒業後もそれを社会の中で体現して下さっているものということはできると思います。そうだといたしますと、一方ではその学院の正式な歴史の記録、正史の記録も、もちろん必要ではありますけれども、同時に正史だけでは、浮かび上がってこない学院の教育活動、あるいは学生活動のディテールの収集もまた貴重な記録としての意味をもってくることになります。それによって、明治学院の同

窓生、教職員が明治学院にいることについて自己確認ができるということにもなるからです。しかもそれは場合によっては、正史をより豊かにするもの、補完してくれるものとして、正史の基礎として役立ち得ることも充分期待できるということになります。そういうこともありまして、本日は『明治学院一五〇年史』の編纂事業の関係者の方からの陪席のご希望があり、皆様のお許しを得てこの席に同席させて頂くことをお願いしたいと存じます。この資料集の座談会の企画は、実際上は、歴史資料館の原さんが全面的にイニシアティブをもって進めて下さいまして、本日昭和三〇年代ということですが、一部二〇年代末も含まれるかと存じますが、この時期の学院を語って頂くにふさわしい八名の方々からご快諾を得まして、本日ここにお迎えしてこうした座談会の席が用意されたという次第です。それで、皆様のご協力とそれからまた原さんを中心に事務方の尽力を得まして、無事に座談会を行なう運びとなりましたことを、館長といたしまして心より感謝申し上げる次第です。特別、今日何もおもてなしをすることはできなくて恐縮ですけど、これからお昼ご飯をご一緒して頂きまして、その後座談会に入っていく予定にしています。私自身は、ちょっとこれから大学の所用もありまして、座談会の始まる辺りで失礼させて頂きますが、どうぞ皆様本日はよろしくお願い申し上げます。

原　それでは、はじめさせて頂きます。最初に私は明治学院歴史資料館の原豊と申します。明治学院中学昭和三四年入学、その後白金高校を出まして、大学のフランス文学科を昭和四四年に卒業しております。よろしくお願い致します。三〇年代のことはほとんど、中学生や高校生としては学内・校庭をうろうろしておりましたけれども、よく分かりませんので、何分よろしくお願い致します。最初にお断りしておきますけれども、出席予定者リストの順番に本来話して頂く予定でございますが、実は西村さんが、所用があ

りまして、この後抜けざるを得ないことがありますので、最初に昭和三五年当時、特に安保闘争の頃の学生時代の安保闘争のことも含めて経験をお話し頂けたらと思います。それでは、お一人大体二〇分ぐらいなんですが、よろしくお願い致します。それで、稲本さんが実は午前中、病院に行っておりまして、一時半ぐらいに多分到着になると思います。最初にお断りしておきます。それでは西村さん、よろしくお願い致します。

西村　申し訳ございませんが、所用のため最初に話をさせていただき少し早めに退出いたしますことをお許しください。北海道出身の経済学部一九五九年度生です。

私が明治学院を受験したのは、おじの強い勧めがあったからです。クリスチャンのおじは、当時、神田美土代町にあった東京ＹＭＣＡに勤務しておりました。そのおじが、入学試験受験手続書類を送ってくれました。当時、札幌で受験できる数少ない大学のひとつでしたが、運よく合格できました。

入学当時はまだ、五反田から銀座までの都電（四番線）が学院の横を走り、道路沿いに桜並木があって、ゆったりとした時間が流れる学院でした。今も桜の花に囲まれた緑が多い学院の風景が目に浮かびます。

当時は、文学部（英文学科・社会学科）、経済学部（経済学科・商学科）の二学部で、確か昼間部の学生在籍数が約三〇〇〇名だったと記憶しています。校門を入り、緩やかな坂道を上がるとチャペルがある光景は、昔の面影がわずかに残っていてとても懐かしく感じます。

卒業後、企業で二〇年、主に営業畑を歩みました。当時は、経済不況が続いており、就職できたのは就職部長猪熊文柄教授のおかげでした。その後、学生時代の友人で坂根孝春君（故人）が私立大学に勤務しており、彼の勧めで私も私立大学へ転職しました。父が教育者だったことも転職に踏み切らせた要因のひ

とつです。大学に約一四年間勤務しましたが、そのうちの八年間を「広報・学生募集部門」で過ごしました。その時に多くの高校へ訪問、全国で開催される進学説明会へ参加したことがきっかけとなり、今の仕事「進路アドバイザー事務所」を開き一三年が経ちました。高校生に進路選択のアドバイスや保護者、教員への進路に関する情報提供が主な仕事です。

学生時代の頃の話に戻りますが、六〇年に学生自治会の代議員会議長に推され、固辞したのですが悪友たちの勧めで引き受けました。六〇年安保闘争が本格化した時期です。ノンポリ学生が多かった明治学院にも「安保反対闘争に参加すべきだ」という雰囲気が出始め、特に白金高校の教員組合に理論的リーダーがいたように思います。また、同学年で社会学部在籍の佐藤洪一君が参加を強力に唱えており、彼の主張と活動が学生を参加の方向へ導いていきました。

日に日に安保反対闘争が激しさを増していき、明治学院の学生たちも無関心ではいられなくなり、参加の是非を問う学生大会が開催されるに至ったのです。激しい議論が交わされた結果、学生自治会の総意として「参加」が議決されました。当時、私は一九歳の未成年でした。私を推した友人たちと参加の是非の議論を重ねたこともあり、私は安保反対闘争に対するひとつの私見を持っていました。そこで、学生大会の参加決議があった後に発言を求めました。

「今、学生大会の総意として『参加』が議決された。自治会規則に基づけば、大会の決議は学生全員を拘束することになる。しかし、私を含め、学生の中には参政権を持たない多くの未成年が在籍している。私はこの政治問題に対して、明治学院は学院としての参加の仕方があると考える。そこで、学生個々の考えにより『自由参加』とすべきではないか。もし、この提案が否定されるなら、私は代議員会議長を辞す

る」と訴えました。感情論がエスカレートして安保反対闘争が過激に走り、結果、自制が利かなくなることに強い危機感を覚えたからです。幸い、私の発言が認められ自由参加となりました。

しかし、実際に行動を開始するには大学当局との交渉という難関があったのです。高橋源次学長[1]、加藤七郎事務局長、大山正春学生部長の大学当局と、私と代議員会の副議長土橋敏孝君（当時社会学部二年）とともに話し合いに臨みました。大学当局はあくまでも参加には反対で、話し合いは未明にまで長引きました。一号館（当時）の事務局の会議室が話し合いの場所でしたが、私を支えてくれる仲間の坂根、佐藤、坂口、白瀬、赤井、水野、永山、そして学生部の職員の畑中（秀）さんたちが事務机の上で仮眠をとりながら話し合いの行方を見守ってくれていました。翌朝六時ごろ、話し合いは条件付きで合意に達しました。会議室を出て、仲間の顔を見た途端、涙があふれ出し大声をあげて男泣きしたことを今も忘れません。

大学当局が参加を認める条件とは、①参加は個人の意思を尊重して「自由参加」とすること　②明治学院としての独自性を持つこと　③参加する女子学生も多いことが想定されるので、過激な行動を慎むこと　④学生部へ一日ごとの結果報告を必ず行うこと　⑤北明寮（男子寮）の学生を説得して、①から④の条件を認めさせること、などだったと思います。北明寮の説得が難問でしたが、話し合いを重ね合意を得ることができました。

もうひとつ難問がありました。それは参加することに強く反対している応援団の説得でした。当時の団長は黒須氏だったと思いますが、幹部に杉本君（当時経済学部二年）がいて、彼を通して話し合いを行いました。話し合いは難航しましたが、明治学院の独自性を保つことを担保して暗黙の了解を取り付けました。

いよいよ安保反対運動のデモ行進に参加することになるのですが、私は色々思案を重ね、運動を統括する小さな組織を作りました。その狙いは、佐藤洪一君や笹川義弘君ら活動家の組織内への取り込みでした。特に彼らは理論武装ができていて、ノンポリを扇動し熱くするすべに長けていたので、フリーに活動させると抑えが利かなくなると考えたのです。坂根君、佐藤洪一君、笹川義弘君、佐藤佳久君、白瀬卓君、そして私の六人が委員となり、その合意で動くことにしました。

最初のうちデモに参加する明治学院の学生は、一五〇名程でしたが、日を追うごとに、女子学生の参加が増えて総数が約五〇〇名を超えることもありました。全学連の反対運動が日ごとに過激さを増していき、ジグザグデモやフランスデモ[2]が道路を占領して断続的に交通機関をマヒさせました。日常であれば違法な行動が、デモという集団の力を借りて堂々と行動に移せることへの快感に酔い、理性が薄められていく危険性を身を持って体験し、そのことに危機感を感じました。そこで、ジグザグデモがはじまっても、明治学院のところでジグザグ行動を断ち切りました。明治学院のデモ隊には女子学生の参加が多いこともあり、危険防止の意味もあったのです。また、フランスデモで道路の通行を遮断することも多く、路線バスやタクシーなどが巻き込まれ、当事者の立場からすれば迷惑なことのはずです。そうしたときには仲間たちと、バスやタクシーの運転手や乗客に「ご迷惑をおかけします。もう少しお待ちください」とお詫びをして歩いたこともありました。ジグザグデモの流れを切り、フランスデモをいったん中止することもあったので、一橋大やお茶の水女子大のデモ隊からは「明治学院は裏切り者だ」と、強く抗議を受けました。しかし、「明治学院は明治学院のやり方で行う。それが不満なら別行動をとる」と抗議を跳ね返しました。

六月に入ると安保反対運動が強まり、国会周辺へのデモ行進は深夜まで続くようになりました。デモが

終わるのが二三時、二四時になることもあり、女子学生はなるべく早目にデモを切り上げさせ、集団で帰宅させるように取り計らいました。デモを無事終えると、大学で待機している学生部の畑中さんに電話で必ず結果報告をしていました。これらの私の行動が、佐藤君や笹川君とは当然意見が異なり、喧嘩腰でやり合いもしましが、仲間の支えによって、どうにか私の考えを通すことができたのは幸いでした。キリスト教大学合同のデモもありました。過激な行動を行わず、整然と反対の意思を示すデモでした。このデモを見ていた国会周辺を取り巻く大勢の一般の方々から、たくさんの拍手と励ましの言葉を受けたことで、デモ（デモンストレーション）の本当の意味を実感させられました。

安保闘争で、今も鮮明に覚えている光景があります。「樺美智子さんの死」[3]です。六月一五日の夜、明治学院のデモ隊は、当時は更地だった現国立劇場の場所に待機していました。そこへ全学連の宣伝車が近づき、我々へ向かってアジ演説を始めたのです。「勇敢な明治学院の同士諸君、今、反動岸（信介）は国会に火を放ち、騒乱罪を適用して自衛隊を治安のために出動させる準備をしている。重要な書類を国会裏から運び出している。これを許していいのか。我々に続け！」という強烈なアジテーションでした。騒然とした雰囲気の中、ただでさえ熱くなっている学生たちは行動を起こそうとしました。だが、なんとはなく疑問が生じたので、いきり立つ学生を説得して押しとどめ、坂根君や佐藤佳久君らと一緒に真偽を確かめるために国会の裏門へ向かいました。そこで警備の警察官（機動隊）とデモ隊の衝突の修羅場を見たのです。当時東大の学生の樺美智子さんが巻き込まれて亡くなったのです。全学連のアジテーションに乗って行動を起こしていたとしたら、大勢のけが人を出していたところでした。冷静に〝一歩引いて考える〟ことの大切さを思い知らされた瞬間でした。

明治学院としてのやり方を通せたことは決して間違いではなかった……。今もそう思うことができるのは幸せなことだと言えるでしょう。

一九歳の田舎者の私にとって、わずか一カ月ほどの安保反対運動が、その後の学生生活と社会人として過ごした人生にとって少なからず影響を持つものとなりました。その当時の仲間たち（先輩・後輩を含め）とは今も付き合いが続いています。ところで、佐藤洪一君は今、元気でいるのでしょうか？　会ってみたい人ですね。

原　ありがとうございます。ちなみに、佐藤洪一さんは現在共産党本部で、私が調べたところでは資料室の副責任者というような肩書きだったと思います。

西山　私は佐藤をある意味で尊敬しています。

陶山　前後関係も含めて、ちょっといいですか。私はちょうどその時は東京神学大学の学生だったのですけど。東京神学大学と東京女子大が一緒になって、その全学連という学生のグループではなくて、キリスト者平和の会っていう中で動いていたのです。それにはやはり、某（なにがし）かの指導者がいるわけで、佐藤洪一さんではなかったです。明治学院の中にも学生の自主活動でなさった部分ももちろんあると思うけど、あの時、もうすでに高等学校は、教職員組合連合が出来ているんです。[3] その教職員組合連合の方々の決議を経て、六月安保に参加するように動いたのですよ。そして学生との連携も、佐藤さんを通していくつかあったはずです。佐藤さんはそういうコネクションを、高等学校の教員、もう亡くなられた人です、高橋泰郎と言う、ヤスは天下泰平の泰、オは郎ですね。高橋泰郎という先生、ご存知でしょう。彼は世界史を教えていた。まさにこの流れの中の方ですから、しかしそんな跳ね上がった人じゃない。でも、きちんと指導

性のある人で、この人のお弟子さんが佐藤洪一なんです。だから連携を取っているはずです。そして、なぜキリスト者の仲間に入らなかったのかはわかりません。高橋先生はクリスチャンではないから。だけど我々は東京神学大学から出ている。それで現場で会うのですよ、高橋先生。ところがその明治学院高等学校教職員組合は、なんとキリスト者の仲間に入っているのです、原田昂先生とか、その時まだ校長になってない社会科の先生。それから伊藤虎丸先生。この方は後に東京女子大の先生になって最後は平和学園の園長になったりしている。こういう人達は皆、やはりあの当時は、もう二度と戦争は起してはいけないと考えていた。ちょうどサンフランシスコ条約から一〇周年になるところで、今度こそは占領下じゃない、我々の民意で決められる、そういうところからものすごい高まりがありましたからね。だから特別なイデオロギーで起ったのではない。でもイデオロギーの人もいた。それは佐藤洪一さんなんかもそうだけど、彼もかなりコントロールされていたはずです。

西村　佐藤洪一君は、ある意味で尊敬しています。あるエリート意識からでしょうか、表面的な思想にかぶれ、過激な行動の先頭を務める学生が必ずいたものです。当時の明治学院にも存在していました。しかし、卒業年度を迎えると大企業への就職のために大きく変節していく者も少なくありませんでした。でも、佐藤洪一君は信念を変えなかった。その点を私は深く尊敬しています。

陶山　彼は卒業後就職先がなくてね。結局母校の明治学院高等学校の図書室のアルバイトで身を少し立てていたのです。それをね、思想的な問題で動いていたとは思えない。私が就職した時にはもうおりました。私は佐藤君の高校時代も大学時代のことも知らない。教員となってから知った。そういう人です。最終的には革新系の政党本部の方に、就職口が見つかったんです。

西村　随分彼とは会いたくて、色々探したのですけど、どうもわからなくて。当時若い頃、本当に私も、彼のある一面しか見ていませんでしたから。だけど段々私も年をとって色々考えて、彼のいわゆる一つの信念を貫き通したというのは本当素晴らしいなと。

坂根　いや、今西村さんの話しを伺っていて、ああ懐かしいなと思いながら、実は私も樺美智子さんが亡くなった時、国会前にいたのです。その時、私は一年生でしたから、明治学院のリーダーたちがどういう動きをするかということにすごく関心があった。中には「皆すぐ国会に行くぞ」とかそういうことをやっている時に、実に冷静に明治学院のリーダーが「待て」と「今行っても何にもならないんだ」と。「整然と運動をやっていることをぶっ壊す気か」というのがね。今、名前が出てきた佐藤さんとか笹川さんとか、ああいう人たちが一生懸命押し留めたんですよ。それで僕はすごく納得が行った思いがあります。そこにいらしてたんですね。だから、結局、明治学院の安保に対する意思表示はこういう形なんだと。これがやっぱり正しいんだって、僕はすごく納得できたんですよ。

西村　佐藤君も笹川君も明治学院の学生であり、明治学院を愛していたのだと思います。それがチームの絆だったのでしょうね。

坂根　だから今出てきた名前、私も覚えている。

陶山　それと私が申し上げたかったのは、佐藤さんを育てた、つまり高等学校から育っている。そしてその高等学校の教職員の連合体があるということ。だからね、明治学院史を書くにあたって色々な視点があるけれど、明治学院教職員組合の歴史のこの頃というのは重要なんです。そして、その後も明治学院高等学校、東村山も含めてね、大学の組合も出来てきます。そういうことと教育の柱というものとの関連を明

確にして行くと、今の行動と結びつきますよ。なぜあそこでブレーキ役になったのかということを、跳ね上がるなっていうね、一緒に育ってきたそういう仲間であったから、学生をも説得していたという風に私は見ています。

西村　私が今もその当時のことを肯定できるのは、怪我人を一人も出さなかったということ。お金がなくて、三宅坂から当時住んでいた原宿のワシントンハイツの近くまで歩いて帰ったことが何度もありました。きっと苦しく辛かったはずなのですが、達成感はありました。苦しさや辛さは覚えていません。

坂根　あの時キレた連中は何をやったかっていうと、僕は目の当たりにしてきましたけれど、車が突っ込んできたりするとプラカードでバンバン叩くんですよ。それでフロントガラスなんてもうめちゃくちゃになって。そういう動きがありましたね。プラカードに長い釘を、まあ武器ですよね。だからそういう中で非常に冷静に、行動したのは明治学院のデモ隊だったということです。

中村　この年代の私たちは直接、学院の闘争とは関係ないのですが、たまたま千葉県の中学校の教師となる試験を受けていました。面接の時、試験官が「あなたの大学が闘争しているけれども、それについてどう思うか？」と質問されました。子どもを二人生んでいますから、やっぱり母親としての母性でしょうか「自分を育ててくれた母校に対して校舎を破壊するという行為は、子どもを殺すことと同じに思える、私たち女性（母親）はそういう気持にはなれない」と答えたと思います。非常に心が痛みました。私の友人が若手の助教授になっており、学長を守る立場で必死になっていたのを聞いておりましたので…。明治学院がどうしてそういう風になって行ったのか…。子育て最中だった私はなにか悲しかったですね。

西村　六〇年安保が終わり、ある意味での静寂な時を迎えたのですが、反対運動に参加した学生の多くに

ある倦怠感が流れていました。そして岸信介首相が暴漢に襲われ重傷を負う事件が起こりました。全学連の次の活動目標が各大学の民主化運動となり、大学生協や学生食堂をのっとる闘争につながりました。

陶山　六八年です。このチャペル封鎖もそうです。昭和四三年です。

西村　あの当時大学の学長はある意味で、聞く耳を持ってくれましたよ。それと信用してくれました。ですから、こちらもやはり毎日報告するのを、随分裏切り者だ、体制派だと言われましたけど、それは「待ってくれている人、心配してくれている人たちというのがいるんだぞ」と。私も意地っ張りですから、それはもう貫き通しましたけれども、でもそういうことができたということも一つの大きな収穫です。

陶山　それがね、あと六、七年後に起きる、七〇年頃にはどう変っていったかということで。特に学生との関係が変わって行きましたね。それから私はこの時もう教員ですから、教員の視点から見て、学生がどうあったかということね。それは後でお話します。ですから佐藤洪一さんの時とは違います。

西村　その後の私たちは、放送研究会に所属していた先輩や後輩を巻き込んで、白金祭の情報宣伝（略称：情宣）委員会で活動し、主に白金祭のポスターやプログラムを三年間に渡り作成しました。今も図書館の書庫にあるかもしれません。

情宣で知り合った人たち、先輩の瀬尾さん、水野さん、国谷匡子さん、後輩の木原君、小原君、そして天明茂君（公認会計士・宮城大学教授）たち、すでに亡くなられた方もおられますが、何人かとは今も折に触れて出会いを持っています。

もう一つ忘れられない思い出として当時の同窓会館があります。情宣委員会の活動場所として三年間自由に利用させていただきました。松田彦寿さん、池田由美子さん、関口のおばさんには本当にお世話にな

りました。私は卒業後も三年間ほど、学院の建築関連の電気関連工事を竹中工務店から受注していました。学院のＬＬ（Language Laboratory ランゲージラボラトリー）に語学演習装置を納めたのも私の担当でした。高橋源次学長からは「君は学生の時よりも出席率がいいね」とからかわれたものでした。卒業後も仲間たちの〝たまり場〟になっていました。今も楽しい思い出になっています。

遠藤　二つのことでちょっと質問があるんですけど、僕は高校時代は佐藤洪一とは同学年だったけど、違うクラスだったんです。はっきりいってその言動、例えば生徒会等で余りに偏った考えと言葉使いに、「佐藤洪一というのは学生としてはちゃんと勉強した学生なのかな」という疑問も一つあるのと。それからさっきお話があった高橋泰郎という先生、僕らはヤス、ヤスって呼んでいたんですが、先生は世界史を教える先生でしたけども、恐らく中国史の中頃迄で一年間終ってしまったんですよ。要するに、やるべきカリキュラムを全部消化できない先生で。それで、今度逆に言うと、運動に参加しない生徒たちが、佐藤洪一に対する眼も、それから高橋さんに対する眼も、はっきり言ってどっちかというと蔑視、要するに軽蔑の眼でね、「あれは大事なことは判ってない人だよ」と。先生も非常に自分で判っているようなことを言っていたんですけども、生徒は誰もなつかない。僕らの組は五五、六人だったんですが、高橋先生は良い先生だって言って慕っていた生徒は今思い起してみても五五、六人の内の二人くらいだったのではないかと。安保は大きな問題なんだけども、授業のカリキュラムをきちっとこなさないで、そういうのが大事で、その高橋先生は僕らの授業の最中に、僕らの前で「私は唯物論者なんだよ」なんて言っていた。まあそういう先生もいられたってことは、明治学院の幅広いところなんでしょうけど。そういうことを平気で言って、それで、授業も全然進まない。自説の社会主義の能書きばかり言っていて。それからわりと常に

優秀だった清水、その他何人かのよく勉強ができた人間を、こき下ろすような先生だったので、全然僕らの時代では。それからまた卒業してから一〇年くらいして会いました。たまたま、先生を慕っていたひとりが落語家になりましてね。田中誠というのが、柳家小三太というのになって、今、東家夢助と名前が変わっているけど。もう一人今圓窓、小三治と、三人の会っていうのを作っていて、僕らも落語聞きに行きました。それからしばらくしたら僕らの同級生は柳家小さんのところからはぐれてどっかへ行ってしまって、それこそ北海道の方に行っていたらしい。それで帰って来て「改めて、前の林家正蔵のところへなんとか入れてもらったんだ」とか言っていたんですけど「ちょっと集まってくれないか、激励してやってくれないか」と言うんで僕ら行ったんですよ。そしたら、高橋先生も来ていたんです。それで、僕らのとこに来ていても、皆普通なら「先生こんばんは」と言うんでしょうけども「何あの人が」という風な、なんていうのかな、相手にしてなかったというのか、先生の気付かない所で、生徒も先生の人間性が判る。そういうようなところがあった先生だった気がするんですよ。本当に先生という仕事が出来たのか、という疑問があるんですよ。そして東家夢助も世に出られた様子がありません。個性と異端は似ていても別物です。一風変った先生に染められた生徒は「世」に出ても可哀そうです。

陶山　社会科学研究会、そこに佐藤洪一さんがいたわけなんですよ。しかも高橋先生は授業よりも、休み時間とか、昼休み、放課後の指導も熱心ですよ。時には、家まで呼んで下さってね、一生懸命面倒見る、そういう方でもあるんですよ。だから私自身はどうなのかって話さなければいけないですけど、やはり受験勉強だとか、いわゆるカリキュラムですね、そういうのは一切無視なんですよ。理由はあの先生の戦争体験なんですよ。家族を亡くし、子どもを亡くし、そして、本当に、まあそれから学徒動員ですね、そう

いう中で、国に裏切られたという思いはかなりあったでしょうね。そういう目では見ていますから二度と戦争を次の世代の人たちにやって欲しくない。学ぶとは何か。今、仰るように世界史ならば、古代から現代まで、全部教えるんだ、社会の先生はやるんだと。それはいわゆる、なんていうかな、本当に文部省的なカリキュラムというもので育てていくのが良い教師だと一般には見られている。だけど、あの先生の情熱は別なところにある。その情熱と触れ合ったときには、佐藤洪一さんのようになる。そういう生徒たちも結構いるんですよ。数をいえば、仰るとおり少数であるかもしれない。だけどね、私は彼の葬儀をやりました。彼の葬儀を私が司式したのです。牧師なのに、何でお前は無神論者の葬儀をやるのかと思われるけれど、あの先生が、遺書に書いておられた。それで私は受けたのです。そういう出会いがあったことは確か在学中で、しかもその、授業以外のところでの関わり、これも大きかったですよ。授業そのものはというと歴史漫談というかな。

遠藤　いや、授業らしきものは何も出来ない人だと思います。

陶山　だからノートや黒板など無視して聞いていればいいんですよ。戦争に対して、まさに反戦ですよ。そこの部分がね、どの時間でも全部出てくる、そういう授業でした。それがいいか悪いかは、まあ勿論、人によって違うでしょう。

遠藤　伊東さんは受験勉強しないで、上の学校へどんどん、伊東さんも多分そうだっただろうと思うんです。僕もそうだったから。ですから、そういう受験勉強とかそういうことではなくて、普通によく覚えとかなければならない、育つ過程で覚えとかなければならないことを教えられない先生で。自分の主張ばっかりで。

陶山　また逆を言うとね、「受験準備、そんなの自分でやれ」と言うのです。あの先生はね、もともと開成中学の先生なんですよ。ところが戦後食べられなくなって、ここならミッションから色んな援助物資があるから、数年でもいいから凌ぐための場所として来た。そういう先生です。一方では実務出版社から『高校・政治経済』の教科書を執筆した実力派の先生ですよ。

遠藤　後にお辞めになったんですか？　当時は指導課で何にでも抑えつけようとして生徒は殆ど嫌っていました。

陶山　いえ、定年までいました。

遠藤　高橋先生の話はこのくらいにしませんか。

原　はい、ありがとうございました。すいません。ちょっと、時間がオーバーしてしまいまして、色々と安保だとかお話は尽きないとは思いますが、順番で次に伊東さんお願いします。

伊東　私は一九四八年、昭和二三年に中学に入りまして、大学を昭和三三年に卒業。一〇年間明治学院にお世話になりました。今色々お話を伺っていて、僕なんかは、のほほんと過ごして来たなあと思っているんですが。僕らは戦争の時にガキでね、集団疎開していましたから、居直る癖があるんですよ。我々がえらい怖いと思うのは昭和一桁台の先輩たちです。これはたった二つ三つしか違わなくてもすごくおとなでね、兄貴に見えてしまう。そういう中で、のほほんとぶら下がって来てしまったのかもしれない。昭和二三年に中学に入学した時は、まだ戦争の名残があったと思います。というのは、入学式のクラスの写真を見ると、服装がマチマチですよ。昭和二九年に高校を卒業するんですが、卒業記念の写真は、皆、詰襟で金ボタンで勢揃いしていますよ。その六年間でがらっと変ってしまうのです。中学入学の時は担任の先生

が体操の石森先生という人だったのですが、担任になって一、二ヶ月で、メチルアルコールで死んでしまう。学校の教員といえどもまだ闇市で飲み歩く時代でした。それで、卒業する時には割り合いと豊かになって、僕らマンボズボン[5]履いてリーゼントスタイルの髪形をしていました。それから、中学に入った頃は『ボタンとリボン』[6]とか『テネシーワルツ』[7]とかジャズを聴いて、FENを聞いて覚えていたんだけど、高校を卒業する頃には目黒に気のきいた喫茶店がたくさん増えて。そこへ、スウィングジャズだとかモダンジャズだとか、ジャンルがはっきりしてきて、随分違ってくるのです。これはね、雅叙園に、進駐軍がいたのです。朝鮮戦争の影響だと思います。アメリカの兵隊がうろうろしていたから、情報もたくさんあって、目黒というのは、闇市からすこし早く様変わりした時代だったんですね。僕達はそういうところで高校を卒業して大学に入学したのです。僕の明治学院に入学した動機は、我々の一年前に新制小・中・高の六・三・三制ができたんですね。当時、僕らの行くべき公立中学がまだ建物も建ってない。近所の小学校の教室を借りて二部授業をやっていました。これもまだ戦争直後ですよ。それで僕の父親が「これでは駄目だ」というので、私立でなければという発想で。一番通いやすいところということで、それで明治学院に来たんです。それで、僕は明治学院に来て初めてキリスト教という宗教があることを知ったんです。それまで、戦争中、小学校にいて、いわゆる戦争が終るまで軍国少年だったのが、急に変って、中学から聖書を読むとか、讃美歌を歌うとか。毎朝朝礼の後チャペルに入って礼拝をする。やることが決まっているから礼拝をまたサボりたがって逃げる。「上手く逃げたぞー」なんて自慢したりするのですけど、あとで考えると、いい経験ですよ。そりゃ逃げるのが楽しいんです。昼飯前に弁当を食うとかね、そんなことを自慢する時代というのがあって。でもやはり僕は明治学院出て一番良かったと思うのは説教を聞いたこと

です。ボケナスと愛称された山本弥一郎先生は必ず母を称える、あれが、讃美歌がなくても歌えるようになる。それから村田四郎、高橋源次、松本亨先生ですかね。熱弁を振るいましたよ。腕を振るってね。そうするとワルの高校生なんか自然に私語がなくなるぐらい。だから「黙れ」って言うより上手い説教したほうがいいですね。それはよく覚えている。今社会人になってこの歳になると、ああ明治学院良かったなというのはそういうところです。だから、そういう意味でもチャペルの思い出っていうのは建物ではなくて、毎日そこで培ったものがあった。それから校庭の周りには宣教師、外国人の先生が住んでいたんですよ。外国人の先生が学校の中にいるというのは、すごく別世界にいる気分なんですね。そんな中で、ハナフォード夫妻だったかな。あの先生の乗っている車は普通のセダンではなくて、木製のボディーの車なんですよ。チーク材のステーション・ワゴンでかっこいいんです。それで、毎日のように、バケツに水汲んで、すごく丁寧に、掃除しているんですよ。俺ら中学生はもう珍しいから、色んなことを質問するんですが、単なるメーターをイチイチ説明してくれるんだけれど、迷惑だったろうなと思います。「この車はラジオが付いてないのか」とかね、色んな話しをした覚えがあります。

陶山　あの車は、コーバー先生に譲られて、最後は学院の車になったんですよ。村田四郎先生を戦後はじめてアメリカにお送り出すとき、在校生は全員並んであの車をお送りしましたよ。

伊東　ニス塗りで木目ですよね。

中村　お詳しいんですね、先生。

陶山　いやいやそんな。タイヤは白いし、何しろめずらしい車でしたから。

伊東　そういう思い出があります。それから我々はよく、鵜ノ木とかね、溝ノ口という所へ行って、あれ

は農場だったのかな。明治学院には全人教育というのがあるんですね。

陶山　戦時中の食糧不足を補う。

遠藤　僕らの時は職業家庭科と言っていましたね。

陶山　それから、鵜ノ木から最後は溝ノ口に移って授業を受けたね。

伊東　溝ノ口はまだ僕らの時は、畑に成りきれてなくて、行くと山谷が凄いんだよ。だから、あそこで追っかけごっこするんだね。だから何もなかったけどね。自分たちで作ったものを収穫してくるっていう、これはなかなかいい教育だったな。

遠藤　さつまいもなんかね、食糧難の中で。耕す、畑を作ってみたり、それから兎とか羊を飼ってたりしたと思うんですけどね。それから花が咲いていましたね、バラの花とかね。きれいに色んな花を咲かせていましたね。

伊東　それから、夏になると臨海学校とか林間学校とかがあってね、それは意外と中学も高校も一緒になって行くんですよ。それから運動会なんですけど、体育祭というのも中学・高校一緒だった。だからそれが為にね、中学生から見ると、高校生はもうおじさんなんですよ、髭生やしているしね。そういう人達には従うという気持がある。それが自分が今度高校生になると逆転するでしょ。そうするとね、面倒見る側になるんですよ。これはやはり白金中学・高校で受けた教育のいいところかなと思いますね。臨海学校なんかは、体育の先生が中学生に水泳を教えるんだけど、その補助役は全部我々高校生がやるしね。それから運動会でもそう。中学生はただ参加してやっていたけど高校生の体育祭って迫力があってね。走っても速いし、もう中学生の目から見て全然違うんですよ。よく中学生が学校から帰るときに、広い運動場だった

けど向こうからラグビー部の高校生が、パスしながら、横になって走って来ると僕ら逃げ惑うぐらいでね、迫力があった。仮装行列でも高校生は念が入ってて、すごくリアルで。ある時、キリストが十字架を背負って歩く、覚えています？　そのことがオルトマンスさんの逆鱗に触れて、大変な問題になった。

陶山　すぐ引きおろされてね、あの時私は高校一年でした。

遠藤　僕らの頃はそれは、皆見ていましたよ。

陶山　十字架刑を見せものにしたので、お怒りになったのです。

伊東　あれリアルすぎたんです。全くキリストの姿で、僕が知っている先輩なんだけど、実に演技が上手くて、要するに「キリストを冒涜している」という言い方で、怒られて。

陶山　遊びに使ってはいけない。

伊東　オルトマンスさんはまた（融通の）効かない人だったよね。

陶山　息子のオルトマンスは優しい方ですよ。

伊東　そんなのがありましてね、後は（旧日本）海軍（白金）墓地[8]で相撲とったり、枝を切ってフェンシングごっこしたりね、そんな遊びをしましたけど、高校になると今言ったように、逆に中学生を面倒見る。見させられたのかな、先生たちに。後藤進先生とか、恵良照義先生とかに「おまえやってこい」と言われて、先生の手下になって。あんまり言いたくないんだけど高校二年生の時、館山の那古船形でヨットで遭難しましてね、もうえらく怒られた。行きに竹島桟橋から館山まで船で行くんですが、その時に、川村女学園の女子高生が乗ってきたんです。仲良くなってしまってね。「どこで泊まるんだ？」って聞いたら、「富浦だ」って。那古船形の次なんですよね。「あっ、富浦なら分かっている、明日ヨットで行くからな」

なんて言って。明日は行けなかったんだけど、隣へ行ったのですよ。行きは沖まで出て、まっすぐ富浦湾に入って行けたんだけど、帰りがね、中学生が昼寝から起きるまでに帰ってないといけないから、沖まで行かないで横ぎろうとして、海流に引っかかって出られなくなった。それが午後の一時位にひっかかって、助け出されたのが夜の七時。それは、岬の崖だったので、もう水面が三メートルくらい上がって、引くときは、水のほうが早いの。ヨットの底がバタンって、後から落ちて、皆酔っちゃってね。助け出されましたけどね。大変だった。もう恵良照義先生にバッカバカぶん殴られて。だけども「申し訳ないことをしたな」としみじみ思いました。先生はもう半日は心配して探しに飛び回っていたはずですからね。翌日、中学生の遠泳を補佐していくんだけれども、顔がパンパンに腫れているし、苦しい思い出ですね。それから大学時代になりますけど、僕は大学も、あんまり勉強しなかったから、一生懸命サボっては、テニス部に入ったんです。だから僕の大学生活はテニス部と、体育会執行部で役員やったのと、それからゼミですね。勉強っていったらゼミだけ。一応卒論をとらないと卒業できなかった時代ですから、それだけは一生懸命やらざるを得なかった。体育会執行部の時代に、委員長が第三代の林さんっていうラグビー部の先輩がいたのですが、その人が委員長の時に僕は会計係をしましてね。カレッジ・カラーを制定するんです。そして校歌での応援はなかなか難しいというので、応援歌を公募する。それで柔道部の先輩が見事当選して、今、応援歌として歌われているんですけどね。それをやったのが僕の学生時代の一番の思い出となっています。カレッジ・カラーの旗を作ったんですけど、「赤はスカーレットという赤だ、グレーはシルバーグレーだ」と言って、「赤は情念、シルバーグレーは、深い思考だ」と村田四郎学長が命名したんですよ。[9]で、大学と学生がきちっとオーソライズして進んできたんですが、最近は黄色に変ったりなんかして。ま

あこれ変るのはね、変るんでいいと思うけど、そういうことが前にあるということを承知しながらね、前もって話しをしていないといけないと思いますね。同窓会には誤解する人がいて「けしからん」と言うのがいますからね。それが僕としては大学時代の思い出です。ただ、テニス部ではあんまり練習に身が入らなくて、体育会のことばっかりやっていて、結局レギュラーの選手にはなれませんでした。だけどまあ、テニス部ＯＢ会としては所属していますし、テニス部がいいなあと思うのはどんどん後輩が続いてくるんですよね。もう一つ江口ゼミはＯＢ会作っているのですが、今一番の後輩が六〇才を過ぎましたからね、この会はいつか消えると思っています。ただ私が明治学院同窓会の会長やった時に一番力になってくれたのはやっぱり高校時代の同級生。それから大学時代のテニス部とゼミ連中ですよ。高校時代の同級生は今でも一〇〇人は超えた集まりです。それからゼミも八〇人くらい来るのかな。そういう明治学院に入って良かったなと思うのは、中学・高校の時代を六年も違う人達と一緒になって色んな経験させてもらって、僕らの時、まだ二学部四学科ですよ。学生は八〇〇人もいないじゃないですかね。小さい学校、大学としてはやっと落ち着いてきた時代に小さかったものだから、なかなかいい雰囲気の学生時代を、過ごさせてもらったなと思っています。そして明治学院をここまで支えてきたアイデンティティみたいなものについては、白金の中学・高校を過ごしてきた連中の役割が小さくはないなと思っているんですよ。それがすごく大事だと思うのですよ。大学は大きくなりましたけどね。僕は高校も中学も、卒業生に祝辞を述べに行っていたのですが、感じるのはね、僕らの白金時代の雰囲気と言うのは全部東村山に行ってしまっているということです。それで白金は、中学がないから高校だけで、周りは大学に囲まれているでしょ、可哀想なくらいです。なんとか小さくてもいいから白金に中学を作ってね、中学生の面倒を見るとか、兄貴分をし

たいとか、僕らの時は男子校だったからそういうことだけど。今は兄貴分だけじゃないですが、学校は大きくなったけど、そういうことを大事にしないと明治学院らしさとかアイデンティティみたいなものが生れて来ないんじゃないかということを、オール明治学院として考える時期に来ているんではないかなと思いますね。

原　ありがとうございました。今の伊東さんのお話に何か質問ございますか？　それでは次に陶山義雄先生にお願いします。

陶山　はい、私もやはり明治学院中学と高等学校の出身者です。大学は東京神学大学でした。この大学は明治学院神学部の延長ですから、中学・高校・大学とも明治学院であったと言っても良い程です。事実、村田四郎先生が教鞭を執っておられましたし、学長の桑田秀延先生は明治学院神学部から、他の神学部との合同に際してそのまま大学に移って来られた先生でしたので、折に触れて明治学院の思い出話を在学中に交わしたこともありました。和田昌衛先生（法学）、工藤英一先生（経済学）も教鞭をとっておられました。

私は白金キャンパスに生徒として七年間（一九四九―一九五五年）、高等学校の教員になって三三年間（一九六一―一九九四年）を過ごしました。明治学院大学では二八年間（一九六六―一九九五年）兼任講師として白金キャンパスでキリスト教学（基督教概説）とキリ専（基督教学（専））を担当させて頂きました。ですから、生徒であった時代の学院を、その母校に帰って教員として過ごした時代の学院と比較できる立場にあったわけです。まず、生徒として思い出すのは、戦後教育体制の六、三、三、四制度ができたばかりで、公立学校への信頼が未だ十分に確立されていなかったので、明治学院中学校に大勢の受験生

が集まった時期でした。しかし、中学で三年間過ごすうちに、公立学校が整備されて、三年後には明治学院高校に進学しないで、公立高校へ大勢抜けてしまった時代です。公立高校へ行った仲間の多くはその後、東京大学に進学して行きました。高校ではどのクラスも半数は公立中学から来た生徒たちでした。私は、両親がキリスト者で、日本基督教団上原教会員で、そこの牧師が赤岩榮先生でした。そのご子息・赤岩宣（ひろむ）君と一緒に明治学院中学に入学しました。教会が戦前では長老派であったこともあり、牧師先生は、同じ教派が建てた明治学院に進学するように勧めてくれたからです。入って見ると、同じように教会と繋がった子弟が多く来ていましたね。そこのところが今の明治学院とは大きく違って見えますね。同級生には赤岩君の他にも、福山君、そう、彼の妹（留美）さんは後に、園部順夫さんの奥さんになった縁のある方です。他に広野君、佐々木君などが牧師の子どもでした。昼食はホームルームで取るのですが、新入生のクラスには、上級生がやってきて、食前のお祈りをしてから食べたのです。この上級生は宗教部にいた高校生で、昼食を食べながら不慣れな一年生に色々教えてくれたのが忘れられない思い出ですね。久世望さん（後に牧師になって松戸教会と長野の教会に赴任）、吉岡サムエルさん、津田一路（後に私の義兄になった人）、藤本嘉信さん（後に保善高校の教員・校長になった人）などの先輩が、一学期の昼休みに代わる代わる来てくれました。その縁もあって、また、教会との繋がりもあったので、私は宗教部に入りました。中高一貫の良さは、このようにクラブ活動で上級生から指導を受けられたことですね。宗教部の部室が宣教師館の一部屋を借りていたので、いきおい宣教師とそのご家族とも親しくなりました。英語も自然に使えるようにまでなったのですが、こんなことも、今の明治学院ではなくなってしまいましたね。あの頃、キャンパスには全部で八軒の宣教師館があったと思います。まず、チャペルに一番近かった、ライシャワー

先生が生まれ育ったと言われるライシャワー館、そこの一階は院長室で、入学時には村田四郎先生がおられ、毎朝の礼拝では、そこから大きな旧新約聖書を脇に抱えて来ておられたのも忘れがたい思い出です。現在残っているのはインブリー館（記念館の隣）だけですが、ここには松本亨先生とそのご家族がおられました。また、その後にはフラハティー先生（後にフェリスに転出）がおられました。宗教部がお借りした一室は、その当時、科学館の右に三軒あった宣教師館の一番科学館に近い家のポーチを改造した所にありました。この建物の本宅にはハナフォード先生ご夫妻がおられましたが私が一年生の時、六月頃には帰国されて、その後にはコーバー先生、後にご結婚されて、そのご家族は二階に移られました。そして一階にはヴァン・ワイク先生ご一家が秋からお住まいになったのです。高橋源次先生や、日下一先生のご家族も別の宣教師館におられました。現在、東京藝術大学器楽科（オルガン）教授（二〇〇九年定年）を務めておられる広野嗣雄君は宗教部のリードオルガンを弾きこなし、毎朝の礼拝でも小泉洽先生の代役としてオルガンを弾いていましたが、彼も宣教師館のオルガンで育ったとも言えるのではないかと思います。もっとも、お父様が本所緑星教会の牧師であり（東京大空襲により死去）、在学中も、また現在もこの教会でオルガン奉仕をしておられたので、オルガン漬けの生活であったからこそ、現在の彼があるように思います。

中学・高校在学中に、この宗教部室と宣教師館のお陰で私は、色々な外国人教師とそのご家族と親しくさせていただきました。まず、ハナフォード先生ご夫妻です。この先生は戦前から明治学院におられた長老派の宣教師で、戦争が始まっても帰国しなかったのですが、高輪警察に留置されたあと、日米捕虜交換の要員にされてやむなく帰国をし、戦争が終わると直ぐにまた明治学院に戻ってこられた先生であると伺

いました。日本語がお上手で、中学一年生であった私には助かりました。おそらく戦後三年経った一九四八年の六月であったと思います。いよいよ引退して帰国される時、私たち中学生の礼拝に参加して下さり、終了後、高橋源次校長先生がお礼の挨拶をされ、ハナフォード先生も日本語で話されました。一番印象に残っていることは、宣教師館の居間でずっと使い続けていた木塗りのアップライト・ピアノ（スタインウェイ）が礼拝堂に運ばれて、これを寄贈して行かれたことでした。「自分たちがいなくなっても、このピアノで一緒に神様を賛美しています」というような挨拶でした。このピアノは、今回、礼拝堂の改築がなされる直前まで置かれていたのに、現在はどこへ行ったのでしょうか。せめて記念館二階で、寄贈の出来事と使用されていた年代（一九四八―二〇〇六年）を明記して展示して欲しいと思います。できるなら、再びチャペルの壇上、右端に置いて現役で使えるようにして欲しいと思います。ピアノと言えば、もう一台、齊藤茂夫先生が退官されたとき、記念として黒塗りのグランドピアノ（ヤマハ）を寄贈されました。大学グリークラブの顧問を長年お務めになり、クラブの練習用に寄贈されたのですが、これも今回のチャペル改修後になくなっています。どこへいったのでしょうか。同窓生にとっては、いずれも思い出と由緒あるものですから、復元し、分かるようにしておいてほしいと思っています。ハナフォード先生については、私が一九六三年七月に、留学でグレイハンドバスに乗ってニューヨークまで大陸を横断した時、お手紙を出してシンシナティのご引退先までお訪ねしました。その時、このピアノが今なお大切に使われている話をしたら、本当に喜んで下さいました。また、先生のお名前が、日本語の讃美歌序文に出ていることもお話したのです。プレスビテリアン教会の宣教師では他に、オルトマンス先生親子、ワイス先生、フォアマン先生、ブランズ先生などがおりましたね。また、リフォームド教会宣教師には、何と言ってもコーバー

先生、ヴァン・ワイク先生ご夫妻、フラハティー先生、エステル先生、それにタニス先生ご夫妻ですね。このうち、実際に授業でお世話になったのは、ブランズ、エステル、コーバー、ワイス、フォアマン先生でした。エステル先生はＪ３と呼ばれる、短期の先生（大学を出て三年間宣教師になった方）でしたが、強い印象をもっています。この先生はアメリカからテープレコーダー（生徒の手を借りないと持ち運びできない程重くて大型、真空管方式）を持参され、英会話の授業で使われました。自分の声を聞きなおした体験はこれが初めてでしたから、生徒は皆、驚きましたね。そのレコーダーが一九五一年に故障してしまい、我々もガッカリしたのですが、品川にあったソニー前身の通信機会社（東京通信工業）に修理を依頼した所、直って来たばかりか、夏休みにこの器械をエステル先生から借りて、全部分解したあと、同じような部品を作ってソニーのテープレコーダーの試作機を造ったそうです。この会社の偉かった所は、改良とトランジスター化を施して小型機を作成し、世界のソニーにしたことですね。またクリスマスにはエステル先生に引率されて宗教部の有志が、アーニーパイル劇場（現在の有楽座）へ、ヘンデルのメサイア演奏会に行きました。まだ占領下の時代だったので、銀座四丁目交差点はアメリカＭＰが交通整理をしていたり、演奏会では米軍兵士が軍服を着たままトランペットを吹いていたりしたのも忘れられない思い出ですね。タニス先生ご一家は院長室の上階に住んでおられ、長沼日本語学校で赴任前の勉強中の宣教師でした。四歳ほどの娘さん（シャーリー）に男の日本語を教え込んで、おれ、おまえ、など喋らせて楽しんだものです。このご夫妻は長崎の活水女学院でＪ３を務めた後、太平洋岸ワシントン州のオークハーバーで教会牧師を務めておられたのですが、私は一九六五年に、やはり、お訪ねして楽しい数日間を過ごしました。シャーリーはもう日本語を完全に忘れていましたね。

現在、明治学院には宣教師がキャンパスに住んでおられないことは本当に残念に思います。授業以外に、例えば、クリスマスやイースター、感謝祭など、オープンハウスがあって、在校生はそのおすそ分けにもあずかれたのです。何と言っても外国人教師とそのご家族がキャンパスにおられるだけで、教育的成果は十分にあったと思います。それも、中学生のように初めて英語や異文化に若い頃に接することができるなんて、絶対他には無い体験ですからね。こういう明治学院をまた作りたいですが、留学生や国際交流がそういう役割を今後は盛んにする以外にはないでしょう。そう思って私は一九七九年に高等学校でホームステイと国際交流プログラムを立ち上げたのです。そして、それは現在も続いている筈です。島崎藤村が『桜の実の熟する時』の中で、校庭の芝生を歩く外国人家族の話を印象深く書いていますが、それは、私たちで終わりました。明治学院にいれば、英会話は不自由なく話せる環境をもった時代でした。私は留学でその恩恵に浴せた最後の世代であったかもしれません。

中高一貫の良き時代も白金キャンパスでは一九五一年までのことでした。先ほど伊東さんがチーク塗りのジープ・ステーションワゴンのお話をされた際、私が、あの車でコーバー先生が運転し、村田院長がアメリカ視察に出かける時、中学生が全員チャペルから沿道まで並んでお見送りをした話を付け加えましたが、その視察土産がパイロット・プランだったのです。在学生であった時には、知らなかったのですが、母校の教員になって知ったことでした。それは、明治学院の中等教育は公立学校と同じレベルで競うのではなく、少人数のクラス作りをして、マスプロ教育を避けたい。そのためには、ミッションからの支援が必要である。その資金援助を得るために村田先生はお出かけになったのです。これには、賛成する先生方も多くおられたのですが、反対の方々もおられて、結果として、賛成者が中学校、反対者が高等学校の教

員へと別れ、一九五二年から中学・高校分離の明治学院になったのです。それまで教員室は一つであったのに、この年から二つに別れ、高等学校の先生方の教員室は、二階の間の教室、（当時）ノートルダムの背むし男とあだ名されていた井上忠一という用務員さんが授業の初めと終わりに鳴らしていた釣鐘の上の部屋へと移動になったのです。中高一貫がどれだけ良かったか、それはクラブ活動に現れていたと思います。私は宗教部（分離後はハイスクール・ＹＭＣＡ：略称はハイーＹ）のほかに、無線物理部でラジオを作ったり、海外の短波放送を受信したりして楽しんだり、また、鉄道研究会にも入っていましたが、中学生が高校生にどれだけお世話になったか分かりません。それが分離してしまえば、三年間という短い期間になり、また、受験などでさらに活動が制約されてしまい、宗教部の昼休みの交流も無くなってしまい、残念と言うほかありません。私の記憶する限りでは中学校に残った先生方は、佐藤泰生先生、宮崎道弘先生、久保山昌弘先生、大堀俊次先生、木村真太郎先生、安藤徳夫先生、大川正先生、緒方正祥先生、それに理科の吉原幸二先生、矢作弥寿久先生、体育の恵良照義先生などでした。高等学校に移られた先生方は、日下一先生、早坂礼吾先生、原田昂先生、宮崎榮先生、高橋泰郎先生、小池正二先生、延原弘一郎先生、細田弥彦先生、斉藤國治先生、高井貞橘先生などでした。パイロット・プランはミッションからの援助が途絶えて結局破綻してしまい、中学校は東村山に移転されてしまったのですね。本当に残念に思います。ただ、分離していたので、高等学校は白金に残れたのかも知れません。本当は中学・高校一緒に東村山に移転して、法学部の増設に際して白金校地を大学用に拡張したかったようですが、パイロット・プランに反対しただけに、独立心の強かった高等学校は理事会の決定に従わなかったと聞いています。

村田四郎先生は昭和二三年から三二年まで院長でいらしたので、私の在学中、ご指導いただいたのです

が、礼拝の説教は忘れられないですね。重みのあるお話を沢山聞かせて頂きました。「諸君は敗戦国にあって、連合国に対して劣等感を持っているかも知れないが、日本の文化や伝統は滅んでいないのだから、誇りを持って生きなさい。紫には重みと渋み、それに気品がある。この色を大切にする国民性は滅びない」この話が忘れられないのですが、礼拝でこれが聖書とどう関係するのか良く分からなかったのですが、印象に残る話でしたね。松本亨先生は神様を説明するのに、飛行機のパイロットを例にあげて話をしましたね。飛行士は自分の腕で操縦していても、実は、ビーコンライトと言うのがあって、そのビーコンに誘導されているから夜でも目的地に行けるのだ。人間も神様の恵みと働きの中で生きているということを操縦士とビーコンの比喩で話してくれました。先ほど中学・高校分離の話をしましたが、学院全体はまだ小さかったので、キャンパスも一つであったし、今とは比べ物にならないほど一体感がありましたね。大学の先生が中学・高校でも教えておられました。中桐先生は教育大を出て、大学英文学科若手の先生でしたが、中学一年で英語を習いました。良い先生でしたね。この先生のお陰で英語が好きになったと思います。高橋源次先生は大学・中学・高校の校長を務めておられたので、英語を習いました。教科書で英文を読みながら、いつしかご自分で一人演劇を壇上でして下さったのも良い思い出です。竹中治郎先生は夏休みの講習で一週間午前中、授業を担当され、ご自分が編集されたホーソンの短編集を読みました。今振り返ると、大変高度な英語の授業であったと思います。高橋先生も竹中先生も、それに加えて若林先生と須藤先生など、皆、お子さんが同学年に在籍しておられたので、親しみが持てましたね。明治学院は家族的な学校だったのですよ。これも今ではなくなってしまいましたね。お父さんが自分の息子に授業をしている。その授業に我々も参加しているのです。

中学・高校の先生もその頃は大学でも授業をもっておられました。高橋泰郎先生、原田昂先生、宮崎道弘先生、細田弥彦先生、早坂礼吾先生、高井貞橘先生、小泉洽先生などですね。先ほども話に出た所ですが、高橋先生など高校には勿体ないような先生で、レベルが高いために生徒とはかみ合わなかったかも知れません。それぞれの先生は教科書を出版されていて、文部省検定ではなくても、勝手にご自分の本を買わせて授業で使っていた時代ですね。音楽の小泉先生などご自分が書かれた『楽典十講』を一課ずつ進め、讃美歌の練習が終わると、ベートーヴェンの解説を一年中なさっていましたね。今の公教育では考えられない授業です。また小泉先生は、毎月一回、国立国会図書館でレコードコンサートを開いておられました。その頃、LPレコードとステレオ再生装置など珍しかったし、会場が、現在は四谷の迎賓館になってしまい我々が入れなくなってしまったのですが、その頃は国会図書館として開放されていたので、建物を始め庭園まで入って楽しめたのですね。宮廷・鏡の間でのレコードコンサートなんて、本当に今考えると贅沢でしたね。その解説者が、我々の音楽の先生であり、また、礼拝のオルガン奏者でしたから。そのオルガンも現在、記念館に保管されている、二段手鍵盤、足一段鍵盤、手漕ぎスエルのハルモニウムという、国宝級の輸入楽器でしたからね。[10] また、上田公子先生（中村橋教会牧師夫人）は一時間中讃美歌指導に明け暮れていました。それで、文句など誰も言わなかった。勿論私はこんな恵まれた授業は他の学校にいたら体験できなかったと思います。古き良き時代でした。普通の授業をして下さった先生もいなかった訳ではありません。国語の小泉チエ先生の授業はピリピリしていました。当てられるのが怖くて皆緊張していましたね。この先生は程なく都立青山高校に転任なさいました（お兄さんの小泉達人先生は用賀教会牧師）。今井晋先生の世界史はもっぱらノートを読み続ける授業。この先生も中学・高校分離に際して同志社大学

神学部の先生になられました（ご自宅は杉並・玉川上水に面した家庭学校）。ボケナスと愛称されていた山本弥一郎先生は英語の先生でしたが、私と同じニューヨーク・ユニオン神学大学の出身なのに、論語を英語で読みながら引用しておられました。英語を読んだことは記憶にないほどですが、文法は厳格で、生徒に当てたあと、答えられたら早く教室から出ても良いが、答えられないと、ポケットから靴べらを出し、それをなめさせたり、それが嫌なので生徒たちは予習をしてきたり、放課後も残して熱心に教えて下さいました。英語も読まずに黒板に向かって縦に書く。それほど東洋人としての誇りをもっておられた方でした。戦争中もネクタイとワイシャツ、背広で登下校したので、非国民と言われ非難を受けたそうですが、それでも、止めなかったほどの自由人であったそうです。明治学院の教員でありながら、築地時代の明治学院（東京一致神学校、東京一致英和学校）とも所縁（ゆかり）のある日本基督教団新栄教会の牧師でもあったと聞いています。

キャンパスが大きく変貌したのは、国道一号の道路拡張に伴って校地が狭められ、代償に現在のヘボン館裏手にあった海軍墓地に大学が拡張された昭和三〇（一九五五）年頃からでした。国道沿いの宣教師館は解体され（インブリー館と記念館は移築され）キャンパスの変容に伴って明治学院もマスプロ化していくのです。私は、高校三年の一九五三年六月一九日に大喀血をし、一年間自宅で療養生活を余儀なくされました。結核が流行していて、同じクラスの前田利雄君や大村君なども前後して休学しています。私は一番早く復帰しましたが、それでも一年休学をしたので全体では七年間在学をした訳です。病気をして気付いたことは、先生方やクラブの友達、級友などがとても親切で、何かと力になって下さったことです。日下校長先生と担任の早坂先生が何回か自宅まで問安に来て下さったり、先生方から手紙まで頂いたりしま

した。ことに、あのボケナスの愛称で親しまれていた山本弥一郎先生は、ご子息がお医者さんで鎌倉の病院におられるからそこへ入院するように勧めて下さったのです。このお医者さん山本敬先生は後日面会の機会がありましたが、クリスチャン・スクールの良さを本当に感謝しています。ザトペックとあだ名されていた一級先輩で陸上部と宗教部におられた藤本嘉信さんはハイ―Yの仲間を連れて、入浴中の銭湯にまで押しかけて見舞いに来てくれたのも有難い友情でした。病気が治ったあと、前田君と私に健康の自信をつけさせるために、奥多摩の三頭山を登り、私たちの荷物を全部背負ってくれながら、帰りはできて間もない奥多摩湖に架かるドラム缶橋を渡ったことも忘れられない思い出です。

高校卒業時には丁度大学の図書館が完成し、ヘボン館と合わせて卒業式のあとで見学に行きました。約半数近くの卒業生は四月からこの新校舎で勉強できるのが羨ましく感じました。早坂先生と図書館の入り口で撮ってもらった写真は今も私の宝物になっています。その、図書館や、グリーンホールも今はなくなっているのですね。あと、明治学院は音楽学校ではなかったのに、同級生に音楽家が多くいるのも明治学院の教育成果ではないかと考えます。先にあげた、広野嗣雄君を筆頭に、N響フルート奏者として活躍した宮本明恭君、大森から通っていた声楽家で音大教授の鈴木仁君など。明治学院は戦中もリベラルな学校であったので、親もそのことを知っていて、音楽家やジャーナリスト、歌舞伎役者、自由業や自営業の子弟、そしてクリスチャンホームの子が比較的大勢来ていたのですね。中学がなくなった今は、殆どがサラリーマンの子弟である所とは大きな違いですね。それでも、自由な校風は生きていて、アルフィーの高見沢俊彦や桜井賢、その他、山本コータロー、南こうせつなどを輩出する学校であることに誇りを感じます。休み時間になるとギターを取り出して弾いたり歌ったりする自由な校風が、将来の音楽家を育てているので

すね。白金祭が発表の場になっていて、大学生と一緒に舞台を組めたのも背伸びができて良かったのかなあ。大学紛争以降、白金祭も大学とは別々になってしまい、これも残念ですね。

最後に教師になって母校に赴任して感じたことを一言お話しして終わります。僅か五年間キャンパスを離れただけなのですが、キャンパスそのものが大きく変わってしまいました。宣教師館がインブリー館以外になくなってしまい、高校校舎は元々大学が使っていた井深ホールとその裏の二階建ての校舎になっていたのです。かつて屋根裏三階が色々なクラブの部室であったようなゆとりとエキゾチックな趣はなくなりました。院長は村田四郎先生[11]から、都留仙次先生[12]に代わっていて、就職一年経った一九六二年には武藤富男先生[13]が院長になられたのです。昭和三〇年代もそろそろ終わりを迎えていますが、これ以降は開発と拡張、明治学院一大転換の時期に入りますね。東村山キャンパスと三浦グラウンド。そして学園紛争。この辺の話もしたいのですが、本日の会合がカバーする範囲を超えるので別な機会に譲ります。一つだけ、都留先生にまつわる思い出話をいたします。それは、一九六三年から六五年にかけて、私はリフォームド教会の支援を受けた明治学院派遣の留学生として、ユニオン神学大学とコロンビア大学院へ行く機会に恵まれたのですが、出かける前に都留先生は私を原宿のご自宅へお招き下さり、夕食にあずかったあと、明治天皇が使っていたようなカウチソファに腰掛けて、留学心得を授けてくれました。先生は、「日本人であることを忘れるな。留学すると西欧かぶれした人間が多いから注意をしておく」と言われました。そして先生が留学なさった体験から、日常生活のマナーを細部に至るまでお話し下さいました。招かれて会食したらば、必ず礼状を書くように、ズボンは寝押しして筋が見えるように、靴も磨いていくように、など、やはり戦前のアメリカが都留先生には規準になっておられました。ジーパン時代になったアメリカではか

なり違っていたのですが、それでも、礼状をはじめ、お付き合いのマナーについては大変役に立ちました。偉大な業績を挙げておられる旧約学者がこのような気配りと期待を寄せて下さったことに感謝しています。その都留先生は私の留学中に他界されました。国際電話を明治学院本部から頂いて、留学中では最も悲しい出来事になってしまいました。私は明治学院で育てられたのですから、後輩の教育と明治学院のために全力を捧げる覚悟を、異国にあって先生の御霊に誓いました。

原　ありがとうございます。それでは続きまして、中村克子さんですね。ここに経歴は書いてございませんが、昭和三一年大学英文学科卒、主に卒業されてから英語教師をされたり音楽の世界で活躍されたり、それから美術、現在も絵をお描きになっておりまして、経歴を見ますととてもではないですけどすごいなという感じがいたします。多才な方でございます。当時の女子学生として貴重な経験があると思いますので、当時の大学のこともお話しいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

中村　素晴らしい皆さんの中で大変緊張しています。中村でございます。原さんから私の絵について話されましたが、ここ数年、かつての明治学院の建物を描いております。（チャペル、小チャペル祭壇、解体される前のパイプオルガン、旧図書館、目下制作中は同窓会館＝インブリー館、来年はヘボン館を予定。東方展に出品）五回目になるのですが、描くにつれ学院への愛着が深まっていくように思います。

当時の景観は「明治学院」と刻まれた校門をくぐると、左側にギリシャ風の円柱に支えられた建物がありました。（井深ホールのこと。本部・学長室・教務部・教室等）その向こうに学院を象徴するチャペルがあり、後方には一号館と芝生が敷かれた中庭に隣接してミセス・オルトマンスの教師館、本部の前の並木道にそって右には運動場と協同館という学生会館があり、その学生会館の一階は食堂、二階はベニヤで

仕切られた各部室が雑居していました。少し高いところに科学館、そのとなりは図書館（現記念館）、隣接して松本亨先生の研究室（現インブリー館）、奥には緑いっぱいの海軍墓地があって、戦後の東京がまだ整っていない中で欧米のモダンな瀟洒な明治学院の建物はとても魅力的でしたね。

明治学院大学を志望大学の一つにしたのは、姉に「いい学校よ」と言われ、二人で下見に行き、こんな雰囲気がフィットしたのかも知れません。現在の入試はどうなっているか分かりませんが英文学科はディクテーション・テストがあって、他の大学にはなかったものではないでしょうか。

当時、文学部は英文学科と社会学科、経済学部は経済学科と商学科の四学科で、英文学科の募集人員は二クラス八〇名でした。小規模だけれど非常に家庭的で暖かい何かを感じました。それはミッション・スクールがもつ学風だったのですね。

おかしな話かも知れませんが、その頃は、交通事情も悪く乗り換えもおぼつかなく気にしたのでしょう。受験に母がついてきてくれました。雪の降る日でした。親たちは試験が終わるのを学生会館のだるまストーブを囲んで心配そうに待っていたのを覚えています。

当たり前の事なのでしょうが、学院は外国人の先生がキャンパスを普通に何人も歩いているのですね。私は都立高校から来たものですから（都立には外国人の先生が皆無）とても珍しく、外国人の先生に会うだけでドキドキして、英文学科の学生なのに外国人の先生をなるべく避けていたと思います。もったいない話なのですが…。明治学院高校から来た同級生（岡田良作、杉茂、関則治さん）は英会話に堪能で、都立から来た友人（水谷陽子さん）と目をパチクリしていました。英文学科なのだからと自己弁護していましたが、コンプレックスのかたまりでした。そんな様子が映ったのか一緒に勉強しようと、帰る道すがら

品川組と五反田組と分かれて駅に着くまで英語で話す時間を作ってくれましたが、馴染めずに一向に進歩しないのです。そこでさらに親切にもミセス・オルトマンスのところへ連れて行ってくれたのです。何をするかといいますと、英語の聖書を読み、解釈してくださって、質問もあったでしょうが、最後に讃美歌をみんなで歌うのですが、私たちは「あゝ讃美歌を歌ったわ、もう終わるんだわ」と、ほっとして素敵な家の階段を降りてきたものです。考えますと大変貴重な体験だったのですね。この学習交流は半年ほど続いたのですが、夏休みの始めに“I am an angel”中身はまったく忘れてしまいましたが、脚本を作って日本橋白木屋の録音室でLPレコードに吹き込みをしました。これも当時としては学生らしい前向きな姿勢だったと思います。明治学院は男女共学で非常に明るいキャンパスだったというのが私の印象でした。女子学生も男子学生も仲が良かったですね。教授の方々とも和気あいあい、和やかな光景があちこちに見られました。

英会話といえば一年のフレッシュマン・イングリッシュはミスター・ペニングスという先生でした。これが当時の教科書で『Thinking in English』という題名です。この本で、英語で考えて話すという事を教えられ、新鮮だったことを覚えています。その頃は日本語から英語というのが常識でしたので。

外国人の先生の強烈な思い出ですが、英米国史はヴァン・ワイク先生でした。授業も日本語を一切話しませんでしたし、早口でメモもとれず、世界史を高校で選択しなかったことを、とても後悔しましたが、後の祭りで…。必修科目ですから試験は何としてもパスしなければならないでしょう。これが教科書で『The pocket history of the United States』です。とにかく日本語に訳して、それから英語で頭に叩き込んで試験にのぞんだのですね。問題を見たら、もうお手上げ、二〇パーセントしか分かりません。「よ

し！　ままよ！　これしかない！」と自分で覚えてきたものを全部書けば何とかしてくれるだろう。何を書いたか忘れましたが、なんとも神頼み的で無作法な答案でした。一言お詫びのメモを添えましたが次の授業の時「こういう学生がいた」とみんなの前で言われ大変恥ずかしい思いをしましたが及第点を下さいました。感謝しています。

松本亨先生も印象に残っています。白いダブルの背広に赤いネクタイ、ちょっと怖い顔をしているのですが親しみやすく、学生に人気がありました。教育心理学を習いましたが、一斉授業の座学スタイルではなく五、六人のグループ方式で、各人が発言しやすい参画方式をとられました。米国・コロンビア大学から帰国した亨先生は、民主主義を教育指導のなかで示されたのですね。またＮＨＫの英会話の講師になったことが明治学院の名前を世間一般に広めてくれたと思います。中桐宣也先生も当時では、貴重なプロジェクターでミシガン大学やアメリカの状況をスライド映写するなど、初期の視聴覚教育をしてくださったことも明治学院ならではの教育環境だったと思います。

私は卒業後、三五歳（教師になれる限度年齢・子どもが小学校に入学）で公立の英語教諭の試験を受け教師になったのですが、明治学院で素晴らしい先生に出会い幸せであったと思います。特に竹中治郎先生には音声学を徹底的に教えられ、口の開き方、舌の位置、唇と歯の関係、声の出し方等、少数の学生でしたので、より丁寧に一人一人指導して下さいました。今も専門学校で教えていますが、実に役立っています。学生に「先生の発音きれいですね」と言われこの年齢でも嬉しいものです。平林武雄先生からミルトンの『PARADISE LOST』の講義をうけ、深く印象に残っています。高橋源次先生には欧米の英詩『A PAGEANT OF ENGLISH VERSE』でシェイクスピアのソンネ他を習いました。丁度その時、演劇部

でシェイクスピアの作品を稽古していましたので大変興味をもって、またシェイクスピアを卒論に選ぼうと思ったくらいですから一生懸命に聞きましたね。（実際には『A survey in essay "The Taste of Lamb"』）

洋書のもつ独特な匂い、本を持っているだけでも英文学科の学生という感じがしていました。須藤信雄先生はオスカー・ワイルドの『THE HAPPY PRINCE』でした。おとなの童話ですよね。"Swallow, swallow, little swallow!"と燕に呼びかけ「困っているあの人に私のサファイアの目を届けてくれ」と王子が言うと、燕は「王子さまの目が見えなくなる」と拒むのですが「早く！」と急がして届けさせる文章がありました。この年でもよく覚えておりまして、慈悲の心、愛の深さを教えて頂きました。一年生だったと思いますが、今にしてこの本を選択した先生のお気持ちがよく伝わります。第二外国語（仏語）はあまり勉強をしないで…"Je t'aime"ぐらいは分かりましたけれど、私は英語の源であり、死語になっているラテン語に興味をもって履修しました。言語が限られていて読み方は殆どローマ字読み、文法も難しくはないですね。

長いことコーラスをやっているのですが、宗教曲をよく歌います。ラテン語が多いのですがお蔭さまで苦労なく暗譜できます。これは玉川直重先生が学生に易しい本を選ばれたのでしょうけれど。モーツァルトの『Ave Verum Corpus』はラテン語の美しい曲ですがよく歌います。思い出しますね。

体育の話になりますが、デンマーク体操[14]といえば高橋賢一先生と竹腰美代子さんのコンビです。今もって申し訳ないのですが何故デンマーク体操だったのか分かっていません。高校の体育館で授業を受けましたが女子学生には竹越さんはほっとする存在でした。スキーとか海水浴で楽しく単位をとった方も大勢い

らっしゃいましたね。教育実習も伊豆の土肥とか。私は明治学院の高校でしたが、皆それぞれのところで戸惑いながら一生懸命にやりました。教わっている学生が教えるのですから、担任の先生や生徒にも迷惑をかけたのではないかと思います。教育原理の小川勝治先生も熱心で、今、校門のところでにこにこした先生の顔が思い浮かんできました。先生方は私たちを学生ではあるけれど、一人の人格ある人間として見てくださったように思うのです。叱られたことは本当に一度もなく、その代わり社会に出てから戸惑うような苦労にたくさん出会いましたが…それが普通なのでしょうけれど。不条理なことがありますね。

明治学院大学に入って私の人生の根幹を揺るがせたのは賀川豊彦[15]先生です。私はクリスチャンではなかったのですが、讃美歌が好きで殆ど毎日礼拝に出ていました。ある時、先生が「君たちは神を信じているか、いないか」と質問されました。大半の学生は知らんふりをしていたようでした。本当のところ半信半疑でした。先生はこう言われました。「目は何のためにあるのか、それは見るためにある。鼻は何のためにあるのか、匂いを嗅ぐためである。耳は？　聞くため。口は？　食べるため」と問答を繰り返しました。生きるためにあるというのが一般的な答えですよね。次に賀川先生は「それでは目、鼻、耳、口を誰がつくり、誰がそこにつけたのか、誰が手足の数を決め身体をつくったのか…」えっ？　それは？　人間ではないですよね。私は一生忘れない衝撃を受けました。先生は「創造主という神が創られた」とおっしゃいました。言葉は？　心は？　涙は？　形のないものは誰が？…と考え、絶句でした。以後、神への信仰というものをもち続けています。侮ってはいけない、自惚(うぬぼ)れてはいけないと自分自身にも言い聞かせ、この衝撃的な話を他にすることもあります。明治学院だからこそ得られたと、深い感謝があります。

年老いてグループ・ホームにいる姉が、あの時になにげなく「いい学校よ」と言わなければ、こうした

出会いと絆はなかったのです。その姉にも熱い想いがあります。

地域との関係ですが千葉県の習志野第一中学校で英語の教師をした後、教育委員会の社会教育を実践する場、公民館にいたことがあります。就職や仲人でお世話になった猪熊文炳先生に昭和五六年度主催事業・成人大学講座（「シルクロードと日本を結ぶ歴史的・文化的背景と現代」をテーマに講義）と国際理解事業（青年対象に中国についての講義）をお願いしましたら、安いお礼にもかかわらず、二年間、喜んで世田谷から来てくださいました。時には横浜の中華街の関帝廟に学級生を気さくに案内してくださったり、戦争で中国へ行かれた体験談や、戦争の忌わしさを語られたり、そのなかで熱心に受講する身近な地域学習を大変評価してくださいました。亡くなられて寂しいです。

もう一つ明治学院と自治体の地域学習の事例ですが、習志野市には町づくりの理念をうたった文教住宅都市憲章があります。それを推進する会が市民大学を設置（昭和五一年度）したのです。一般教養講座の他に、英語コース、音楽コースを置き、公民館を会場に一〇年間、開いてきました。英語コースに同期の赤川裕先生をお呼びし、月一回の五年間『Britain 24』『Ring of words』等のテキストや英詩を通してイギリスの風土、文化、民族の心まで深く講義いただきました。市の文化祭にも参加し、受講生は千葉県ですので、木更津の『証城寺の狸囃子』英語版の芝居を演り、私たち講師もハムレットの名場面「尼寺へ行きやれ」を演じたりしました。文化祭の企画は受講生中心で、先生方にも参加して欲しいといわれ、乗せられたのでしょうけれど、迫力ある演技をしたらしいです。私も「マザーグース」「外国の絵本」=(『The Very Hungry Caterpillar』他)「映画シナリオ英語版と映画」=(『Wuthering Heights』,『Jane Eyre』,『Daddy Long-Legs』他）等の学習を月二回ボランティアで一〇年間受け持ちました。雰囲気の良い授

業で、皆さんが真剣な眼差しで学習していましたね。当時、自治体で市民大学という文化的な仕組みはありませんでしたね。一般コースも、音楽コースも一流の先生をお呼びし、内容が充実している上に成績表なし、留年歓迎ですから一〇年続いたと思います。赤川先生も講義を通し大学にはない市民の受講生との接点をもたれ、「赤川先生どうしていらっしゃる?」と未だに聞かれ、娘さんを明治学院の英文学科に入学させたほどの人気がありました。社会教育は垣根のない共学・共育といった理念があります。「集い」「語り」「楽しく学ぶ」ということでしょうか。大学の教授をお呼びすることはよくあることですが長期的に依頼することは余りありません。卒業して二〇年後の活動です。（＊前者は成人大学講座報告書として文部省に提出、市民講座一〇年のまとめは「グローバルな市民を育てる公民館の役割り」として国際理解研究所の応募論文で佳作＝三位入選）

最後に今回の座談会のきっかけとなった、演劇研究部と白金クラブのことを話させていただきます。私はＮＨＫの朗読番組で話される秋山ちえ子さんに憧れていました。できれば入局したいくらいでした。放送研究部に入りたかったのですが当時はなく、新しく設置するから入ってほしいと言われ入部しました。考えると女性のキャストが少なく、客演で公演していたので女子学生が必要だったのですね。約束どおり『発破（小沢不二夫作）』を科学館で発表した後、放送研究部を立ち上げ、矢代清二先輩（ＮＨＫのアナウンサー木島則夫に師事し、卒業後ＡＢＣ朝日放送アナウンサーとなる）が初代部長として発足しました。『たそがれ（近藤若菜作）』という放送劇を発表しましたが、授業を受けながら演劇部と放送研究部を併行して演る余裕がなく、すでに『女学者』のキャストとして稽古に入っていましたので色々考えた結果、演劇部のお願いを受けました。残念でしたが芝居の魔力があったかもしれません。

演劇は台本、演出、キャスト、スタッフを決め、本読み、半立ち（本を見ながら動作）、立ち（本を放す）という順序をふみ、約半年をかけて公演にこぎつけます。一方、演出、衣装、小道具、照明、装置プランを詳細に立て、台本のテキストレジー（整理）をし、キャストは演出の意向で役づくりをする等、かなり本格的な取り組みなのです。毎日授業が終わると窓のない部室に集まり裸電球の下で稽古です。よく目が悪くならなかったものです。休講の時はそれぞれ部室にあつまり、先輩たちがギターやウクレレを持ってきて音楽好きがドリス・デー、パティー・ページ、ナット・キングコール、ハリー・ジェイムス等の歌を歌い、ハワイアンを奏で、時にはオペラ界のカルソーのアリアまで響いていましたね。かたや「ドラマトゥルギー」という言葉、スタニスラフスキー論、ブレヒトの演劇論を耳にし、口にしていました。この頃、石原慎太郎の『太陽の季節』、D・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』も話題になり部室内で侃々諤々（かんかんがくがく）でした。「暗い部屋だけれどピースの紫煙が揺らめき華やかさがあった」と述懐していた部員がいましたけれど、ピッタリした表現だなあと思います。

芝居はさまざまな人生をみることが出来るし、体験、疑似体験ですけれど出来ますし、熱心な人は芝居という魔力にとりつかれプロの道へすすみます。例えば児玉庸策さんは民芸の演出家として現在活躍していますし、大津一郎さんも静岡のSBSで一〇〇〇回余の民話の放送を続けています。西田知子さんも〝まきみのる〟という芸名でシャンソン界にデビューしソロ活動しながら後進を育てていますね。部員たちは卒業して俳優座（林正喜）、新国劇（飯沼良三）、東宝現代劇場（河内玲子）、同人会（原勉）、映画界（松前孝廣＝東宝、山口康男＝東映）、放送界（水野厚子＝日本テレビ、西内綱一＝TBSテレビ、佐藤健次郎＝NHK・札幌、土橋義治＝北海道放送）、報道・出版界（高沢信一＝三省堂、中村勝彦＝報知新聞、

信太正行＝東京日々新聞、森本徳司＝東芝音楽芸術出版、菊池信夫＝大和通信、柴田忠秋＝日刊スポーツ）、バレエ界（江川明）と、一九五〇年前後の知っている方なので限りがありますが、それぞれ長短あろうとはばたいていました。勿論その他の演劇部員たちは企業、行政、教育、福祉の分野で活躍をしてきましたが、私たちの世代はもう第一線を退いてそれぞれの自分らしい生活を送っていると思います。

演劇研究部第一回目は島崎藤村の『破戒』を公演しています。創立会員の井口恵吉大先輩が脚本を書き、都立上野文化会館で発表しましたが、この時、名だたる民芸の清水将夫、加藤嘉、宇野重吉等が明治学院の卒業生である藤村の『破戒』を明治学院の学生がどのように演るのか興味津々で見に来ております。民芸の早川演出助手は熱心に指導くださったそうです。評判は上々のようでした。それがきっかけとなり部員は照明を頼まれ、プロの劇団と交わっています。演劇部の顧問はエリザベス文学の三神勲先生です。私が一年生の時、モリエールの『女学者』を日本橋の日本劇場で公演しました。当時明治学院学生会会長であり演出の川上利一郎さんが挨拶に行くと「なんでこんな難しいものを演るんだ。だけど、まあ、振られても女学者に振られるのだから、振られ甲斐があるだろう」と言われ指導を受けたそうです。半年後に三好十郎作『浮標』を読売ホールで演った時も演出助手の中村眞一郎が作者に上演許可を受けに行くと「学生が演るには荷が重い」と言われ「佐々木すみ江を監督指導に行かせるから」と熱意にほだされて公演することができたのです。実際には一、二回来ただけで私たちスタッフとキャストで演りましたが。

三神先生はプログラムに次のように書いています。

「『浮標』の初演は昭和一五年築地小劇場で行われた。この初演の主役丸山定夫は広島の原爆で焼き殺されている。人間が牛馬以下に取扱われ、人間の命が無意味に虫けら同然に無視され若い多くの生命が消え

ていこうとした時代に書かれた。この作品は一人の肺病やみの女の命を守ることが、狂暴な時代に対する必死の抵抗だった時に書かれた。『浮標』はぼくには悲しく、いたましい作品である。このような作品を書かせるような時代を再び来さしてはならない」と冒頭にあります。

私もキャストとして出演していましたが、芝居を演っていながら三好十郎の哲理まで分からなかったとしても、艦砲射撃、機銃掃射を受けた者として、もう二度とあんな悲しい、辛いことはあってはならないと思います。二度と戦争は繰り返してはならないですね。

舞台芸術家の河野国夫は「学生演劇の舞台美術は商業劇場の均衡の取れた写実的な装置を追うことは無意味なことである。純粋に徹し得る新しい舞台形成の探求を推進してもらいたい」とプログラムに書いてあります。君たち学生の精神を大切にして、〝こう考える〟というメッセージを舞台に作るべきだということなのですね。企画の森本徳司さんは「われわれ未経験の部員共が片手間にやれるものではないということは承知している。敗北するかもしれない。苦しみを越えて挑む覚悟である」と載せており、主役五郎を演じた宮崎恵二郎さんは「生きるということがどんなに強烈なものか、と同時にどんなに素晴らしいことか、われわれはこの生きることの悦ばしさを決して忘れてはならない。その悦ばしさを知れば知るほど生きることの強烈さに堪えて行く力が増してくるのではないか」とあり、私たち部員の演ろうとする共通のメッセージと私たち戦争を体験した世代の心を伝えてくれていると思うのです。また、来場してくれた友人、入場者に共感してもらいたいとの思いもあったのです。みんな純粋ですね。一九五三年には三神先生の訳ですがシェイクスピアの『ウインザーの陽気な女房たち』、一九五四年には『オセロ』を読売ホールで、一九五五年はゴーリキーの『どん底』を飛行館ホールで公演しています。サーチン＝部員の菅原貞

夫さんの「人間！これはどえらい（豪勢）響きだ！」というセリフが耳に残っています。

歌声喫茶[16]が流行し、ロシア民謡が歌われダークダックス、ボニージャックとぞくぞく出てきましたね。気がつきませんでしたけれど、一九六〇年へと時代の波が走っていったのですね。反面、純喫茶ではクラシック音楽を流し、静かにコーヒーを飲みながら傾聴する学生や若者もいました。私も行きましたけれど。

それから演劇研究部の演目はアーサー・ミラーの『橋からの眺め』サルトルの『墓場なき死者』と方向が変わって行くのですが、二〇〇八年の今日まで、白金と横浜のキャンパスで演劇研究部は健在です。なかなか交流は出来ないのですが。

私たちは卒業後、榎会という同窓会をつくるのですが、一九九〇年頃は開店休業状態でした。再び演劇部らしいことを演ったのは芝居の上手だった五〇年度生不破彦麿さんが亡くなり、それをきっかけにバラバラになった部員に元主将だった川上利一郎さんが呼びかけ白金クラブを結成したのです。（一九九六年）第一回目に『幻の馬』の台本を（一九五一年・学生演劇コンクール参加作品　不破彦麿作）月一回集まって練習し、総会などで発表し白金クラブは二〇〇八年まで続いています。十二年になるでしょうか。高齢者集団ですが、気持は学生時代演劇部の延長です。

二〇〇二年、この座談会のきっかけとなった『ヘボン博士の輝かしき業績と敬虔なる日々』（白金クラブ・四九年度生富田二郎作）を講談調にまとめたものを銀座のクルーズ・クルーズと五二年度英文学科の同窓会で演じております。調べますと、一九四九年・ヘボン博士来朝九〇年記念に牛島英輔作『ヘボン博士』を上野都民文化会館で上演しています。明治学院創立七二周年記念公演でもあるのですが、いみじくも半世紀以上たっているということですね。ヘボン博士がいかに新しい日本の重要な架け橋であったか、

芝居を通して、また原豊さんの著書『ヘボン塾につらなる人々』を通して知りました。ヘボン邸で大村益次郎、高橋是清、林董、益田孝等が学んでいるのですね。辞書の編纂やヘボン式ローマ字は知っていましたが、歌舞伎俳優・澤村田之助の足を手術し義足をつくり再び舞台を踏ませたこと、皇后美智子妃の曾祖父正田作次郎に目薬の製法を教えたこと、生麦事件の傷病者を米国領事館（本覚寺）で手当したこと等すべて無償でやっているのですね。まさに偉業で頭が下がります。川上会長が九七年に他界し、その後白金クラブを力不足かもしれませんが私が後を継がせていただき、「継続は愛」という先輩の言葉に励まされて皆さんとがんばっています。

今年も宮部みゆきの『神無月』を発表し、船橋の高根台地区の文化祭に朗読・箏曲・絵画とコラボレーションで地域参加を楽しみました。私個人としてはインブリー館、近い将来想いをこめてヘボン館を描いてみようと思っています。

とりとめもなく長くなりましたけれど、これで終わらせていただきます。

原　それでは、村上文昭先生お願い致します。時間がなくなってきましたので、二〇分だったのですけど一五分程で、それぞれもしお願いできればということがございますのでよろしくお願いします。

村上　実は今日の為になかなか準備できなくて、歴史資料館の原さんに相談しましたら、「それなら、先生方のことを思い出されて話したら」ということだったので、一昨日は一日中メモを書いていたのですが、皆さんのお話なさった先生方と、私の先生方の名前とはあまり重複しないので安心しましたけれど。

私は一九五五年度生で、学籍番号は一〇八〇番。未だにちゃんと覚えていまして、昭和三〇年の四月に英文学科に入ったわけですけれども、衝撃的だったのは第二外国語でフランス語をとったことです。担当

は木越豊彦先生。九〇分の授業のなかで二回ぐらいは、廊下で煙草をスパスパ吸うことがありました。そして、もう一人は若い栗田勇という先生です。こちらはもう毎回のように遅刻で、二〇分以上過ぎて、自然休講になることも何度かありました。二〇分過ぎたからそろそろ出ようと思ったころ駆け込んできて、「すまん、すまん」と言って授業を始めるんですね。そういう風な形のフランス語を二年間やっても、何も覚えていません。ただ栗田先生は若き詩人として売り出し中だったのですよ。一方で、すごい先生でもあるということがわかって、後に作家として宗教的な、キリスト教ではない、例えば一遍とか、親鸞とか、そういった仏教のほうの著作をするようになっていますけれども。

一般教育の先生方を申し上げますと、飯坂良明先生には政治学を習いました。この先生は三〇代ぐらいだったと思うのですけれども、随分と論理的で、明快な、しかも説得力を感じました。朝日新聞の「論壇」欄などで、政治的な文章を書いたり、雑誌の『世界』に、例えばクリスチャンとして世界平和のことを書いた文章を載せたりとかして、（後になって）学習院大学の教授であると知りました。よく「論壇」の所に顔写真が載ったりして「ああ、この先生だった」と懐かしんでおりました。

それから歴史学は、東大から来ていた秀村欣二先生に習いました。教科書は今も残っておりますけれども、一番印象に残っているのは、古代エジプトのミイラ作りについて実に懇切丁寧な説明がありました。それから、古代ローマの皇帝ネロ、この暴虐の皇帝についても随分と詳しく話されたこと、よく覚えております。先生は後に東洋英和女学院の学長になられたと思います。美術では、野村久康という先生がおりました。美術ということですが、「履修要覧」を見れば、美術史になっているかもしれません、確か三年次の受講だったと思います。先生は、「焼き物のことを瀬戸物なんて言ってはいけないよ」とか、「焼き物

と瀬戸物を同一視することはね、間違った考えですよ」というようなことをおっしゃっていたことを特によく覚えております。それから基督教概説、これは園部不二夫先生に習いました。『旧約聖書』の順序を暗記するのに、先生は『鉄道唱歌』のあの「汽笛一声新橋を　はや我汽車は離れたり…」の文句をずっと憶えていて、数年前までかなりの長さまで唱えられたのですけれど、昨日いざそれを辿ろうとしたら、出てこなくなったのです。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記…の頭の一字をとって、「ソウ・シュツ・レビ・ミン・シンメイキ…」と言うように。それが思い出にあります。

もう一人の基督教学の先生で、小野忠信先生がおられたのです。この先生にはラテン語を習ったのですが、英語も駄目なのにラテン語をよく受講したものだと思うのですが、やはり歯が立たなかったのです。なんであんな難しいラテン語をやったのか。フランス語も駄目なのに何故ラテン語だってと思いました。毎回、練習問題だけで終るような授業ですからね。ラテン語の本来の面白さとか深さというのはついに掴むことなく終ったのですけれど、果して単位は取れたのかどうか。大学院へ行った時に、卒業からかなり時間がたっていったのですけど、ラテン語はアモロス先生というイエズス会の神父さんで上智の先生に教わりました。一〇人前後が向い合って端から順に問題を答えていくのです。これまた繰り返しの連続でした。今度もモノにならずに終ってしまいました。

それから、英語の方に入りますと、フレッシュマン・イングリッシュでは、小柄なドイツ系の女性のシュミット先生に習いました。何を教わったか全然覚えてないのですが、ジンジャーエールっていう飲み物のことを懇切丁寧にね、あの当時コカコーラは知っていてもジンジャーエールの味は分かりません。先生は生姜入りのさっぱりした味として説明してくれました。今思うと懐かしい先生です。専門科目では竹中治

郎先生の音声学。これは一年の時に習ったのです。当時は明治学院以外の英文学科では、音声学を習うというのはかなり珍しかった風に聞いたことがあるんです。先生が発音する音に続いて学生が一斉に発音練習をするのですが、時間の途中か一番最後にフォスターの歌などを元気よい声で歌いました。

学問をする深みは感じなかったけど、気楽な授業でしたね。一番付き合いが深く、しかも卒業後も先生が亡くなるまで一緒に過ごしたと言ってもいいくらいなのは斎藤國治先生です。ここで一度も皆さんの中からお名前が出てこなかったぐらいで、実にマイナーもマイナー、体もマイナーで。

陶山　とんでもない。私はピーチクさんと呼んでいました。

中村　あ、ピーチク先生のこと。

村上　ご存知のように、人のいいおとなしい目立たない先生でしたから、そういう敬愛と多少の軽さも含めて、ピーチクのあだ名がついたかと思うのですが、私にとっては大事な先生でした。後に大学院に入るのも斎藤國治先生のお陰でした。

大学四年の間に、おもに二つの活動をしました。一つは社会科学研究部、つまり俗に言う社研ですね、社研に入っていました。それから一方では卒業生で作家の耕治人。ご存知ありませんか。耕治人と同級であった斎藤國治さんの二人で、発行者と編集者の関係で、同窓生及び在学生に呼びかけて最初は『白金文学』、その後は学生主体の『白金文学』と重複するため、誌題を「丘」に改めて、通算一一号まで雑誌を出しましたけれども。そこのメンバーでもあった私です。その当時のメンバーが今でも年一回は集まって、お喋りしております。そこでは思い出をこめて耕治人の悪口を言ったりもしています。

それからもう一人の作家の十和田操さんは耕さんより四、五歳年長ですが、和田豊彦という本名で授業

をなさいました。もちろん非常勤で来ていたんです。この先生は朝日新聞社に長く勤めて、傍ら一年に一本か二本しか短編小説を書かない、知る人ぞ知る寡作な作家でした。実にユーモラスで斎藤國治先生によると、十和田さんのことを「日本のローレンス・スターンだ」と言っていたんです。ローレンス・スターンといいますと、『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見』や『センチメンタル・ジャーニー』の作者でもあるんですね。つまりこれらの作品でわかるように、あっちへ行ったりこっちへ来たりと主人公がいつのまにかいなくなってみたりとか奇想天外な流れの小説を書く人。十和田操さんの小説も実にそういった風変わりな小説を書いていたんです。ですから知る人ぞ知る、例えば伊藤整とかごく少数のプロの人にとっては十和田操の作品は高く評価されていたのです。この先生の講座名は「英国散文」でした。教科書なしで、和田先生はただ大学ノートを読むだけで、全然面白くないのですよ。あとで十和田操という作家だと知りましたから、ユーモラスな作品を書く人にしては、全然ユーモアは感じられない面白くない授業だったのですね。大体、佐々木邦も授業は面白くなかったといいますけれど。有名作家だからってみな期待して受けても、期待を裏切られたりするようです。卒業後は「英国散文」が「小説作法」という講義名になったようです。

シェイクスピアといえば三神勲先生でした。私は去年の夏前に、「白金の丘の文学風景」という題で、昭和三〇年代のことを原稿として書いて校正を待っているところなのです。あの時代の三神勲先生は俳優座と関係しておりましたから、俳優座研修所の卒業生・河内桃子がまだ初々しい時です。明治学院大学の図書館がオープンしたばかりで、こけら落しのような形で、そこで一人二人の生徒さんが三神先生訳の『真夏の夜の夢』の一部を読み合わせしたのです。河内桃子のあの初々しく弾むセリフや動作に見とれな

がら聞いていたのですね。それが印象的です。三神先生のことでは書くこと言うことがいっぱいありますけれども。私にとって、三神先生というと、西脇順三郎先生に小野田耕三郎さんがおります。図書館などにいた小野田さんはいつもよれよれのレインコートに風呂敷包みを抱えていました。この三人が揃って、夕方のチャペル前の坂を下っていくのです。何となく近寄り難い、羨ましいような姿に見えましたね。これはやっぱりこの風景の中に、白金の丘の文学風景の中に馥郁（ふくいく）として残っているものなのです。

私は英文学科に籍をおいていたけれど、経済の学生が「今度すごい先生が経済学部に来たよ、大塚金之助っていうんだ」。それで私は履修登録もしないもぐりで授業に出ました。学生は数人いたでしょうか。先生は英語もろくに出来ないぼくらに、ドイツ語の文献まで、何枚も何枚も自らタイプを打った参考文献を持ってきて紹介するんです。どんな内容かといいますともう忘れましたけど、一つだけ覚えているのは、大塚先生はドイツのルターの宗教改革は認めないのです。これはむしろ宗教改革の頃に同時に起きたドイツの農民戦争を指導したのはミュンツァーだと。それでこのミュンツァーのことをすごく高く評価しているということがよくわかったんです。未だにこの名前を覚えているわけです。

一方で、岩波新書が戦前の赤版に対して戦後の青版を出した際、一番最初に大塚先生の『解放思想史の人々』[17]を出版したのです。これを僕は何度も何度も繰り返し読んで、戦前の思想弾圧によって職を奪われ、一橋になる前の東京商科大の図書館すら使わせてもらえない中、慶應大学だけが自分に門を開いてくれたというようなことも含めて、トマス・モアとか、色んなことがその本のなかに書いてあるのです。頭が下がる思いで、すごい先生にもぐりでもって授業を聞けたのだなと思っております。それであとから卒業後に知ったことですけれど、大塚先生は『アララギ』[18]の歌人としても優れた人であったと分かりました。そ

して歌集は『人民』と言う歌集だったんです。ずっと後年になって岩波書店から出た『大塚金之助著作集』を見ると明治学院時代の「履修要覧」に書いた数行の言葉や文章までもが載っているくらい克明に拾い集めているのです。『解放思想史の人々』の大塚先生のことはなつかしく、忘れ難く思っております。大変に貧しい私の四年間の思い出ですけれども。

ちょっとはしょりすぎましたでしょうか。

原　時間がだんだん迫ってきまして、申し訳ございません。延長でよろしゅうございますか。次に坂根先生お願いいたします。

坂根　私はここに書いておきましたが、昭和三九（一九六四）年大学の経済を卒業しました。六〇年度生です。皆さんのお話のようにどの先生がどうだとかそういう話はもう省略して、もう時間があんまりないので簡単に話をしていきたいと思います。私は、レジュメにちょっと書きましたが、六〇年安保闘争とエネルギー革命の真っ只中に、大学に入学してきました。先程の西村さんは北海道で入試をされたと仰っていましたが、私は福岡で受験しました。それで福岡で合格して、それまでちょっとアルバイト的に、ある仕事をしていたんですが。九州から出てきたのです。九州学院という学校が熊本にありますが、そこを卒業しています。現在私が関わっている九州ルーテル学院は以前は九州女学院と呼ばれ、一昨年八〇周年を迎えました。共学になったために女学院と言えなくなったので、九州ルーテル学院という名前に変えました。この学校では白金の高校で校長をやっておられた坂先生が今、中学・高校の校長です。九州ルーテル学院の学院長兼学長の清重尚弘先生は、現在学院長である久世了先生がキリスト教学校同盟の理事長、キリスト教学校同盟主事も同窓生の花島さんですから「何で我々は明治学院のばい菌にやられなきゃいけな

いんだ」とジョークを飛ばしております。私は熊本から東京に出て来て東京のこの雰囲気というか、本当に驚くことばかりあったわけですが、とにかく入学して最初に、とってもアットホームな、そういう学院だな、そういう大学だなと感じたことが第一印象でした。そして、私はお話ししたいことたくさんあるんですが、ここに書いてある順序で話をしていきます。時間の節約のためですね。で、アットホームというのは、先程どなたかも仰っていました、二学部四学科だけの学校です。そして、私も今でも学籍番号を覚えていますが、大体八〇人ぐらいの学科の学生数だったと思います。先程雑談の中であったように、高田馬場駅から目黒駅まで山手線で一〇円の時代です。その時代に田舎から出てきて、本当にびっくりしたことを覚えています。この時に、同級生は勿論のこと、先輩達と本当に親しく語ることができる、そういう学校だなということを感じましたし、先程とても自由な雰囲気の学校だっていうお話がありましたが、私も本当にそれを感じています。アドキャン（アドバイザー・キャンプ）[19]というのがありましたよね。アドキャンでもすぐ友達が出来ました。アドバイザーの先生ともすぐ親しくなる、そういうことが出来た。それで、学校の授業もそうなんですが、私は何にでもすぐ頭を突っ込む癖がありまして、クラブ活動はS・C・Aといって、キリスト教関係のクラブにいました。どうしてこのクラブに入ったかというと、レジュメの⑤にも書いてありますように、YMCAの学生寮で四年間生活したんですが、このYMCAの学生寮に入る資格として、大学の学Y（学生YMCA）かS・C・Aに入らなければいけないというのがあったんですよ。それで、ここに入ったという経過があります。他のクラブも色々考えていたんですけども、結局ここに入って、色んな活動が、具体的な活動が面白くなってきました。そういうなかで、学生自治会にも関わりましたし、生協の組合員にもなったし、それで、先程やはりこれお話がありましたが、食堂を生

協の食堂にしようと運動をやったり、そういうことを一生懸命やりました。そういうことをやりながら…かなりはしょります。私が出た九州学院の教育目標である「神に愛され人に愛され、自分で自分を監督し役に立つ善人たれ」という標語がありました。それで、やっぱり「役に立つ善人」になるということはいつも頭のどこかにありました。

二番目にいきますが、その当時ですね、まさに安保闘争とエネルギー革命の渦の中の時代ですね。石炭産業が斜陽化して石油にとって代わる。そういう中で、筑豊という福岡県の炭鉱の町があって、山がどんどん閉山していくわけですね。そういうなかで筑豊の子どもたちを守ろうという運動がキリスト教系の大学、ここに書いて有りますが、東京神学大学、立教大学、東京女子大学、ＩＣＵ（国際基督教大学）、東洋英和女学院大学、明治学院大学、同志社大学、関西学院大学、こういう学校で、「筑豊の子どもを守る会」という会が組織されました。その時の顧問は、隅谷三喜男先生だったんです。そして明治学院の中では福田垂穂先生が顧問をして下さいました。我々は各大学毎にキャラバン隊を組んで、筑豊にでかけました。閉山した結果、そこで働いていた人たちはどんどん県外に出ていくんですね。それで空き家になった炭鉱住宅、炭住と言うんですが、その炭鉱住宅に学生達が夏休みや冬休みに住み込んで、子どもたちとのつきあいを始めるのです。子どもたちのことで今も脳裏に焼き付いているのは、お父さんお母さんは毎日、日雇い労働をやって生活をしていますから、毎日朝早く出かけて行って、その日の仕事をもらって、そしてお金を貰ったら、「仕事やったー」というんで自分達が飲み食いして、遅く帰ってくる家庭が結構ありました。子どもたちはほったらかしなんです。その頃に流行ったコマーシャルは「何はなくとも江戸むらさき　とっきゅう～」というコマーシャルご存知でしょう。あの海苔の佃煮。子どもたちは本当にそれだ

けがおかずという、そういう生活をしていました。それで夏休み冬休みですから、給食が無いんです。学校が休みですから。そうすると本当に毎日食べたのかどうかわからないような、ほったらかされた、そういう生活を余儀なくされた子どもたちがいました。そういう子どもたちと一緒に過ごそうというので行ったんです。それがキリスト教系の大学で組織して行っていますから、そういう点では「お前たちはキリスト教の伝道に来たのか」とか、「学生の分際でなんだと思っているんだ」とか、色々なことを言われました。でも、我々はしっかりアルバイトをやって、それで稼いでそれで出かけて行った。あの頃は、我々はそんな裕福じゃなかったですからね。（募金もやりました。我々は吉祥寺で、東京神学大学。／そう、あちこちにね、そういう方がいらっしゃって。その時の写真が最近出てきて、池田守男という資生堂の社長。当時東京神学大にいた彼が写っているんですよ。つい最近「名前入れて出す」と言って、それで当時活動を一生懸命やった船戸義孝が「池田守男が写っているならね、これを売り込む」と言って朝日新聞に載るはずですよ）あの時は船戸さんがリーダーだったですからね。それで、そういう所に行って、そこで私は子どもたちを集めて、午前中は勉強を見てやるんです。そして午後は一緒に遊んで、それでお風呂に行くんです。炭鉱住宅の中にお風呂屋さんがあって、そこは男風呂の方は浴槽が三つあるんです。それで、山から炭だらけになった人が帰ってきて、ドボンとまず入るわけです。その浴槽は真っ黒です。そしてそこでバーッと汚いのを落として、次の浴槽に入って石鹸使って、最後きれいなところで洗い流してって。こういうお風呂に行くんですね。子どもたち連れていって一緒に入って、背中を流したりそういうことやった思い出があります。そういう子どもたちを、何とかほったらかしになっている状況から救おうということで出かけて行ったわけですけども、こういうことやってく中で、私はそれまでは経済学部に入ったんで

すから、将来大金持ちになろうと思って入った面もあったんですが、途中でガラッと変りました。人間相手の方がいいなっていうことで、それで教職課程を遅れて取り始めまして、だから四年生の時はもう目一杯授業を受けていました。それで結局教員になろうという決意をしました。

その当時就職課に橋口冬子さんって方がいらっしゃいまして、橋口さんとこへ行ったら「坂根君ね、社会科でしょ。ないわよ」と同情するような言葉だったですね。それで「ないから自分で探しなさい」と言われまして、しょうがないから、よく考えてみたら明治学院東村山高校は二年目だな。よし、じゃ来年一人社会科教員が必要じゃないかなって、自分で勝手に決め付けてそれで武藤富男先生の院長室に行ったんです、直談判です。そこで私が感じたのは、武藤先生に何回か会って行く中で、ますます明治学院の教員になりたいという思いが強くなっていきました。それは、武藤先生が私にご自分の教育ヴィジョンを滔々と語って下さった結果です。それでその時に、実は明治学院東村山高校を作った経緯等を話されました。それは「中学から、高校に上る時に関門、いわゆる移行試験があって、それで落とされるのがいる。これは黙って見ていられない。やっぱり、明治学院で一旦、預かった以上、最後まで面倒見るのが明治学院なんだよ」ということを言われて、そういう言葉に私はすぐ打たれるんですよね。それで「先生、仰るとおりです、やっぱりキリスト教学校である以上、途中で投げ出すようなことは、これは先生、教育の敗北ですよね」って言ったら「そうなんだよ」って意気投合しましてね。それで随分その中でやっぱり武藤先生は「出来る人間を採って、いわゆる難関と言われる学校に入れるのは誰にでもできるんだよ。そうじゃなくて、能力はあるんだけど、それを発揮できないまま卒業していかなきゃいけない、そういう子どもの能力を掘り出してね。そして自分の進みたいように進ませる、そういうのが教育なんだよ」っていう話しを

されまして、それにも私は本当に揺さぶられまして「先生やっぱりここでやらせてくれ」っていう話しになったのを覚えています。それで、そういう形で、明治学院に就職したわけです。だいぶ端折っちゃっているから、話が難しくなっているんですけども。あのレジュメの三番の①の話はほぼ終ったつもりなんですが、明治学院の東村山高校が設立されたのは要するに中学から高校に関門が設けられて落とされた子どもを拾う、そういう学校を作るんだということが元だったようです。これ『明治学院百年史』にかなり詳しく書いてありますね。武藤先生は、一九六二年の六月に院長に就任されるんです。そして六二年の、同じその年の六月二七日にはもう第二高校を作るっていう提案をされているんです。理事会にそういう自分の考え方を発表されたんです。そして七月三一日の、就任されてから一月ちょっとあとですよね。臨時理事会を開いて第二高校を作るということを理事会にかけられて。そこでもう一二月には、東村山高校新設案を東京都に申請しています。そしてなんと、年が明けて一月九日には申請が認可される。ものすごいスピードですね、ものすごいスピードで。そして一月二八日には都知事から認可が下りる。こういうスピードです。それで、三月一六日に第一回の入学試験があって、この時明治学院中学から七一名が応募したんです。そして合計一六八名が合格して、四月に入学式がもたれたと。まあこういう経過があります。これはもう少し詳しく本当は話さなきゃいけないのかもしれないんですけど。そういう中で、武藤先生は先程言ったようなヴィジョンを、非常に高邁なヴィジョンをお持ちで、それに共鳴した、感銘を受けたベテランの教師たちが結構広い範囲から集まってきたんです。そういう教師達の中で、大学出てすぐというのは私ともう一人、やはり明治学院の英文学科を出た深山祐さん、今牧師をやっておられますけど。その深山さんと二人で採用されたんです。そして、彼は途中で、やはり牧会の方にということで方向転換しました

が、そういう中で、やはり武藤先生のヴィジョンに惚れて来た教師達も、やはりその理想と現実の違いに、これには随分悩まされたわけです。やはり本当に、こういう言い方はあまり良くないんですが、一年目俄(にわ)か作りで募集した子どもたちはまさに玉石混淆(こんこう)なんです。玉と言っていいのか、今ノンフィクション作家として活躍中の山根一眞氏たちも入っている。彼は明治学院中学から来ていたんですよ。武藤先生のそういう考え方にかなり惚れて「東村山に行こう、行こう」という明治学院中学校卒業生が大分いたようなんです。だからそういう点では本当に玉石混淆なんですが、その石の方は本当に大変だった。それで私も随分悩まされましたけど。でも何が良かったかというと、私は明治学院で色んな人と仲良くなって、なんでも相談できる仲間が出来たというのが非常に私にとっては良かった。それをやはり明治学院で学んだ者として、いわゆる石の部分のどうしようもない本当に困った子ども達をどうするかという時、みんなで「彼等は集団だ。我々も集団になろう」っていうそういう話し合いをしたり、そして「皆で『A君は最近こういう風になった』という、そういう情報交換をしようよ」と。そういう雰囲気を作ることが出来たと思っています。そういう中で思うのは、明治学院だから出来たことというのはやはり誰とでも何でも語り合えるような人間関係ですか、こういうものができ上がって行った。それから「筑豊の子どもを守る会」というのも、明治学院だからそういうところに参加することができたと私は思っています。

それで、私は齊藤茂夫先生のゼミにいました。後で判ったことなんですけど、齊藤茂夫先生の奥様のお父さん、斎藤宗次郎さんという方がいらして、だから齊藤茂夫先生は養子という風に伺っているんですが、その方が実は宮沢賢治の『雨ニモ負ケズ』のモデルなんです。ということが、岩波書店の『二荊(けい)自叙伝』という本の中に書いてあるんです。そういう先生にめぐり合えたというのもすごく私は良かったなという

風に思っています。実は一五人、ゼミの仲間がいたんですが、一五人ですから「そごわ（十五輪）会」と名付けていました。今もよく集まっています。そういう繋がりが崩れない。それでついこの間S・C・Aの六〇年度会をやりました。今オーストラリアで盆栽を普及させているメグミ・ジャネット（旧姓 鵜飼洋子）さんもS・C・Aに入っていた人ですけど、彼女が今オーストラリアの人と結婚して、向こうで頑張っているんですが、今度一五日に帰ってくると言うので、再会を楽しみにしています。そういう繋がりが、明治学院だから出来た繋がりって言いますかね。そしていつの間にか皆がお互いに支え合っている。そういうことをこの学院ですごく学ぶことができたと思っています。そういう意味で今私が色んな教育に携わったりしている中でここで学んだものは本当に活かされているなあっていうことをつくづく感じるということを申し上げて話しを終りたいと。大分端折ったのですみません。

一九六〇年経済学科入学（六〇年度生）坂根信義

一九五五年（昭和三〇年）代の明治学院事情座談会レジュメ

1. 六〇年安保闘争とエネルギー革命真っ只中の大学入学
   ① アットホームな大学生活
   ② クラブ活動はS・C・A
   ③ 学生自治会活動への関わり
   ④ 生協との関わり
   ⑤ YMCA学生寮での学生生活
2. 「筑豊のこどもを守る会」への参加

① キリスト教系大学（東京神学大学、立教、東京女子大、ＩＣＵ、東洋英和、明治学院、同志社、関西学院）の学生たちによる組織
② 明学の顧問は福田垂穂先生　③ 教職課程の単位取得へ

3．学院長・武藤富男先生の教育ヴィジョンに感銘し、明治学院東村山高校社会科教諭に
① 明治学院東村山高校設立の経緯
② 武藤先生の教育ヴィジョン
③ 武藤先生の教育実践
④ 理想と現実の狭間で

原　ありがとうございました。

陶山　すみません。解説を。どうして中学から来る生徒を高校で拒否したかという、その問題なんですが。これは、もう一つ前に大学が中学・高校・大学のいわゆる一貫教育を最初に壊したんです。つまり全入を止めたのは大学側です。そしてその時期はですね、ちょうど六〇年代の急成長の時期です。そして武藤院長を迎えると、どんどん建物ラッシュです。そういう中で、拡張、拡張をして行く中で「いい学生を集めなければ明治学院大学の将来はない」と。それでいい学生を集めるということは即、外から新しく採らないとうまく行かない。下からは玉石混淆なので下の方は切りたくなる。これはもう私、東洋英和にいますからよくわかります。東洋英和の下から来るのは大体受験向きでない。いい方は皆外に出てしまう。明治学院もそうだったんですよ。そういう状況があったんですよ。大学が閉め始めたんだ、これはもうやはり中学の所から閉めなければならないというのが六二年から始まる、ちょうどその頃武藤富男院長が就任するんですよ。

坂根　ところがね、ところが『明治学院百年史』によると少し違うんですよ。

陶山　それはね、『明治学院百年史』の編集の、やはり一つの曲った…

坂根　まあそれはここで言ってもしょうがない。

陶山　だけどそれは正当に見て欲しい。私は高校から来ているから。あの書き方はなんとしてもパイロット・プランに従わなかった高校への批判ですよ。パイロット・プランの順応者が書いたのではないですか？パイロット・プランを批判した者に対する不当な評価です。そこから動いているんです。武藤院長を迎えた背景もそこにあります。そういう意味では本当は、高等学校を白金から追い出したかったんです。武藤院長も散々やりました、それは。だけど最終的には諦めたんです。それですからね、その辺の所はね、次にもし『明治学院一五〇年史』を書くならば、公正に見ないと、ちゃんとした歴史は書けない。それからもう一つ。そうは言いながら、私どもは東村山をかなり支援している。これはご存知だと思います。すごい支援をしているんですよ。そこがキリスト教学校なんですよ。我々は理事長や院長からかなり首を絞められている、一方では新しくできた学校と連携している。同じことをもう一個できた新しい学校にさせてはならない。我々は東村山へ行かなかったけれども、この学校を潰してはいけない、明治学院にとっても非常に生命線に関わることなので、助けているところ、かなりあるんです。そういう部分の歴史を正当に書いて欲しい。あの『明治学院百年史』はその意味でダメですよ。

原　それでですね、陪席者も含めまして、それから私も、真向かいの先生も四名、明治学院一五〇年史編集委員が、今陪席しておりますので、今のお言葉を深く受け止めます。

陶山　でないとちゃんとしたものは書けないと思います。

坂根　途中で抜けますが、続けてください。

原　では次に稲本さん、よろしくお願いいたします。

稲本　稲本と申します。私は昭和三三年に文学部社会学科へ入学した一九五八年度生です。一九六二年、昭和三七年に社会福祉学を専攻して卒業しました。現在は横浜の山手にあります児童養護施設、日本水上学園の園長をしております。最近の児童養護施設は入園児童の八割以上が家庭で虐待を受けていた子どもたちです。以前のような孤児は殆ど居りません。また、頼まれて関東学院大学の現代社会学科の非常勤講師もしております。

私は学生時代に社会福祉の実習をとおして情緒障がい児に関心を持ちまして卒業後、私立の短大付属の児童相談所に勤務しましたが、神奈川県からお声がかかり、県立精神衛生センターや県立こども医療センターなど主に児童精神科領域で精神医学ソーシャルワーカーとして二七年間仕事をしましたが、一九年前から頼まれて日本水上学園の園長をしています。今年の七月で満七〇歳になりましたので今年度一杯で退職したいと考えております。社会福祉法人の理事長として残るよう要請されていますので役割は果たしたいと考えております。

学生時代の思い出としては、私の入学当時の明治学院大学は文学部に英文学科と社会学科、経済学部に経済学科と商学科の二学部四学科しかなく、小規模で落ち着いたキャンパスで、ユニバーシティと言うよりカレッジのような小規模な大学でした。大学のキャンパスの一番奥に五階建ての校舎があり、その右手前にグリーンホール、その反対側に図書館という建物構成でした。その当時の教授や助教授、講師の先生方はクリスチャンが多く、クリスチャンの学生も多くいてミッション・スクールらしい和やかな雰囲気で

した。私は高校が都立の工業高校で校舎も汚く、男ばかりの殺風景な学校でしたから一層強く感じたものと思います。

私が明治学院へ入学したきっかけは、高校時代、電気関係の仕事に就こうと考え、墨田区にあった都立の工業高校で電気機器の勉強をしていたのですが、クラスメートに誘われて神田美土代町に在った東京YMCAの少年部に遊びに行ったところ、熱心な少年部担当主事に、君の行っている高校の近くに良い教会があるので行ってみないかと紹介されていったところが東駒形教会でした。東駒形教会は関東大震災のときに賀川豊彦先生が中心になって救援活動をされた本所の地に建てられた教会で、当時は賀川先生と共に働きをなさった黒田四郎先生が牧師をしていました。黒田先生や教会の方々に導かれ、高校二年のクリスマスに洗礼を受けました。その当時は賀川豊彦先生もまだお元気で特別伝道礼拝もありました。賀川先生や黒田牧師の説教などをとおして、クリスチャンは人に仕えることが大切である。人の役に立つ仕事につくことが望ましいなどと勧められ、私は東京YMCAの少年部での活動が大変興味深かったこともありYMCAの職員になりたいと考え、黒田先生に相談したところ大変喜ばれて、それなら明治学院には良い先生方がいるからと推薦されて明治学院に入学したという次第です。

入学当初、男ばかりの殺風景な工業高校に比べると、大変自由で開放的で明るいキリスト教文化があるんだなという感じを最初に受けたことを思い出します。チャペルアワーも毎日あり、先生方や学生も多く参加し、説教も興味深かったため欠かさず出席しました。水曜日の英語による説教も充分理解はできなかったものの関心を持ちました。余談になりますが、私はこのチャペルで結婚式をし、記念館二階の、いま座談会をしているこの部屋で披露宴をしました。もう四一年前になりますが。

私は貧乏学生で専門書を充分買うことが出来ませんでしたから、図書館にもよく通いました。壁面に「THE TRUTH SHALL MAKE YOU FREE」というヨハネの福音書八章三二節のことばが掲げられ、専門書もそろっていましたのでずいぶん利用しました。

当時の先生方についてですけれども、講義も学生の指導にも大変熱心で、個人的交流も盛んでした。部活やゼミなどにも大変熱心に係わってくださり、学生との個人的交流も盛んで、大変親しくなりました。温泉宿に泊まってゼミをやったり小旅行をしたり、私のゼミの教授の福田垂穂先生はお宅に呼んでくださって、料理が大変上手なものですから、手料理をご馳走してくださったことなどを嬉しく懐かしく思い出します。入学当時のことで思い出すのは、新入生のためのアドバイザー・グループです。これも非常に新鮮な感じを受けました。少人数で話し合いをしたり山中湖の湖北寮に泊まって共同生活をしたりしました。私のアドバイザー・グループの先生は園部不二夫先生でしたがサポート役にヴァン・ワイク先生がついて上手な日本語ではありませんでしたが熱心に指導してくださいました。

その当時の学生は経済的に恵まれている家庭の子女が多く全体的にのんびりしていました。しかし、私のようにアルバイトと奨学金で授業料を賄ったり、米軍関係施設で働いたりして学費を貯めてから入学してきた者など、経済的に苦しい状況にある学生も多くいました。また、社会学科の学生の中には卒業後、社会福祉関係の仕事に就くことを前提に入学してきた学生もいましたが、余りそんなことを考えないで入学してきた学生も多くいたように思います。

話が飛び飛びになりますが、グリーンホールは建築されて間もなかったので大変きれいで、食堂や購買部、部活動の部屋などがあり、部活動も盛んでした。六〇年安保があり、先ほど色々話されたように大変

なこともありましたが、私は関心はありましたが苦学生でしたからアルバイトで忙しく、東京ＹＭＣＡの少年部のボランティアリーダーをしていましたのでデモには参加していません。そこに同席して居られる陶山義雄先生には東京神学大学の学生時代に東京ＹＭＣＡの夏期学校のお手伝いをしていただきました。

陶山　いやいやいや。なんだ私より先輩。驚きました。

稲本　夏期学校では陶山先生のほかに東京神学大学の何人かの学生さんにも手伝っていただきました。夏休みにはＹＭＣＡの夏期学校で子どもたちに体操や水泳や勉強を教えたり、東駒形教会の教会学校の教師をしたり授業料稼ぎのアルバイトをしたりで、先ほど話されたように国会議事堂前で樺美智子さんが亡くなるなど大変な事件がありましたが、私は一度もデモに参加しませんでした。

また、その当時、授業料は半期ごとに納めなければならなかったのですが、私はアルバイトの収入と奨学金が頼りでしたから纏めて払うことができないため、事務の三浦正雄さん[20]に前期、後期とも三回の分割払いにしてくれるようお願いしたところ、これまでそのような例は無かったようでしたが「まあ、何とかしましょう。」と了承して下さり大変助かりました。

部活動は社会学研究会に入りました。ちょっと硬い部活で、ジークムント・フロイトの『精神分析入門』や『夢判断』の読書会やテーマを設けて議論したり、夏休みには顧問をしてくださっていた渡辺栄先生などと一緒に木曾の山奥のまた山奥の「下栗」という部落の農村調査に行ったりするなど楽しい思い出も残っています。

「体育実技」では当時、白金キャンパスに体育館が無かったため、わざわざスクールバスで東村山まで行って高橋賢二先生や山鹿謙先生の指導でデンマーク体操をしたり、シーズンスポーツのスキーキャンプ

では発哺温泉の「天狗の湯」に泊まってスキーの練習をしたり先生方と寝食を共にした楽しい思い出があります。

社会学科の先生方のことについてですが、その当時の日本の社会学や社会福祉学分野で高名な先生やアメリカ留学から帰ってこられた新進気鋭の先生方などが丁度旨い具合に揃っていて、大変興味深い講義を受けることができました。時間がありませんので一人ひとり挙げられませんが、「社会学」の若林龍夫先生、「グループワーク」の福田垂穂先生。非常勤講師で「精神衛生」の講義をしていた柏木昭先生、この先生はボストン大学で精神医学やソーシャルワークを学んで帰国し、国立精神衛生研究所の研究員をしていました。「社会思想史」の阿部志郎先生、「社会事業概論」などを講じていた三吉明先生等々、挙げればきりがありません。私は児童青少年問題に関心がありましたから、福田垂穂先生のゼミを履修し児童福祉関連の研究をしましたが、福田先生は学問的には大変厳しい先生でしたが、学生の指導には大変熱心で温かな配慮をなさり、卒業後も随分お世話になった学生もたくさんおります。

私は卒業後、情緒障がい児などの相談治療の仕事に就きましたが、勉強不足のため柏木昭先生にお願いして、当時わが国で最先端の研究をしていた国立精神衛生研究所（国立精研）の社会精神衛生部の研修生にしていただき、相談面接のスーパー・ヴィジョンをしていただくなど大変お世話になりました。当時の国立精研にはわが国の精神医学や臨床心理学、精神医学ソーシャルワークなどの優れた研究者が集まっておりましたので大いに刺激を受け勉強になりました。柏木昭先生には卒業以来、今日に至るまでご指導をいただき親しくさせていただいております。

また、当時の社会学科は新しい考えや実践の導入にも熱心でした。私は「社会福祉実習」を、社会学科

付属の研究研修機関として発足間もない児童相談所でしました。この児童相談所はチャペルの横にあった木造二階建ての宣教師館を改造して創られたもので、当時アメリカで盛んに行われていた、チャイルド・ガイダンス・クリニックの考えと実践を導入したもので、日本でも多くなってきた学校恐怖症や各種の情緒障がい、小児自閉症などに関する相談治療と研究をすると共に、学部の学生と大学院生の研修機関になっていました。若林龍夫先生をはじめとし、福田垂穂先生、三吉明先生、柏木昭先生、E・W・トムソン先生など多くの社会学科の先生方が相談治療の実践と学生の指導に当たっていました。副学長になられた山崎美貴子先生はその当時は助手をなさっていました。私はこの児童相談所で二年間実習をさせていただきましたが、子どもの遊戯治療や簡単な心理テストなどの訓練を受け、ケース・カンファレンスに参加したり、スーパー・ヴィジョンを受けたりするなどの実習をしているうちに虜(とりこ)になり、将来、このような仕事に就きたいと願うようになりました。前にも話しましたように、私はYMCAの職員になりたいと考えて明治学院に入学したのですが、児童相談所の実習をとおしてすっかり児童臨床の仕事に関心が移ってしまいました。就職先を考える段になって、福田先生に相談したところ都立の児童相談所を勧められましたが、公立の児童相談所では一般的な相談業務が多く、臨床面の仕事は少なく希望がかなえられないと考えて、情緒障がいなど児童の相談治療機関を探しました。しかし、希望する職場は無く、卒業間際になってから、若林先生から横浜でよければ募集しているところがあると紹介されて就職したのが現在の横浜女子短大付属の白峰会児童相談所でした。私の今日に至る記念すべき職場となった次第です。このように、昭和三〇年代の明治学院の社会学科を振り返ってみると、色々な新しい学問や社会福祉に関する実践を積極的に取り入れるなど、全国の大学の中で最先端を進んでいる大学であったと思います。

現在、明治学院で育った学生や後輩たちが、全国の児童福祉分野や精神医学ソーシャルワークの分野など広範囲の社会福祉分野で地道に活動している。神奈川県内でも福祉の分野や医療関係の分野でしっかり根をおろして働いている後輩たちが数十人居ることを思うとき、明治学院のスクールカラーといいましょうか、気風といいましょうか、あまり派手ではありませんがしっかり地に足をつけて、キリスト教的にいうと、仕える者としての生活を、仕える者としての役割を果たしているということができるのではないかと思います。

原　ありがとうございます。それでは最後になりましたが、遠藤慎也さん、よろしゅうございますか。

遠藤　出来るだけ手短にお話しましょう。私は中学を受験して入学した時には初めて制服というものを設けられて、紺の背広に赤いエンジのネクタイで、ちょっと恥ずかしいような気分で登校して参りました。面接の時に矢作弥寿久先生から、「リトマス試験紙は赤くなるのにはどうすればいいの」とか、そういう風な質問を受けたのを口頭試問で答えただけだったことを覚えておりますが、それで入学できたようでございます。学校へ来て何をどう得られるということで、文芸部と新聞部を久保山昌弘先生がやっていましたから、先生に「明治学院に島崎藤村という先輩がいるから、ことによったら文豪になれるか」という風なことを尋ねて入部しました。それから、試験の時に担当をしてくれた先生が、木村真太郎先生という書道の先生でした。この先生も好きになりましたので書道部に入りました。月曜日の一時間目の授業がE・クライニアンズ先生という、全然日本語が喋れないという風なことで、最初の授業が机を縦に並べて、六列あるんですがそれのチーム合戦という風なことで英語を覚えさせようとして、黒板にGATEとかJANEとかTOMとかそういうような絵を貼り付けまして、前置詞をいきなり覚えろということで。

“Where is Tom?” と言うとすぐに、“At gate.（門の側にいるよ。）” “Where is apple?” “On the desk.” そういう風なことをやって、とにかく前置詞の勉強に入りました。それでその時に各チームの名前を付けなさいといった時に、カルチャーショックを受けたわけですが、ジャイアンツ、タイガース、そういう風なことを言っている内に、六チームで僕が、外国の野球のチームがいいなと思って、ヤンキースというのが出たんで、こちらは僕はドジャースって言ったら、「そういうチームはない」と言うんですね。どうしてないのか、ドジャースですよ、ブルックリン・ドジャースですって言ったら、「…ダジャースだ。」って言うんです。それからロンドンもランドンと発音しなきゃいけないんだということを覚えました。それが明治学院の良いところなんでしょう、とにかくもういきなり英語で話せるようにさせられる、癖を付けられまして、最後に…（一クラス半分にしませんでした。／いや、各列に机が教室に並んでいたでしょ。／いや、私どもの時はコーバー先生とブラウン先生で、一クラスを半分ずつに分けたんです。一つは英会話教室、一つは自分の教室のままでやったんです）まあそれでクライニアンズ先生の話で、最後に一年の終りに「色んな小説家、作家の名前を言え」と言ったんで「『ポギー&ベス』を書いたのは何でしたっけ。（ガーシュイン）あ、ジョージ・ガーシュイン」だって言ったら「それも君違うんだ、そうじゃないだろう」って。ヘボン先生の話を持ち出して「グッシュインだ」っていう風に言われて。それから「あれはヘボンと言っているけど、ヘップバーンって書くんだよ」という風なことを教わりました。まるで全然発音が違うので大変なカルチャーショックでした。もう一人のリーディングの先生は渋谷一之助先生ですが、この方は日本式の英語を教えてくれました。

それでとにかく日曜日には教会へ行けということで、小学校は男女共学でしたが中学は男だけだったの

で、教会に行って何より嬉しいのは女の子と話が出来ることで。一生懸命「高校を卒業するまでは教会へ行け」と言われていましたので教会へ行きました。それでその教会へ行ったのが良くて、高校入試のときは日下一先生から面接試験をしていただいて「おっ、君か」と顔を知っていてくれたらしくて、「どうだ、毎週ちゃんと教会行っているか？」と言われ「ちゃんと行っています」と。僕の成績表見て「ちゃんと行っているな、それじゃあ合格だ」と言われて高校に入れまして、要するに受験勉強はしたことがありませんでした。そうこうしている内にいきなり体育の恵良照義先生が来て「お前な、体がちょっと細すぎるから鍛えなきゃいかんぞ」という風なことで「明日から体操部に入れ」と。文芸部、新聞部、書道部に体操部はやっていけないんで、そういうわけで先生に断ったんですが、「ダメだ」と言って、久保山先生と恵良先生が勝手に話をされて「お前書道だけはやっていい」と。「文芸部と新聞部は、またの機会にしろ」と、久保山先生は多分僕の才能を見限ったのだろうと思って、それでそのまんま高校まで行き、あんまり体操が辛いので辞めようと思ったら、高校の藤井信之介先生が恵良先生から言われて待っていてくれていまして「丁寧にちゃんと体操教えてやるからな」という風なことで。で、大学へ行って男女共学になったので、もう体操辞めようと思ったら、山鹿先生が待っていて体操部を辞めさせてくれませんでした。従ってですね、勉強のことは、社会科の佐藤泰生先生、宮崎道弘先生、千原英之進先生、いい先生がいたので社会科は好きでしたが、その他はあんまり勉強をしないで、大学へ行った。勉強しなかったお陰で、体操もちゃんとできたし、書道もちゃんとできたし、まあ音楽なんかも好きで聞くことが出来て、あまり勉強、勉強と騒ぎ立てない、そういう風な所が明治学院ののんびりした良いところだろうと、今でも深く考えております。インカレ[21]も四回全部出られたのは、学校が小規模のためで、体操部員が少ない。一年生から試合に

インカレに出られる、という風なことで、日体大の人たちの話を聞くと、もう雲泥の差で楽しい部活でしたね。大変良かったと思っております。ただ卒業の時、インカレから帰ってきた時に恵良先生が健康を害されまして、学校にあまり出て来れない。佐藤泰生先生が僕のところへ来て、「君、悪いけど体操の授業を見てくれないか」と言うので、これもまた大学の授業をほとんどサボりまして、中学一年から三年の体育を半年くらいですかね、教えていました。

そういう風なことで、大学に入った話になりますが、経済学部に入ったんですが、三年になる時、ゼミに入らなければといって受けたのが江口行雄先生のゼミ。何故受けたかというと、卒業するとほとんどの者が早く就職が決まる優秀なゼミだ、という風なことを聞いたのでそれを狙って受けました。江口先生は日本に投資信託を持ち込んだ先生で、オープン型投資信託、ユニット型投資信託の形をびっしり教えられていた。先生は教授以外にどういう仕事をしていたかっていうと、東京証券取引所の上に日本証券取引所の研究所というものがありまして、その主任研究員でした。いわゆる経済界では名のある方で、あの先生の紹介状を持っていけば、なるほどどこの会社でもわりと就職できるのはこのせいなんだなという風なことがわかりました。で、今考えてみるとごく最近のアメリカを源にしている、ああいう証券関係の不況を呼ぶ元ですね。先生は「これを紙一枚を信用して商売をするんだけども資本主義が行き過ぎると大変なことが、こういうことが起きるよ」ということを、四〇年前に先生はもう見通しておりました。その先生が実を言うと、あまり明治学院で名を残されてないのが非常に残念ですが、証券業界では、要するに経済界では有名な先生だったので、それがちょっと私には不満に思います。

まあそういう風なことで、私は今は新宿を中心にしていくつか商売をやって、忙しい思いをしておりま

すが、何か商売のことで色々な問題が起きた時に、ふっと帰ってくるのがキリスト教の概念ですね、神様が観ているぞということと同時に、中学から大学までずっと一緒だった恵良先生、藤井先生、それから山鹿先生と親しくお付き合いしていましたから、僕が人の道をこの年令で外したら、押しかけてきて叱られる、うんと叱られるだろうなという風な思いがしたので、商売をやっていても後ろ暗いことは一切しないで、不良にならないで済んだということで大変感謝しております。今、実を言うと明治学院のこれからのことが少し僕には、商売の経験で言うと先を見通さないといけませんから心配です。大学のことをユニバーシティと言うんでしょうけど、カレッジという呼び方があって、僕が出た頃の明治学院はカレッジでした。ユニバーシティという名前を使いたいんでしょうが、今から、前からでも同じですが、早稲田や慶應を追いかけていって、追いつくんだろうか、追い越せるんだろうか。そこまで及ばなくても、日本大学や東海大学のような大型大学を追いかけていって追いつくんだろうか。そうじゃなくて明治学院は、つまり僕が商売をするならどういう商売をするかなと考えた時に、狙うとしたら上智大学とか、それから成蹊大学とか、武蔵大学とか。カレッジでもいくらでもいい学校があるじゃないか。手広くばっかりするのは、学校業でもあるまい。むしろ僕らが育った明治学院の良さを生かして、小さいけれども人と人の気持ちの通い合う、助け合う、そういう学校の方に進まれることが、僕はこの母校の先行きを考えると良いと思います。ユニバーシティで大きくなることは、一つの考えをやめて頂きたいと思います。それからもう一つ考えていかなければいけないなあと思うのは、もう既にたくさんの卒業生が出ています。それで、同窓会の各支部には、僕が中学の頃決めたんでしたっけ、カレッジ・カラーというのを。スクールカラーっていうので、シルバーグレーとスカーレットの旗がありますね。それを頂いたものに文句をつけるわけではありません

けど、これはどういうお考えで黄色を使ったものに変えたのか。ただ単にデザイン的に面白いからでしたら別に構いませんが、同窓生にも断りも無く、力になれる同窓生かどうかはともかくとして、今まで続けてきたものを断ち切ってしまうのは、これはまた商売の話に僕はつい戻ってしまいますが、老舗って何なんだろう。今まで続けてお客さんに愛されてきた商売というのは何なんだろう。これを考えない、危ない仕事じゃないかな、という風に実を言うと思います。

中村　私もそれまだ聞いてないんです、何でこうなったのかを。是非聞きたいんです。

陶山　山梨学院大とかね、本当に色で勝負しているところがあるんですよ。デザインをトレードマークとしている。それに準ずるような所に明治学院大も流れていったんではないかと私は思うんですよ。

遠藤　だから僕ははっきりいって間違いだと思った。

陶山　元々はプレスビテリアン、長老派は緑なんですよ。だから女子学院も緑です。高井戸教会の前身レバノン教会のマークも緑です。私もいました。それから先ほど稲本さんが話された福田垂穂先生もいた。これは元々マリア・トゥルー・メモリアル・チャーチと英語では名付けられ、女子学院の創設者であるマリア・トゥルーもヘボン先生もそういう緑のマークを戴いたプレスビテリアンです。是非そういうルーツをね、ちゃんともって見ていって頂きたいですね。だから緑に戻すべき。あるいは、緑とそれから村田先生の好きだった紫ね。まあコンバインしてもいいけど派手に目立つということばかり考えるような姿勢、これは時代迎合ですね。

伊東　これはね、応援旗が無かったんですよ。それでこれは徳永清さんのデザインなんです。それをちゃんとオーソライズするために、村田四郎先生が、さっき僕が言ったようにスカーレットとシルバーグレー

と命名して。これを学生も卒業生も使って行こうということになった。それでずーっとそれでやってきたんだけど、今回は大塩武学長[22]がね、決められたんですね。僕の一つ下で、羽野眞理耶（まりや）さんって人がね、学院の法人理事をやっていまして、理事会の席で「こう決めます」って言ったらしいんですよ。そしたら彼女は同窓会のことはよく知っていますから。当時僕は同窓会会長やっていましたから「同窓会に話しましたか、私が入学した一九五五年にこういう話で決めましたよ」という話をしたら「話しました」って言ったらしいですよ。それで「えっ、同窓会に話してれば、私に話してこないわけがない」ということでね、家に帰って夜の一〇時ごろに電話ありましたよ。それで「聞いているか」と聞くから「聞いてない」って。「多分明日あたり大塩先生から話があるだろう」って言ったら、一日置きましたね。その翌々日、電話がかかってきて「僕と佐藤可士和はブランディング・プロジェクトをやっているんだ」と。

遠藤　ですからね、三越が今度伊勢丹と合併しますけども、新しい袋を出すんだかそれともそれぞれが別で、今までの袋で商売するんだか、そういうものでも自分のところの長い商売の歴史、それで得た信用、そういうものを大事にする気持ちが無ければ、学校業もビジネスの部分が当然あるわけですから、多分そこで失敗すると思います。

伊東　今度ね、学長が代ったでしょ。だからっていって、ダメにしたらみっともない話でね、これはこれでね、使い分けをしていかないといけない。で、やっぱりデザイナーが真剣に考えてやっているわけで、ある程度外に向けての効果は上っていると思うんです。それをなにか坊主憎けりゃ袈裟まで憎いみたいなね、やり方するとみっともない。

遠藤　僕は老舗としての体面はしっかり保たないといけないよと言っているんですよ。伝統は大切にして

次世代に渡すもの、ある思い付きでは駄目ですよ。

伊東　僕もだから絶対スカーレットとシルバーグレーですよ。

原　ありがとうございます。ただ、江口先生について言いますと、私の伺ったところでは、事ある毎にゼミの学生に対して、「一つのことを一生懸命やれば一流になれる、だから君たちは一流になりたまえ」ということをしょっちゅう言われた。だから私は先日江口ゼミの総会に招かれて講演をしたんですけども、メンバーを見て唖然としたのは、皆さん立派な人が多い。一流会社の取締役をやったり、色んな方面で活躍したりした方々が入っている会なんです。だからやっぱりこれは江口先生の言葉が効いたんだなとしみじみ思ったんです。だけれども明治学院史の中で、江口先生ってあまり取り上げられないですね。

伊東　これはね、クリスチャンじゃないからかなと思っています。江口先生は彦根高等商業にいたんですよ。で、彦根高等商業で一緒だったのが高橋源次先生と高谷道男先生。それでまず高谷先生と高橋源次先生が明治学院に来て「江口も来い」と言って明治学院に引っ張ってきたんですよ。ところがクリスチャンではないから、結構冷遇されたんですね。今度、高谷先生たちは桜美林に行ってしまったので、江口先生も桜美林に行きました。この江口先生は「その人の人生が良かったか悪かったかっていうことは、その人の知人友人の質と量で決まる」と言うんですよ。だからもうそれはすごく「仲良くやれ」っていうのが口ぐせでね。だから江口ゼミは未だに、先輩後輩の仲が良い。

陶山　一言いいですか。大学を大きくした今でも、内向きで、そして本当に、学生と教師が向き合うように、そういう場を作るように。一年生の時に担任制を作れるはずです。実は東洋英和女学院大学は作ったんですよ。クラス担任なんですよ。新入生はクラスを作る。最大は三〇人くらいなんです。そうするとほ

とんど専任が一クラスを持つ。それでゼミはまた別。ゼミは三、四年になってきますけど、一年でクラス制をとるとすごく変わりますよ。あの子はこの後どうなっていくのか。やはり向き合うような関係というのは、時間的に数多く触れ合わなきゃいかん、それを勧めたいですね、それからもう一つは教職員。教職員の間で明治学院スピリットできちんと理解し合えるような、そういう環境が欲しいです。私どもの時代には、武藤院長の時ちょっとあったんだけども。完全に全員というわけにはいかない、特に大学がそっぽ向いていましたからね。だけど、中学・高校・大学、教職員全員が集まる研修会ですよ。それは創立記念日でもいつでもいい。会えば必ず色んな意見交換ができる。ただ飲み食いするだけではない、真面目な会を、歴史の継承をするような会を一年に一回やっぱりやるべきだと、大きくなろうがなるまいがね。それはね、いい見返りと成果を挙げていくと思いますよ。それから同窓会です。同窓会で何をもって一つになるかというと、それは同窓への畏敬と感謝の念です。それが実感できるのは、英語で言えばボンドBOND、つまり絆なのですが、亡くなった同窓や先輩、後輩を思えば良くわかる。彼らとは同じ学院で青春時代に学んだという絆で結ばれている。これを一番感じることができるように追悼記念礼拝のような行事を学院と同窓会で毎年開くのです。亡くなった同窓と同じ年度の卒業生が集ってそのご遺族をお慰めする。同時に同窓生は亡き友を偲んで絆を更に深め合う機会となる。そのような企画があると良いですね。それはね、ものすごく大きなインパクト、そしてそのスピリットをね、継承できますよ。で、またそれを支えていく役割を持つからね。私としてはただ集まるんではなくて、集まる中で、亡くなった人、私の年代にもかなりたくさんいるんですよ、亡くなった人。それが忘れられたまま、名前も載らない我々だけで知っている。これでは申し訳ない。

伊東　亡くなった方は、全部いつも同窓会誌「Revoir」に出ていますよ。ただ探れない人と会報を手にしない人はダメですね。

陶山　だからまあ、それぞれの学校、例えば高等学校なら高等学校だけでもね。それからもう一つ、『明治学院一五〇年史』について。この前は武藤富男体制の中で書かれた中で、いみじくも坂根校長が出したあの言葉にあらわれています。つまりパイロット・プラン、それに対して、否を語ったそのグループが正当に評価されるような書き方をしないといけない。これは敵対関係で言うのではなくて、私は大学が高等学校の移行入試を厳しくした理由がわかりますよ。いけないって言いませんよ。でも高等学校が今度、中学に向かってやったのはね、やむを得ずそうなっていった事情ね。で、そしてそれが、たまたま武藤院長の教育理念に合致して東村山に中学・高校ができる。かなり無理をして出来てきているわけです。でもそれを乗り越えて今があるわけです。だからね、やっぱり歴史というのは、あんまりある所を叩いて、傷つけていくようなやり方を取るとよくないですよ。『明治学院一五〇年史』を出すなら一貫した明治学院スピリットが生きているように書いてほしい、苦しい中で移行生を落とさざるを得なかった事情を理解しつつ痛みとして言っていかないといけない。それから中学が向こうに行ったのも私たちにとっては痛みです。移行生を入学試験で落すということをやった大学にも痛みがあったろうと思うし、高校も痛みがあった。そういう痛みをね、どこが悪くてだからこうしたって言うと、ギクシャクして上手くいきません。この点が百周年の武藤体制で作られた、つまりパイロット・プラン延長の中で作られた欠点ですね。本当はパイロット・プランは崩壊しているのに、その線に乗ってね、中学の先生が書いたからこうなるんです。是非とも公正な歴史観を貫いてほしい。『明治学院一五〇年史』では是非ともお願いしたい。

原　重く受け止めたいと思います。記録に残りますので。

陶山　さっきのチップス先生[24]は、私にとっては平林武雄先生がチップス先生です。私は今でもそう思っています。お元気なら、明治学院校歌百年の演奏会の時にいらっしゃると期待していました。「あかつきに覚めて起つ者[25]」の作詞者です。齊藤茂夫先生が作曲者でしたね。ピーチク先生は私も慕っていますよ。カーライルを高校生にむかってなんであんなに一生懸命言うかね。面白かったですよ。ただもうさっきの話ではないけど、大学や高校でやる授業ではありません。だけど面白い。そういう授業は生きていました。だから文学者としてだとか、研究者としての面白さを教えてくれたのは確かだけれども、残念ながら明治学院全体の流れではないんですよね。だから平林先生はチップス先生なんだと私は自分に思っています。

中村　本当にいい先生でした。

原　はい、平林先生にお伝えいたします。ありがとうございます。平林先生は今年で九八歳です。先日ヘボンクラブで白寿の会を、パレットゾーンの二階でやりました。写真もここに残っております。本当に皆様、遠いところを貴重な時間を頂きましてありがとうございました。

遠藤慎也氏インタビュー

＊座談会開催後、遠藤氏より座談会での話を補足したい旨の申出を受け、インタビューすることなった。以下、その記録である。

遠藤　では入学のときから話をしたいと思います。明治学院のいい所の一つですが、私の小学校の時の五年、六年の担任に明治学院出身の石田美佐雄さんという方が台東区立浅草小学校に赴任して来られました。ちょっと幼い頃の私のおっちょこちょいなところ、下町風人間を見たのでしょう。僕のことを好いてくれたこともあって「君は、良かったら、僕の卒業した学校に行ってみないか」とお勧めを頂いたので受験しました。入学後知ったのですが、その時の競争率というのが、大体一〇人くれば八人ぐらい補欠を含めて入れるという風なことだったように思います。それで、覚えているのは矢作弥寿久先生ですね。リトマス試験紙のお話をし、聞かれて赤色になる青色になるという風な話をして、それで「では結構ですよ」と言われました。その後大川正校長先生との面接もあったのですが、大川先生の所に、石田先生からお話がいっていたのだと思います。それで、要するに「私の教え子をやるので、是非入れてやってくれ」という風な話だったので。明治学院は激戦区ではなかったものですから。そういうこともあって、「石田先生か」と逆に聞かれて「はいそうです」と答えたのを覚えております。それで入学して受験の時の説明の先生が、優しい先生なので、後で聞いたら国語と書道を教えている、木村真太郎先生ですね。真美書苑という私塾の先生で、その後、國學院大學に戻られて名誉教授までなさった木村東陽先生という方です。書道をやりたいと志すようになりました。それからもう一つ、明治学院の同窓生の文豪島崎藤村ということが頭にあったので、文芸部と新聞部が一緒でしたからそっちにも入ろうという風なことで、久保山昌弘先生のところへ行って入部をお願いして。それで、二、三ヶ月したら私の体が少し弱いのを知って、恵良照義先生が直接来て「君はそういうことをやっているより体操をやって体を鍛えなさい」それで体操部へ入ることになり、そのまま卒業するまで一〇年間いるんです。それで恵良先生は他の人の話にもおそらく出てくると思

うのですが、怖いという感じの先生で、他の先生達が、生徒達に「礼拝堂に入って静かにしていなさい」といくら言っても聞かない生徒たちが、恵良先生が来ただけで静かになるというような、そういう睨みの効く先生でした。でも体操部として付き合っている内に、この先生が怖いふりをしているが実を言うと大甘な先生で、いつでも何でも生徒たちの味方だというようなことがわかったので、おそらくスポーツ系の、運動系の生徒達も先生の人柄を少し知れば、皆、「恵良先生、恵良先生」と懐くようになって行ったと思います。私も当然そうなりました。それで、普通に勉強などはあまりしなかったのですが、三年の時に、「高校があるからちゃんと勉強しよう」と思っていたところ、一学期の成績で大体学年で五番ぐらいになってしまったのです。いつも中くらいの生徒がそうなったら、恵良先生が来て「大川先生が呼んでいるよ、行ってきなさい」ということで、それで伺ったところ、「君はどっか他の都立高校へ行きたいのかい」という風な質問を頂きました。急に成績が良くなって勉強するようになったので、多分都立へ行きたいという風に考えたのだろうと。ところが「僕はそんな気持はありません」と申し上げたところ「そうだろうね」と言ってニコニコして「明治学院にいた方が色々と好きなことが出来るものね」という風なことで、それは終りになったんですが。それでまた大川校長先生に余計親しみを感じたのです。それから社会科の先生では、佐藤泰生先生、宮崎道弘先生は恐らく皆さんもお話になるでしょう。よく色々と教えてくれました。あとから僕らの時に赴任された千原英之進先生。この方は戦争の体験者でした。それで戦場の色んなことを、辛いことや、それから勇ましいことや、そんなことを話してくれるので、僕ら生徒というより子どもたちと言いたい仲間ですが、その千原先生のお話に惹かれて千原先生に非常に親しみを感じました。後で勉強するようになったのは佐藤泰生先生、宮崎道弘先生、千原先生が「お前たちもうちょっと勉強すれば

成績良くなるんだよなあ」という風な煽てがあったのだろうと思います。

中学の制服のことを話さなければいけないですね。中学・高校は制服がなかったので、自然と学生服とかジャンパーとか私服で来ていたんでしょうが、僕等の時は紺色の背広でアウトポケットでした。ポケットが外側にこう縫いつけてある。それからズボンは当時は皆、裾の折り返しのあるズボンが普通だったのですが、それがストレート。エンジ色のネクタイですね。それから紺の登山帽[23]を被っていました。これがやはり当時一番新しかったのでしょう。昭和二八年九年の話ですから。例えば電車の中でも入ってくとちょっと注目されました。「君どこの学校」なんて聞かれたりしました。それで「明治学院」と言うと、明治が有名だったのでしょうけども「ほう、そういう学校があるの。そう、そういう服なの。おしゃれないい学校だね」なんていうようなことを言われました。大川先生にその頃注意されたことがあるのです。「ちゃんとズボンは寝押しをするのですよ。丸い膝のでるようなそういう服の着方をしてはいけませんよ。筋を付けておきなさい」という風なことは少し注意を受けました。夏、夏期は…

原　白い小倉の夏服ですね。

遠藤　あれは僕らの時代にはなかった。それはもう少し後になってからだと思います。

夏期学校は山は霧が峰、蓼科。それから海は伊東ですか。今で考えると恐らく伊東の網代くらいになるかもしれませんが、伊東へ行って。先生と生徒が一体となってよく遊ぶ、楽しい、心わくわくするような学校だったのですね。それで「教会の日曜学校へ行きなさい、おとなの礼拝ももちろん出ていいのですが日曜学校へ行きなさい」ということで、おとなの礼拝の前にある日曜学校へ行きました。そこには他の女学校の人たちも来ていて、それもまた楽しみの一つでしたね。僕らあの頃の話題と言えば「何々教会へ行

くと綺麗な女の子がいるよ」とか。当然男ばっかりですからそういう風なことになりますね。行人坂教会ですとか鳥居坂教会ですとか銀座教会ですとか、そんな風なことを言って。高輪にあったのは、高輪教会ですか。木村知己先生が牧師先生で中学に聖書を教えに来てくれました。他の方も色んな先生挙げるでしょうから、中学校はこのくらいでよろしいでしょうか。要するに、そこにあるのは、勉強は当然しなければならないのだけれども、それ以上にもっと、人生を楽しめという風な感じのものがありましたね。それは明治学院の全学生に言いたいのは「中学から入るのが一番楽しいのだよ」ということを言いたかったです。それで高校への移行テストは、口頭試問でやはり、中からの推薦ですから、簡単にやってくれました。その時に会った先生の一人に「君はデモクラシーという言葉を知っているか」という風な質問をされました。それで民主主義という風に話をしたのですけれど、「二つの言葉が一つになっているのだが」という風なことを聞かれたのですが「それが何と何の言葉の二つか」というのを先生は説明してくれましたけど、ちょっと今は覚えてないのですよ。それから校長の日下一先生と会いました。日下校長先生の質問は一つで「ちゃんと日曜学校、日曜日は教会に行っている」という風な話で「ほとんど行っています、どうしてもいけない場合以外は全部行っている」と答えましたら「うん、それでいいよ」という風なことで、高校へは進みました。

高校で特に感じたのは、数学の延原弘一郎先生ですね。それから体操部でしたから当然藤井信之助先生です。それで、延原先生は、きちっとした講義をする人ですが、やはり人柄でしょうかね、だからといって冷たい感じは全くなく、話を聞いていても、先生自身苦学をして学校を卒業したと言っていましたから、そういうことで生徒には非常に理解がある先生でした。それから藤井先生は恵良先生と逆で、普段はすご

く優しい先生なのですが、しかしあまり生徒が無茶をすると怒りだす、もうきつく怒った先生でその時の藤井先生は本当に怖かった。恵良先生の言った通り逆の先生で、その対照がまた良かったのではないかと思います。あと社会科の高井貞橘先生とか、勿論日下校長なんかも良かったのですが、これは別に入れてほしいことではないのですが、高校の書道部にはまだ書道の先生がいませんから、さっきの木村先生の塾へ通っていて、その頃に年に二回くらい展覧会と調書、その場で字を書くのが東京都主催であったので、特選とか都知事賞とか貰ったんですが、日下先生は大喜びして「その表彰状を都から伝達されただけだから、もう一回礼拝堂で表彰式をやろうよ」と言ってくれたんですが、僕がやはり心に刺さったのは高橋泰郎先生が「そんなものとって何になる」ということを言ったことです。僕らは、もうしょうがない先生だと思って諦めて口答えもしませんでした。そういう先生もいるということも、やはり明治学院の懐の深さかなと今になって見れば思います。中学・高校が一番楽しくってあっという間に過ぎたという感じです。高校はそんなところだと思います。

それから大学へは二科目のテストで、筆記テストがありました。僕らの時代には無試験で入学許可というのはなかったと思いますね。二科目、国語と英語ですね。僕は国語が好きでしたから、自分でもって出した時よりも、英語はちょっと怪しかったのですが、合格していました。面接は加藤七郎先生でした。加藤先生は僕の顔を知っていたようで「やあ君か。来るのか、よかったな」というそれだけの面接でした。それで体操部を辞めない様に山鹿先生がそこではやはり待ち構えていて、体操部に入部して四年間やりましたし、部員数が少なく体育学校と比べて弱小なものですから、四年間全日本インカレ、インターカレッジですね、全日本学生選手権の試合に出場することができました。それでやはり最後には恵良先生のその

教訓が生きているのですが、今社会人でなんと言っても自分の健康ということについて、自信が持てることはいいことですし、もっと言うと、図書館には「真理はあなたたちを自由にする」とそういう言葉が書いてあったのですが、今私この年になって思うことは、人間は真理より現実だと思うのです。それこそ明治学院で楽しい青春をやれたことはそれになりますね。それでやはり阿部勇教授を始めとして習ったのですが、経済学はあまりにも古い時代のものでしたので、通り一遍のものですが、ゼミの江口行雄先生にお会いしてからが本当の勉学でした。この方に出会って本当の資本主義の話が出来ました。この方は日本にオープン型投資信託・ユニット型投資信託を取り入れるという風なことをした方で、非常に金融界に顔が利く方でした。ですから私たちのゼミを出た人はほとんどもう早く就職が決まりました。当時七月に就職活動が大変盛んだったのです。僕は三日頃にはもう三井系の損保に入ることが出来ました。先生の推薦状も効いたのだろうと思います。周りで、東大、京大、早稲田、慶應なんて人でも、随分もう来ていましたが落ちたようです。それで当時はもう横書きペンの履歴書が始まっていたのです。そこへ僕は古めかしい毛筆できちんと書いたのを持って行ったので、面接の時に字で「おっ！」と言わせることが出来ました。これも良かったと思います。中学時代から大学卒業まで木村先生に教えていただいたお陰です。

それで、もうその頃から、今日本に出てきているアメリカの影響による金融商品。金融商品もしくは製品そういうのがどんどんこれから投資信託で、経済が大衆のものになっていくにつれて、そういう危ないものも売りに出されるよ、という話をして、今は住宅ローンですか。それを暗示したような話をしていました。それで、どうしてそういう風な投資信託をやるのかっていうと、経済成長率つまりインフレが進んでしまうと何か物を買おうと思ってお金を貯めてって、貯まる頃には品物の値段が高くなっている。だか

ら買えない。そこで、その時に買ってしまってローンで返すというようなことが始まるんだ、という風なことも言ってくれました。そうすると安い値段で買って、買ったものがだんだん年をとる、これは土地も住宅も入るわけですが、経済の大衆化という風な意味ではすごく役にたつものだ、というそういう風な経済学を教わったものですから、非常に世の中に立って役に立ちました。で、お話したとおり、江口先生の所へある日訪ねてったら、証券取引所の上にある日本証券経済研究所です、東京証券取引所のある東京証券会館。そこの理事をなさっていました。当時よく日本経済新聞に、対談とか解説文を載せたりしているような先生でした。先生の価値はやっぱりその後の明治学院の扱いを見ると、ちょっとそういうところは逆に疎くて、わかんなかったのでしょう。名誉教授にも何もしないで、出てしまいましたから。

原　人材輩出という点でおそらく渡辺実ゼミと江口ゼミが一番すごかったと思うのですよ。

遠藤　はい。これはもう話は別ですが、江口先生が亡くなる直前に、お子さんがいないのですよ。それでゼミでの教え子の幾人かが呼ばれて、「私が死んだら遺骨を分骨してくれ、君たちがやってくれ」と「分骨して、日本の真ん中は善光寺だから、善光寺においてくれ。そうすると仕事とかで往来する時に立ち寄って、たまにはお参りしてくれるだろう」それで、「今ここにあるお金を君たちに預ける。このくらいあればかなりの長い間ゼミのＯＢ会をやれるだろう」ということで、ゼミのＯＢ会（江友会）に六百万円残して行ってくれました。ご兄弟と親戚がいるのでそういう人たちに遺産は行ったのでしょうけれど、僕らに残してくれたのはそういうお金です。それを基にして、江口ゼミＯＢ会は江友会として運営されて、去年までの三年間は私も会長をやっていました。今は高草君にバトンタッチしました。それでこの年になってこそわかることですけど、一〇年において、明治学院から何を一番得たんだろうということですが、やっ

ぱり大いなる知友を得た。それのみにて可ではないかと思います。良しとするという。これが一番大事なんではないかと思います、僕は。明治学院の真髄も、仲間も僕と同じで、少し甘いというべきか大らかというべきか、そこら辺の難しい線上にいるのでしょうけども、そういう友達が多いですね。これが一番の、明治学院の特色かなと思います。僕も高校卒業してもう五一年目ですか。母校の大学の状況を思うと、これから何も明治学院はユニバーシティの必要はないではないか、カレッジでいいのではないですか。ああいう大きくなった大学を追いかけたって、追いつくもんではなくて、むしろ内容を良くするべきではないかなと僕は思いますね。

こんなところを少し補足して終わります。

原　ありがとうございました。

注

1　一九五八年明治学院学長就任、一九六四年退任。

2　手をつないで道路いっぱいに広がって行進するデモ。

3　樺（かんば）美智子：東京生まれの戦後の学生運動家。一九五七年東京大学文学科入学。同大文学部学友会副委員長として安保闘争をリードする。一九六〇年全学連の安保反対国会デモで国会南通用門にて警官隊と激突し死亡する。享年二二歳。

4　一九六九年九月に結成された。

5　一九五〇年代半ばに流行した、細みのズボン。マンボのバンドマンが着用したところからの名。

6 Buttons And Bows　一九四八年の映画『腰抜け二挺拳銃』の主題歌で、作詞はRay Evans、作曲はJay Livingston。

7 The Tennessee Waltz　一九四八年に作られたアメリカのポピュラーソング。作詩はR.Stewart、作曲はP.Wee.King。

8 一九五二年三月に買収契約が成立し、学院所有地となった。慰霊堂工事に一九五三年一〇月着工、翌一九五四年三月に完成した。

9 一九五六年印刷の『カレッジ・カラーの栞』に村田四郎学長が「カレッジ・カラーの喜び」の一文を寄せ、その中でカラーの意味について述べ、「願わくはこの二つの色彩の示す如き情熱と沈思がこの学園の全体をつつむ雰囲気となるように祈るものである」と結んでいる。なお『カレッジ・カラーの栞』によれば一九五五年十二月一三日制定、一九五六年一月一八日発表とある。

10 米国Maison&Hamlin社製のリードオルガンのこと。一九一四年一一月二日理事会記録によると「米国シカゴ・ハイパーク教会ドクトルチャンブラン氏の好意に壮大なるオルガン寄贈」と伝えている。第二次世界大戦後まで礼拝で使用、ハナフォード・木岡英三郎・由布保・黒沢英二・安部正義の諸氏が演奏した。また昭和初期には森有正が演奏したとの記録も残されている。

11 一九四八年明治学院学院長就任、一九五七年辞任。

12 一九五七年明治学院学院長就任、一九六二年辞任。

13 一九六二年明治学院学院長就任、一九七四年退任。

14 デンマーク体操は、その父ともよばれるナハテガル（一七七七―一八四七）によって始められ、ブック

（一八八〇―一九五〇）が大成した。最初はドイツ体操に出発し、途中からスウェーデン体操の影響を受け、それぞれの長所を取り入れ欠点を補充した民衆体操。

15 大正・昭和期のキリスト教社会運動家、社会改良家。戦前日本の労働運動、農民運動、無産政党運動、生活協同組合運動において、重要な役割を担った人物。日本農民組合創設者。「イエス団」創始者。キリスト教における博愛の精神を実践した「貧民街の聖者」として日本以上に世界的な知名度が高い。一九〇五年明治学院高等部神学予科に入学、一九〇七年卒業。明治学院教授理事も歴任した。

16 日本において一九五五年前後に流行した飲食店の一形態。コーヒー、ジュースなど飲料を供し、アコーディオン、ピアノなどの生伴奏によって、司会者（うたごえリーダー）のリードで参加者が、歌集をもってともに歌を歌い合う場。

17 『解放思想史の人々：国際ファシズムのもとでの追想 一九三五―四〇年』東京：岩波書店、一九四九年四月刊。

18 日本を代表する短歌結社誌。一九〇八年に伊藤左千夫を中心に『阿羅々木』として創刊。翌年『アララギ』と改題され、正岡子規門下の歌人らが集まった根岸短歌会の機関誌となった。『歌集　人民』は一九七九年五月新評論刊。

19 大学のマスプロ化による人格的人間関係の喪失等の問題への対応策として、一九五七年からアドバイザー制度が採用された。ひとりの教員に三〇人の学生を配し、教師と学生、学生と学生同士の人間的触れあいの場とした。その中の行事として、山中湖畔の学寮「湖北寮」でのアドバイザー・キャンプがあった。一九六八年に廃止された。

20 横浜校舎開校に合わせて、秋元徹 元明治学院大学教授とともに上倉田地区での開拓伝道を志し、日本基督教団上倉田伝道所となる基を築き、これが後の明治学院教会へと発展していくこととなった。なお、三浦、秋元両氏はすでに故人である。

21 インターカレッジ。カレッジ対抗スポーツ競技大会。各種スポーツ全日本学生選手権大会など。

22 二〇〇五年明治学院学長就任、二〇〇九年退任。

23 オワイヤ帽子と呼ばれていた、と昭和四〇年代座談会出席者からの回想がある。

24 イギリス小説『チップス先生さようなら』（ジェームズ・ヒルトン、一九三四年）のストーリーに出てくる、全寮制男子校のパブリックスクールで教育に携わった一人の男性教師（主人公チッピング先生（愛称チップス））を想起している。

25 『あかつきに』の第一節 初行歌詞。曲名としては『あかつきに』副題として「われし黎明（れいめい）を呼びさまさん」詩篇108—とある。

昭和四〇年代の明治学院事情座談会

二〇〇九年一〇月三一日（土）開催

＊必要に応じて注を付させていただいたが、一般的事項については『日本大百科全書』（小学館）（オンラインサービス）等を利用させていただいた。

＊昭和四〇年代を語るテーマの一つに「紛争」問題が避けられない。これについては『明治学院百年史』（一九七七年刊）でも第八章第四節 紛争と改革 の項で取り上げられている。ここでは「明治学院大学における紛争」、「学園民主化・自治権奪還闘争」（前掲五〇三頁）と記されている。

本座談会でも、発言者によって「紛争」の呼び方について違いがみられ、統一性に欠ける感があるが、発言者のママを掲載させていただいた。

＊昭和三〇年代・四〇年代を通して大学のキリスト教団体として盛んに活動したサークルに「S・C・A」があった（『明治学院百年史』四八九頁）。名称については昭和三〇年度における文化団体（第一部）として「S・C・A」（前掲四六四頁）、一九七五年学生自治会公認団体として第一部学友会文連会「基督教学生会」（前掲四九九頁）、第二部サークル連合会文化団体委員会「S・C・A（キリスト教学生会）」（前掲五〇〇頁）と記載され、また冊子表紙（『荒野の声』第八号一九五七年発行）は「明治学院大学基督教学生会」と記しており一様ではない。座談会出席者により呼び方も一様でなく、「キリスト教研究会（キリ研）」とも呼ばれているが、発言者のママとさせていただいた。

昭和四〇年代の明治学院事情座談会出席者

大学関係

【文学部関係】

太田治子氏　昭和四五年三月　大学　英文学科卒業

山本昌実氏　昭和四二年三月　明治学院中学校卒業
昭和四五年三月　明治学院高校卒業
昭和五〇年三月　大学　フランス文学科卒業

【経済学部関係】

下田正樹氏

昭和四二年三月　明治学院中学校卒業
昭和四五年三月　明治学院高校卒業
昭和四九年三月　大学　経済学科卒業

五嶋正道氏

昭和三五年三月　明治学院中学校卒業
昭和三八年三月　明治学院高校卒業
昭和四二年三月　大学　商学科卒業

【社会学部関係】

星　靖夫氏

昭和四二年三月　大学　社会学科卒業

今関公雄氏　昭和四六年三月　大学　社会福祉学科卒業
昭和四八年三月　大学院　社会学研究科社会福祉学専攻修士課程修了

【法学部関係】

小田　彰氏　昭和四六年三月　大学　法律学科卒業

歴史資料館

辻泰一郎先生　館長

司会　小杉義信

昭和四〇年代の明治学院事情座談会

二〇〇九年一〇月三一日開催

小田　彰氏インタビュー

＊小田氏は座談会当日午後、所用があり、会の冒頭で退席しなければならないため、午前中にインタビュー形式で話をお聞きした。

小杉　先生今日はおいでいただいてありがとうございます。昭和四〇年代の学院事情ということで、先生の過ごされた学院時代のことを振り返っていただいて、お話を頂けたらと思っています。実は、私は昭和五三年に入学をしましたので…。

小田　昭和五三年？

小杉　はい。昭和四〇年代の学院の様子は全く分からず、特に昭和四〇年代というと学園紛争というイメージがとても強いのですが、私が在学した当時にも学園紛争の影が少し残っている時代でありました。その様子から「そういった時代もあったのだろうな」という想像でしかなかったのが、昭和四〇年代を我々が後世に残していく、学院の一五〇年正史として記録していくのに、どのように記憶に留めていきたいのか、どのようなことを伝えていきたいのかという事柄をぜひお話しいただけたらという趣旨で先生にお願いをした次第です。

小田　今ね、ご承知のように団塊の世代[1]が、芸能界あるいは森田健作千葉県知事あたりもそうですが、ちょ

うどこの団塊の世代が日本を引っ張っているという時期でありますね。昭和四〇年代の激動の時代に生み出された若者たちが今、団塊の世代を迎えている。その昭和四〇年代があったから今の私がいる、昭和四〇年代があったから今の日本がある、というふうに言えるのではないかと思います。ちょうど今、羽田空港を二四時間使えるハブ空港にするという話がありますよね。だけど、私たちの昭和四〇年代には成田空港を造るか造らないかという。

小杉　そうですね。三里塚闘争[2]です。

小田　三里塚闘争ですよ。

小杉　私、小学生頃でした。

小田　僕は千葉の県立高校生だったんですけど、そこの社会の先生は、成田に大きな土地を持った農家の方だったのですね。ですから「私は後世のために、成田闘争に命をかける」と。すごく立派な歴史家だったんですよ。「とにかく後世のためにこれに反対するんだ。これで死んでもよい」ということを高校の授業中に言っていたんです。

そういうところから今度は大学へ入学する。そうすると、ちょうど皆がヘルメットをかぶって三里塚闘争に行っていた頃です。そういう反対するエネルギーが非常に充実していた時なのですね。昭和四〇年代には、そういう反体制とか、あるいはそれまでの文化とか、経済とか政治とか、あるいはもっと言うと土地や農業を大事にしようとしていた時代を、新しい高度成長のために全てを捧げるかと。

先程先生（陪席者　手代木研究調査員）が、私が招かれた教会の説教で「礼拝で捧げるときは思い切って捧げよ」と言っていたと話されていましたが、第二次世界大戦、太平洋戦争の終わりは一億総拠出とい

う時代でした。金属でも何でも持っているものは全部出せと。それを鉄板にしたり玉にしたりして、国土を守るためにお前の持っているものは全部捧げる、それが国民じゃないかという。だから一億総拠出という時代でした、太平洋戦争の終わりは。それで今度は特にオリンピック以後の日本の高度成長のために、日本最大の平地を利用した農地であった成田三里塚を「空港に捧げよ」と、「捧げるときは思い切って国に捧げよ」と言った時代ですよ。今頃になると、捧げたけど十分利益がまわっていないと。今度はやはりハブ空港を造るのには海の方がよいというようなすり替えが…。

小杉　すり替え？

小田　すり替えです。論点のすり替えがデモ無しでできるんです。もっと言えば、これは全く本論に入る前の歴史観の問題だけど、鳩山さんが自由民主党から民主党に変わることを「無血革命」だと言っているようなんですね。その程度のことで、大きなプロジェクトのすり替えがなされてしまう。これが今の二〇一〇年に入ろうとしている時代の特徴ですね。

けれども、昭和四〇年代というのは、そのすり替えが血を流さずしてはできないという時代なんです。そういう歴史観ですね。一つは時代の変化というものに、若者たちが皆、命を捧げたくなったという時代なんです。今はもっと大きいチェンジがなされているのに、それがマスコミの二、三行のヘッドラインで解決してしまうという時代なんですね。それは要するに、生命をかけるエネルギーというものが今は無い時代、枯渇した時代なんです。

また、昭和四〇年代の前に昭和二〇年代があったわけですが、終戦という昭和二〇年に向かって、戦艦大和が沈み三〇〇〇人が一度に死ぬとか、そういうことが当たり前にあった。要するに神風特攻隊のよう

に、国家のために死ぬのが当たり前だといった時代。だから昭和四〇年代というのは、日本の高度成長のために三里塚を捧げるのは当たり前だという時代なんです。それに対して反発したのが学生たちです。そういう反発するエネルギーがあったということ。しかし今、平成二一年というのは、反発するエネルギーはない。そしてまさにその時代の時流の中で、いかに自分がうまい汁を吸うかという選択の時代だね。前は選択がないんですよ。人の選択までね、「選択」という言葉は洗濯物の「洗濯」でもいいけど、隣の家の洗濯物まで入って行って洗濯してやるようなおせっかいな時代なんだよね、昭和四〇年代は。今は、私の洗濯物じゃないよって言ったら落ちていても拾わないですよ。そういう時代なんですね。どうして選択の時代になったかというと、これはコンピュータです。

小杉　コンピュータ？

小田　コンピュータというものは、「1」か「0」かという「選択」で動いているわけです。現代の文化というものはね。それから今度、小学館の『小学五年生』『小学六年生』という雑誌が廃刊になるわけですけれども、要するに他に読むものはいっぱいあるわけですよ。昔はこれしかなかった。僕らの時代はね。あと、先生（陪席者　手代木研究調査員）と、私の学生時代は『平凡パンチ』[3]、若者が『平凡パンチ』のグラビアなんかを見てワクワクした時代でした。それだけでもう感激しちゃったんですよね。ものすごい数が売れてた。

ところが今はチョイスがいくらでもあるじゃないですか。ヤングメンズファッション、ミドルエイジメンズファッション、アダルトメンズファッション…っていっぱいある。そういう現在「チョイスの時代」だから、好きなものを選べばいいということは何の責任もないということです。だから、自民党を選ぶか民主党を選ぶかという、「チョイスの時代」。ところが昭和四〇年代は、まだ第二次世界大戦を背負ってい

たんだね。「一億総玉砕」だとか、勝海舟みたいに船の舳先にのって、「日本のために！」と言っていた、そういう人たちの息吹が残っていて、自分で何か行動をすることが国家と関わっているという意識をまだ持っていた時代なんですね。そうでなかったら、あさま山荘事件[4]とか起こるわけないわけ。そんな所で死んだって何の意味もないって言ってね。だから非常にキリスト教的なんです。私が殉職することが国家のためだという時代。

ちょうど今、映画が始まって、「日は昇る…」とかなんとか、あるじゃない。（『沈まぬ太陽』山崎豊子原作のフィクション小説をもとにした映画）あれは日本航空ですよね。要するに日本の旗をつけた飛行機会社をどうするかという問題ね。今、日本航空が倒産しかかっているけれど、これも一つの時代なんですよ。

昭和四〇年代は、三里塚闘争で死ぬことは日本のためだとみんな思っていたんだよ。そのエネルギーが、明治学院は非常に過激だったの。それを推進したのがキリ研です。キリ研が本館バリケードしたわけだから、そうでしょ？　だから明治学院は賀川豊彦以来の社会派だったんだね。社会運動家のスピリット、賀川豊彦以来のスピリットがあってね。英語はヘボン、社会学部は賀川豊彦ですよ。この社会学部のスピリットというものがあったから、キリ研が本館をバリケード（封鎖）したと考えたほうがいいと思うんですね。ちょっと極端な歴史観ですけど、やっぱり社会派なんですよ。そしてそれが東神大（東京神学大学）問題[5]にもずっとつながっていきますしね。社会派というのは、政治を動かそうとしたわけではなくて、民衆のための平等とか福祉とかを実現しようとした動きなんですが、それが武藤富男的な、不動産を買い増して大型不動産業をやるような学校形成に対して反発を持ち、たまたまあの昭和四〇年代の安保反対のムードと三里塚闘争、そういったものと合体して全学バリケードに進んでいくんですよ。

小杉　闘うキリスト者同盟（以下、闘キ同）が出した文章をみると、「一九六七年度からS・C・Aはそれまでの無目的聖書研究団体から脱皮し現在の社会状況と自己との関わりの過程に神の現存とキリスト者の証しを具現化する目的性を有する団体へと変化して行った」[6]という文章が残っているんですが。

小田　その通りです。変化していったとも言えるし、まあちょっと学生が賢くなったという。それまでは、ただのキリスト教研究会だから聖書を勉強しましょうということだったけど、何のために聖書を研究するんだという時代感覚を持ったんですね。時代意識を持った。それから学生っていうものはね、たかだか四年間じゃないですか。一生いるわけではない。自分が、自分の青春というものをこの明治学院のキャンパスで過ごす、そこで聖書を読む。私が生きている時代というものに、私はどういう使命をもって聖書を読むのかという時代感覚、そういう意識を持ったんですよ。それはどこから来るかというと「カルヴァン主義」[7]、『キリスト教綱要』[8]です。カルヴァンの『キリスト教綱要』の、やはり教会と国家という問題に目覚め始めた。それはね、キリ研が目覚めただけではなくて、東神大の学生も目覚めたんですよ。日本基督教団の牧師たちも、一部のカトリックの社会派の神父たちもそういうことに目覚め始めた時代なんだね、昭和四〇年代に入る昭和三〇年代の後半から。昭和二〇年代で戦後復興という時代でしょ。要するに、食べていくのが精一杯という戦後復興の時代から、昭和四〇年代に入ってくると、何のために私たちキリスト教会は存在するのかという、時代感覚というものが鋭くなってきたということだよね。それには片方で高度成長というものがあって、これはもうご承知のように、昭和五一年の万博問題[9]。僕が大学生の時に大阪万博があって、キリスト教館で讃美歌を三曲歌ったんですよ。「ナルドのつぼ」と、あと二曲歌ったんですけど。明治学院の学生であって、将来音楽をもって伝道しようと思った私が申し出て、万博会場のキリ

スト教館、八角形のパビリオンのオルガンのところで三曲歌ったんですよ。ただ万博があるから行ったんだけどね。後で考えてみると、通産省（当時）に何で教会が媚びるんだという問題ですよね。国家に何で媚びるんだという問題じゃないですか。それが後の万博問題に発展するわけだけど。だからキリスト教会もこれだけ成長しているんだから、大阪万博で私たちの存在を証しをするという、証しという見方の人と、国家の富国強兵じゃないけど、とりあえず国が富むという富国のためにね、何で教会が出ていかなきゃならないのか（という見方の人がいた）。こういう万博問題、軋轢というものが尾を引いてくるわけで。みんなそこで、私たちが信仰を持っているのは旨いものを食うためなのか、私たちが信仰を持っているのは国が豊かになるためなのかという、基本的な問いかけがあったということ。

それがS・C・Aの問題でもあり、あるいは三里塚闘争の問題でもあり、後の（大学）本館封鎖でもあり、後の全国に広がっていく大学紛争でもあると。だからそういう意味でね、僕は日本の大学紛争の火種は、キリスト教社会主義が作ったのではないかと思うんですよ。その意味では、明治学院は歴史的な仕事をしたということだね。S・C・Aという、キリスト教研究会があったから、キリスト教研究会が「現代においてキリスト者は何を発言すべきか」という問題を問うたから、全学バリケードがあり、機動隊導入があった。早稲田とか東大はそのあとですから。だから、国家とかそういう問題を考える前に、キャンパスは時代に対して何を語るべきかという思いが爆発したと。

ところで僕は学生オーケストラ（明治学院大学管弦楽団）のたしか三代目の学生指揮者でした。クリスマスにオーケストラが演奏した時も指揮をしたんですが、学生オーケストラで朝から晩まで練習ができたのは、全学バリケードで授業がなかったからなんだよね。その頃に、学外では『メサイア』をやり、学内

ではシンフォニーをやったということが、六〇歳を過ぎた今になってもう一回音楽を始めたということなんですけど、それは昭和四〇年代に授業がなかったからなんです。僕はアルバイトをして結構稼いでいたんですけど、音大生並に、ピアノを習い、指揮法を習い、声楽を習い、合唱団に属し、レッスン代を稼いでできたわけですよ。それは学校が全学バリケードで授業がなかったから。休講、休講だったからなんだね。昭和四〇年代の休講時代の遺産のおかげで、私は六二歳で東京芸術劇場で『メサイア』のマエストロをやろうとしているわけなんですよ。

ただね、それはそれで結果的なことであって、思想的な流れというものは、やはり賀川豊彦の社会主義と、先程もお話したのですが、ヘボンが信徒だったということです。だから日本基督公会[10]を作ろうとか、教派色をなくして日本に、いわゆるミッションフィールドにおいて一つのキリスト教を目指したというのは信徒だからできたんです。やはりその日本宣教は聖職者ではなくて信徒伝道者によってなされたと。賀川豊彦は牧師ではなかったんですよ。一応牧師らしいことをしているけど、聖職者ではないんです、社会運動家です。時代感覚を超越してしまうならば、やはりヘボンも信徒伝道者、賀川も信徒伝道者なんですね。その信徒伝道者によって、宗教も思想も躍動するということですよ。聖職者による教会は中世的で、聖職者による教会は、躍動感がないんですよ。明治学院にはその躍動感があった。それが、他にエネルギーがいってしまったかもしれないけれども、それがキリスト教研究会の全学バリケードにいったと。

オーケストラの顧問は園部不二夫先生だったんですね。園部教授もその疲れで心筋梗塞で亡くなった。そういうことにおいては非常に申し訳なく思うけれど、やはり全体の流れとしては、社会をこのままにしておいていいのかという、信徒伝道者ヘボンと賀川のエネルギーが昭和四〇年代の安保闘争と合体したと。

そこで日本の学園闘争の火種が明治学院から始まったという、このことは時代の経過ということを考えると、誇るべきことであったのかもしれないですね。

そろそろ本題に行かないと。僕ね、今朝メモしたことがあるんです。第一に、昭和四〇年代というのはね、デモクラシーが問われた時代。

小杉　先程先生がお話されていたことですね。

小田　デモクラシーというのはね、民主主義。民主主義なのに、ある政権与党によって全てのものが支配されるという、変形されたデモクラシーだったということだね。本来、デモクラシーというのは国民の総意なんだけど、一部の政権与党によって全てのものが支配されたということで、本当のデモクラシーは何かということを問うた。これがキリスト教研究会ですよ。大げさに言えばね。もっと言えば、教会と社会という、教会と国家という、カルヴァンの『キリスト教綱要』にのっとっているんです。

二番目にミッションスクールが問われた時代。青山学院だって神学部がなくなりましたし、関東学院も神学部がなくなった。明治学院神学部は（すでに一九三〇年に分離され、戦後に）東神大となり、そこで東神大問題が起こった。各地の神学部が、みんな解散ないしは移転あるいは分校させられた時代です。それで、ミッションスクールというのは何なのだと。心の清い人たちを育てるという所がですね、非常に自民党的な多角経営という、不動産を拡張したり資産を作ったり社会にどんどんのしていったりという風に進んで行ったことに対して、デモも起こりました。それで「ミッションスクールとは何なのだ」ということが問われた時代。ここから明治学院も含めて、クリスチャンでなくても理事になれるし、まあ学長になる時だけ大急ぎで洗礼を受けると。僕もある方から、「先生、理事長選挙に出たいから洗礼授けてくれ、

単立だからできるだろう」と頼まれたことがあった。そういうことが問われる時代ですよね。結局ミッションスクールであろうと、慶応だろうと早稲田だろうと上智であろうと、大学である以上、その学問の府としてのレベルが要求されると。やはり有名な学者を集めなければいけないというところで、結局ミッションというものの使命感、伝道的な使命感が段々と希薄になってきた。

三番目に、福音が問われた時代。これは、福音とは何なのか、つまり人の魂の救いということなのか、今の社会派的な改革ということなのか、福音て何？　ということが問われた時代ですね。このことは私にとっては意味のあることでした。

それから四番目に、キャンパスが結果的にエネルギーを消失する、喪失するきっかけとなった時代。キャンパスでデモもありました。いろんなゲバ騒ぎもありましたけど、キャンパスの中で若者たちがどうやって生きるんだということと格闘していた時代ですね。今、学校に在籍していれば、インターネットでレポートを出そうとすれば済んじゃうんだからね。学校へ行かなくてもいいわけですよね、在籍していれば。そういうことによってキャンパスのエネルギーが失われてしまったという、これが昭和四〇年代から始まるということだね。それは、キャンパスのエネルギーが、デモという形、あるいは全学バリケード、そういうことによって余りにも過激に集中したために、これからはもうキャンパスに人を集めないようにしようって言って横浜校舎を建てたようなものですよね。広々として、校舎はポツポツポツって森の中で、自分はどこを歩いているか分からない。夕方になったら真っ暗でね、チカンがでないようにって。そういう学校になっちゃった。小さなところに密集しているということは、すごくエネルギーがぶつかるわけですよ。歌舞伎町とか、銀座とかと同じように密集地ですよ。それを分散させたということによって、キャンパス

が結果的にエネルギーを喪失したんです。これが昭和四〇年代の結果ですね。

次に、これは私の個人的な問題ですが、しかるに聖霊は、なお学内に働いていたと。ヘボン聖書研究会ができる前、私はですね、左翼運動でもう疲れ果てて、空虚の連続で、新宿の歌舞伎町で毎日風俗営業店に出入りしていたんです。もうそれも嫌になっちゃって、お金もないし、死のう死のうと、毎日どうやって死ぬかということを考えていた。それが一九六七年。私が大学浪人して一年目の一〇月一〇日です。僕は百人町を歩いていて、淀橋教会を見て、フラッと入った。私の父が昭和五年にここで回心したという。それでフラッと入ったことがきっかけで、その日僕は、ああ神様はいるんだなあと思った。そこで私は初めて聖霊ということを教えられてね、聖霊っていうのは私の内に働く、神様。「あなたがおられるなら私を作りかえてください」とボソッと祈った。涙が出てきた。土砂降り雨の中帰った。それが僕の回心です。一九六七年一〇月一〇日。これはまず個人的に聖霊が私の心に働いた。図らずも御殿場で伝道している中見透という青年が、高校の時に回心して、すごく熱心に学内伝道して、学内祈祷会というのをやっていたんですね。それが後のヘボン聖書研究会です。僕はデモをやっていたけど、もう生きているのが疲れちゃって、たまたま淀橋教会で回心して、それで学校へ戻ったらお祈りしてる学生がいるんです。それでその学内祈祷会へフラッと入ったんですよ。

小杉　そうだったんですか。

小田　だから僕が始めたんじゃない、中見透なんです。ここに初めて集まった人たちの名簿が載っています。[11] 私の名前もありますけど。僕は一年生の時に学生オーケストラに入ってフレンチホルンを吹いていたんです。学校はほとんど授業がないから、一日中ホルンを吹いていたわけですよ。けれども学内祈祷会に

入ってからは、お昼は学内祈祷会の集会に行って、そしてそれ以外のほとんどの時間はヘボン館地下のオーケストラの練習室で練習していた。

それまで僕はデモでヘルメットをかぶってやっていたけれど、これからはもうそんな時代じゃない。体制を変えるんじゃなくて心を変える。体制を変えることでは決着しないんですよね。心が空しくて僕は死のうとしているわけだから、体制を変えたって僕が自殺したんじゃ元も子もないじゃない。そこで、空しい心でいる仲間たちに僕は伝道しようと思った。僕らは運動場にメガホンを持ってきて、僕はオートハープを、中見君はギターを弾いて、二人でメガホンを持ってデュエットして歌って伝道した。それが後のヘボン聖書研究会になって、五・六〇人、そこから伝道者がでてるわけなんですね。

だから、しかるに聖霊は学内に働いていたと。そして二番目に、青年はいかに生きるかを模索した時代だった。レジュメ（A）は時代の流れと体制、学園、そして（B）は私たちの個人、人のなかに働いた神の業ということを言おうとしてるわけですね。（A）はその時代の流れ、学園、組織。そして（B）はスピリチュアルな。そして青年はいかに生きるかということを模索した。私は自分の育った教会に非常に躓いていたんです。教会にも失望していました。だから、信仰が復興したから教会に帰ろうという気持ちは全くなかったんです。そういう時初めて、明治学院大学の図書館というのに、入り込んだわけですよ。一日中、それまではもうホルンを吹いているかデモをしているか。今度は明治学院大学図書館に入った。それでその時に、園部不二夫先生が色々とリードしてくださったんだけど、初めて明治時代以降の先輩の歴史というものを読んだんですよ。ですから僕はカルヴィニズムでもないし、ウェスレアンニズムでもない、改革派でもメソジスト派でもない、とにかく明治学院大学図書館というもので夕暮れ時遅くまで。私の読

書は図書館だったんです。そこで僕のキリスト教信仰というものは形成された。そして三番目に、私にとってキリストとの出会いがあったことですね。中見透君と一緒にキャンパスで伝道した、その時ハープを弾きながら、彼はギターを弾きながらやっていたことを、私は今もやっているわけです。結果的には全てキャンパスから始まった。

しかし聖霊はいつもpersonalityに働きます。政治はリンカーンが“For the people, by the people”と言ったようにpeopleに働くんですが、やっぱり聖霊（Holy spirit）はpersonnel、ペルソナに働くんだね。ということで、神の業は個人に働き、人の業は善悪の流れに働いたが、いずれも神が容認していたこと。だから神の容認がなければ、なぜこのミッションスクールの中で、ああいう事が起こりえたということですよ。神様はヨブを苦しめるためにサタンを放ったじゃないですか。[12] 明治学院をふるうためにね、あるいは日本をふるうために神様はサタンを放ったと。神が悪霊の働きを許したと。それが昭和四〇年代だったと。

小杉　興味深い話をありがとうございました。

小田彰先生レジュメ
昭和四〇年代の明治学院事情
67J（S42）として回顧するに…
（A）①デモクラシーが問われた時代
②ミッションスクールが問われた時代
③福音が問われた時代
④キャンパスが結果的にエネルギーを喪失するきっかけとなった時代
（B）①しかるに聖霊は学内に働いていた
②青年はいかに生きるかを模索した
③私にとってキリストとの出逢い　伝道の熱情が与えられた尊い時代

昭和四〇年代座談会

小杉　正式に会をスタートさせていただきたいと思います。本日は皆様お忙しいところお集まり下さいましてありがとうございました。最初に本学院の歴史資料館館長の辻泰一郎先生よりご挨拶をいただきます。どうぞよろしくお願いします。

辻　今、ご紹介にあずかりました辻と申します。今日は大変お忙しい中を、この座談会のためにおいでくださいまして大変ありがとうございました。歴史資料館では資料集を発刊しておりまして、昨年度、昭和三〇年代の明治学院事情座談会を行って、それに引き続いて昭和四〇年代の座談会を計画したのですが、どういうメンバーにお集まりいただいて、どういう話をしていただくのか、最初苦労がありました。当然その中心に、その時代は大学紛争があって、明治学院もその点では非常に大きな紛争を経験したということで、この話を抜きに昭和四〇年代を語るというわけにはいかないのではないか、けれどもそれにふさわしい方をどうやってお招きしたらいいのか、またお招きできるのかという、ここのところが最初のうち非常に苦労をした所でした。職員の小杉さんを中心に、できるだけそういうメンバーの方にお集まりいただくことに尽力していただきまして、できるかできないかということから始まったのですが、今日お集まりの皆さんにお声をかけさせていただいて、ご快諾いただけたということで、当時のそうした生々しい話も出しながら、昭和四〇年代の大学、それから高校、中学も含めてですけど、色々なお話を伺うことができるのではと期待しています。

現在、法人では『明治学院一五〇年史』の編集作業に入っていまして、学院の様々な歴史をもう一度掘り起こしていくという作業に入っています。そういう意味でもこの座談会でのお話は歴史を見直していく土台になりますので、貴重なお話をいただければありがたく存じます。これから早速、座談会に移りたいと思いますので、どうぞ皆様よろしくお願いいたします。

小杉　ありがとうございました。実は、今ご同席いただいている小田彰先生ですが、これからご所用のために一足先にこの場を退席しなければなりません。午前中に先生から大変興味深いお話をお聞きしまして、大変刺激を受けました。ご退席される前に、先生から何か言い残されたことを含めて一言ご挨拶をいただけたらと思います。

小田　小田と申します。現在は田園調布で単立教会の牧師をしておりますが、単立というのは勝手に色々なことをしたいから単立教会なんです。イギリスで少し勉強しましてから日本基督教団清水ヶ丘教会という横浜にある教会の牧師になって、その後フリーの伝道者をしております。イギリスへはヘンデルの研究に行ったものですから、一昨年還暦を機にもう一度音楽を少しやり始めまして、一二月一五日に東京芸術劇場で、オーケストラと合唱をプロの編成で演奏会をすることになりました。今日、一時半から合唱団の練習なんです。そういうことで失礼しなければならないことをお許しいただきたいと思います。

今もちょっとお話しましたが、明学の法学部にいた者が牧師になったのもまさに方角違いですが、オーケストラの指揮をしているのも方角違いで。まあ、明学卒業生が芸劇でプロのオーケストラを指揮するという事で、ぜひお訪ねいただきたいと思っています。

よく考えてみると、授業はほとんど休講でありましたので、私はフレンチホルンを吹いていたんですが、

ほとんど毎日音楽学校のように、歌や音楽の練習をしていたということを思い出しております。

今日は早く帰らなければならないので既に録音をさせていただきましたが、先程申し上げたのは、学生紛争・学内紛争は何だったかということを一口で言うということは非常に難しいのですけれども、日本の、特にミッションスクールから発した学内紛争の火付け役というか、口火を切ったのは明治学院ですね。私は、そのことは良かったのか悪かったのかということについては、傷もあるし色々な問題もあると思うんですけれども、やはり明治学院というのはヘボン以来の英語と、賀川の社会運動というところにルーツがあるのではないかと思っています。その社会運動という意識と、それからキリスト教研究会が時代に何をするか、ただ聖書を読んでいるのではなくて、聖書を読んでいる私たちは現代に何を発信するかということを非常に真剣に自問自答した結果、一つは時代の流れもありました、安保闘争もありましたし、三里塚闘争もありましたし、反自民とか、反体制とか、反米とか、ベトナム戦争とか色々なことがありましたが、そういう中で、「現代において聖書を読む私たちはどういうメッセージを発信するか」ということで、このバリケードに移っていったのではないかなと。

今、バリケードの中の専門家がおいでになるんで、発起人がいらっしゃるのでね、それはお聞きしたいところですが。時間が過ぎてみますと、明治学院というのは結構歴史の大事な節目を担った、東大の紛争とか色々発展していきますけれども、明学の学内紛争というものは非常に大きな意味があった。私もその中で少しだけ石を投げたり、走ったり、警察とぶつかったりして、十分虚しさを感じまして、何度か自殺未遂なんかもしたんですけれども、新宿の百人町を歩いている時に淀橋教会にふらりと入って、そこで回心したことがきっかけで、後にヘボン聖書研究会が生まれる頃のキャンパス、あちらはデモをやっている、

こちらはメガホン持って伝道しているという、そういう時代が始まりました。イデオロギーとか、歴史は色々あるけれども、また、密かに魂のなかに聖霊が働いていたと、そんなことを振り返って今日参りました。皆様方の座談会に参加できなくて残念なんですけども、小杉さんが非常に頑張っておりますので、よい資料ができるようにと願っております。

小杉　ありがとうございました。昭和四〇年代をどう振り返るかということは、私は小学生の頃ですので、大学生はこんな凄いことをやるんだという思いだけでした。その中で凄く印象に残っているのが安田講堂の攻防[13]で、あの姿がものすごく子ども心に焼きついて「あの大学生たちは一体何を考えているのだろう?」という目で見ていた世代です。そのような時代をこの学院の中で送られた皆様方は、どのようなことを一五〇年正史の中に留めたいのかをお伺いすることができたらと思い、この会を企画させていただきました。しかし大学紛争ということだけに焦点をあてると大変難しいため、辻館長と相談をいたしまして、昭和四〇年代の全体を俯瞰できるような皆様に集まっていただいて、そこからさらに問題を掘り下げていくための材料を得るような機会としたらどうだろうということで、皆様にお声をかけさせていただいたという次第です。それで今日このように皆様へご連絡を差し上げた時、本当に快くお引受けくださったことを改めて感謝を申し上げたいと思います。今日ご出席の皆様につきましては、お手元にある資料のとおり、当時ございました各学科のそれぞれの代表という意味合いでお一人ずつおいでいただいた次第です。文学部の英文学科から太田治子様、フランス文学科から山本昌実様、経済学部経済学科から下田正樹様、商学科から五嶋正道様、社会学部社会学科から星靖夫様、社会福祉学科から今関公雄様、法学部法律学科から小田彰様ということでお集まりいただいた次第です。まず順番に皆様に当時のことをご回想いただきまして、

後に座談会という形で進めることができたらと願っております。

私どもの方で用意させていただいた資料を参考に、世代順と言いますと大変申し訳ないのですが、星様から当時のことを振り返っていただいて、お話を聞かせていただけたらと存じます。では宜しくお願いいたします。

星　改めまして、星でございます。どうぞ宜しくお願いいたします。私は昭和三八年に文学部の社会学科に入学をして、昭和四二年に社会学部社会学科を卒業いたしました。ちょうど私どもが入学をして二年が過ぎた時に、文学部の英文学科と社会学科がそれぞれ独立をして、文学部に英文学科とフランス文学科ができ、社会学部に社会学科と社会福祉学科が加わりました。そして翌年に法学部ができるんですが、実は法学部は政治学科と法律学科と二つ作る予定だったようです。私の知ってる範囲では。ところが、当時は非常に学生運動が活発で、政治学科というのは非常に作りづらい環境にあったということで、法学部法律学科だけを作って四学部七学科という形になっていったのだろうと思います。実は応援歌『光の園』にもありますように、「目醒めて起ちし三千の」[14]ということで、明治学院大学そのものは全学部学年合わせて三〇〇〇名近くでございました。文学部の英文学科・社会学科で一〇〇・一〇〇、経済学部の経済学科・商学科で一二〇・一二〇の四四〇名が一学年の募集定員だったと思います。ただ我々の時には受験生が大変多かったということと、明治学院高校から上がってくる人たちもいましたので、一学年大体平均で見ますと二〇〇名前後が一学科にいたんじゃないかなと。だから一学年で大体八〇〇名…。

今関　（学科では）二〇〇名超えてました。

星　ええ、八〇〇名、一学年一〇〇〇名まではいなかったと思いますが、八〇〇名前後だったのかなと。

当時の明治学院大学はユニバーシティではあったけれど、カレッジに近い学校でした。一つのキャンパスの中で男女が揃うというようなこともありまして、先生との関係、それから学生の関係でも同学年に限らないで、先輩後輩の関係があり、それから学部・学科にとらわれない関係ということで、学生会館「グリーンホール」を中心として大変過ごしやすい四年間の学院生活だったと思います。

そういう中で紹介欄にありますように、私は昭和四〇年度後期に常任委員長を務めました。皆様方ご承知のごとく、当時は全学年学部統一の全学自治会でした。その中で執行機関を常任委員会と称し、議決機関を代議委員会と称していました。そのほかに文連会と体育会という二大クラブ活動組織が存在をしていて、応援団ともう一つ、明治学院大学学生新聞会（以下、新聞会）という学生組織がありました。新聞会についてはまた後ほどご質問のところがありますので触れていきたいと思うんですが、当時、学生の課外活動費として一人につき八〇〇円を集めていたと思うんです。それを学生部が徴収し、学生自治会を通してサークル活動に分配していたやり方でした。部室と予算の関係もあり、体育会と文連会でどうしても学生自治会の主導権をとる必要があったので、常任委員会に対して文連会、体育会、応援団もそうなんですが、積極的に人員を提供していました。私は体育会の合気道部に入っていたんですが、合気道部（の先輩）から二年目に常任委員会に行けということで出されました。そこで色々なことがあったのですが、丁度その時に私が覚えておりますのは、明治学院はノンポリの学校で比較的穏やかだったと思います。当時から東大・早稲田を中心として学生運動が大変活発でありました。明治学院は本当に少数の人間が、個人参加で他の大学に行って学生運動に関わっていましたが、学生全体としては関わることが少なく、特に常任委員会という執行部に対して体育会と文連会が人を送り込んでいましたので、そういう形で動くことはあり

ませんでした。

私は昭和四〇年度の前期に常任委員長に立候補したのですが、その時まではチャペルで常任委員長を多数決で決めていました。一般学生はなかなか集まりませんので、組織関係からいって絶対的に多い文連会と体育会推薦の委員長が選ばれていました。しかし、民主的なルールとして、学生自治会の委員長選挙を全学投票とすることをこの年に改めたんです。その時に私が立候補したんですが、二七票差で民青（民主青年同盟）の代表者に負けました。その民青代表者の北名昭美さん、今でも北海道深川市議会の議員をやっておられますが、その方が勝ちました。但し、新聞会発行の新聞には出てるんですが、二七票の票が途中で紛失したんですね。[15] 一定の場所から紛失した。その行先が分からなくなったんです。二七票差。それで少し学生間ですったもんだがあって後期を迎え、私が常任委員長に選ばれるのですが、個別な学生の意識から言うと、やはり反自民のところがあって、純粋な学生気質なところで、比較的反自民の価値が根付いていった、こんな様な気がします。当時の私は、学生は学生運動に参加することもさることながら、クラブ活動で青春の汗を流すということを基本としていました。私が後期委員長となった時、文連会と体育会のクラブ組織だけで、体育会が約六五〇名前後、文連会でも一〇〇〇名前後ぐらいの組織だと思いますけど、在学生の半数以上の人がやはりクラブに入っていない。自分たちの趣味を親睦で、それぞれが人数を集めてやっている。

今関　同好会？

星　同好会ではなく愛好会ですね。同好会はクラブ組織に入っていましたので。そこに何とかもう少し予算をつけて、あるいは予算配分して応援してあげる必要があるだろうと思いまして、愛好会協議会という

ものを設立させた記憶があります。そして私が四年生になった時に「文連会と体育会がいつまでも自治会組織に関わっていたのでは、クラブ活動に専念できないな」というので規約改正を断行しました。[16] これも当時の新聞会発行の新聞に大きく載っていると思いますが、サークル活動を学友会と名付け、サークル活動と自治会とに組織を二分化したんです。[17] 自治会を全学自治会から学部別自治会に切り替えて、サークル関係については学友会ということにして、自治会と関わりがなくてもサークル活動に対しては一定の予算配分が下りてくるようにしました。そして私が四年生の最後の年の学生大会で、学生規約改正が承認に至ったんです。

そして一年の準備期間をおいて施行するという形をとった段階で我々は卒業したのですが、実は我々が卒業した翌年の一九六八年から学園紛争へ突入をしていったのです。そしてこの時には、第一の問題が国際反戦の呼びかけだったのですが、実はもう一つ問題がありました。明治学院大学は授業料値上げを他の大学と同じような形で提案をしたわけです。この授業料値上げの提案に対して学生が入りこんでいきました。今日、当時の学院紛争を書かれた若林龍夫学長の本[18]を持ってきたんですが、ここにも書いてありますが、やはり一番最初に紛争に突入していったのは社会学部の学生自治会でした。そのあとを追いかけて、経済学部とか、法学部、文学部が後を続いていき、全学の紛争に突入していく時代に入っていったんだろうなと思います。

そういう中にいて、我々としては、学園紛争へ突入する前のとにかく古きよき時代の明治学院で、最後の一年間を過ごしたという思い出があります。駒沢公園で開かれた体育会執行部中心のオール明治学院運動会をやったり、それから白金祭をやったり、色々なことをやりました。当時、先生方も「明治学院で学

園紛争は起こらない」と大変安易なところもあり、学生の動きに対して先生方も興味を示さなかった。そんなところにも一つの問題が残されていたのかな、そのような気がするのです。

小杉　ありがとうございました。次に五嶋様です。宜しくお願いいたします。

五嶋　星靖夫さんと私は同期で、大学時代はマンドリンクラブを応援してくれた立場で、今も縁が切れなくお付き合いさせていただいております。私はそういう生々しいところよりも、何かお坊っちゃんの世界の方に入ってしまっているのかもしれません。昭和三二年に明治学院中学に入りまして、高校、そして大学を昭和四二年に卒業という、昭和三二年から昭和四二年の一〇年間をこの白金のキャンパスで過ごしたわけです。学園紛争直前のすれすれで、なんと言うか、ホワッとした雰囲気のキャンパス時代を過ごしました。一〇年間という長い期間だけに、中学・高校・大学といったセクション的な感覚を私はあまり持っておりません。明治学院という意識は、私、人一倍強い方なんですけれども。その中で明治学院という学校が、あの時代、昭和三二年から昭和四〇年の始めまで変貌していった姿、これは今思えば非常に印象深く、一〇年という長さだけに強く思っております。そんなことと、色々と先生方の思い出話を交えてお話ししたいと思います。

記念館二階ロビーに、一九五〇年頃の明治学院という模型がありますけれども、ちょうど入学した頃はあの模型そのものの建物がそっくり残っていまして、戦前の建物でした。それで、今のパレットゾーンあたりですかね、海軍墓地跡に五階建ての大学本館が途中まで建っていた。私が中学に入った時は木造の黄色い壁の二階建て校舎で、雨漏りのする校舎に入っていたという状況です。

ものすごくのんびりした学校で、ちょうど入った時は中学校校長が「西洋ルンペン」というあだ名の大

川正先生。それから俳優の池部良さんも習ったことのある、国語の安藤徳夫先生、動物のカバみたいなあだ名「安カバ」で有名でした。独特の英語の発音をする由布保先生、国語の大西貞治先生。ビンタ飛ばす佐藤泰生先生、後に校長先生になりましたけれども。そういう先生に習いました。あと、鉄拳制裁する恵良照義先生という元気な体育の先生。それからクマさんみたいな吉原幸二先生、音楽の国枝誠也先生。讃美歌は素晴らしいんだということを説かれて、ちょうど私が三年の時、キリスト教宣教一〇〇年祭というのをミッションスクール合同でやったのですが、その時に合同の聖歌隊をつくり、それに私が選ばれたという楽しい思い出があります。大してうまくはなかったのですけれど。あと、チャールトン・ヘストンばりの、二メートル近いコーバー先生という体育の先生がおりまして、大学同窓会の中村会長も教えを受けた先生なんです。これは資料館の原さんとよく話すんですけれども「上田の婆ちゃん」先生（上田公子先生）がいましてね。『鉄道唱歌』のメロディーで、聖書の順番を覚えさせられて、その時は変な学校に入ったなーと思いましたね。

♪マタイ、マコ、ルカ、ヨハネ伝、使徒、ロマ、コリント、ガラテヤ書、エペソ、ピリ、コロ♪

未だにこの歳になっても覚えていてね。そういう教育を私は受けました。英会話ではミセス・ウィン先生、おっかないヒステリーなおばちゃんがいまして、顔真っ赤にして怒るんですね。私の友達が、“What's your name?”と聞かれ、「マヨネーズ　イズ　キューピー」と答えてね。ありゃ耳を引っ張られて、うわー、と。外国の先生って暴力を振るうんだなってね、そういう印象を。美術の先生は大堀俊次先生、我々は「おっぽり」って言っていましたけど。バス旅行へ行きますと先生は必ず「エッフェル塔からしょんべんすれば」という歌を歌うんですね。これはやっぱり美術学校仲間で、フランスの歌がそういう歌詞になっ

ていたんだと思うのですけど。そのようなとても楽しい中学時代を送りました。そして高校に昭和三五年に入学したのですが、校長は針谷松太郎先生、化学では後藤進先生、この間、校友会の時にも来られていましたけども、社会の津田一路先生、陶山義雄先生。国語の大河原忠蔵先生は、陰では「忠蔵のデブ」とか、酷いことを言っていました。それから三年の時は原田昂先生が担任で、よく授業中に自分の娘さんの自慢話をするんですね。きれいで頭がよくて素敵でどうのこうのって、親が言うんだもの、変なおやじだな、と。最後は、「お前たちにはうちの娘はやらないよ」なんて言うのが癖でね。そういう思い出が高校時代にありますね。

大学は昭和三八年入学、星さんと同期なんですけれど。学長は高橋源次先生だったと思います。私は西洋商業史の英明先生のゼミをとりました。英明先生のお父さんが英語の英義雄先生でありまして、その先生からお説教をくらったことを今でも覚えているんですが、「昔、明治学院はね、横浜に大きな船が入ると学生たちはみんな通訳に出されたものだ。君たちはどういうことなんだ」と、よくお説教をくらったんです。よくというか一度ですけどね、強烈に覚えております。そういう時代だったんです。ですから、私が習った時代は、まだ戦前の明治学院の気風を知っている、戦前の気風を経験した先生たちだったのですね。その時の学院長は、中学から高校二年までは、確か都留仙次先生。いかめしい感じの先生でしたけれども。高校三年になって、武藤富男先生に代わりました。

武藤富男先生は、とにかく何か変わったことをやろうという気風にあふれた先生でした。私は高校三年間は皆勤賞だったんです。真面目に勉強をしたわけではないですけれど、学校が面白くて来ていたからなんです。それで「それは母親の力が偉大なんだ」ということで、うちの母親が武藤先生直々に賞状をもらっ

たという経験があります。武藤先生というのは、もともと教文館の社長さんをやっていたという、経営手腕の優れた、今までの明治学院の雰囲気とはちょっと違うタイプの先生でした。

それでその当時の日本社会はどうかというと、ちょうど経済規模が大きくなって、日本社会、企業がものすごく大量の「ホワイトカラー」、こういう人たちを必要としていたと思うのですね。それに対して大学もどんどん変わっていった。明治学院は必ずしも先頭をきっていなかったものの、遅れ遅れですが、その流れになんとか乗った。これは良い悪いは別として、武藤先生の力だと思うんですよね。それでその当時、よくマスコミでは大学の「マスプロ化」とか「レジャーランド化」とか、そういう騒がれ方をして、記事に載ったりなんかしていたんです。私は大学に入って、大学の典型的なレジャーランドの一角と言いますか、「マンクラ」マンドリンクラブで青春を謳歌したわけなんですけれど、これはもう実に楽しくて、学校へ行くのに片手に楽器、もう一方の手には楽譜と。こういうスタイルで行くんで、親は、「うんー」と唸ってしょっちゅう首をかしげていました。

それで、校門をくぐると、もうそこは別天地に変わるんですね。星さんも言っていましたけれど、グリーンホール前はもう青春のパラダイスという気分だったんですね。夜練習が終わると、品川駅前のバラック街がありましたけれど、そこの中華屋さんの宝来という店で仲間と酒を飲んで、いっぱしの音楽家気取りで青臭い音楽談義をやって、かなり熱い話をしていました。そんな思い出がいっぱいあります。あの時代、ちょうど武藤先生になって、武藤先生は昭和四〇年代の終わりまで確か学院長をやっていたと思うんですけど、ものすごく変革したわけなんです。昭和三〇年代・四〇年代・五〇年代、日本経済はどんどん右肩上がりなんですね。あの時代を今振り返ると、文化だとか、生活スタイルは過去とは不連続、全然つながっ

ていないというスタイルを作り出している。その中には空虚な部分、虚しさ、ちょっと意味のない部分もパッパッと出るわけですが、そういうのをどんどん蹴散らして、右肩上がりで社会は進んで行った。そういう中で、明治学院のキャンパスの風景もその時代に全く無関係ではなかった、と今思うわけなんですね。

そういう高度経済成長と戦後教育の高まりがあったのですけれど、何と言いますか、精神的な何かが無くなっていく、希薄化していく、それに代わるものが何も見つけられていないという時代だったんじゃないかな、と今思う次第なんです。では明治学院はどうだったかというと、明治学院のキャンパスが持っていた伝統的なものがあったと思うんですが、その気風というものが、あまり気にされなくなった。皆レジャーランドで楽しんでいた、なんとなくお祭り的な雰囲気の中にいたのです。それがどういうことなのかと思うのですね。まあ、敢えて言えばキリスト教精神というか、そういう土台が無くなってきた。讃美歌を歌ったことがない、校歌も歌ったことがない、そんな学生ばかりになり始めた時代ではないかと思うわけです。それから『歴史資料館資料集第五集』で大河原忠蔵先生が、先生は戦前に明治学院で学ばれたのですが（昭和一七年中学部卒業）、「戦前の明治学院キャンパスに漂う自由の気風」というようなことを言っておりました。それはキリスト教をバックボーンにした自由というか、気風があったんだと思うんですね。ところが、我々にも確かに自由という雰囲気はあったんですが、それは何かそういったバックボーンの無い自由だったという気がしてならないですね。そういうことで、ちょっと泡のような夢のような世界だった気がしています。

歴史的に見ると、経済、社会の流れと学校のキャンパスというのは無関係ではないのです。明治学院の過去の歴史も時代の流れと格闘していたということを、少し思い起こしたいと思います。皆さんご存じの、

島崎藤村の『桜の実の熟する時』に書かれているのは、明治二〇年代の明治学院の姿、いわゆるアメリカン・リベラル・アーツ・カレッジ[19]という、要するにアメリカのラトガーズ大学の雰囲気だったんだと思うのですね。あそこは長老派ではなくてオランダ改革派ですけれども。そういう先生たちも当時の明治学院にはいっぱいいて、ラトガーズ大学校歌を、（明治学院前身校・築地大学校・東京一致英和学校）校歌として歌っていたという記録もあるそうです[20]。一方、日本の教育制度はヨーロッパ、特にドイツの教育体制を真似て、それが明治三〇年代に完成しつつあった。それからご存じのように、教育と宗教の問題があって、明治学院はものすごく大変な苦労をしたということはよく知られていることです。こんな中で各アメリカ系のミッションスクールは、正規の大学を作らなくてはいけないという思いが沸々と湧いてきたということなんです。

そういう中で大正元年、明治学院総理井深梶之助先生[21]がアメリカ系ミッションスクールに対して、「各高等学部の経営事業を合同化しよう」という提案をしたという記録があります[22]。これは残念ながら不成功に終わったのですが、それに代わる体制として、それまでの神学部を中心とした教育ではなくて、職業教育志向の専門学科を明治学院につくらなくてはいけないということで進めて、その一つとして、大正七年に高等部商業科（後の高等商業部）ができた。それが「聖俗共学化」と言うのか、聖書の「聖」ですね、俗の「俗」、「聖俗共学化」という風に言われているんですけど、段々当時の実業志向の青年たちが入ってきて、明治学院の土台がある程度できつつあった。生徒がほとんどいなくなっていたのが、それなりにできてきたということなのです。それで、昭和五年には神学部が経営の上でお荷物だったので切り離されましたが、「聖俗共学化」の中でも、やっぱりキリスト教が持つ、心落ち着く素晴らしい雰囲気というのは

キャンパスに残っていたということなんですね。それが大河原先生の言う「明治学院キャンパスに漂う自由の気風」の原点になるんだと私は思っております。

ちょうどこの私の一〇年間が、そういう気風を知っている先生たちがまだ健在で活躍されていた時代でした。大学では齊藤茂夫先生、平林武雄先生ともキャンパスで身近にお会いできた時代でしたね。しかし、その先生たちの入れ替わりという分岐点があった。それが昭和四〇年代じゃないかな。全く方向が変わっていったのが昭和四〇年代、学園紛争という起爆剤で学校がどんどん変わっていったと。それまでの古い事を知っている先生たちが、結局はその大きな社会の流れの中で無力化していったのかもしれませんけれども。都留仙次学院長、先生はクリスチャンとして立派な人なんですけれども、皆さんもいろんな話をお聞きしていると思いますが、先生の考えは「明治学院は国家のための人材ではなく、神の国に寄与する人材を養成する」という考えなんですね。ところが、このような考えを昭和四〇年頃に言っても、社会の荒波、潮流には乗れなかったんです。でもやっぱりそれはそれで、大切に我々明治学院のキャンパスには残しておかなきゃいけない。今、“Do for others”という言葉が盛んに言われていますけれど、その根本の精神は、やっぱり都留仙次先生が言われた「神の国に寄与する人材」から来ているはずなので、そこらへんをやはり忘れちゃいけないんだなと。

要するに今言われる“Do for others”のもっと奥にある精神がこれなんじゃないかなと私は思っています。雑駁な言い方をしましたけれど、明治学院の教育設計、あるいはキャンパス設計について、広く時代の潮流に乗って、素早く大きく舵をとって変更していかなければならない部分がある一方、明治学院の持っているアイデンティティといいますか、時代が変わろうがずっと受け継いでもっと太らせていかなけ

ればならない部分、その二つがある。それをちゃんと頭に入れて、一方に偏ったら駄目なんだと。経済や時代に偏ってしまうと、この明治学院のキャンパスはコンクリートの塊になってしまうと思うんですね。コンクリートの塊には本来の気風も何も残りません。そういうことを考えていかなければならない。しつこく言えば、特に大学においては、このチャペルを中心とした明治学院キャンパスにどれだけ青春の心と言いますか、若い魂をひたす、そういう魅力と、いわゆるキリスト教から来る感化力を大学がいかに持っていくか。讃美歌を歌ったこともなく、校歌も歌ったこともなく卒業していくというところに、大学として何の感化力もないんじゃないかと。ちょっと乱暴な言い方ですけどそんな風に考えます。

小杉　はい、ありがとうございました。今の話を伺いながら、大変貴重なキーワードがいくつも出てきたと思いますが、そのお話はまた次につなげていくとしまして、太田治子様にお話をいただきたいと思います。ご紹介にも書きましたが、当時の明治学院の風景をおりこんだ『私のハムレット』という短編小説を書かれております。私も大変興味深く読ませていただきましたので、そういった風景も交えながらお話を頂けたらと思います。よろしくお願いいたします。

太田　今、お二人の先輩のお話を興味深く伺いました。私は高校時代に初めて大学見学に来た時、バスの中で明治学院の女子大生の方を見て、それは清らかな方たちがいらっしゃると感激しました。当時、スカーフをふわりと頭にかぶることがありました。今のスカーフとは少しイメージが違って。それがとってもロマンチックな感じがして、「ああ、きれいだな、この方もきっとクリスチャンのお姉様ではないかな」と思ったんです。私はクリスチャンではなかったのですが、キリスト教に対する憧れをもっていましたので。そしてキャンパスに入りましたら、ちょうどチャペルが冬の夕日を浴びてそれは清らかで。何て言うのか

しら、固い言葉で言えば質実剛健なんですが、本当にね、「ああ、この学校に入りたい」、心からそういう気持ちになりました。そして大学に入ってからも、私はチャペルアワーに必ず参加をしていましたし、村上和男先生がキリスト教学で、分からないことが多かったものですから、必ず質問事項をいくつか出して、先生これ何ですかと。先生は親切に教えてくださったんですね。

英文学科でしたので、竹中治郎先生とおっしゃる明学ご出身の英語の音声学の先生でした。それで竹中先生はその時ちょうど六〇歳だったんですね。大したことではないのですが、いつも「私は当年とって五〇歳です」と、必ず授業の前にそのことをおっしゃるんで、ちょっとおもしろい先生だなと思ったんですが、私も今その年になり、先生の気持ちがすごくよくわかりますね。英文学科の学生としては英語ができないのに、とにかく明治学院の雰囲気が好きでした。しかも私の場合はイギリス文学ではシェイクスピアに憧れたり、アメリカ文学で言うと、今でもこれは私の好みなのですが現代小説のトルーマンカポーティは苦手、やはりホーソーンの『緋文字（ひもんじ）』の世界が好きです。そういう古きよきアメリカのものに憧れ、私がキャンパスにいた頃はその憧れがそのまま明学の雰囲気として残っていたのです。その後も村上先生にも優しくしていただいたりしまして、それから千葉茂美先生の哲学の教室にも入ったりして、先生方にもずうずうしく親しくさせていただきました。英文学会の例会に、生意気にも一年生の時に出席したりしました。ミルトンの『失楽園』の感想をお話したことがあるんです。英語ができないのに、ぬけぬけと。

私がやっぱり明学の理想の先生だなと思ったのは、新倉俊一先生、それからＮＨＫで講師をした赤川裕先生。英文学科では須藤信雄ゼミをとっておりまして、須藤先生も、やっぱり穏やかな優しいおっとりとされたジェントルマン。それが私の明学の先生のイメージです。

私は基督教児童研究会に入っている男の子とも軽井沢のホテルの修養会などでご一緒しました。私はクリスチャンになれないでいましたので、本当に明治学院の高等学校から来た男の子たち、基督教児童研究会に入って活動している子たちは憧れでしたね。それは清らかで。軽井沢の修養会などに行くと、みんな優しいんですよ。私は女子高から来たんですけれども、ちょっと遅くチャペルに入ると、「僕のスリッパを履いてください」と言って、自分が履いているスリッパを脱いで私に譲ってくださるのね。私はすっかり感激して、その子も学院の高等学校から来た子でしたが、「なんて優しい子。クリスチャンはこういう風に優しい人ばっかりなんだ」という気持ちで、いよいよ明学、大好きになったんですね。英文学会でも、質問をするとどの先生もすごく優しく親切に答えてくださって。そして、その時ホープカレッジに行くというのが私たちの憧れでしたので、「英語さえ勉強してもっと成績良くなればきっと行けるのよ」とうちの母からも言われていたんですが、英語がどうも不得意だったんですね。そういう中で、ヴァン・ワイク先生にも憧れて。ご夫妻でいらっしゃいまして、明るくて、私は英語なんかできないんですけれど、そういうできない子にも、さっきの「キューピーマヨネーズ」など、ああいう風なヒステリーの先生とは正反対で、できない子にも優しい、穏やか、明るく、全てを受け入れてくださるというのがヴァン・ワイク先生だったんですね。[33]

あと、私もちょうど武藤富男学院長の時代で、いつかは神様を見られるのではないかなと一生懸命思ったのですが、なかなかそういう機会がなかった。武藤先生がチャペルアワーの時に「人間には、アウグスティヌスのように、神をなかなか見られないことを悩んだ上で見えるようになった人と、あと突然パッと見られるようになった人がいますね。誰でしょう、パウロですよね。その二通りある」と。それから「私

はどう考えてもパウロのようにパッと見える素直さがない。欠けているんだろうな。アウグスティヌスのように、勉強する姿勢がやっぱり足りないのかな」と思い、「いつかなりたい」といつもお祈りしていたんですね。ところがですね、そういう日々を過ごしている時に衝撃が走ります。怠けつつ明学の良さに浸っていたある時、気づくとキャンパスに立て看板があるんですよ。そしてチャペルが封鎖されました。それは突然でしたね、私にとっては。そのチャペルを封鎖したヘルメットの男の子が、以前基督教児童研究会でスリッパを譲ってくださった、私が憧れていた優しい男の子だったんですよ。もしかしたら今関先生ご存じでいらっしゃるかもしれません。

今関　たぶん。

太田　まあ、そんなに活動を先頭に立ってはしていないのですが。それから何人かの人はみんな私の知っている男の子たちでした。それはもう大変なショックで、私はその時点で、まあ今もそうですけど、クリスチャンになれない子だったけれども、今度は全共闘にも入っていけなかった。何でこうなってしまったのか。ほんの一年前まではチャペルの前で「礼拝に参加しましょう」とビラを配っていたんですよ。白いブレザーを着て、スマートさが板について晴れやかな笑顔で配っていた子が、それが今度はヘルメットをかぶって。もう私はどういう変化だろうと。これはもうお話を聞かずにはいられないという事で、勇気を奮って当時の学生会館に、全共闘によって封鎖されたところへ入っていきました。

今関　グリーンホール。

太田　グリーンホールに訪ねて行ったんです。そして図書館の前のベンチに並んで座って「どうされたんですか」と聞いたら、はっきりとは言わなかったけれど、「やはり自分は今までなにも知らずに学生生活

を送っていた。続けていたことがやっぱりおかしい、間違っているということに気付いた」と言いまして。私はその時もノンポリだったので、「うん、まあそれもそうかもしれないけど、封鎖はしなくてもいいのではないですか」と言うと、「やっぱり封鎖はしなくてはいけないことだったんだ」と強く言ったんですが、いまひとつ私には共感できないところもあったんです。和田昌衛先生[24]が学長になられた頃のことですね。それで、私は気持ちとしては今でもそうなんですけれども、自己否定したい彼らの気持ちがわかるところがあります。自分の今まで恵まれてきた生き方も、この時代の中で流されていくよりかは抵抗したい、という気持ちです。でもそのやり方には違和感がありました。ちょうどその時、中国でも紅衛兵[25]が暴れていたころです。赤い三角帽子をかぶせたりとか、そういうことをしている時で、その影響もあったと思うんですね、何でそういう風な学園紛争が紅衛兵につながっていくのかっていうことが、私には非常に分からなくて。和田さん、禿げた頭だったんですね。とてもきれいな禿げた頭をされていました。非常につややかできれい、そのピンクの頭をね、メガホンか何かわかりませんけど、こん棒ではなかったけれども、全共闘の学生が集会の時にその頭をポンポンと叩いたわけですよ、棒で。それで「これは暴力だ。やっぱりついていけないな」と思ったんですね。和田さんはユーモアのある方で、ご自分のことを「僕はピンクのヘルメットをかぶっています」とおっしゃっていて、さすがだと思いました。

それと共に私自身のことを言えば、共感するところ、彼らの言っていることがわかるような気がする一方で、キャンパスで「我々は断固として戦うぞ」というアジテーションに、やっぱり私は違和感というかな、ついていけなかったんです。そしてそのまま過ぎていったんです。知り合いだった男の子たちは全員明学を中退しました。その時にちょうど東大紛争で、私の同い年の東大生の知り合いも紛争に入っていた

んですが。その後が問題だと思います。私は勉強しなかったけれど紛争に乗じてというか、卒業できました。しかし、あの子たちが、キャンパスで運動をしていた彼ら全員、私の知っている子たちは全員中退したことね。一方、私の知っている東大の全共闘の人たちは、安田講堂攻防戦の時に検挙されたんですが、私の知り合いも含めてほとんどの学生が復学しまして、そのあとＮＨＫにいったり経営コンサルタントになったりしたんですよ。「それはずるいな」と思って。「革命というのはそんな生易しいものではなかったでしょう」と、「あなたたちはあれだけ大学解体を叫んでいたのだったら、その大学にノコノコとよく復学できますね」と。私はやっぱり今でもそれは同世代として、彼らはずるいなと思っていました。

その一方で明学の彼らは、私にとっては『車輪の下』というヘルマン・ヘッセのお話のハンスのように思われるんです。東大の運動に感化されていたハンス。ハンスは、学校をやめて、傷ついて、死んでいった。でも彼らは死んでいないし、立派な六〇歳になっていると思うんですが、先程退席された小田さんも一時期は石を投げたとおっしゃっていましたけど、あのようにクリスチャンになられた方がいる一方で、私の知っている六〇歳の一人は、ポエムという喫茶店のマスターになりました。大学を中退して、最近のことは分からないのですが。ある人はガラス工場に勤めて、しばらく本当に工員さんをして、そのあと認められて、営業をされた。そういう人の方が私はやっぱり好きなんですね。東大を出て、まあ一橋もそうでしたけれど、そういう運動をして、また調子よく今度は良い地位について、弱い者いじめではないですが、若い人に対してネチネチ言う上司になる。それで（私は）「あなたが若い時は何をしていたんですか」と（思う）。私はそういう変節は、やっぱりあまり好きではないんですね。そういうのは好きじゃない。自己否定はどうなったんですかとお聞きしたい。

私と同期だった明治学院の彼らは、みんな辞めたから良いとは言わないけれど、やはり一旦「革命」とまで言ったわけですから、単なる学費値上げ反対問題を超えてしまったことに帳尻を合せた。「革命」と言った以上は自分の言葉に責任を持って、ガラス工場や、そういった工場に勤めて、自分で働いて。それはとても辛いことだと思うのですが、そうして生活を続けていく、その上でまた新しい仕事を得るということをしてきた彼らの方が、私は本物だと思います。明治学院の全共闘に入った彼らの中に、明学の良き伝統がそうした形で生きていた。さっきのお話のあった、コンクリートの塊でない、そういうものだけでない、お金儲けでない、自分はやっぱり足が地に着いた生き方をしたいという。全共闘を辞めずに、中退をして労働者になった彼らの中にそういうものは生きていたと思う。彼らのほとんどは明学の中学・高校から来ている子たちですが、一時期全共闘の運動に入って、ちょっと行き過ぎがありましたが、根っこは同じだったし、その後も彼らは良き生き方をした。東大を出て、コロッと忘れたふりをして「韜晦（とうかい）」した、「韜晦」という言葉は私たち全共闘世代の言葉なんですが、心の中では違うことを考えていても表向きは違って生きるという。それは私はとてもずるい言葉だと思いますね。表向き生きていれば、その時心の中に何を思っていようとも、行動、実践がなければそれは全く生きていないも同じで、ずるい言葉ですよ。だからそういう意味で、明治学院は私が最も好きな学校です。生き方は色々違っていたけれども、彼らのことも、そこに加わっていらっしゃった皆さんも、それぞれ個性があって違ってはいても、私には何かわかるような親しみをずっと感じて生きております。

小杉　ありがとうございました。今太田様のお話を聞いていて、そういえば私もヴァン・ワイク先生に習ったなと思い出しました。

太田　あ、そうですか。

小杉　実は大学に入って一年生の時の英会話の授業がミセス・ヴァン・ワイクの授業でした。

太田　あ、ミセス・ヴァン・ワイク。笑顔の素敵な先生でした。

小杉　とても優しい、本当に穏やかな先生。授業は月曜の一限だったんですけれども、「あれ、今日なかなか来ないな、どうしたんだ」と思ったらご主人のゴードン先生がいらっしゃって、「今日はうちのワイフの具合が悪いから僕が授業する」と言って、休講は一回もありませんでした。

太田　じゃあもう、その頃もお元気で？

小杉　はい、本当にお二人とも元気で、とても優しい、いつも穏やかな顔でいらっしゃいました。

それで先程のお話で、突然チャペル封鎖がというお話があったのですが、記録を見てみると、立て看板の破壊事件は昭和四三年一〇月八日で、明治学院大学新聞によると昭和四三年一二月チャペル封鎖なるという記録が残されてるんです。[26]

今関　一二月…？

小杉　一二月八日。学生新聞会が出した記録を見ると、発端となった事件から約二か月でチャペル封鎖が行われている。ちょうど今言われたように、早急というか、あまりにも突然の出来事だったのかなと思われるんです。さらに「礼拝は明学権力機構維持の手段と化している。チャペルは明治学院のキリスト教建学精神の空洞化の象徴。だからチャペル封鎖をしなくてはいけない。バリケードで完全に封鎖し、誰一人入ることを阻止し、チャペルの建物である機能を拒否し単なる瓦礫と化してしまう。すべてのキリスト教主義大学の存在が不可能である」[27]という文書が闘うキリスト者同盟冊子に書かれていて、これを読んで私

もチャペル封鎖についてすごく考えさせられてしまっているところです。

星　あのね、今言っていることはそのとおりなんですが、最初は、授業料値上げの問題から始まって、先程申し上げた各学部別自治会の代表者が責任者となって、学校側との交渉に入っていくんです。ところがいつのまにか学生自治会が全部追い出されて、全共闘に代わっていってしまうんですよ。

要するに、いつのまにか明治学院の学生主体から、必ずしも明治学院の学生ではない人たちに主体が移っていくのです。それで、一二月八日に闘うキリスト者同盟がチャペルを封鎖するんですが、一二月一二日に全共闘が学生自治会室を襲撃して、学生自治会の役員四名をバリケード封鎖中の本部内に連れ込んだ。だから若林龍夫先生の論文というか、記録の中に書かれていることですが、やはりいつのまにか学生自治会代表者と学校側との話が全部すり替えられて、もう学生と学校がと言うんじゃなくて、それこそ違った組織と学校とのやり取りになってしまった。そこにチャペル封鎖。だから明治学院の学生ではまず考えられない、起こりえないであろうと言うことが、平然と起こり始めた。

今関　だからその点で言うと、青山学院大学の学生たちが、ワーッと来たんですよ。実際のところは。だからチャペル封鎖などね。

星　それから立正大学からも来たとか色んな話がありましたね。

小杉　ではそういったことを含めて、今関先生にお話を伺いたいと思います。宜しくお願いいたします。

今関　今関公雄です。自分が学園紛争でとった態度というか、行動を理解してもらうためにも、ライフヒストリーみたいなことに触れざるをえないと思います。僕は二六歳で大学生になりました。だから同学年の人よりは、八年ライフサイクルが遅くなっている（八歳年上）わけです。それは家庭の事情もあって、

工業高校の機械科を出て、東京ガスの技術屋をやって、ライフワークと言うのでしょうかね、一生涯うち込む仕事を模索する中で、福祉か教育だろうと思って。貧しかったですから、国立とか授業料が安い学校ばかり最初は受けたんですけど、教会関係の人の勧めもあって「明治学院も良い学校だよ」ということで、受けて何とか合格したわけです。高校を出た年に洗礼をうけてキリスト者になっているので、つまりキリスト者としての人生を貫くというのかな、あるいは「キリスト教価値観」をかけるという、自分の中に一本の見えない芯があって、明治学院大学の社会福祉学科に入学して、勉強し始めたのです。ですから、今で言う社会人入学みたいな感覚もあったわけですよね。それで二年次、すなわち一九六八年一〇月に学園紛争が起こったと。その当時は、僕は何が何だか分からなかった感じで。ただ見えるところで言うと、立て看板の取外し（破壊）がきっかけで、体育会や応援団関係の学生こそが権力そのものだという印象を全共闘系の学生たちが持ち、それでワッとなったのでしょう。象徴的には、東大の安田講堂に機動隊が入った時期と重なっていたのです。

僕は一般学生のリーダー格になっていたので、構わず本館のバリケードの中に入って、その歴史的な事実を全共闘の人たちと一緒にテレビで見たことだけは確かなことなんです。多少の記憶違いがあるかもしれませんけれども、私なりに学園紛争の流れをお話しすると、まずヘボン館、本館のバリケード封鎖がありました。バリケード封鎖はご存じと思いますが、机だの椅子で、とにかく外から人が入れないようにやってしまうわけですよね。それから機動隊が何度か入りました。そうすると学生大会において、学生の民意は機動隊が入ったと言えば反権力だと言って、（新左翼であるフロントの執行部の側へ）ワーッと気持ちが流れていくんですね。冷静になると一般学生である私たちの側に傾きました。

僕たちは、知的障がい者に対して関心を持っていた学生たちの同志的結合で結成された、ＭＲの会で活動していました。さらに、その連中で基督教社会福祉研究会という、キリスト教は漢字で書いたので、略称「基福研」なんですけど、基督教の「基」と福祉の「福」と。一年間かなり熱心にやって、それで終わっちゃったんですけども。何故かというと僕は二六歳で東京ガス出身で、話としてよくできたものですが、東京電力出身の二四歳の北村弘二がいました。それから後日、大久保製壜（びん）の知的障がい者による労働争議で、ずっと障がい者と一緒に活動することになった長崎広も「基福研」の中心メンバーなんです。ですから学園紛争の嵐というか洗礼を受ける中で、僕らは素朴に社会福祉の実践を通じて、社会の幸せに懸けていたわけです。具体的には、社会の底辺地帯である山谷の日雇い労働組合の方へ北村は移っていきましたし、長崎は大久保製壜の障がい者のために人生を懸けることになりましたね。それから北野三男君は知的障がいの施設に行きました。私のゼミの先生は社会保障の天達忠雄先生で、学園紛争でバタバタしていた時も「君たちはやっぱり勉強しなくちゃだめだよ」ということで、『日本の労働者階級』（岩波新書）などを読んでゼミをやった記憶もあります。ですから冷静だったと言っていいかどうかわかりませんけど。

説明の必要はないかもしれませんけど、グリーンホールの前あたりで、社青同の河野さんなんかが独特のスタイルでマイクを持ってアジ演説をやっていました。ヘルメットをかぶって、覆面をして、ゲバ棒持って、時には火焔瓶投げて、それから投石したりした。目に見えるところで整理をすると、そういう全共闘の動きがありました。それで今までの社会と大きく違ったことの一つは、大衆団交という形で、学長に直に交渉する、まあ実態は吊るし上げ集会なんですが、理屈を言えば直接民主主義みたいなことなんだと思います。また、どうしてああやって、ゲバ棒で人を傷つけてもへっちゃらでいるのかと不思議でしたが、

ものすごく簡略化して理解するとすれば、「独占資本主義という国家の大きな暴力を否定するためには、反対勢力に対してゲバ棒で直接的に力を行使するところの小さな暴力は認められるべきだ」みたいな論理だったと思います。だから、民青というんですか、民主青年同盟の自治会の人たちは、ずいぶん敵対視されて気の毒だった。追っかけられて「お前たちは日和見主義だ」みたいな感じで、つまり民青の路線は、直接的な力を使わなかったわけですから。

全共闘系にも色々なセクトがあるわけですよね。僕なんかの社会学部の自治会執行部はフロントと言って、北沢さんがリーダーとしてやっていたんですけれども。あとハンドマイクを持った社青同の河野さんだとか、他に革マル、あと外からと言われましたが、沖ノ谷さんというのはやっぱり山谷の方から来たりしているから、赤軍系統なのかもしれないと個人的には思っています。そういうわけで、今までの学園生活という、平和な温室と言っていいかどうか分からないですけど、（平和な温室）じゃない、社会（の流れ）がそのままウワッと明治学院の中に濁流のように流れ込んできたような時代状況だったのかなと思っています。

それで多少自慢話になっちゃうのかもしれませんけど、我が社会学部は八回学生大会を開いたんですよ。これはやっぱりすごいことだと思っているんです。社会学部の五〇年史（記念樹とともに―明治学院大学社会学部五〇周年特集）あたりにたぶん記録してもらっていると思うんですけど。それを通じて色んなことを考えさせられているんですが、僕は福祉を実践したいというだけで入ってきた人間ですから、学生運動や政治運動に直接関わるつもりはなかったわけです。だけど、あの冬の中で、キリスト者であることも含めて、逃げないでとにかく取り組もう、一年や二年の留年はしょうがないという覚悟で。千葉市に家が

あったんですけど、月の半分くらい東京の男子寮に行ったり、友人の下宿に行ったりして暮らしていましたね。外食してたから、下宿生活では随分金がかかるもんだなと実感しましたけど。

大事なことを整理すると、友人の大郷博を一般学生グループの議長に立てて、私は参謀役として議案書作成もしたりしました。フロントの諸君はそれなりの政治理論を持って行動していたんだろうと思いますが、僕らは非常に素朴な、オーソドックスな民主主義で、民意と言うんですか、それを中心に動くべきだ、という立場でした。どう言ったらよいでしょうか、六〇〇～八〇〇名くらい学生大会に集まるんですよね。それで少し勉強になったのは、ノンポリという言葉がありますね、ノンポリティカルですか。一般学生が大半なわけで、少しオーバーに言うとファシズム（全体主義）の怖さみたいなものを実感した気がしているんです。どういうことかというと、大衆の全部は押さえなくていいんですよ。およそ一割くらいこちらの一つの考えに共鳴させられると、他の人たちも見事にワーッとスイッチが入る。だから「機動隊が入ったので国家権力に対して俺たちは立ち上がらなくちゃいけないんだ」となると、新左翼の人たちの側へ一般学生もワーッとなびくんですね。一方、「社会変革はステップバイステップ」とか「一歩一歩改革を積み上げていかなきゃいけないんだ」というような論調で議案書を僕は書いたわけですけど、冷静になってくるとそっちへまた一般学生がなびくんですね。あの時に、何と言うんですかね、大衆の怖さを実感しましたね。うまく理解や整理がつかないんですけども。

あとチャペル封鎖の件ですけど、あれはやはり明学の力だけではできなかったんじゃないかなと。青山学院大学の人たちが入ってきましたしね。それで青山はご存じの通り、その後良し悪しはともかく神学部がなくなるのはそこらへんと繋がっているはずなので、これはまたそういう意味での歴史的な意義を持っ

ていたのかと思います。どうしてあんな大きなことができたかというのは、僕ごとき者には整理がつかないのですが。東大医学部の古い体質に対して、山本義隆さんでしたか、全共闘の議長がいましたよね。「独占資本主義の旧体制を粉砕するのだ」との呼びかけに、立ち上がってワーッといって、あの安田講堂の問題に至ったわけです。新左翼の考え方というのか、外国の学生運動ですか、それと絡むんでしょうけども。（直接民主主義的な）新左翼の考え方が、ある種の新鮮さを学生たちにはもたらした。太田さんからあった、多分自己否定みたいな論理、滝沢克己さんの思想なんかに相当みんなが共感したりして。ですから「大きな国家権力の悪の前には、一回、微温的な自分を自己否定しなくちゃだめなんだ」ということで、このエネルギーが盛り上がったんだと思います。ただ、一面で「内ゲバ」という言葉がありますよね。セクト間でものすごい殺し合いみたいなところまでいってしまった現実があるわけだから、やっぱり一般の大衆を巻き込めないということはあったと思います。ですから、最初は若林学長だったんですが、ご存じのように学者研究者の先生ですから、僕の勘では、全共闘の人たちの行動は、若林先生にとってちょっと理解を超えていた行動じゃないかな。それから天達忠雄先生[28]が学長代行をしばらくしたんです。僕のゼミの先生は天達忠雄先生でした。ご存じと思いますが、天達忠雄先生は社会保障研究で独房にも入ったような方だし、共産党の思想をくぐっている方ですので、やっぱりこの新左翼の政治理論、行動には限界があると言いますか、偏狭であると言ったらいいのかな、閉鎖的と言うかな。たぶんそういう意味ではクールに、でも誠実に、いわゆる大衆団交なるものに付き合っておられたと理解しております。和田昌衛学長に代わってお若かったかと思うんですよ、禿げ頭でいらっしゃったけどね。本当に誠実に対応されたでしょう。そして、心身を使い果たされたと推測しています。だから僕は「いわば殉教の死を遂げられたのでは

ないか」と思っています。そんな時代状況であったと思います。

ですから、僕ら社会福祉学科の人間にしてみると、あの学園紛争の洗礼をうけたということは生半可なことではなくて、それをくぐって自分がどうやって社会と関わるかという、そういう一つの「試金石」というのか、「登竜門」というのかの役割にはなったなと。ですから、僕らの仲間にとっては八回の社会学部学生大会を成立させたことは大きな核になりましたしね。理論は非常に粗末なものだったと思うんですけど、誠実に執行部であるフロントの諸君もよく付き合ったなと思うんです。私はそのあと勉強が足りないなと思って修士で二年勉強させてもらえたりしているんですけれども、そんなことで何と言いますか、学園紛争は、社会全体の、見えないけれどすごく大きなうねりの力を借りて、我が明治学院の中にも（起こった）と言いますか。それまで本当にのんきというか温和というか、学風がそうですよね。その中での大きな出来事だったのかなという風な思いを改めて感じています。

小杉　ありがとうございました。先程、明治学院に社会の濁流が流れ込んできたという言葉がありましたが、社会とのつながりをやはり考えなければならないということを実感させられました。次に、下田様の方からお話をお願いしたいと思います。

下田　はい。山本さんからこの座談会の話を承った時に、私みたいにあまり何の変哲もないというか、後ほど多少お話しますけれど、平平凡凡に一〇年間過ごした者としては、あまり相応しくないのかなと思っていまして。先程から皆さま方のお話を聞いていまして、今日のメインテーマでしょうけれども、学生運動・学園紛争、これは後ほど申し上げますが、本当に私は一般大衆のまさしくノンポリで「あまり語るものがなくて、今日困ったな」と先程から伺っていたのですけれど。

簡単に一〇年間についてお話をいたしますと、五嶋さんの後輩になりますが、昭和三九年に入学しまして、昭和四九年までの一〇年間お世話になりました。私はもともと川崎で生まれ育ち、当時は一二歳という小さい子どもながら、父親の言いなりのままに「私立に行け」という事で、試験を受けて入った記憶があります。当時は確か、倍率があまり高くなかったのでみんなが受かったのではないかと思います。はっきりとは覚えていませんが、当時は佐藤泰生校長、武藤富男学院長、確か岩居保久志先生の一年D組、そこから中学校生活がスタートしました。公立の小学校から私立に入ってきましたので、当然、皆さん優秀なクラスメートばかりだろうと思っていましたし、当時はモノをあまり買ってもらえない時代でしたが、父親から「いい成績をとったら何か買ってやる」と人参をぶら下げられたということもあって、「こりゃ一生懸命勉強しなきゃいかん」ということで、中間試験・期末試験で年六回の試験があったかと思うんですけれど、結構必死に中学・高校までは勉強をしたつもりです。確か最初の試験の成績が、たまたまクラスで一番だった。それが幸か不幸かですね、当然いい成績をとればその座を守らなくてならないということから、以後、試験のたびに徹夜をし、子どもなりに試験勉強だけは一生懸命いたしました。そういうことで、確か中学二年の時ですか、武藤富男学院長から表彰を受けた記憶があります。当時、学年一位がヘボン賞で、賞金が一万円だったかな。私は、一位はとれなくて二位のワイコフマコーレー賞だったと思うんですが、それをいただきました。当時で三千円だったか五千円だったか覚えていませんが、賞金と英和大辞典と賞状をいただきました。それが非常に、子ども心なりに自信になったというか、名誉になって、順風満帆で三年間を過ごしました。

苦い思い出というと、中学に入った時にブレザーにネクタイ、これは良かったんですが、当時の帽子は

登山帽のような帽子だったんです。これが非常に嫌で、かぶらないで朝来るわけですよ。そうすると先生に怒られた記憶があります。いつもカバンの底に半分に折ってしまっておいて、帽子はかぶらずに来たんです。「なんでこんな帽子なんか」と、当時、本当に嫌で嫌で三年間を過ごしました。

五嶋　オワイヤ帽子と言ってたね。

下田　ああ、オワイヤ帽子。そうです。

それと印象的なのは、当時の中学校の修学旅行は、大体他の学校に聞いても、京都・奈良という時代だったんです。僕たちは確か九州まで、長崎・熊本・大分・別府、そういう所に修学旅行で行きました。当時白金高校は修学旅行がなかったと聞いていました。噂だと、なにか白金高校の先輩たちが、代々事件や事故を起こした、それから高校では修学旅行はやらないという時代だったそうです。それを受けて、中学の時に少し遠出をしようということらしくて。オリンピックが昭和三九年に始まって、その年に新幹線が開通したわけですけれども、それから二年後ですから開通後間もなく新幹線を使って大阪へ行って、寝台列車に乗り換えて九州まで行った記憶があります。子どもなりに「こんな贅沢な旅行をしていいのかな」と思いました。

今かなり社会が乱れていますが、当時中学・高校もそれに近いことはありましたが、今ほど悪質な生徒はたしかいなかったと、それが明学の校風なんであろうと思います。

それから、ストレートに高校へ進みまして。これまた高校は三年間で同じクラス。クラス編成がない時代で、中学から進学するのが二クラス一〇〇人くらいですかね、その他は外部から一般受験で入ってきましたので、当時の傾向は、中学から進学してきた者と外から入学してきた者では、やはり学力差があった

ように記憶しています。なぜここでクラスをシャッフルしなかったのか、未だに思うんですが。別に壁があったわけではないでしょうけれど。中学から進学した二クラスと、一般受験の六クラスぐらいあったと思うんですが、そのような編成で、三年間はクラス替えなく過ごしました。

それから当時の流行っていたことって何かな、と思い出していたんですが、たしかホンダのN360[29]、あの軽ですよね。それが若者の間で流行った時代で、我々同級生は高校生の分際で、親にホンダのN360を買ってもらって乗りまわした時代だったと思います。あとは石津謙介[30]が流行った時代。色んな男性向けファッションが流行った時代だったかなという気がいたします。

高校も数学が結構好きだったので、当時数学教師だった神田寿夫先生から「お前もう上に行かないで、どこか受けたらどうか」と、要するに「他の大学チャレンジしろ」と勧められましたけど、中学・高校男子校でずっと六年間過ごしてきて、勉強をかなり一生懸命やってきたものですので、少しやっぱり気を抜きたい、遊びたいという気持ちがどこかでありまして、かなり悩みましたけれども、「すいません、先生、上に行きます」ということで明治学院大学に進みました。

高校時代は軟式野球をやっていまして、鵜の木グラウンドがあって、そこに行くのは結構楽しみで三年間過ごしておりました。大学では、もう廃部になったと聞きましたが、愛好会のユースホステリングクラブに入っておりました。今はもう無くなってしまったと聞きまして非常に残念なんですが、確かグリーンホールの地下に部室があったと記憶しています。四年間「ユースホステルの精神を学びつつ」なんて掛け声がありましたけど、男女で和気あいあい、全国各地の自然と触れ合って楽しい生活を過ごしました。先程から皆様方のお話を聞いていて、我々の時代は学園紛争・学生運動がたぶん中間から末期だったと思う

んですけれども、確かほとんど試験らしい試験はなかった時代です。当時、高校時代でチャペル封鎖はあまり覚えておりませんが、確かに全共闘とか色々入ってきて、機動隊と睨み合う場面も鮮明に記憶しております。当時、私は一般大衆ノンポリの一人で、皆様方の当時の思いというのか、あれほどまでさせるものは何かをなかなか理解ができないというか、たぶん理解しようとしなかったのだと思います。とにかくそちらの方には本当に無関心で、朝学校に来ると、「今日も休講、ラッキー」という感じで、「雀荘でも行くか」とこんな感じでですね。昼間から雀荘へ行って、夜は目黒あたりへ行って、サントリーコンパとかトリスのバーとかよくありましたよね。そこで飲んで土日はバイトとこんな四年間。中・高は勉強しましたけど、大学はまさによく遊んだと。当然、父親からは「大学まで行かせたんだからちゃんと就職せい」と。まあもちろんですけれど。

今あるかどうかもわかりませんし、はっきりとも覚えていないのですが、当時、就職問題研究会[31]というのがあったんです。私は経済学科の大宮俣一先生のゼミに入っていて、ゼミの落ちこぼれの一人だったのですが、なにかのご縁から就職問題研究会というのがあるから手伝ってくれないか、と頼まれました。どういうわけか、この力もない私が「やりましょう」ということで、一〇〇人くらい集めて演説をした記憶があるんですが、何を話したかよく覚えていません。そんなこともあって、何とか無事に四年で卒業いたしまして、今の会社に入社し、現在、人事部の責任者をやっております。おかげさまで明治学院大学卒業生をこの数年間、毎年一名ずつでも採用できていまして、これまでにたぶん私や先輩を含めて三〇人強の明学出身者がおります。現在はおそらく一〇名近い現役がおります。ここからは企業PRではございませんが、今後も引き続き毎年優秀な卒業生がおられれば、ぜひ採用させていただければと思います。今日の

メインテーマの学生紛争云々については、あまり話題性がなくて申し訳ございません。

最後に、私はクリスチャンではありませんが、中学・高校の時、毎朝の礼拝が大変好きでした。聖書そのものはあまり好きじゃなかったんですが、説教、あの話を聞くのが好きでして、讃美歌も大好きだったんですね。今でもたまに結婚式に呼ばれることがあり、チャペルで式をする時に讃美歌を歌いますよね。あのメロディーが流れるとすぐに歌えるくらいに、今でもよく覚えています。校歌もおそらく今でも歌えます。そういう意味で、私はあまり貢献しておりませんが、明治学院を愛した一人だと自負しております。今後も何らかのつながり、関わりをしていきたいと思います。

小杉　ありがとうございました。今のお話の、高校で修学旅行がなかったということについて『明治学院百年史』を見ますと、「明治学院高等学校は修学旅行を行っていない、修学旅行は昭和三三年に会議の決定によって廃止された。その理由は高等学校の生徒指導の原則に深く繋がっている」[32]と。ちょっとまだ長い文章が続くのですが、そのような記録が残っています。

下田　ああそうですか。

小杉　はい。ありがとうございました。それでは山本様続けてお願いをいたします。

山本　昨日は図書館で過去の学生新聞を眺めていました。学生自治会委員長時代の星さんの写真なども拝見しました。また、太田治子さんの『私のハムレット』（新潮　昭和四七年四月号掲載）を読んでいましたら閉館（一〇時）間近の時刻になってしまいました。まず感ずることは、同じ昭和四〇年代を過ごしたと言っても中学・高校・大学、それぞれいた場所により（各自の年齢はもちろんですが）、風景といいますか見方・感じ方も違ってくるように思います。簡単に自己紹介をいたします。レジュメに冗談のつもり

で「MG5」と書きましたが、当時、資生堂の「MG5」という整髪料が流行っていました。一年留年しますと「MG5」と呼んでいました。決して自慢できることではありませんが、私も卒論と“Exercices Pratiques”という科目を残しまして、一年留年しています。そして一九七五年卒業後、半年ばかり書店勤務を経て、同年一〇月事務職員として図書館に配属されました。その後、情報センター・学生部・また図書館を行き来し、現在は二〇〇六年四月に発足した大学事務局の校友センターに勤務しております。同窓会役員である星さん、五嶋さんとも時々お話しています。

大学のことについては先輩方が語っておられますので、一九六〇年代後半まで白金にあった中学校[33]、そして高等学校のことを、なるべく中心にお話をしたいと思います。歴史資料館の小杉君から今回の座談会を持ちかけられた時に、『明治学院歴史資料館資料集第五巻』を渡されました。そこには高校で現代国語を教えられていた大河原忠蔵先生が登場し、色々明治学院に関するエッセンスを述べられています。私ごときがその後に加わると格調が低くなってしまうと思ったのですが、下田さんが先に話してくれましたので幾分気軽になりました。下田さんは中学・高校時代、本当に優秀でした。

昭和四〇年代というのは西暦に置き換えますと、一九六五年から一九七四年です。武藤富男学院長が就任された年は一九六二年、退任された年が一九七四年だったと思います。そして、一九六四年はご承知の通り、東京オリンピックの年です。敗戦後、経済復興した証として日本中が沸きかえっていました。明治学院では一一階建てのヘボン館が工事中だったと思います。私と下田さんが中学に入学した時（一九六四年四月）、まだ鉄骨が見えていたように思います。また、世界史上では一九六五年にベトナム戦争が勃発、一九七五年にサイゴン陥落を一般的には終戦としていると思いますので、まさに昭和四〇年代の歴史なわ

けです。ベトナム戦争は一九六〇年代後半の大学紛争にも大きく影響していると思います。大学紛争のことは後で、話題になるでしょう。

よく六〇年安保、七〇年安保などと言いますが、六〇年代の日本は確かに政治の季節であったのでしょう。七〇年代前後もそうかもしれません。六〇年代後半のフランスではパリの五月革命[34]が起こっています。しかし、政治的な側面だけではなく、旧世代に反対する新世代の主張、古い価値観を打破するという意味が六〇年代後半の主張にはあったように思います。

一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、日本では政治だけでなく、若者（流行）文化も大きく変容していった時代です。下田さんがホンダの軽自動車のことを言いましたけれど、洋楽・ポピュラー音楽でいえば、プレスリーからビートルズ、ローリングストーンズなどの時代です。五嶋さんの世代ですと、ポールアンカとかニールセダカでしょうか？

五嶋　そうそうそう、ポールアンカ。

山本　ベンチャーズが何度か来日し、エレキギターが一躍脚光を浴びる中、邦画でいえば既に石原裕次郎ではなく加山雄三の若大将シリーズ。洋画では007シリーズなどがありました。中学二年の時でしょうか、三年の時でしたか、学芸会的な発表会があり、その時にベンチャーズの曲を数曲演奏した同級生が現れました。「ギターを持っていれば不良」と言われた時代です。アコースティックギターでもそうだったのに、エレキギターです。それもチャペルでの演奏。エレキギターの演奏は生徒たちにとっても先生方にとっても衝撃的でした。英語を担当していた若き名越陽子先生は満点評価。社会を担当していた工藤勇先生は〇点の評価を下しました。エレキギターを弾き、ドラムを叩く同級生を、私は羨望の目で眺めていま

した。

一方、明治学院中学の制服はどうだったかというと、紺のブレザー、ズボン、ハイキングに使用するような帽子に、赤いネクタイ。夏はグレーのブレザー、ズボンに開襟シャツ、それが制服でした。中学一年の時は東京オリンピックを経験し、二年の時はベンチャーズ来日、三年の時はビートルズ来日、武道館での公演です。そんな中、ファッション界ではＪＵＮ、ＶＡＮが男性若者向けブランドとして登場しました。ＶＡＮは石津謙介さんが代表をされていたと思います。

ボタンダウンでチェック柄のシャツが、アイビールックなどと呼ばれていた時代です。『平凡パンチ』が創刊されたのもその頃です。登校下校時には皮靴を履くことが基本でしたが、中学生にとってスニーカーを履くことがおしゃれでした。ズックではなくスニーカー！「不良のようだ！」と言う先生もいましたけれども、理科の高橋登先生は「機能的で大変よろしい！」などと励まして？　いました。厳しい戦中、食糧も十分でない戦後間もない頃の時代とは明らかに様相は異なってきていますが、五嶋さんも言われたように、自由があったように思います。もちろん、何もかもというわけではありませんが、先生方はある事象に対して統一的、全体的な判断を下さない。悪く言えばバラバラですけれども、それぞれの主張を一定レベルで認めるという自由があったように思います。名越陽子先生は英語の授業中、例えば“tonight”という言葉が教科書の一節に載っていると、ウエストサイドストーリーのことを話し始めたことがありました。一九八〇年代半ば以降であれば、ビートルズの話なども英語の教科書に掲載され始めたかもしれません。それが一九六〇年代半ばでそうしたミュージカル映画のことを先生が話してくれるというのも、やはり明治学院ならではないかと今になって思い返します。

一九六三年でしょうか。東村山高校の開設があります。中学の東村山への移転が、一九六六年、そして、白金において最後の中学卒業者を送り出した年が一九六八年（三月）です。これが大学の拡張と軌を一にしているというか、その必要性から中学が移転したという背景があります。白金に中学が存在していた時期、武藤富男学院長の影響は強かったように思います。中学・東村山高校の教育目標は、武藤富男学院長が掲げた「道徳人・実力人・世界人」を継承しています。礼拝で説教をされることが多かったと記憶していますが、背広の右ポケットに手を入れながら話している姿は、とても存在感がありました。

一九六〇年代半ばは、今、言いましたように大学の拡張期です。一九六五年に文学部フランス文学科の創設、一九六六年には法学部法律学科が創設され、ヘボン館、旧六号館、一〇〇番教室もおそらく一九六〇年代に建てられたと思います。一九六五年、ホープカレッジへの第一回短期留学なども実施されています。どなたか先生が設定してくださったのでしょう。中学生（希望者のみ）向けに、大学生による報告・懇談会などもありました。中学時代の先生は、五嶋さんのお話と重複するかもしれませんが、校長先生が佐藤泰生先生、英語が名越陽子先生、社会が宮崎道弘先生、それから工藤勇先生、理科に高橋登先生、大谷東洋先生、生徒たちは「安カバ」などと言っていましたけれど国語が安藤徳夫先生、技術が緒方正祥先生、体育は恵良照義先生と坂仁先生。坂仁先生は東村山へ中学が移転した後、（白金）高校の先生に移られ、後に校長も務められました。聖書は大川先生、数学は…

五嶋　吉原先生。そうクマ！

山本　クマ先生？

五嶋　吉原幸二先生。

山本　ああ。そうですね。先生のエピソードについては、もし時間があれば後で述べたいと思います。それらの先生のうち宮崎道弘先生、高橋登先生、岩居保久志先生、大谷東洋先生などが確か東村山に、岩居保久志先生は現在、牧師を務められていると伺っています。中学（白金）における話は以上です。

一九六七年に高校へ入学しまして、ここで中学と高校の雰囲気の違いについて少し、お話します。高校の制服は一転して詰襟でした。いわゆる学ラン。当時は、中学・高校共に男子校でした。男女共学になったのは一九九〇年以降です。中学生から高校生への成長の度合によるという変化もありましたが、明らかに中学とは違う雰囲気が感じられました。何が理由だったのかうまく表現できませんが高校では、武藤富男学院長の影響をあまり感じませんでした。もちろん振り返ってみた際の印象です。中学・高校の教育方針も、別に責めているわけではないですけれども、中学と高校の連続性はなかったのかなと。中学と高校の教員の交流もなかったのではないでしょうか。中学・高校が別々に、独立していたように感じます。一九六七年に東京一致神学校から数えて九〇周年のイベントが開催されました。現在の三号館あたりに中央グラウンドがありましたが、ヘボン館側に特設舞台を設置して、百年史にも写真が載っていますが、グリークラブの合唱や、田代美代子さんがゲストで参加され、讃美歌を歌ったのを記憶しています。

話はベトナム戦争に戻りますけれども、明治学院高校の宣教師、英会話の先生でもあったベントリー先生という方がおられました。そのベントリー先生が徴兵されるという事態が発生し、兵役免除の署名活動が高校生の中で起こりました。朝日新聞に掲載された記事がここにあります。時代背景としては先程も申しましたように、ベトナム戦争がありまして、佐藤首相訪米阻止羽田闘争[35]が一九六七年一〇月八日、テレビニュースで放映されました。それから一九六八年にいわゆるパリの五月革命、それと日本の各大学でも

大学紛争が起こった時代です。

今関　すいません、パリの五月革命は？

山本　一九六八年五月二一日です。

今関　あ、一九六八年五月ね。だから一〇月なんだもんね。

山本　そうですね。明治学院大学の方は一〇月。いわゆる応援団やその他の団体による立て看板破壊事件がきっかけだと言われています。学生新聞には、そのように記載されています。

今関　そっか、立て看板破壊したってとこで、そうだな。

星　あの、もうちょっと今の話を詳しくしますと、一九六八年一〇月四日に、学生が学生部に届け出ないで、無許可で反戦の大きな立て看板を出すんです。無届けで。

今関　無届けで？

星　ええ。当時、一九六七年までの学生自治会と学校側とは、例えば学生会館グリーンホール一つをとりましても、所有者と管理者は大学であるけど、運営は学生自治会に任せていたのです。先程言ったように、学生自治会が部員数を考慮して部室の大きさを決めていました。一つのクラブでいいのか、二つのクラブを一緒に入れるのか、第二部（のクラブ）と併用させるのかとか、色々な配慮をしていたんです。立て看板も、その中身の問題については自治の問題なので触れませんが、立て看板を出す時にはルールを決めていました。というのは、無差別に看

師を兵役に送るな

明治学院　高校生が署名運動

「コンニャク・ベントリー先生の兵役免除を撤回しろ」という学生の署名運動が、明治学院高校で起った。

いま、戦争問題で、ベトナム問題を中心にしてもろもろの問題が出ているが、「日本の大学紛争」の中でも、「十月五日学生会館グリーンホールで、日本学校新聞の記者会見」という題名で、ベトナム問題をとりあげた。

「ベトナム問題を中心にしてもろもろの問題をとりあげる」ことを明らかにした。

先頭にたったのは、「兵役免除撤回署名運動」であった。「兵隊を出さない、兵隊を送りたくない」という意思表示である。

ベントリーさんは、はっきりした意思表示をしていない。が、日本の兵隊の出身者が、ベトナムへ行くかもしれないと思ったからである。

ベントリーさんは法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリーさんは、法学部の教授であり、「アーコンニャク」は「蒟蒻」のあだ名である。

ベントリー先生の兵役免除について、当時の高校生が署名活動を行った時の記事　朝日新聞　1969年10月3日　夕刊10面（朝日新聞社掲載許諾済）

板を作ると学内がどうにもならないので、「ちゃんと学年と氏名と団体名を名乗って、学生自治会を通して、学生部でハンコをもらってください」というルールがちゃんと大学側と学生側にあったんです。それがですね、一〇月四日に無届けの立て看板が出されたと。それで一〇月五日に、学生部長の名前で立て看板を撤去してくれという注意を出したんですね。ところがそれが守られない段階で、一〇月八日の午後二時に応援団が立て看板を壊したんです。

今関　わかってきました、だんだん。

星　そこから事が始まるんですね。当時は大学と学生側でお互いに理解を深めるということで、R・T・D（ラウンド・テーブル・ディスカッション）というのがありまして、学生側から学生自治会・体育会・文連会・応援団が出ていたんです。学校側は学生部長、学部長、必要によっては学長、加えて事務局長という、それなりの担当長が出ていたんですね。

一〇月一一日、学生が立て看板を仲間内で壊したか壊さないかということで、R・T・Dを学生側が要求して、学校側がそれを受けたんです。そのR・T・Dについたメンバーが、要するに自治会組織の代表者だけの人数ではなくて、一般学生を含んだ大勢の人数だったので、それを見た学校側にとっては、R・T・Dだから参加したのに、状況を見ると大衆団交に見えたのです。

今関　大衆団交になっちゃいますね。

星　そうでしょ。それで（学生たちは）「なんで、立て看板を壊したんだ。立て看板を壊した学生を処分せよ。」と。そういうところから始まったんだろうと思います。それで、一時この問題は終結するんですね。しかし、その後色々なことがやはり起こってきて、次に今度、第二部の廃止問題等々がありましたね。

それも学生側と学校側の間で一時的におさまるんですが。ところが今度、翌年の五月になると、アドバイザーキャンプで第二部自治会の委員長がアジ演説を行い、それが大変長時間行ったので、学生部長がやめろと強く叱責をした。それに対して、今度はまた学生が反発をしたというようなこともあって。一つの問題がずーっと何年間も続いたのではなく、一つの問題で一年二年かけて対決すると、また次の問題に移っていく、今度は洋服が破かれたりなんか。まあ暴力がどうしたこうしたというのはあるんですが。

一九六九年七月二日に開かれた、学生部長と三学部長の出席で行われた説明会で、この時は全共闘と民青が別々に席を確保していた。（その様子を見た僕は）全共闘と民青とは、同じ学生自治の問題を学校側と争っても、全く質の違った方向性を示したんではないかなと（感じたんです）。私が承知している範囲内では、民青はあくまでも話し合いで解決をしていこうというのに対して、全共闘の方は、権力に立ち向かうのだから少々の暴力はあってもしょうがないじゃないか、それはやむを得ないじゃないかと。このようなことから、スト権を確立したり解除したり、確立したり解除したりと。でも、一般学生が冷めるんです。ところが処分という問題が出てくると、それはかわいそうだよねという話に、今度は一般学生がボーンと乗って行ってしまう。そんなような繰り返しがずっと行われていたみたいですね。

また、学校側の姿勢もはっきりしない。若林先生が学長の最後の時期（昭和四四年に退任されるまでの間に）、やはり教授の中で糸を引いて脚本を書いている人がいる、その教授を処分したいということが教授会で可決されるんです。しかし、法人の執行部では否決されてしまいました。

先程の話にちょっと戻りますと、賀川豊彦さんが神戸の貧民窟で活動されたりするんですが[36]、教授間でも色々な考えの方がおられて、賀川豊彦さんのようにもっと底辺に光をあてようという先生方がいて、そ

の教えを実践していこうというクラブ活動もいっぱいあったわけですね。それと、もう一方では全くそれには関知しないという先生もおられて、教授の権力思想闘争的な意味もあったのではないか、そんなところも学生運動の大きな底辺の中に引っかかっていっているんじゃないかと思われますね。

今関　路線論争といいますかね、色々ね、それはありますよね。

星　いわゆる社会学部の路線論争ですね。

今関　すみません、ちょっと中断させちゃったんだけど。つまり、昭和四〇年代のパリの学生運動が五月でね、うちらが一〇月というわけでしょ。「立て看板ぶっ壊したくらいで、そんなもの大騒ぎするな」って、今こんなに穏やかな時代であれば言っちゃうと思うんだけど、マッチにちょっと火がついたように、とにもかくにもワーッと騒ぎ始めたんですよね。

星　学生運動は明治学院だけではなく東大や早稲田でも起こっていましたし、それから太田さんがおっしゃったように中国も。だから色々な形で世界が荒れていたんだと思います。

今関　そうですね。全共闘っていうのもくせ者でね。東大の、それこそ医学部から発端したのなんかは純粋すぎるぐらいの連中なわけでしょ。だけど、いわゆるセクトですよね。

山本　あの、東大の場合には医学部登録医制度、日大の場合は不正経理問題。

今関　そうそう、古田体質のね、古田総長でしたけど。

山本　マスコミでは東大と日大が一番大きく扱われていましたね。

五嶋　早稲田じゃなかった？

山本　そうかもしれません。どこの大学も、いわゆる拡張時代だった。それで明治学院大学でも、学生全

員が授業に出席したら、おそらく教室から溢れ出てしまう状態ではなかったかと思います。麻雀などに行く学生もいて、教室が収まってくれていたような状態だったでしょう。学生新聞を見ると、食堂改善要求などの記事が出ています。いわゆる学生生活の改善という点では、大学の規模を急激に大きく、入学定員を増加したので、設備が追い付いていかなかったという時代であると思います。そのような背景、キャンパスにおける学生の生活問題もあったので、一般学生にとっても世界的な学生運動、ベトナム戦争、それらの影響も受け、問題が大きくなっていったということがあるかもしれない。ですから学生生活というベースでは、共感する部分も…

星　学生の課外活動費も学生自らが決めたことで、確実に大学側が実行してくれている学生自治会の予算というものがあるんですね。新聞会だといくらだとか文連会だといくらだというのは、全部当時の学生自治会の我々が決めて、学校側にこのように実行してほしいと。それを学校側は確実に実行するんですが、若林先生の本によると、学生間で新聞会費の取扱トラブルがあったので、学生部長が学生間で話し合いが解決するまで予算を凍結することになるんです。そして凍結したのをまた解除する。だから、明治学院の学園紛争はいくつもの問題点が次から次へ出てくるような形になっていますね。

今関　すいません、話の腰を折っちゃって。

山本　高校に話を戻しますと、我々は高校校舎のベランダから、チャペル封鎖をしている大学生に「おーい」なんて声をかけたり、歓声をあげたり、眺めていたり、まあそういった高校生でした。話は異なりますが、安田講堂の攻防戦が一九六九年一月一八日、一九日でした。ほとんどの明学高校生は政治的ではなかったと思います。一部教室を封鎖したり、礼拝ナンセンス事件[37]？　などもありましたけど、一時的な出

来事でしかなかった。但し、ある同時代性の共有があり、それは文化・流行性の中に存在していたように思います。

ところで、私と下田さんが高校を卒業、大学へ入学した一九七〇年、後のアルフィーを結成する高見沢さんと桜井さんが明治学院高校に入学します。まあこういう動きがちょっと面白いですよね。アルフィーの宣伝をすると、二〇〇九年はデビュー三五周年です。

五嶋　そうですか。

山本　その音楽性は日本ロック界の原点とも言われている。三〇枚にも及ぶオリジナルアルバムレビュー曲数は三〇〇曲を超えて、その中には明治学院校歌も含まれています。

小杉　ええ、ボーナストラックで。

山本　それから『桜の実の熟する時』という曲を最近リリースしました。高見沢さんの最近のブログを見ますと、

「制服を着るということ以外は、ほとんど自由だったのも良かった。坂道を上って、まわりに木があって、その横にチャペルがあって、まさに明学のシンボル。やはりチャペルはいい。アルフィーの歌にもチャペルの鐘とか、キャンパスを題材にした歌詞があるんだけど、明学のイメージで描いたかもしれない。今でもクリスマスコンサートでは三人で讃美歌を歌うしね、明学は僕らの原点。桜井や坂崎との出会いは偶然だったんだけど、三〇年も続くと必然だったんだなと思う」

とあります。こうした印象は、世代を超えて通ずるところがある、という風に思うのですけれど。

高校の当時の先生としては、校長が原田昂先生、これも五嶋さんと重複しますが、体育が古坂三男先生、

上嶋実先生、そして中学から移ってきた坂仁先生、数学が神田寿夫先生、及川健先生ですね。倫理社会が陶山義雄先生、古文が森本真幸先生、現代国語が大河原忠蔵先生、真田治彦先生、藤岡輝行先生。世界史が今、山梨県に住んでおられる千葉信一先生、化学は後藤進先生、物理が中瀬寛一先生、地学は坂田雅雄先生、英語が佐野菊雄先生、そして英会話はベントリー先生、先程配りました朝日新聞の記事に掲載されていた方です。聖書が泉隆先生、東村山でも教えられていました。キリスト者である先生のキリスト教の伝え方、非キリスト者である先生のキリスト教の理解・違いは確かに、面白いと感じました。

他校に移られた先生では、武蔵高校に移られた真田治彦先生。後に、東洋英和女子短期大学へ移られた陶山義雄先生などが印象的です。本当に感謝しているんですけれども、神田寿夫先生、古坂三男先生、蔵野菊太郎先生は既に他界されています。もっとお話を伺いたかったと思います。そして真田治彦先生もですね、武蔵高校のホームページというか高校の卒業生のブログを偶然みつけたのですが、昨年亡くなられたということです。同級生には韓国・台湾・中国がルーツである同級生もいましたが、高校の雰囲気は、総じて他者を認める、喧嘩はもちろんありましたけれども、「差別」というような言葉は存在しない、自然な振舞いがあったと思います。余談ですが、明治期、白金学報の最初の号から、韓国・台湾・中国の卒業生がいることが記載されているようです。

明治学院の雰囲気、スポーツでいえば勝つことに執着しない、悪く言えば貪欲さに欠けると言ったら一面的でしょうか？一方で、島崎藤村のような第一期卒業生を見ると、人生に負けない粘り強さも併せ持っているのかな、などと思い巡らします。

星　勝つことに執着しない運動部はない。しかし運動部の立場から言わせると、よその大学のように高校

で運動をやっていた人たちが推薦で入ってくるのとは体力が違う。例えば明治でラグビーをやっていた人が、今、明治学院のラグビー部のコーチをやっているけれど、明治と明治学院でラグビーをすれば、明治学院の連中はみんな身体がぶっ壊れちゃうよ。とても明治とまともにぶつかれないよ。花園出身の高校生と戦っても、明治学院の連中の身体がぶっ壊れるんじゃないの？　というくらいのレベル差があるので、勝つとは思えないですね。

山本　ラグビー部は今、健闘していますよ。対抗戦BグループからAグループへ昇格する可能性があります。

星　ぜひ、そこのところは。頑張ってほしい。

山本　日本では、ミッションスクール間の差異を、昔はあまり強調していなかったのではないかと推測するのですが、それはともかく、明治学院で学生生活を送ることにより、様々な聖句が無意識のうちに沁み込んできたように思います。大学図書館には“THE TRUTH SHALL MAKE YOU FREE”『真理はあなたたちを自由にする』（ヨハネ八：三二）という聖句が掲げられていましたし[38]、『地の塩、世の光』（マタイ五：一三～一六）、『マルタとマリアの物語』（ルカ一〇：三八～四二）、『私はアルファでありオメガである』（黙示録二二：一三）、『カエサルのものはカエサルに。神のものは神に』（マタイ二二：一五～二二）などなど印象深いものが数多くあります。一言では語れませんが、排他的にならずに自己との対話を繰り返すというメッセージが聖書には込められているように思います。だからといって、相変わらず「俗」であり、自分自身が高められたということでは全くありませんが、明治学院によって教えられるものの中で、「聖書」の存在は大きいということを強調したかったのです。時間も迫ってきており、恥の上塗りに

なるといけませんので、このへんで終わります。

小杉　ありがとうございます。

星　一つ、さっきの太田さんの話でね、明治学院と東大の違いがあったんですが、おっしゃる通りなんですよ。東大の人間が一流の民間企業に就職したなら私はしょうがないと思うんだけど、東大紛争に関わった学生はほとんど国家公務員になったんですよ。みんな高級官僚ですよ。その中の代表例は、厚生省（当時）に田谷さんという人がいたんです、汚職で捕まったんだけど。彼らはみんな第一線の赤ヘルでした。だけど、彼らは卒業時には一変してしまう。要するに東大の連中は変われるんだよね。明治学院（の連中）は変われない。でも東大の連中はね、本当に一八〇度ガッと変われる。そこに東大生の節操が全くないところがあるんですよ。

小杉　なるほど。明治学院の節度を守りたいという。でも貪欲さがないことはなくて、学生新聞を見ますと…。

山本　まあ、そういう印象を受けるということで、全ての明学生が「貪欲さに欠け」ていると決めつけてはいないですよ。

今関　頑張っている。

小杉　頑張っているというのが出ているんですよ。関東女子大学ライフル射撃大会で英文の女子学生が三年連続優勝というのもありました。あと首都大学リーグで優勝したのもこの時代ですね。

山本　はたから見る印象がね、やっぱりおとなしいというかおっとりしている。

小杉　そうですね。あと私が見て気付いたのが、札幌冬季オリンピック聖火ランナーに明治学院の学生が

選ばれて走ったことがある。全日本大学英語弁論大会で高松宮杯を獲得した。ＥＳＳ五大学英語劇大会で優勝した。学生たちが活躍した時代でもあったんですね。

星　私立の東大です。頑張っている。

小杉　それから学生生活に関すると生協の話がさっき出ていましたが、生協食堂問題ということで、新聞を読むと、味だとか環境に対する学生の不満が書かれている。あと、施設利用について、休日・日曜日の学内開放をせよという要求があったとか、学生自治と関連付けて女子寮問題というのもあったようで、当時の学生が色々な議論を掲げていました。結局、実現しなかったようですが、学バス問題もあったようですね。

星　当時、良い悪いは別として、自治会の執行部が年度前半と後半に分かれていたんですね。任期が短かったのです。当時の会則では連続ではいかんということにはなっていないと思うのですが、事実上は次から次へと代を代えていく。半年で夏休みと冬休みが入ったら、事実上二ヶ月か三ヶ月なんです。そうするとね、こんなのはやれない、実績なんて上がるわけがないと思うんです。そうは言っても、自治会委員長に立候補する時に、私は学生の皆さんのためにこういうことをやりますよということで、キャッチフレーズは作らなきゃいけないね。そうすると、通学バスを何とか実現するように品川の（都バス）営業所へ行って交渉するとかね。それから五大政党の政治家をお呼びして、色々な話を聞きましょうとかね。色々なことは考えます。食堂の味とか値段とかを少し改善しましょうとかね。テーマは掲げるけど、長期にわたるような問題は事実上ほとんど解決しないですよ。

小杉　そういうことだったんですか。学生が問題意識を持って取り組もうということですかね。

星　さっき五嶋さんが言ったように、その面からいくと、紛争前の古きよき明治学院の流れは本当に自由だったんですよ。学生はもっとこうしたいああしたいと、すると学校は、学生が要求しているんだったらいいんじゃないのという感じで聞いてくれた。

今関　だからまだ、一色ではないでしょうけど、まとまりなんですよね。ただこの学園紛争あたりが分岐点かどうかはわからないけれども、いろんなセクトの問題も含めてでしょうけど、主義・主張というか路線が多様化してきて、そう簡単に一筋縄ではいかないというか、一本化できないような。

星　そう。さっきも言ったように、自治会のリーダーであった民青が脇に干されて、新左翼が出てきた。しかもそれが革マルだとか中核だとか路線が違うのが権力争いで、ここの持ち場はどっちだみたいな話になってきたから余計わけが分からなくなってきた。

山本　星さんが卒業した後でしょ、その話。

星　そうです。ただ、我々の時にはもうそういう雰囲気があったんです。

山本　そうでしたか。

星　それで私が卒業した後なんだけど、情報が入ってきて。当時、大阪に勤務していたんだけど、ある先生から来てくれって呼び出されて来たことが何回もあるの。卒業してから。

太田　よく、ノンポリの人たちは追いかけごっこと言っていました。キャンパスで突然、民青系の人たちが「わーっ」と声を上げてみんな逃げてくんです。それを全共闘のヘルメットをかぶった子たちが追いかけていく。そういうね、追いかけごっこだった。

今関　民青の人たちは皆、怪我しているんですよ。共産党系ということでしょ。既成政党のわけだから、

全共闘だかセクトだかそっちの人から見れば、やっぱり日和見主義というのか。

星　彼らは新左翼、暴力主義ですからね。自分の意思が通らなければ相手を殺してもいいという。

今関　…という風になればね、赤軍みたいにあさま山荘事件じゃないですけども、思い切ったことをやってしまうわけだから。だから論理によって事柄を進めていこうという次元をもう超えてしまっている部分があると思うんですよね。おそらくね。

星　建物の内部を壊したのが本当に明治学院の学生であったと言うなら話は別だけど。明学の学生が自分の教室とか職員室を壊したのではなくて、よその学校の学生が入りこんできて壊したんです。何でも自由にしていたんです。

今関　あれはそうですね。ずいぶん入ってきていた。

星　だから、明治学院の学生が純粋に先生方と意見交換をしたというならば全然違った方法だったと思いますけれども、途中からそういう形ではなかったですね。

小杉　そんなに学外から来たんですか。

星　大変な人数入ってきました。

太田　リーダーの後について一緒に走ったり、大衆団交に加わったりした学生の中には、私の知っている、明学高校から大学に進学してきた男の子たちがいたのです。みんないい子で、本当にお坊ちゃまで。その子たちの目つきが鋭く変わっていった。

今関　民主的手続きと言うのかどうか、学生大会、あるいはその大学の執行部との交渉と言うかな、でもそうじゃないわけですよ。大衆団交という名目で、外人部隊という言葉がよいかどうかわからないけど、

プロですよ、そういう意味で、プロが入り込んできてガシャガシャやっちゃうわけでしょ。そうすると普通、真面目に勉強しているだけの学生さんにしてみれば外国語なんですよ。

小杉　外国語？

今関　つまり、やっている事柄がね。

星　もうついていけないです。

今関　うん、ついていけないんですよ。そういう意味では。

星　だから、本当に一部の団体がワーワーやって、学内は完全に振り回されちゃったんだから。

太田　『戦艦ポチョムキン』[39]の上映会をしまして、あれは結構面白いことでした。そんなこと今までなかった。キャンパスで映画を上映したんですよ。映画自体は『戦艦ポチョムキン』という、ロシア革命のもとになった事件ですけれど。上映会をすると、私たちノンポリは映画も見られるし、それは数少ないというか唯一と言っても良いのどかなことですね。全共闘の思い出の中で。

星　今もそうですが、同窓会をやっていますとね、敵をつくって戦うんだと言うと、みんな盛り上がるんですよね。それを一つにまとめるのはものすごく楽なんですよ。ところが、戦わない、話し合いをするんだと言うと、何をのんきなことを言っているんだと。どうやら人間の持っている質なのでしょうね。仮想であろうが事実であろうが、敵をつくって目標をつくり、それに向かってただやるんだってことになると大変勇ましく聞こえるし、みんなもついて行きやすいんですよ。ものすごく引っ張りやすい。

五嶋　だから頭の中でも理論武装が楽になるんですよね。すごく単純だから。人間というのは。

星　だから赤穂浪士もそうですよ、戦うんだって言ったらみんなまとまる。

五嶋　単純にね。

星　ところが戦わないんだって言うと、何を保守的なことを言うんだって。

今関　だから繰り返しになるけど、社会学部が学生大会を八回開いたというと、今の視点から見ると半端じゃない、すごいことだったなと思うんですよ。

太田　先生方も、ほとんどの先生方やっぱり困っただろうと思って。私、その中で和田学長が大衆団交の時にも逃げずに、堂々とそれに立ち向かっていかれた姿勢は偉かったなと思う。本当にもう同情しました、私は和田先生に。先生だって逃げ腰になりたいですよ。

星　一昼夜吊るされて…。

太田　だから本当によく頑張られました。

星　だって生玉子ぶつけられたりしたんですよ。

太田　私はやっぱり嫌だなと思いました。そういう暴力は。

山本　聞いた話ですけれど、一〇〇番教室の大衆団交で武藤富男学院長に牛乳をかけたことがあったらしい。武藤富男学院長は残った牛乳を全部飲みほしたそうですが、その場は歓声が上がり、えらく盛り上がったそうです。それから一年後か二年後か知らないですけれど同じようなことが起きた。二回目は白けちゃったそうです。また、最初の本館封鎖の時は、一般学生が「なんでそんなことをするんだ」って言ってすぐに解除されちゃった。その後まもなく、今度はヘボン館を封鎖したところ、大学側が応援団に供応したとかの領収書が出てきたり、盗聴をしかけたりしたことが浮かび上がってきた。すると、一般学生も含め、一挙にガーッと流れが変わった。

星　ですから学生はね、アドバルーンを上げるとウワッと飛びつくんだけど、何ヶ月か経つと一般学生は冷めるんですよ。するとリーダーが浮き上がっちゃう。そうするとその問題では引っ張っていけないので、新しい問題を探してこれでまた盛り上げていく。さっき申し上げた、何回も色々な波が。赤電話の設置の問題だとかね。

山本　卒業してもそんなに詳しく伝わってきたんですか？　すごいですね。

星　そうですね。

太田　学校の中にはですね、全共闘の応援演説をされた方も、講師とか若手の先生の中にいらっしゃったんですね。他の大学でもそういうところがあったと思いますけど、でも明学はすごく、そういう先生にも寛大ですね。その後、先生はちゃんと教授になって。だから寛大な学校だなと思いますね。

星　ちゃんといい給料もらって。

太田　そうですよね。人間考え方が変わっていく場合がある。私だって今も彼らのシンパのところもある。でもやっぱりあれだけ応援演説をしたのだったらば、その時一体自分はどういう気持ちで演説をしたんだということを、あの時はこういう気持ちだったということをね、きちんとおっしゃらないと、自己責任を果たしていないなと思うんです。

五嶋　人間だからね。

太田　そうです。だから戦争の時に軍部を応援したのは、その時に仕方ない事情があったとしたら「その時はそういうことだったからごめんなさいね」と言えるのは大切だと思う。人間は過ちを犯さずにはいられない。言わないまま口をつぐんでいたという大人に対する腹立ち、憤りというものが全共闘の中にはあっ

たかなと今にして思うんです。

五嶋　人を教える立場の人がそうだからね。

山本　ただ、色々な背景が絡み合っています。こちらが悪い、あちらが悪いと、あまり単純化して言うのは避けるべきです。過去を振り返っているわけですから、紐を解いていくような姿勢が大事ではないですか。

五嶋　もちろんそうだね。ただそれはそれとしてね、やっぱり太田さんの言う、その姿勢として本当のことだと思うんだね。それをただいろんな要因があるということで…。

山本　過去は止まっています。静止した状態に対しては、色々言える。動いている状態の時とは違うわけです。今、一九六〇年代後半のことを話しているわけですが、多角的に捉えていくという姿勢がないと、騒然とした状態の記憶しか残らない。わからないままです。一面的ではなく多面的に解いていく姿勢が大事なわけで、それを一方的に…。

五嶋　だからその時代に、動いている時代にしていたことに対しては、責任を持たなきゃいけない。

山本　一方的（一面的）に、発言しないでほしい。

五嶋　だから一方的には言ってないの。

山本　そうしたことを言うのであれば、今話題になっている人の反論する機会がなければ公平ではない。反論する機会を設定するといっても難しいけれど…。

五嶋　チャンスはなかったんですけどね。チャンスはなかったんでしょうけど、やっぱり自分自身の人生、そういうのを背負っていかなきゃいけないんじゃないのかなと。それは個人の問題ですけどね。

星　小杉さんからいただいたテーマで、学生新聞についてあったので触れておきますと、我々の時には学生新聞費は校納金の一部だったんです。その費用が全額新聞会へいって、新聞を発行する費用に使ったので、全学生に無料で配っていたんです。

ところが、新聞会の作る記事は真実なのですか？　事実なのですか？　という見方があるんですね。どうしても記者によって少しずつ記事のニュアンスが変わっていく。そうすると批判的に書く場合と、好意的に書く場合と、まるっきり一つのことを見る目が変わってくる。それで新聞会の中立性をもっと求めたのですが、新聞会は言うことを聞かないんです。それでは自由購読制にしましょう、買いたい人が買う、買ってもらう人のために記事を書くというのはどうですかと。すると新聞会は受けて立ったんですよ。ああ結構だねということで自由購読制にした。とたんに新聞会はつぶれてしまった。私はその時に新聞会に、中立性というのを自治会執行部の委員長として大変強く求めたんです。新聞会会員は、学部別から平等、均等に選出された人たちが集まって記事編集をしているのではなく、新聞会に入りたい人はいらっしゃいという呼びかけだけで、趣味と同じような感じでやっていて、そこに全学生の費用が流れていって、書きたい放題だったんです。これではちょっと報道の中立性が保てないね、ということで止めたんです。

小杉　確かに、この会を開くにあたって昭和四〇年代の記事を読んでみると、論調が全然違うんですね。本当にどれが真実なのか、どれが正しい判断基準になるのか。

五嶋　それは本当に大変なことだよ。

小杉　例えば『明治学院百年史』が大学紛争時のことについて事実経過として事項羅列にとどまっているのと同じように、新聞会の記事は、学生の視点からのみの記事としか読めない。

山本　今回の座談会があると言うので一部、読み返したんですけれど『キリスト教主義大学の死と再生』という本が新教出版社より出版されています。ミッション系の五大学、明治学院大学、関西学院大学、関東学院大学、東北学院大学、国際基督教大学でのそれぞれの状況について学校側の見解、当時の学生たちの見解双方の主張が掲載されています。必要があるなら、これらを正確に読み比べることもひとつの方法であると思います。

五嶋　大変なことだけどね。

小杉　白金通信の記事と、学生新聞会の記事で同じようなものを照らし合わせると、真っ向から対立する記事の書き方になっている。学生新聞の側からすると、白金通信は学校の御用新聞だという書き方をしている。

星　だから私が言ったのはね、御用とか、反発なのかどちらでも構わないけど「事実」を伝えなさいと。特に「事実」じゃなくて、できれば「真実」を伝えてほしいと。「事実」はね、私が五嶋さんから殴られたら、殴られたという「事実」がある。だけど、その前に私が五嶋さんに対してものすごい暴言を吐いたということを伝える。五嶋さんが殴ったというのは「事実」ですよ。でも「真実」っていうのは、いやその前にあなたが、五嶋さんが手を上げざるを得ない様なひどいことを言ったじゃないか、ということまでさかのぼってきちんと伝えること。それが報道じゃないのと言うんだけど、なかなか当時の学生は理解してくれなかったんですよ。それだったら自由購読制にした方が良い。新聞会の方々の趣味のために出す新聞はないよ、ということですね。

小杉　新聞一つをとっても、どこに目をつけていくかということはとても大切ですね。

もう一つ、皆さんからお話しいただいた言葉の中で「明治学院の中に聖と俗が共存していた」とか、やはり「キリスト教をバックボーンにしながらの自由があった」というところに興味を持ちました。その点について皆様からお話は。

五嶋　私が言った「聖俗共学化」の「俗」というのは、要するに今の時代ではなく、あの時代における実業教育、そういうものを言っているわけでね。あの時代の感覚ではそうだったんですよ。そういう風にあの時代は流れていっていましたからね。ちょうど三菱商事ができたのは大正七年度。同じ時代なんだけど、明治大学などの商学科もできたんですよ。慶応義塾や明治学院をはじめとするミッションスクール以外の私学の生い立ちを見ますと、早稲田をはじめ明治、法政、中央、日大、専修等はみんな法律の学校として明治時代に出発しています。大正に入ってそれまでの時代の要請から解き放たれ、官から民の時代になり、現実を見据えて学校経営をしていかなくてはならなくなった。そこに実業分野の専門教育があったという。それが明治末から大正にかけての時代だったんですね。そういう中で実業、食べていくための勉強という意味で、それがキリスト教に比べて「俗」と。そういう意味なんです。聖俗共学化とは。あの時代はそういう風に言ったんですよ。明治から大正にかけて、キリスト教の側から見ればね。

山本　一九六〇年代の後半じゃないですか？　今関先生。『世俗都市』[40]が出版されたのも。

今関　そうですね、あれなんかはずいぶん取り上げられていましたね。ですから今の論理でいけば、宗教というかキリスト教、聖なる世界と日常生活とか市民世界といえば二元化。カトリックなんかでいけば、もう良い意味でか悪い意味でか、とにかくはっきりさせていると。牧師さんだか神父さんの世界だってね、説教をする神父さんと、労働に出ていく神父さんがいたりと、役割分担はバッチリやっているわけです。

言えることは、キリスト教を単なる教養主義としてではなく、実人生の指針として受け止めていたのです。だから、僕らは福祉に人生をかけた仲間たちですから、山谷のドヤ街にもかなり入り込みましたしね。この学園紛争と直接つながるかどうかは微妙なんだけど。

山本　セツルメント[41]などは？

今関　セツルメント活動もありましたね。あと太田さんが言っていた、基督教児童研究会があったでしょ。僕らはそういうのがわからなかったからかどうか、問題をほぼ同じくする仲間の同志的結合で、基督教社会福祉研究会を実質二年間でしたけど、かなり活発に、知的障がい者の施設を訪問したり、山谷のドヤ街に入り込んだりなど色々しました。

五嶋　明治学院の成り立ちはアメリカンタイプのリベラル・アーツ・カレッジ、要するに教養人を作る学校から出発していますからね。しかも宗教を中心としてね。それを転換するのが大変だったんですね。それに気付いた。それで、いろんな職業のための高等学部を作るということで井深先生も苦労された。その重要な一つが高等学部の商業科だった。明治時代、法律をもとにして国家統治をする時代に変わりまして、弁護士も必要であったし、それが大正に入り社会に必要なものが広範囲になったのです。そんな時にいつまでも教養主義だなんて言っていられない。そんな時代の荒波の中で「聖俗共学化」という風になったという歴史が明治学院にはあるわけです。その時代状況が、どうも私には昭和四〇年代と重なって見えてくるのです。

小杉　そうすると発展的にその昭和四〇年代に出てきたのが…。

五嶋　発展的というか苦し紛れですよね。

小杉　苦し紛れですか。

五嶋　もちろん。生徒が入学しなくなっちゃうんですから。

星　二学部四学科ではね、食べられなくなってきたんじゃない？

五嶋　これは明治の終わりから大正の話ですが、アメリカでも従来のリベラル・アーツ・カレッジ・スタイルはだいぶ変質してしまったようです。

今関　だから一つの見方はね、その古きよき明治学院と言いますか、一つのまとまりがあった時代から、この昭和四〇年代というのは、社会福祉学科はいつからできたのか、結構最近じゃないですか。とにかく大学の形状なども多様化して、いろんな実学的な方向をとり始めた。例えば、商学部だか何だかよくわかりませんけど、そこら辺がだんだん…。

山本　経済学部商学科は、今、五嶋さんが言われた高等学部商業科が発展した形で、また文学部の中に社会学科がありましたが、やがて社会学部として独立します。英文学科の他に一九六五年にフランス文学科を創設。文学部は英文学科とフランス文学科、社会学部は社会学科と社会福祉学科となります。

今関　社会福祉学科がね。

星　当時、青山学院で大木金次郎先生が拡大の路線をとったじゃないですか。明治学院はかたくなに二学部四学科を守っていたんですよね。だから「本当に明治学院はこのままでいいのかな」というような思いが我々在校生でもあったんですよね。「もっと違うのではないか」と。青山学院だってどんどん学部が増えているという中で、どうも色々な方から話を伺うと、二学部四学科の受験者数と学生数では、将来、明治学院を発展・維持させていくことは難しいということで、やっぱり学部の増設に踏み切った感じですね。

今関　そうすると大学は大衆化するというか、一般化するというかね。つまり昔で言えば象牙の塔とか、学問の府とかね。そういう一つのキーワードで理解できていた大学という世界が、もう誰でも、何と言いますか…。

山本　大衆化と言っても、一九七〇年頃の大学進学率は二五％程度だったと思います。星さんの時代（一九六三年入学）だと、もうちょっと落ちるでしょうね。一〇％台？　一五％台かな？

今関　だからごく限られたと言っては悪いけれども、物心両面ある程度の条件が整った方が大学に行ったわけだからね。

山本　団塊の世代が大学に入学する時期が、一九六六年―六八年です。

五嶋　それで、武藤富男先生が学院長の頃に大きく変わったんだね。要するに昭和四〇年代ですよ。

今関　やっぱりそれがポイントですよ。拡大路線です。

山本　武藤富男学院長の就任は確か、一九六二年？

五嶋　その流れというのが、やはり昭和三〇年代にあるんです。昭和三〇年代というのは、今言われたように、戦前の気風を持った先生、我々はそういう先生方に教わってきたわけなんですけど。まあ、その先生方が入れ替わるという分岐点が昭和四〇年代じゃないかなと私は見てるんですけどね。そのような流れの中で、全部が全部うまく行ったのかなと。そうではない、何かやっぱり大事にしてなきゃいけないものもあったんじゃないのかな。

山本　記念館二階ロビーに白金キャンパスの模型がありますけれども、一九六〇年代後半かいつかは分からないのですが、ライシャワーさん[42]が明治学院を訪れた時、「昔の明治学院は本当に美しかった。それが

工場のようになってしまった」と語られたそうです。ライシャワーさんが過ごされた時期の明治学院は、洋館の立ち並ぶ、木造建築でしたね。それが一九六〇年代後半は、旧六号館、中学の校舎だった四号館と、昔の明治学院を知っている方から見れば、確かに味気ない建物であったかもしれません。

五嶋　なんかね、香港の工場みたい。

山本　その反省が白金再開発では、新本館をレンガ造りに、インブリー館の修復に二年をかけ、チャペルも耐震工事を行うということに結実していったように思います。欲を言えば、正門を入って左側にあった高校の井深ホール、ギリシャ建築風の円柱の再現を願いたいですね。あれは高等商業部が使っていたんですよね、確か。

五嶋　私が昭和三二年に入った時はそのままでしてね。

山本　大正時代の明治学院のキャンパスが一番美しかったんじゃないでしょうか。チャペルに通ずる広場もヴォーリズの設計だそうです。

五嶋　まあ、回顧主義にならない程度にね。昔は良かったなんてね。

山本　それで、ライシャワー館が移転したのも一九六〇年代の後半ですね。

小杉　ちょうど東村山ができる時ですね。

五嶋　ライシャワーさんが大使になっている時は、私、高校生の時でね、柔道部だった。大して強くないんですけど。アメリカ大使館の下に道場があるんですよ。いらっしゃいとよくお誘いをうけて、何回か行きましたよ。将校さん相手にね。あの人たちは紳士だから、高校生でもなんとか相手にできたね。本当に体格の差はすごかった。

星　ところで紛争は何年続いたんですか？　結果的には一〇年くらい続いたんですかね？

山本　一九七〇年から一九七二年頃までは試験の代わりにレポート提出により単位を取得できたこともありましたが、既に下火というか黄昏時で、一九七三年頃からは、そんなこともなくなってきました。

星　大学紛争があったので、明治学院の将来についての論理というのは、二〇年、三〇年くらい遅れたんじゃない？

山本　日本中の大学で起こったわけですから、それは乱暴な言い方でしょう。

星　遅れているような気がするな。

小杉　『明治学院百年史』の事実経過というところで、紛争処理の項を見ると、昭和四四年から昭和四九年までの事実経過を列挙しているんです。ただ私が入学したのは一九七八年ですけど、現代思想研究会というのがありました。

山本　最後の名残ですね。

小杉　一九八〇年ぐらいまで構内に立て看板が立てられ、活動している学生がいました。本当にそれが末期でしょうか…。

山本　でも、極めて少数だったね。

星　やっぱり一〇人前後は残っていたのかな。

小杉　学生も四、五人くらいじゃなかったですかね。そのような経過ですから、一九八〇年以降はそういった傾向はなかったんじゃないかな。

太田　ヘルメットはまだかぶって？

小杉　まだかぶっていましたね。

山本　全体的に見れば、連合赤軍事件で終わっているんだと思います。

小杉　では、丸山先生今までずっと陪席してきて、何かお感じになったことはございますか？

丸山　私が話を聞いていて、参考になったことは、先生方のことですね。ですから今、先生方の話を色々と伺っていましたが、『明治学院一五〇年史』を書くにしても、教師をどう我々が大事にしていくかが問題なんですね。だから、私は教師のことについても調べてきました。例えば、先程、天達忠雄さんの話も出てきましたよね。しかし、もうちゃんと今関さんが一九九〇年三月発行の『天達忠雄追悼文集』に「わが内なる天達先生を偲んで」という思い出をお書きになっており、大いに参考になります。

例えば、星さんの若林さんに関する人物理解は正確です。星さんは『若林龍夫著作集』の賛助者となっているほどです。結局、我々が『明治学院一五〇年史』を書くにしても、先生方を大事にしていくのもいいと思います。今、お話を伺っていても色々なエピソードがありますよね。新聞なんかに動静などの書き込みもありますが、先生方の逸話とか、エピソードはなかなか出てこないんですね。ですから、現在、『〈明治学院人物〉人名事典』を作っているんですが、先生方のことはわからないです。例えばいつお生まれになっていつ亡くなったかということすら分からない。そういう意味で、今日は先生方についての話がすごく参考になりました。

小杉　ありがとうございます。岡村先生もいかがですか。

岡村　高校の教員をやっております岡村と申します。私自身は、学生紛争に関しては、うちの母もいわゆるノンポリと言われる立場でずっといまして、学生紛争がそもそもどうしてそんな状況に起こったのかと

か、全く理解できませんでした。皆様方のお話をお聞きして、それこそ真実というものを見極められるように、これからも色々調べていきたいなと思いました。

小杉　ありがとうございました。私自身は最初に申し上げましたように、この紛争を全く知らない、どういう現実だったかを知らない世代で、今回の昭和四〇年代の座談会を開かなくてはいけないということについて不安がありました。皆様方の話をお聞きして、昭和四〇年代はこのような世代だったのかと、おぼろげながらもつかむことができました。今日陪席できなかった『明治学院一五〇年史』編集委員の方々、また、資料集として今度これを刊行させていただく事になりますので、これを読んでいただく皆様に、生の声としてお伝えできるように努力したいと思います。今日は本当に参考になるお話をありがとうございました。まとめとして最後に一言ずつ頂けたらと思います。今関先生からお願いします。

今関　現在、保育者になる人たちの教育、また研究活動をしています。明治学院の修士（課程）を出てからずっとしているのですが、最初が東洋英和の短大で、次に「光の子どもの家」という児童養護施設の施設長を一〇年務め、平成元年より埼玉にある衛生短大で二年勤めました。今、青山学院女子短大子ども学科で一三年目になるんですが、いずれにしても明治学院で学んだということが「肥やし」になっているということがはっきり言えると思います。実は四〇歳代の時に夜間の日本聖書神学校で学んで、日本基督教団の牧師にもなっておりまして、現在は日本基督教団久我山教会で年に四・五回説教のお手伝いをしています。つまりここらへんも含めて明治学院で学んだ事柄、仲間たちと切磋琢磨した結果というか、個人史になりますが、そういう風に思っています。

それで、学園紛争という「洗礼」を受けたんですが、単なるイデオロギーとは違うかな、キリスト教精

神はどういう風に言えるかということになるんだけど、僕は、最後の一人の人も大事にするといいますか、「一粒」を、いと小さきものを大事にする、そこに原点を置いています。いずれにしても、そういう思想形成も、明治学院のチャペル礼拝に結構頑張って出ていましたし、育ったかなと思っています。人間関係でもそういう仲間たちのネットワークといいますか、これは財産になっていますしね。そういうことで学園紛争そのものは、やはり僕らの思いを超えた社会的現象というか、今にして思えば時代精神の荒波に遭遇したと思っています。でも、そこから逃げないで取り組んだことは、やはり大事な一回きりの人生ですので、大事なことだったのかなと、今改めて思っています。ただ残念なことに、そういうセクトの人たちはおおむね自滅していたような感じがしないでもないので、心が痛む思いがはっきり言って残っていますね。何人か不幸な例も見聞きしているものですからね。うまく言えないんですがそんなところです。

小杉　ありがとうございました。では五嶋様。

五嶋　私自身、明治学院はやはり自分とは切っても切れないですし、もう来年になると六六歳になりますので、やはり明治学院の歴史をもう少し紐解いてみたい。私はマンドリンをやっていた関係で高等商業部にこだわるんですが、その生い立ちというか、マンドリンが明治学院のキャンパスで初めて演奏されたのは明治四三年、あのサンダム館であって、その後それらしい団体になっているんです。高等商業部に引き継がれて当時としては活発にやっていた。キリスト教音楽が充満していた明治学院キャンパスで、大正七年、発足早々の高等学部商業科（後の高等商業部）の学生が何でマンドリン合奏に飛びつくように受け継いだのか。これは大正という時代、そしてマンドリン音楽の性質等が絡んでくると思いますが、このマンドリン音楽という視点から、当時の高等商業部の学生の気風、気質を知る手がかりがあると思っています。

明治学院大学もこれから時代の要請に合わせて新しい学部、学科ができて、そこに入る学生はそれまでの学生と微妙に違ってくるはずです。明治学院の歴史で、その最初の経験が大正七年発足の高等学部商業科ではなかったのかと。これは私のこれからの老後での研究テーマにするつもりです。明治学院の歴史に興味津々です。

それから明治学院大学の教育理念としての“Do for others”は、素晴らしい言葉だと思うんですけれども、キリスト教の教えの中には色んな切り口があるので、いずれはもう少し間口を広げて、誰でもが広く入ることのできる部分をつくることが必要じゃないかな。ただ“Do for others”じゃスローガン。単にスローガン社会というのは良くないですけど、そういうことじゃない何かをいずれは見つけていかなきゃいけないんじゃないかなと私は思っている次第です。これからの卒業生が、これからの社会で生きる上でも、“Do for others”を信念として生きる上でも、明治学院の原点「リベラル・アーツ・カレッジ」がもつ人間力の養成力を学校として見直す必要がありますね。

小杉　ありがとうございます。では、星様。

星　私はヘボン塾から数えてちょうど一〇〇年目の入学、一九六三年。先程話をさせていただきました中で昔を振り返りますと、ちょうど明治学院大学の大きな変革期に学生自治会の委員長をさせていただいて、会則等々いじらせてもらったのかなと。卒業して今、第一三代目の同窓会長をさせていただいておるわけですが、ちょうどここも今大きな変革期を迎えておりまして、会則等の変更も行っていかなければならないと思っています。

卒業して四二年になるわけですが、私の人生、学校を卒業してから四二年間生きてきた中で、約八割か

ら九割といっていいくらい明治学院の卒業生がらみの人生を生きています。大変素晴らしい人生であったし、明治学院に対しても大変感謝しております。できれば、今、校友会で山本さんが大変ご努力をなさっていますが、後輩の人がもっと明治学院を愛する学校になってほしい、我々と同じような熱い気持ちを持つ後輩が育ってほしいなと。それには今、大西学長が継承し、各学校長もそれに追随をして色々ご検討をなさっている、私学の中高大一貫教育、できれば、幼稚園から小学校、中高大。要するに、私学の一つの教育理念を持った一貫教育。ヘボン塾から数えて二〇一三年が一五〇年になるわけですが、今、学内で創立一五〇年に向けて色々ご検討なさっている様ですが、我々としては、なんとかきちんとした一つの焦点をおいた理念をぜひ早めに作っていただき、我々卒業生も真からその体制を応援していく組織を作っていきたいなと。いずれにしましても、色々な出来事があってこういう形になったのですが、我々の時代と比べて、今、卒業生で校歌が歌える若者が少ないっていうのは大変残念に思っております。

小杉　ありがとうございました。では太田様お願いいたします。

太田　たまたま数日前、新横浜プリンスホテルで私のお話の会を開き、そこで初めてお会いしたコーディネータの男性が、確か私の二年先輩の社会学科卒業の方で、「実は、太田さん、同じ頃キャンパスにいたんですよ」と。その方もやはり全共闘に入っていた人だったんですが、それまでは色々な仕事をされて今はコーディネータの仕事をされている。思わぬところでその方のお話を聞いた時、彼もガラス工場ではなく、何の工場だったかな、やはり工場で働いていて。明学は二年遅れて卒業して、そのあと営業担当になって、そしてこの業界に入っていかれたという。だから彼は彼としてすごく真剣にひたむきに生きてきたんだなと考えて。やはりその方も、昔は全共闘に入っていたなんて全然そういう感じではなく、今は極めて

温厚なジェントルマンに見えたものですから。私の好きな明学の卒業生は、秀才であってもどこかのんびりおっとり。人間、今の社会急いで歩きながら、もちろん私も歩きながら携帯電話を使うことはあるんですけれども、あまりに急ぎすぎている世の中で、のんびりゆっくり歩いている人もいていいんじゃないかと。

私も、自由なというか、文章書きをメインにしていますが、結構しんどいなと思うんですが、やっぱりのんびりとありたい。そんなに急いで競争なんかすることなく、やはり「真実」を考えていきたいと思います。先程「事実」と「真実」の違いについてお話していただいて「ああ、そうだわ。」と思ったけど、やはり「真実」を考える一人の人間でありたい。たまたま私が憧れた明学に入って、そののんびりした良さとともに、激動の明学のキャンパスですから、その激動の中にあった時、私はその時の流れに流されることなく考える人でありたいということまでは考えなかった。ただ過激な運動についていけなかっただけなんですが、今はやはり流されることなく生きたいと思っています。そんなに大金持ちになる必要は全くないし、自分に正直に生きられたらそれが最高だと思うので、明学のよき伝統はあの激動の時にあってもなお生きていたし、「全共闘の男の子たちにも生きていることだなあ」ということを数日前の思いがけない出会いで思ったんですね。だから、私たちの世代というのは今でも「何とか君」とかね、あと「男子」ではなく「男の子」っていう言い方を、まあ郷ひろみの「僕たち男の子」っていう歌がありましたけど、あれよりちょっと先の世代で、やはり「男の子」「女の子」っていう言い方をして。全共闘の学生もみんなあの時代ですよ。

その頃に「スニーカー」っていうのもね、定着したんですよ。小説家の司馬遼太郎先生がアメリカに行っ

て気持ちが良かったのは、アメリカのニューヨークのオフィスの中では女の人がハイヒール、パンプスを履いているけど、（オフィスの外で）歩いている時はみんな家に入るまでスニーカーで歩いていたって書かれているんですね。それはもう二五年も前の話ですけれども、それがすごく目新しかった。日本も最近までみんな若い子は高いパンプスを履いていましたけど、最近はぺったんこの靴を履くことも自然になっているし。自然のあるがままで生きていいんじゃないかっていうことが、ようやく今の日本の中にも出てきたと思うんですよね。

だから、明学もチャペルに行かない生徒さんが多いと思いますが、強要はしないで、でも「チャペルに行くと、とても気持ちがいいですよ」という感じでね。自然な雰囲気の中で、「一部上場の会社に入らなくてもいいですよ」という感じでね。「その方が人生幸せだ」と。だから、私も本当に明学で良かったなと思う。そののんびりさのゆえに、つい先程もヘボン先生がヘボン式ローマ字を発明しただけでなく目医者さんだった[43]ということを、この歳になって初めて知って。迂闊ですよね、実に迂闊だと思う。でも初めて教えていただいて、これは勉強しなきゃいけないと。だから焦ることなくね、そういう風に真実がわかるということは喜びですから。これからもゆったりと勉強していきたいですね。

また、今まで知らなかったことで、賀川豊彦先生のことも実はちょっと残念なんですけれども、私は今も賀川先生がセツルメント活動で献身的な働きをされたことはすごく心から尊敬しているんですが、敗戦近くになった時、結局日本軍部になびかれてしまわれた。とても残念なことです。賀川豊彦記念館に行って、初めてそういう雑誌を見て知りました。記念館では、そういう賀川先生の負の部分もちゃんと公表しているわけですよ。だからとても心が大きいなと思いますよね。とても残念な部分ですよね、最後に軍部

になびかれたのは。でも、その真実を明らかにすることで、若き日、明治時代に神戸のスラムに入られたという輝きは消えないと思います。奥様がマリア様のように素晴らしい方だったと思うんです。でもそういう残念なこともあったから、やはりノーベル平和賞は無理だったんだなと初めて合点しました。そういう風にいくつになっても勉強する、ゆっくりと長く勉強をできるっていうのは「明治学院に私も染まっているんだな。とても私には合っていたな」と思って。誇りにして、卒業生の席に加えさせていただいているのも心から嬉しく思い、仕事をしていても、出会って間もなく、「実は、私も明学なんですよ」と言われると、もうそれだけで、「ああ、いいですね」というか、信頼できるような気持ちになるんですね。そういう意味でも明学の良さを持ち続けることは、これからの時代、私たちがますます生きやすくなれるような秘訣になっていくと信じています。この時代もゆっくりと焦らずにと、私も生きていきたいと思っています。

小杉　ありがとうございました。では、下田様。

下田　過去の歴史認識がほとんど乏しくてですね、今日の座談会のメンバーの一員としてはお役に立てず申し訳なく思っております。まもなく明治学院が創立一五〇周年を迎えるということですが、私が今勤めているユアサ商事株式会社は、創業は一六六六年で三四四年の歴史がある年商四〇〇〇億円弱の商社です。そういう意味で、一〇年間学んだ明治学院も、今勤めている企業も歴史が長いということですね。

もう一つ、私どもの社是、企業理念として「誠実と信用」「進取と創造」「人間尊重」の三つを掲げています。そういう意味で校風と社風は別に一致するものはありませんが、私は明治学院で一〇年間学んできまして、優秀でも何でもなく、大して貢献もしていませんが、漠然としたものですけども、明治学院の校

風と教育方針はユアサ商事の社風・社是と何となく通じるところがあって、運命的なものを感じています。数年に一度、山本さんも含め中学・高校時代の同窓会をやってみたり、大学時代のクラブも潰れてしまいましたけど（当時の仲間たちと）たまに会ってみたりっていうので、数年に一度は思い出すことがあります。直接的に明治学院にお役に立つことがなくて申し訳なく思っておりますが、人生もう三分の二を過ぎまして、残り何年生きるかわかりませんが、何らかの形でお役に立てれば、関わりを持ち続けられたらと思っております。

小杉　では山本様。

山本　大学時代の下田さんは詳しく知りませんが、中学・高校時代は間違いなく優秀でした。さて、（私の持ち時間である二〇分の最中）「大学自治会」の話で盛り上がり、言えなかったことが三つほどあります。大学校友会として、「各地校友会」を開催しますと学生時代、S・C・Aに所属されていた方からのお話を伺うことがあります。まあ、S・C・Aから闘キ同へというような、基督教児童研究会も含めてでしょうが、いろんな背景があったのだと思います。コックスの『世俗都市』だけでなく、私は詳しくないのですが、イエスの捉え方として「史的イエスの問題」もあったかと思います。編集史的研究であるとか、様式史的研究などと言われ始めたのは一九六〇年代後半ではなかったでしょうか。『原始キリスト教史の一断面』（田川建三著）という図書が出版されたのも確か、一九六八年でした。

二つ目は、大学に入学した年、一九七〇年一一月二五日に三島由紀夫事件[43]がありました。その前年、一九六九年五月に東大全共闘と三島由紀夫が討論していまして、一言だけ言いますと、三島由紀夫が「君らが一言『天皇陛下万歳』と叫んでくれれば俺は喜んで君らと手をつなぐ」と語ったことは有名です。東大

全共闘 VS 三島由紀夫『美と共同体と東大闘争』というタイトルでして、『文化防衛論』という本の中に入っていたと思います。多くの人が感じたことですが、今でも面白い。面白いというか興味深い言葉です。

三つ目は、早稲田では「久遠の理想、現世を忘れず」と言うそうです。立派な理念でありますが、明治学院の強さは「現世」以外のことも語れるといったら、おかしいでしょうか。キリスト者は何事に対しても非暴力が基本です。まあ、キリスト教の歴史では暴力を行使した歴史もあったかと思いますが、非暴力という立場に絶えず立ち返ることが、重要であると思います。

小杉 本日は長時間にわたりまして皆様からの貴重なお話をお聞きすることができました。本当にありがとうございました。心から感謝を申し上げます。

注

1 一般的には、昭和二二年生まれから二四年生まれまでを指す。さらに大きな枠で捉えることもある。

2 千葉県成田市の農村地区名称である三里塚とその近辺で行われた、成田国際空港建設に反対する闘争およびこれに関連する事柄のことを指す。成田闘争とも呼ばれる。

3 一九六四年創刊。若者向けの雑誌として一世を風靡する。

4 一九七二年二月一九日に始まる、長野県北佐久郡軽井沢町にある河合楽器の保養所「浅間山荘」において連合赤軍が起こした事件。

5 学生運動が盛んな一九六九年、東京神学大学学生と学校側の間に紛争が生じ、翌年学生が校舎を封鎖、機

動隊導入により授業再開に至った経緯。

6 『10・8闘いの狼火　12・8背教者は錆刃で偶像を打ち砕く　2・8青のジュラルミン　荊棘よ耐え抜き　碧き牙となれ』闘うキリスト者同盟書記局発行　一九六九年三月。

7 宗教改革の思想家ジャン・カルヴァンにちなんでカルヴァン主義と名づけられている。すべての上にある神の主権を強調する神学体系、およびクリスチャン生活の実践を指す。

8 ジャン・カルヴァンの主著。プロテスタント神学の最初の組織神学書とされる。

9 一九七〇年の日本万国博覧会におけるキリスト教館出展をめぐり、特に日本基督教団で起こった諸問題。

10 一八七二年三月一〇日に横浜公会として設立された日本で最初のプロテスタント教会。後の横浜海岸教会。

11 『明治学院大学ヘボン聖書研究会〜35周年記念誌〜いのり』

12 旧約聖書ヨブ記第一章、第二章参照

13 全学共闘会議（全共闘）が、暴力的手段をとり東京大学本郷キャンパスを違法に占拠していた事件と、大学から依頼を受けた警視庁が一九六九年一月一八日から一月一九日に封鎖解除を行った事件である。東大安田講堂攻防戦ともいう。

14 明治学院大学応援歌『光の園』第二節の歌詞。

15 『明治学院大学新聞』一九六五年二月一五日　一面。

16 昭和四〇年六月一五日明治学院大学新聞第一八六号記事参照。

17 『明治学院大学新聞』一九六五年六月一五日　二面、同年七月一五日　一面、同年九月一五日　第一面に関連記事が掲載されている。

18 『若林龍夫著作集4　若林龍夫と明治学院：信仰と教育に生きる』若林龍夫著　明治学院大学若林龍夫著作集刊行委員会編、一九八四　若林龍夫…一九六四年明治学院学長就任、一九六九年辞任。

19 アメリカ合衆国におけるリベラル・アーツ教育、全寮制少人数教育を特徴とする四年制大学。

20 『明治学院同窓会百年史』第七章　明治学院校歌の系譜　第三節「隅田のほとり」明治学院前身校・東京一致英和学校校歌にその論考がある（丸山義王氏による）。

21 一九八一年明治学院総理就任、一九二一年辞任。

22 『明治学院百年史』第四章第四節　高等学部の合同と拡張　二九三―二九六頁を参照。

23 アメリカ　ミシガン州にあるホープカレッジへの短期留学を含む交流は、一九六五年から開始された。『明治学院百年史』六七九～六八一頁に詳しい。

24 一九六九年四月学長代行就任、一九七〇年四月学長就任、一九七四年三月辞任。

25 中華人民共和国の文化大革命時期に台頭した全国的な青年学生運動。

26 『明治学院大学新聞』　一九六八年一二月一五日付　第一面。

27 注6前出　同八五、八六頁。

28 一九六八年一一月から一九六九年一月まで明治学院学長代理を務める。

29 本田技研工業が一九六七年から一九七二年まで製造した軽自動車。低廉な価格と高性能によって当時のベストセラーとなった。

30 岡山県岡山市出身のファッションデザイナー。戦後はファッションメーカー・レナウンに勤務した後一九五一年に独立し、「VAN」ブランドとして知られる「株式会社ヴァンヂャケット」を設立。特にブレザー

とボタンダウンシャツをベースとした学生のファッションスタイルを「アイビールック」として紹介し、若者のファッション文化に改革をもたらした。

31 三年次の後期に就職部の後援により学生自身の手で組織されたもの。就職問題について研究していた。

32 『明治学院百年史』六〇二頁。

33 白金における募集は一九六五年まで。最後の中学卒業生は一九六八年三月。

34 一九六八年五月二一日にフランスのパリで行われたゼネスト（ゼネラル・ストライキ）を主体とする民衆の反体制運動と、それに伴う政府の政策転換を指す。

35 一九六七年一〇月から一一月にかけて、東京都大田区で発生した左翼暴動事件のうち、佐藤首相がアメリカに訪問することになった際に起きた事件。

36 賀川豊彦が神戸・新川（正式には新生田川）のスラムに入ったのは一九〇九年一二月二四日のことであった。

37 一九六九年六月、明治学院高等学校生徒有志から礼拝改革を求める掲示がだされた。同年九月、二・三年生の礼拝が始まろうとするとき、ひとりの生徒から「礼拝ナンセンス！」との声があがり、司会にあたっていた教師が礼拝を中止、生徒を退場させる出来事が起こった。これを受けて、高校教職員も新しい礼拝を目指した生徒有志との対話の場を設けることを呼びかけた。これらの動きについて、『明治学院百年史』でかぎ括弧をつけて「礼拝ナンセンス事件」と記述している。（五七六～五八一頁参照）

38 現在も上記と同様の聖句が白金図書館にはギリシャ語で、横浜図書館ではラテン語で掲げられている。

39 「第一次ロシア革命二〇周年記念」として一九二五年に製作・公開されたセルゲイ・エイゼンシュテイン

監督によるソビエト連邦のサイレント映画。

40 『世俗都市―神学的展望における世俗化と都市化』：ハーヴィー・コックス　一九六七／新教出版社

41 貧しい住民の住む地区に宿泊所・診療所・託児所などを設け、住民の生活向上のために助力する社会事業。また、その施設。隣保事業。

42 一九一〇年一〇月一五日―一九九〇年九月一日　キリスト教長老派教会の宣教師で、東京女子大学創立にも関わったオーガスト・カール・ライシャワーの次男として東京府（現在の東京都）東京市芝区白金台町の明治学院内宣教師住宅で生まれる。アメリカ合衆国の東洋史研究者。一九六一年から一九六六年まで、駐日アメリカ大使を務めた。大使退任後はハーバード大学日本研究所所長として歴史に限らず日本研究を推し進め、後進の指導にも尽力した。

43 「ヘボンの専門は眼科であったが、外科手術や内科の治療にまで手をひろげねばならなかった。」『明治学院一〇〇年史』一〇、一一頁

44 一九七〇年一一月二五日に三島由紀夫が憲法改正のため自衛隊の決起（クーデター）の呼びかけた後に割腹自殺をした事件。楯の会事件と呼ばれる。

昭和三〇年・昭和四〇年代の学院点描

この項では、座談会にご出席いただいた方のお話に出てきた当時の明治学院風景を歴史資料館所蔵写真により振り返ってみることにしたい。

このことにより、すこしでも座談会にご出席いただいた方のお話の内容をより具体的な姿としていただけることを期待している。

昭和30年代　正門写真

正門左手に見える建物が井深ホール。ギリシャ風の円柱に支えられた印象的な建物だった。

井深ホール

井深ホールは1925年落成、1979年解体。高等学部校舎、高等商業部校舎、専門学校校舎、新制大学校舎、新制高等学校校舎として多年にわたり多くの生徒、学生に親しまれた。

大学３号館（左）・２号館（中央）・旧図書館（右）

大学３号館（100番教室）は1963年落成、1988年白金再開発により解体。大学２号館は1963年落成、1996年白金再開発により解体。

グリーンホール

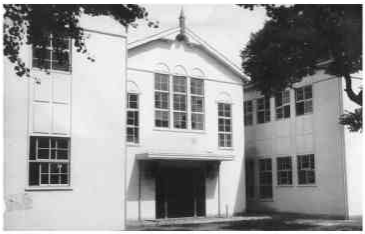
1957年落成、1994年白金再開発により解体。
校歌の「緑葉は香ひあふれて」の歌詞から、「グリーンホール」の名がついた。

グリーンホール外観

学生食堂

購買部

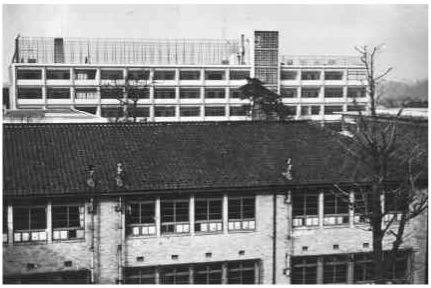
ライシャワー館



サイエンス・ホール

協同館

旧本館（左）
グリーンホール（右）



中学校旧校舎（手前）
大学旧本館（奥）

1960年頃　明治学院中学生制服（夏服）

1960年頃　明治学院中学生制服（冬服）

アウトポケットの紺色背広に、ストレートのズボン、エンジ色のネクタイと、当時としては非常に新しいスタイルだった。また、オワイヤ帽子とも呼ばれた登山帽風帽子が制帽だった。

外国語教育研究所（LL 授業風景）

本学の LL は1961年夏に 3 個の完全ラボ型ブースと12個の聞き取り用ブースから出発した。その後、1966年夏に旧 2 号館 1 階に外国語教育研究所として、新規の機器設備が導入されて完成した。第 1 ブース室は64ブースを備えた教室、第 2 ブース室は LL セミナー室として利用された。

紛争時の立て看板

山中湖畔「湖北寮」
アドバイザーキャンプでのひとこま

旧図書館壁面

旧図書館は1954年11月に落成。1階から2階へ上がるらせん階段そばの壁面に「THE TRUTH SHALL MAKE YOU FREE」と掲げられていた。白金再開発により1996年7月に解体。この言葉は現白金図書館ではギリシャ語で、横浜図書館ではラテン語で掲げられている。

元学長回顧談

（森井眞元学長回顧談）

話し手：森井眞元学長

聞き手：『明治学院百一五〇年史』編集委員

遠藤興一

大西晴樹　（現学長・編集委員会顧問）

久世　了　（学院長・編集委員会顧問）

播本秀史

渡辺祐子

丸山義王

辻　直人

（金井信一郎元学長回顧談）

話し手：金井信一郎元学長

聞き手：『明治学院一五〇年史』編集委員

遠藤興一

播本秀史

中島耕二

辻　直人

原　　豊

※回顧談本文に注を付するにあたっては、日本キリスト教歴史大事典（教文館　一九八八）、キリスト教人名辞典（日本基督教団出版局　一九八六）、『日本大百科全書』（小学館）（オンラインサービス）等を利用させていただいた。

大学在職中の思い出

森井　眞

二〇〇七年六月二三日

遠藤　本日は、森井眞先生をお招きして、初めに森井先生が在職中のことについて、もちろん学長時代が中心になろうかと思いますが、必ずしもそこに限らずに、それ以前の学部教授時代、学部長時代、あるいは、それ以後の様々な社会的な活動もございますので、森井先生、まずはその辺りをご自由にお話をして頂いて、その後に内容についての質問や確認のためのやりとりをしたいと思っております。

森井　はじめに一言、お断りするのは、遠慮や謙遜ではなくて事実だからなんですけれども、記憶力がすごく悪くなりましてね。ですから私の話の中で、しかるべき記録と異なる場合は、それは全部私の思い違い、考え違いですから、訂正して頂きたいということ。それから記憶力の限界というのは、だいたい誰でも気づくんです。恐ろしいのは、注意力とか、判断力とか、思考力…こういったものがすごく衰えましてね。ですから、今日も私はみなさんに聞いて頂きたいと思ってお話しに来たんですけれども、お聞きになってみると、それがまったく聞くに値しないことも、たくさんあると思います。それはもう本当に聞き捨てにしてくださっていいと思います。もし私の話の中で、「これは、まあ使える」ということがありましたら、それを活かして頂ければ幸いです。私の話を、どんな扱いをなさろうが、けっして恨みません。文句は言いませんから。ご判断をお任せいたします。

◆平出学院長

私の学長時代のことについてお話をしたいと思います。思いつくままの話ですから、大事なことが抜けたりしているかと思いますがお許しください。ちょうど私が学長だった一九八二―九〇年の間、平出宣道君がずっと学院長でした。思えば、平出君の存在は、大学にとって「とっても」大きかったと思うんですね。例えば、この時期、横浜校舎の開設事業がありました。それから白金再開発の大事業もやりました。幸いにして、平出君というのは事業家だったんですね。それで、本当に大学のために、よく両方の事業をやってくれたと私は思っています。この話はまた後で触れますけど、平出君は大学の自治には介入しませんでした。しかし大学のことをよく理解して、大学のことに協力してくれたと、私は思っています。

彼との関係を、ちょっと個人的な話から始めますと、生まれた年は同じで、一九四一年に同じ大学の西洋史学科に入ります。そこで、初めて知りあったんです。ところが、平出君はお洒落で、ハイカラで、モダンで、ジャズが好き、アメリカが好き、そして、経済学史に興味がある。私は、野暮で、無趣味で、時代遅れで、しかもジャズは嫌い、アメリカ嫌い、経済のことまるっきりわかんない。興味があるのは思想史なんです。とっても、彼とは付き合ってもらえないと思っていました。でも、一学年十数名の学科でしたから、それなりの付き合いはあったんですが、それなりなだけで、深い付き合いは、いっさい無かったんです。

同じ年に卒業して、兵隊にとられました。彼は兵隊から帰ってきて、何年か知りませんけれども、割に早く明治学院の専任になりました。それで、私が明治学院の専任として着任したのは、一九六五年にフランス文学科ができたときなんです。でも、彼は経済学部で、私は文学部ですから、会ったことはそれ以降

もほとんどなく、付き合いもありませんでした。ところが、学長になった一九八二―一九九〇年までは、おそらく二、三日に一回ぐらいは彼と会って、話をしました。同じ世田谷に住んでいるものですから、法人の会議の帰りは、必ずタクシーを一台つかまえて、家まで一緒に帰りました。ですから、その間は、付き合う機会をかなり与えられたんですね。

あの人は、割合に…どうでしょう？　誤解されやすい気質だと思うんです。私は学長時代に彼と知りあって、初めて平出君のことが少しわかったような気がしました。例えば、平出君は一般に開放的ではなくて、秘密主義だという風に言われていました。私も「そうか」と思ったんですが、付き合ってみて驚いたのはね、彼を陥れようとしている人がそばにいるんです。何人か。本当です。恐ろしい状態でしたよ。これは、よっぽどしっかりした人だったならば別ですけれど、普通の人ならちょっと…あんまり開放的になれない。私は、あんな風になるのはある程度はやむをえないと、そのとき初めてわかりました。

それからもう一つ、これも付き合って初めて知ったんですが、平出君は、上っ面として、拡大主義者、拡張主義者だと、たいていの人が思っている。で、付き合ってわかったのは、「そう」なんですが、彼の拡大主義の根底には、「明治学院大学をこうしたい」という志があったんです。その志を実現するために、こういう風にしたいというのがあって、その一つが物理的な拡大だったんです。これは、彼と親しく付き合って、初めて知りました。

◆平出学院長の志

平出君が持っていた「志」が何であったかを分けて話しますと、一つは、明治学院大学は、ほかのどん

な（優れた）大学であろうとも、（その大学の）真似をしてはいけないということ。世の中には、明治学院の果たすべき使命が、または仕事がある。それをちゃんと果たす大学になるべきだと。それが何かと言ったら、それが問題で、色々な言い方があるかとは思いますけれども。折に触れて、我々自身が、明治学院の使命は何かと、問い続けなくてはいけない問題だと思います。彼は、これをはっきり言っていました。明治学院は、明治学院のやるべき仕事を、使命を。これが一つですね。

それから、もう一つは、明治学院大学を「大学らしい大学」にしたいということ。これはおそらく、彼が専門学校から（新制）大学に移るときの明治学院を知っていたからだと思うんですね。その経験もからんでいるかと思いますが、「大学らしい大学であるべきだ」と言うんです。それは、どういう意味かと言いますと、これには色んな意味があって、まず一つは、「大学とは学術研究の場でなければいけない」と言うんです。教育の根底に、きちんと世間で通り、世間で評価される学術研究がなされていなくてはいけない。これも立派な考えだと思いますよ。それで彼も、あんなに忙しい中で一生懸命、研究者として生き続けようとしていました。これも我々は、忘れてはならない大事なことだと思います。彼は、大学をそんな目で見ていました。

それから、その次に大学らしいというのは、これは彼の口から聞いたわけではないんだけれども、明治学院大学は本当は、人文科学、社会科学、自然科学系の学部を備えた総合大学でありたいと思っていたみたいなんですね。なぜか？　彼がまず考えたのは、医学部を作ろうということです。これは、もちろんヘボン博士の流れをくんでいるからですが、自然科学系がウチにありませんでしたから、その学部を作りたいと思ったんです。それで、彼がまだ学長の頃で、私がまだ文学部長の頃だったか、つぶれかけている私

立の医科大学を見に行きました。これを立派に建てなおして、ヘボンの志を受け継ぐような医学部を作ったらどうか、と。これは、私も大賛成でした。ところが、資金が無いんです。医学部を作ろうとなれば、かなりの資金が要るんですよ。残念ながら、この計画はつぶれました。

それで、その後に平出君が思いついたのが、明治学院の国際性ですね。それを活かす学部を作りたいということです。国際性を活かす学部を作る。これ平出君の着想です。その学部は政治、経済、文化、この三つの系列の学科を備えた学部でありたい。ここまでは彼の着想です。私は、この考えは立派だと思いました。それで学部の理念に関しては、もちろん大学が平出君を加えて、大学として考えたんです。ここで、明治学院の使命とは何かと、当然出てくるわけですね。やはり、「国際性と開拓者精神」、それから「人間教育」が挙がりますね。

考えてみると、ヘボン、フルベッキ、ブラウン、これらの方々はみんな立派な人たちですが、この人たちがつくった明治学院から、賀川豊彦、そして島崎藤村という人物が出てきたんです。私、最近になって、いよいよ驚いているんですけれど、賀川豊彦という人は、あれはやっぱりすごい人だったんですね？　日本ではあまり聞いたことありませんが、西洋では賀川豊彦は、アルベルト・シュヴァイツァー、ガンジーとならんで、世界の三大人物の一人らしいんですよ。それだけの人物を明治学院は生んでいるんです。あの人も、もちろん、いくつか問題があります。でも、私が見るところ、一番すごいのは、あの人ほど、隣人を自分のように愛するということを実際にできた人、実行した人というのは、これはやっぱり世界的にみても、珍しいんだと思います。

私もフランスに行って、賀川のことで、今まで知らなかったことが色々ありました。やっぱりすごい人

です。隣人を自分のように愛する。つまり隣人というのは、「善きサマリア人」のたとえに出てくるように、あらゆる民族とか人種の違いを越えて、性別やら、貧富の差、身分の差、それから障がいの有無や、宗教など、全部の違いを越えて、一人一人がかけがえのない人生を生きているということですよね。それに気がついて、一人一人の人間を大事にする。賀川という男は、ほかに欠点があったとしても、そのことに目覚めて、一生懸命にやった人だと、私は思います。

それから島崎藤村は、また、ずいぶん違います。あの人もやはり人間とは何か、という問を問い続けた人だと思います。私はあまり文学者として好きではないんですけれども、それは趣味の問題。人間を大事にしようという思い、これを我々が受け継がなければいけない。人間とは何か、問い続けて、そして人間の尊厳、人間がそれぞれにかけがえのない人生を生きているということに気づいて、それを大事にしていこうとする。これは、やっぱり明治学院の、本当に受け継ぐべき精神だと言っていいのではないかと、思いました。

◆国際学部の開設

それで、国際学部をつくるときの話ですが、「国際」というのは、国と国との関係、インターナショナル（International）ですから、ネイション（Nation）とネイション（Nation）の間なんですね。だけど、そのネイションの境にとどまるんじゃなくて、そこの中に住んでいる人間一人一人を、国境を越えて、人間として、政治的にも、経済的にも、文化的にも、できるだけ正確に国や状況を認識して、人間相互の理解を深めて、人間と人間との間に信頼関係を築いてゆく。そういうことができる人間をつくる学部。つ

まり、戦争が起こったら、どう国を守ろうかというのではなく、今ある平和をどう守るかというのでもなくて、平和を生み出してゆく人間をつくろう。平和をつくり出してゆく人間をつくる。そして、それが世界の平和につながってゆく。そのためには、やはり、その学部に国際平和研究所、平和を研究する研究所を作るべきじゃないかと。これが私どもの理念になったと言っていいと思うんです。

そこで、そういう理念に賛成してくれる、そして、その理念を実現してくれる可能性をもつ中心人物を、まずつかまえようと思いました。数人、候補が出ました。それで、学部長会議でもお話しし、私的にも話し合いましたが、結局は、武者小路公秀さんのところにお願いに行こうということになりました。私の知り合いだったので、武者さんのところに、平出君と私と、二人で話しに行きました。彼は我々の計画をとっても喜んでくれたんです。それは是非やるべきだと。ただ彼は当時、国際連合大学の副学長をやっていましたでしょ？　彼はアジア問題の大事なテーマに取りくんでいましてね。これは、どうしても、やり遂げたいと。これが終わるまでいけないが、終わったら、明学にきっといくと言ってくれました。すぐには来られなかったけれども、彼は国際学部の構想の中心になってくれたんです。まず大黒柱に武者小路公秀。

人文系の中心は誰かと言ったら、武者小路公秀の推薦で多田道太郎。これも平出君と二人で、京都に口説きにゆきました。「こういう学部を作りたい」と言ったら、彼は大喜び。彼は明治学院に「いく」と言うんですよ。それで、多田道太郎。経済は、平出君の知り合いで玉野井芳郎さん。東京大学経済学部の教授で、ちょうど定年で、沖縄の大学に呼ばれていたんですよ。そこへ、やはり二人で訪ねて、「こういう学部を作りたいんだけど」とお話ししたら、「大賛成」。沖縄の方を蹴って、来てくれたんです。それで、いつから準備会がはじまったか、よく覚えていませんけれど、武者小路公秀と、多田道太郎と、玉野井芳

郎。この三人を柱にし、そして学院長も加わって準備会を発足しました。多田さんは毎回必ず京都から駆けつけてくれまして、武者さんも忙しい中で必ず出てくれました。

そのうちに多田道太郎さんが、深作光貞という、やはり同じ部門の研究者、彼を入れてくれって言うんですけど、「こりゃいい！」と二つ返事。それから、物理学者の豊田利幸先生が、この話をどこかから聞きつけて、白金に訪ねてらしたんです。「こんな話があるんだけど、本当かい？」という感じで。で、「実は、こういう学部を作りたいと思っている」とお話ししたら、「入れてくれ」とおっしゃるんですよ。自然科学の関係の方がいらっしゃらなかったものですから、準備会のメンバーに喜んで入って頂きました。それから経済で西川潤という早稲田の人がいるんです。私の知り合いで、彼もきっと乗ってくれると思ったんです。（その時、彼は）ちょうど、アメリカにいましてね、手紙出したら、彼も、もう大喜び。明治学院に「いく」と言うんです。アメリカから帰ってきてから、準備会に入ってくれました。福田歓一さんは、東大定年退職ですから一九八四年でしょうか、明治学院にいらしてから、この人をつかまえて入ってもらいました。こんな風にこういう顔ぶれで、実に熱心に準備会で、どういう国際学部をつくるか、カリキュラムから何から、毎月か、ふた月に一回だったかもしれませんが、本当に熱心に論じ合いました。それで、国際学部のコースをつくったんです。このまとめ役をやってくれたのが亡くなった福田垂穂さん。文部省の交渉から、記録から、彼が実によくやってくれました。ところが発足の少し前に玉野井さんが亡くなられ、その代わりに都留重人さんを、ということで、これも平出君と一緒に朝日新聞社に行って都留さんと会い、趣旨に賛同してくださったので、来ていただくことになりました。

こんなことで一九八六年に国際学部が生まれることになるんです。ところが文部省（当時）は今お話し

したような学者たちとは違って、我々の理念がよくわからないんですよ。しかも国際学部という名前の学部は本学が初めてなんですね？　それで「国際交流」と言えば、まだわかるみたいなんですけれども、「国際学」をやるんだと言うと、よくわからないみたいで苦労しました。ですが、この顔ぶれですよ。我々は有名人を集めようなんて、ケチな考えなんて無いですよ。私たちが考えたこの理念をちゃんと活かしてくれる人物を集めようとしたでしょ？　ざっと揃ったでしょ？　となると文部省が蹴れないんですよ。それで認可になって、一九八六年に発足しました。これが国際学部。

国際平和は、やっぱり大事なことですから、国際平和研究所が発足して、豊田さんが初代の所長です。この国際平和研究所の機関誌は今や国際的に評価されていますよ。本当に立派な研究が、たぶん今でも続いていると思います。それから国際交流は、もちろん国際学部だけに任せるべきではないわけで、大学全体の仕事です。「アクーカ」ＡＣＵＣＡを、みなさんご存知だと思います。“Association of Christian Universities and Colleges in Asia”の略で、アジアのキリスト教大学の連盟です。これは昔からありまして、福田垂穂さんがずいぶん熱心だったんです。これに力を入れてくれたおかげで、私も学長時代に、ずいぶんとＡＣＵＣＡの関係で、アジアの大学とお付き合いをしました。

それから、ホープカレッジとの付き合いはかなり長いです。これも熱心に力を入れました。加えて、国際学部が発足してから、アメリカではカリフォルニア大学との付き合いが密接になりました。さらに翌一九八七年、これはフランス文学科の工藤進さんの努力の結実なんですが、フランスのリモージュ大学と明治学院の交流。これは、やはり立派な成果をあげていると言うほかありません。毎年、明学から留学生が行っています。しかも、うちの学生は向こうで高く評価されているんですよ。立派な業績をあげている学

生がたくさんいます。ご存知のように、島崎藤村は、ちょうど第一次大戦中、パリに行っていましたよね？そして、戦争になったもんだから、リモージュに行って、そこにしばらく滞在したんです。リモージュにとって、日本の大文豪、藤村がここに滞在したというわけで、今、リモージュには藤村の記念碑が建っています。それから、韓国の崇實（スンシル）大学との交流も、ずいぶんと熱心にいたしました。これが一九八六―八七年のことです。

◆一九八七年――国家秘密法反対

一九八七年で、ちょっと触れたいことがあります。この八七年に、覚えていらっしゃる方もいるかと思いますが、政府は、俗に「スパイ防止法」と言われる国家秘密法をつくろうとしていました。つまり戦争に備えて、言論を統制し、戦争準備をするというものです。

当時ＩＣＵの学長だった渡辺保男さんが、ある会合のとき、私に話しかけてきたんです。渡辺さんが「あれに反対しよう」と言うんです。私も大賛成で、ＡＣＵＣＡ加入大学の各学長と交渉してみましたら、関西学院大学はこの話に賛同してくれました。私は、関西学院の学長と親しかったので、良かったんです。ところが、南山大学はカトリックの大学でしょ？（その）南山大学も話に賛同してくれたんです。これは本当にうれしかったです。それから、上智大学。上智はよく知っていたんで、話に賛同してくれました。驚いたのは、東京女子大学です。東京女子大学は、確かＡＣＵＣＡに入っていなかったと思うんですが、隅谷三喜男さんが学長でした。電話で私は、実はこういう話があるんだけれど、と言った。実に喜んで賛同してくれたんです。

隅谷さんは、本当に積極的でした。国家秘密法反対のキリスト教大学学長声明というのを出しまして、この白金校舎で、記者会見を開いたんです。そのときも隅谷さんが、ほとんど中心になって記者団を相手に、実に見事に対応されていました。その後、朝日新聞に「国家秘密法廃止！」と、ちゃんと記事が載ったのをご存知でしょうか？　まさか我々の声明だけであの法案が廃止になったとは思いませんけれどね。そんなことが一九八七年にありました。やはり明治学院にとって、このことは大事なことだったと思います。

それから一九八九年ですが、これは翌一九九〇年の「大嘗祭反対」へと続くものですから、少し触れておきます。一九八九年は、昭和天皇の病が重くなられて、下血の報道が毎日流れました。それで、各大学などで記念祭を自粛しはじめたんです。様々な大学が自粛の方向にありましたので、明学の学生も「白金祭を自粛するか？」という質問状を学長宛に出してきたんですよ。これには答えざるをえないので、私は学部長会にお諮りしましてね。学長声明を出すことにしたんです。

もちろん白金祭は中止なんかしません。むしろ、今、我々が考えるべきことは、（1）昭和天皇を個人的に美化して、昭和の時代が、あの醜い、「戦争」のあった時代だという歴史を忘れるような流れを、国民の中につくろうとしている。これは、許すべきではないという主張。それから、（2）「国体護持」という名のもとに、どれほど大きな犠牲が払われたか。この問題を、きちんと、これから明らかにしなくてはならない。（3）国体というのは、どんな風に変わろうが、「人権」を重んずる国でなければならない。この三つの主張を我々ははっきりさせようと、学長声明を出したんです。これは、朝日新聞に載りましてね。そうしたら、右翼のすごい脅し。でもその後、何人かの方から「朝日新聞の記事を見て、是非うちの娘を、

（あるいはうちの息子を）明治学院に入れたいと思った」と言われました。ただ、あの時は、右翼のひどい攻撃を受けました。私も「国賊・森井を殺せ！」と、さんざんやられましたけれども。その次が一九九〇年の大嘗祭反対なんです。

◆一九九〇年――大嘗祭反対

大嘗祭というのは、天皇を神にするという儀式なので、これは当然反対すべきです。くり返しになりますが、我々が考えてきたことは人間を大事にする大学でありたいということですね。それを否定する働き、特に戦争。それから、それに近づこうとするあらゆる動きに絶対反対してゆこうと、我々は考えてきたと思うんです。この大嘗祭反対を誰が言い出したのか、私は覚えていませんが、古代ローマ史がご専門の弓削達さんが、ちょうどフェリスの学長になったときのことでした。弓削さんは、電話で色々なことを言ってきましたので、弓削さんに大嘗祭の反対声明の話をしましたら、弓削さんは話に賛同してくれましてね。それから、関西学院大学・ＩＣＵも話に賛同してくれました。それと明治学院。この四つの大学が、「キリスト教四大学学長大嘗祭反対声明」を出しました。私は、これも明治学院にとって意味のあることだと思います。

ただ、あのとき弓削さんが右翼に自宅を銃撃されました。幸い、当らなかったんですけれども、あの年の三月に、申し訳ないことに私は定年で辞めたんです。この大嘗祭反対の声明文は、三月中に出そうという予定だったんですが、四月にずれ込んだんです。それで、（明学での）責任者が福田歓一さんになりまして、右翼のすごい脅しです。本当にお気の毒でした。

ちょうどこの頃（一九八九―九〇年）、日本のバブル景気が崩壊しました。このとき明治学院大学も大きな打撃を受けましたよね？　私も理事会の一員でしたから、当然、責任者の一人なんですけれども…退職してしまいまして、本当に申し訳ないんですけれども、逃げちゃったんです。当時、一番の責任者は誰かと言うと、平出学院長になるんですが、これは気の毒なことだったと思います。時期が悪かったんです。

◆横浜校舎の開設

次に、横浜校舎のことをお話ししましょう。当初、どこに校地を求めようかと、色んな意見がありました。埼玉とか、千葉とかね。色々ありましたが、平出君は初めから、「明るい湘南がいい」と言ったんです。それを決めるときの連合教授会は、反対意見がとっても多くて。覚えてらっしゃるとは思うんですが、どこに決まるか見当もつかないほどだったんです。

それで横浜に決まったのは、亡くなった福田垂穂さんが「ヘボンはいかに明治学院にとって大事な人物で、立派だったか、そしてそのヘボンの横浜こそに校舎を」という誠に情のこもった大演説をぶったんです。それから、もう一人は、法学部の若手の横山さんという大男がいまして、国立を一望に見おろした一橋大学で育った人です。彼が立ち上がって「大学っていうのは、ゼミが終わったら、教師と学生とが、のびのびキャッチ・ボールできるようなとこじゃなきゃダメだぁっ！」と、大音量で叫んだんですよ。たぶんね、あの二つの歴史的な大演説が…重要だったのではないかなんて。それで、決を採ったら、それほど圧倒的多数ではなかったんだよね？　わりあい僅差でね。だから、どうしようかなって思っていた人は、あの二つの演説を聞いて「ああ、横浜にしよう」としたのかもしれないですね。それで、横浜に決まった

んです。

横浜校舎の土地は、これは私の推測なんですが、明治学院の前に、青山学院が買おうとしていたんです。ところが、あそこの土地はいろんな規制がかかっていましてね、難しいんです。それで青山学院が諦めたところを平出君が見つけてきたんです。だから、その規制と戦ってあそこでちゃんとやるのは、本当に「大変」だったんですよ。職員の人たちが「実に」よくやってくれた。本当に「熱心に」。感心しました。そして、当時の大西亨邦副学長が横浜担当の副学長になってくれて、ほんとによくやってくれました。横浜校舎は通うのに不便だとか、色々、今でも問題はあると思うんですけれども、私はやっぱりヘボン縁（ゆかり）の横浜で校舎を開設できたというのは、明治学院にとって、とってもよかったのじゃないかなと思っています。

◆白金再開発の問題

それから、白金再開発の問題についてです。当時、白金再開発計画の話が広まると、複数の設計事務所の申し込みが殺到したんです。色んなところから「俺にやらせろ」と。しかし、平出君はとても慎重でした。彼は有名な東大の建築学者、当時、東大の建築学科の主任だった方と知り合いで、その人に四つほど信用できる設計事務所を推薦してもらったんです。その四つの事務所から、図面と書面を出してもらいまして、理事会で検討して、二つだけ選びました。この「どちらでもいい」という二つの設計事務所の実績を平出君と僕と二人で関西まで足をのばして、調べましたよ。その結果、「内井」が一番いいという結論に至りました。

この選択が成功だったかどうか、私は、わかりませんけれども。ともかく内井事務所に任せたんです。そして、内井の意見をとり入れて、建築会社も選びました。やっぱり不動産が動くときには、どうしても利権とか登記の問題とかが絡みますでしょ？　この時もほんとに平出君は、慎重にやったと思いますよ。内井昭蔵さんの内井事務所というのは、立派な建築事務所です。ですが、ウチのこの白金再開発は、どうだったのでしょうか？　私の見るところでは、あの新校舎というのは、「不便」ですねぇ？　内井さんも亡くなってしまいましたけど、残念ながら彼も、あれは傑作だとは思わなかったみたいです。でも、ウチの校舎を、一生懸命やってくれたことは、事実なんです。まあ、そんなこともありました。

◆二〇〇五年――名誉教授による改憲反対声明

私が去ってからのことを、一つだけ付け加えさせてください。二〇〇五年のことです。「憲法九条」を廃止しようという、憲法改悪の動きが強くなったときに、キリスト教学の加山久夫さんが動き出したんです。明治学院が動かないんなら、明治学院の名誉教授が反対声明を出さなければならないとおっしゃるんです。それで私も、憲法改悪に反対し、平和を守ろうという声明の話に賛同しました。

事務は全部、加山さんがやってくださった。それで二十何名かの名誉教授が賛成してくれました。それで、加山さんは、ここで公開記者会見を開いて、「大新聞からテレビから、みんな来るぞ」とおっしゃっていましたが、私はどうかなと思っていました。それでも、一応、朝日新聞は来ましたし、キリスト新聞も来ました。テレビは、さすがに来ませんでしたけれども。ただ、やって来た朝日新聞の記者は、要領を得ない若い記者で「これは記事にならないかも」と私は思いました。果してなりませんでした。加山さん

は一〇万部の発行部数をほこる『白金通信』には記事が掲載されるから、それを通して我々の反戦平和の意見が広がることを期待されていたようです。

賀川豊彦の『キリスト新聞』は、第一面のトップ記事ですよ（※1）。我々の改憲反対の声明をデカデカと報道しました。ところが、きちんと学長事務室にも報告したんですけれども、『白金通信』には、ぜんぜん載らないんです。これには、みんなびっくりしちゃいました。それで、加山さんに相談して、僕が『白金通信』を出している学長事務室に「なんで載っけないの？」と伺いました。

確かに「明治学院」として行動

2006年1月14日 第2950号 週刊

キリスト新聞

明治学院大学名誉教授有志の会

平和憲法の改悪を憂慮

森井眞元学長らが記者会見

※1『キリスト新聞』二〇〇六年一月一四日号（掲載許諾済）

会員通信

Campus TOPICS

※2『白金通信』二〇〇六年四月号

『白金通信』二〇〇六年四月号　キャンパストピックスに掲載された記事の内容

［名誉教授が憲法の改悪を憂慮］

昨年一二月一九日〔月〕に本学名誉教授有志が白金本館十階大会議場にて記者会見を行い、「平和憲法の改悪を憂慮する」と題する声明を発表しました。声明の要旨は次のとおりです。

＊　＊　＊

アジア・太平洋戦争を体験した世代として、戦争の悲劇を再び繰り返すことは許されない。今、政治家たちは永久不戦および戦力不保持の平和憲法を変えようとしている。「戦争の放棄」を「安全保障」に替え、「自衛隊を保持する」とうたい、「国際的に協調して行われる活動」に自衛軍を活動させる、と称して、戦争の片棒を担ぐための準備を進めている。また、現行の「公共の福祉に反しない限り」基本的人権が尊重される等の規定は、拡大解釈がなされうる「公共及び公の秩序に反しない限り」と書き替え、「政教分離」の規定にも手をつけようとしている。人間の尊厳を蹂躙する戦争への道には絶対に進んではならない。

を起こせば、大学の中には色んな考えの方、色んな立場の方がいますし、文部省との関係もありますでしょうから、問題が生じるかもしれません。でもね、名誉教授の有志が自分の責任において出した声明を、明治学院大学が利用すりゃいいじゃないですか？　だから、「人の責任で、“Do for Others”できるなんて、都合がいいんじゃねえか？」という手紙を出しました。そうしたら、さすがにこれを無視できなくなって、学長が、学部長会にお出しになりました。それで、学部長会の結論は、やっぱり「『白金通信』に載っけなきゃ」となりました。

ところが、載ったのが『白金通信』のほんの僅かなスペースの小さな記事。あんな小さいのを載っけられるんですね。しかも「名誉教授有志」とあるんですが、「有志」と書いたら、二人～三人程度かもしれないと思うじゃないですか？　「二十数名の有志」と書けば、それは、かなりの数だと思うけれどもね。「名誉教授有志」の記事が、「こ～んな」に小さい扱い（※2）。

私が、今日、こんな話をしているのは、「今」の明治学院の問題だと思うからです。現役の方々に、是非考えて頂きたいと思ったからなんです。我々は明治学院を去った今でも、明治学院大学は、人間が大事にされることを、ちゃんとやってくださる大学であって頂きたいという願いを持っています。加山さんも、それを訴えたかったんですね。それを酌んで頂きたいと思います。もっと大事なことも、たぶんあると思いますし、それから、一番初めにも言いましたように、どうぞ私の言うことはお忘れになってください。もし、何か利用できることがありましたら幸いです。

【質疑応答】

遠藤　どうも、ありがとうございました。森井先生のいわば公的な立場でのお話は、大体、今の中で、かなりお話頂いたと思います。この際ですので、森井眞個人と言うか、先生ご自身の「教育論」と言いましょうか、もう少し広い形でも結構ですので、そのようなことをお話頂けたらと思います。実は、一五〇年史編集委員会で最初に会議をしたときに、「キリスト教主義教育とは、なんぞや？」ということを話し合いましたが、これが記述しようとすると、結構、まとまらないものなんです。もし、そういう点でのご意見でも、アドバイスでも、先生のお考えを、まず少しお伺いしてから、次に質問に入りたいと思います。

◆キリスト教主義教育とは？

森井　そのことについては、まさに国際学部を作るときに、先程お話しました準備会で大問題になったんです。名前は申し上げませんが、準備会の中に、明治学院大学はキリスト教主義の大学なので、国際学部を主にクリスチャン育成のための学部にしたいと、思っていた人がいたんです。

ところが、多田道太郎さんは、それは違うって言うんですよ。キリスト教主義に立つことは、それは立派なことで、明治学院は当然そうあるべきです。だけど、キリスト教を絶対化してはいけない。キリスト教絶対主義ではダメなんです。キリスト教を選ぶことは大事ですが、キリスト教の中の相対化すべきものをきちんと相対化しないといけない。教育はキリスト教を相対化しそれを教えるべきだということです。

この準備会で、このことは本当によく議論しました。ですから国際学部では、仏教やイスラム教なども扱っています。それでもキリスト教に立ち、キリスト教を主張した上で、目標は先程お話したような「人

間に目覚める」教育にあるんです。人間は様々に違います。宗教の違いを越えて、なお、一人一人がかけがえのない人生を生きている。奪うべかざる尊厳を持っている。そのことに目覚める人が、一人でも増えるということ。それを目標にし、その手がかりをキリスト教としてもいいのではないでしょうか。ただし、それはキリスト教を手がかりにして、クリスチャンを増やすということではありませんね。

私自身、クリスチャン・ホームに育ちましたので、戦争中であっても、すごく熱心なクリスチャンでした。ところが、戦中、日本基督教団は、結局、戦争に協力し、戦闘機を寄贈しました。そのキリスト教界の体験を生きているんでね。やはり、本当にキリスト教にとらわれてしか、人間を見られなくなった。また、キリスト教にとらわれてしか、世界を見られなくなった。

でも、そうではないんです。キリスト教によって、人間が解放され、自分が解放され、その上で、人間をあるがままに見る。私の母が、熱心なクリスチャンで、クリスチャンは信用できる、クリスチャンでない人は、信用できないと思っていたんです。そんな風にではなく、人間を人間として「ちゃんと見る」。世界を人間として「ちゃんと見る」。その「ちゃんと見させて」くれるキリスト教でなくてはいけない。そういうキリスト教というのは、本当に人間の目を、心の目を開かせてくれる。

その結果、キリスト教を信仰する人が増えれば、それはうれしいことですよ。ただ、みんながそうなるのかと言ったら、そんなことはわかりません。それは、神様がお決めになることです。前に明治学院にいたアメリカの宣教師は、みんながクリスチャンになるのは当たり前だと思っていて、クリスチャンでない人は「ノン・クリスチャン」じゃなくて「ミ・クリスチャン」なんだと。つまり「未だ」クリスチャンになっていない人なんだと言っていました。でも、そんなことは、神様がお決めになることなんです。キリ

スト教は、明治学院にとって大事な「柱」です。我々ができることは、それを柱にして、人間が人間として目覚めるということを、やはり第一の目標として考えるべきではないかと、私は思います。

遠藤　ありがとうございます。私は、先生のカルヴァンのご本を、去年、読ませて頂いたので、そういう意味では、先生の個人的なクリスチャンとしての生き方もお伺いしたいです。それから、先生のお話の中に先程、戦争体験のこともありましたが、「戦争」と「平和」というのは切り離せない問題だと思います。これも別の機会に、先生のお話をもう一度、伺いたいものです。さて、皆さんから色々と質問なり、こういうお話をして頂けないものかという要望なりを、自由で結構ですから、出して頂きたいと思います。副委員長の大西先生からいかがでしょうか？

◆近年の明治学院①

大西　森井先生、ありがとうございます。先生の今日のお話で、「人間に目覚めろ」ということを改めて教わったような気がします。戦争のお話がありましたが、当時、戦争をしていた敵国の人たちやアジアの人たちも、みんな「人間である」ということに戦争が終わるまで気づかなかったということが、もうひとつ諸悪の基礎にあった。どの国の人たちも、ちゃんと友人もいるし、恋人もいるし、家庭もあるし、生活をしているんです。そういうことに対する認識が、当時の日本人は、ほとんど持っていなかったのではないか、こうしたご指摘が心に残りました。今日の話を伺って、国際学部を作るときに、やはり「人間に目覚めろ」という思想が根底的にあって、人間に対する理解をきちんとしようということを、我々はずいぶん教わったような気がします。

それから、森井学長時代には、色んな運動が十分にできました。どの運動や声明も、森井先生が「何かやれ」と指示して起こった話ではないんですね。当時の学部長たちの理解もあったようですけれども。学長が「大嘗祭の反対声明」をお考えになっているようだという話があったときも、一方で、我々も「何か大学教授として形にしたいね」という議論をしていました。例えば、昔、湯河原で教職員研修会をやったときの夜なんかに、「今度の大嘗祭、どうする?」なんて話になって、不登校をやろうか、一斉抗議をやろうか、と。こうした運動と、学長が声明を出すということが、不思議と、力ずくでもなく、同時期に沸き起こって、一つの流れを生み出してゆくという…そんな環境が森井学長の時代にはあったと、そういう風に私は感じています。私も、恵まれた環境で教えることができたな、と改めて思います。そこには、ひとつの時代があったと思います。

やはりバブルがはじけてから、大学が変わったと思います。「明治学院研究」が入ってきた頃から、一般教育の大学設置基準が改訂されて、大学はいっぺんにカリキュラム改革の時代を迎えまして、それ以前にあった、自由な校風というか、おおらかさが、明治学院から無くなったという印象を受けております。森井先生は、ちょうどバブル崩壊の前に退職されたとおっしゃっていましたけれども、それ以前と以後では、大学の印象はずいぶんと違うのではないかと思います。

それから、改憲問題のとき、明治学院は、基本的にキリスト教を大切にしていこうということでやってきていますから、そういう意味では、名誉教授だけの声明となったことは、非常に不幸なことでした。もう少し、現役教授たちとうまくチームワークができれば、それなりのことはできたと思います。私も学部長会で、声明があまりマスコミで取り上げられていないと聞きまして、そこで、せめて『白金通信』に掲

載しようということになりました。さすがに、そのとき、どれくらいの大きさの記事にするかという議論はしませんでしたが、やはり、その辺も含めて連携プレーがうまくいってなかったという気がしています。

◆学長のクリスチャン・コード問題

久世　私は、ここにいらっしゃる先生方よりは、ひとつ世代が古いわけでして。それで、私自身はですね、一九七八年、平出先生が学長になられたのと同じ年に、経済学科主任になりました。当時の学部長が津田博士さん。そのときに、横浜の話が出てきました。ですから、それ以外の経過についても、色々と知らなければならなかったんですけれども。その後、私が一九八八年に経済学部長となって、学部長会で森井先生とご一緒するというところまで、大体、今、お話頂いたような時期のことについて、森井先生とかなり近いところにいました。森井先生はボケて、もう記憶力も判断力もうんぬんとおっしゃいましたけれども、森井先生の今までのお話を聞いていて、大体、私が認識している事実と同じです。

森井　そうですか。

久世　ですから、森井先生、まだまだ、私たちを叱咤激励してください。

ただ、一点、先生のお話に付け加えさせて頂きたい事項があります。これは、遠藤委員長が質問したことと深く関連するんですが、森井学長在任時代に、私が特に深く関わった問題は「学長のクリスチャン・コード問題」でした。ことの始まりは、法学部の酒田、大山、横山、この三人の先生方が、あるとき私のところに来まして「学長のクリスチャン・コードを外そうじゃないか」と言ったんです。それで、クリスチャン側としては私の他に、橋本茂、それから真崎隆治、こういうメンバーも加わり、グループをつくっ

て声をあげたわけです。それが、私が学部長になる前、一九八〇年代の半ばぐらいのことです。そのときから、八年、ずっとです。結局、福田さんが学長のときに改正という形で実現しましたので、確か八年かかっているんです。

その八年の間にこの問題に関して森井先生ともだいぶ色々と折衝があったんです。そのとき、森井先生は私らに肩入れしてくれました。ところが平出さんは反対だったんです。それで、学部長になる前、学科主任の任期が終わってヒラ教授にもどっていた私が、あるとき、森井さんと平出さんから言われて、常務理事会でこの問題について発言したことがあるんですよ。つまり、そういう場をつくってくれたのは、森井さんなんです。平出さんは渋い顔してその辺にいました。それ、先生、覚えてらっしゃるでしょ？　平出さんと先生の考え方がちょっとズレていたということは。

森井　ついでに、今の話、付け加えますと、僕はエキュメニズムの立場でね、カトリックでもいいようにしようと言った。それはなぜかと言ったらね、武者小路公秀さんがカトリックなんですよ。彼になら、学長を譲ってもいいってね。僕はプロテスタントでなくても、カトリックでもいいように、クリスチャン・コードを外す前に、エキュメニズムでいったらどうかと。平出君は反対。あの人は、やっぱり福音主義。だから彼とは、今おっしゃった問題ではちょっと考えが違う。

久世　実は、私は経済学部で中山弘正君と同じ研究室にいたんですよ。ところが、この問題で中山君は、「クリスチャン・コード守れ」派の旗頭になっちゃったんですよ。私が撤廃派の旗頭をやっていて、中山君が擁護派の旗頭をやっていたんで、あの二人は研究室の中で、殴り合っているんじゃないかなんていう噂も飛んだんですけれども。そんなことはありませんでしたが、いつも議論はしていました。どちらも明

治学院の将来のためにということで考えていましたから、そういう意味では感情的な問題ではなくて、考え方の問題でした。

先程、森井先生がおっしゃっていましたけれども、結局、クリスチャンなら信用できる、クリスチャンじゃない人は信用できないというね、そういう線引きは、もうやめましょうよ、というのが私の考え方です。学校は教会ではなく、人間を教育する場だと。私は最近、学院長として入学式なんかで、挨拶をしなきゃならないんです。そのとき、私はこういう言い方しているんですよ。明治学院でのキリスト教は、あなた方に対する「チャレンジ」です。このチャレンジを受けて、そうして、あなたたちなりの答えを出してくださいという言い方をしているんです。その辺は、森井先生と私は考え方が一致しているという風に思います。

森井　ふむ、賛成ですね。

久世　森井先生は、その当時、もう雲の上の人でした。我々が、大学の中でごちゃごちゃと色んなことをやって運動をして、そこには色んな経緯があったということは、あんまり詳しいことはご存じないと思いますけれども。しかし、私にとって「森井学長」と言えば、クリスチャン・コード問題で、あの平出先生とは立場を異にして、私らに共感を示してくださったということが、非常に強く印象に残っているんです。

森井　そうですか。

久世　それは、まさに明治学院のキリスト教主義教育についての理念に関わる問題で、そういう点で一致できたというところで、非常に印象があります。

それ以外にも、「四学長共同声明」の時とか、一九八九年、一九九〇年のあたりの色々と大事な時期に、

私は学部長をやっていました。それで、「四学長共同声明」を福田さんにバトンタッチされたという、そのあたりのところをよく覚えていまして、そのとき、小泉智義さんから懇ろに、福田学長をよろしく頼みますという風に言われた事を非常によく覚えています。

その前の昭和天皇の問題、昭和天皇が病になってどうするか、歌舞音曲は控えるかどうかというお話があった時も、森井先生から私のところに電話がきたりして、「どう、思いますか？」なんていうこともありました。ですから、非常に生々しく記憶しております。実際に実現したのは福田学長時代ですから、森井先生ご自身の学長としてのお仕事ではないんですけれども、学長のクリスチャン・コード問題では色々と関わらせて頂いたということから、私にとっては森井学長時代の一つのポイントとなっております。

遠藤　ほとんど一〇〇パーセントとも言えるような、素晴らしい補足をして頂いて、ありがとうございます。どうぞ、若い先生も含めて、この際ですから、質問してください。

◆近年の明治学院②

播本　質問になるかどうかわかりませんが、私は一九九七年から、こちらにお世話になっております。その前、一九八九年や一九九〇年の一連の出来事があったときに、私は、当時、高校の教員をやっていたんです。そして大学にも、ちょっと非常勤で行っていたんですけれども、非常勤で行っていた大学で、「今度、播本さん、どこ行くの？」と聞かれ、「明治学院です」と答えました。すると「ああ、良いとこに行きますね。あそこは、筋を通す大学ですからね」と祝福をしてくれたんですね。私は、そういう気持ちで、良い大学に来たなと思っていました。

それで、今日お話をお聞きしていまして、一九八九―一九九〇年頃の明治学院の在り様と、先程の二〇〇五年の時の名誉教授の方たち、教職では野口先生もご一緒だったと思いますが、そのときの対応を比べると、先程も大西先生のお話もありましたけれども、やはり明治学院が少し変わってきた気がするという印象があります。例えば、最近の出来事ですと出席管理の問題です。色々と事情はあるんでしょうけれども、学生を管理しようというような文部科学省へ明治学院も同調しています。これを見るに、何か明治学院大学が方向を見失っているような、何か普通の大学になってきているような様子が、そこかしこに見られるような感じがするんですね。先程から一九八九―一九九〇年の話を伺って、ますますそういう感が強くなりまして。そこにいる自分が、「じゃあ、どうなんだ」ということを改めて問われるような思いが致しました。

遠藤　学生の管理が、きつくなっているという現場の先生のご感想ですね。播本先生のお立場から言うと、もう答えは明確に「いや、それはいかん」と。

森井　今、やはり私学が大変になってきているでしょ？　だから、僕らの時代とはやはり違って難しい問題があるに決まっていると思っています。ですから、僕には今の明治学院を批判する気は無いんですよ。今を背負ってらっしゃる方たちはね、この現実の中で、それなりに一生懸命考えてらっしゃるんだろうと、僕は思っています。ただ、さっき言った二〇〇五年の名誉教授の有志の声明ね。あれは、もう少し利用できたんじゃないんですかねぇ？　確かにあれに関しては、明学というものに対して、ちょっとガッカリしましたよ。こんな大学になっていいのかな、と。とにかく、これから私学の経営は学院長や、皆さんは大変なんで、それを僕は批判する気は、全然、無いですね。

遠藤　森井先生、ここは歴史を書かなきゃいけないところですので、ちょっと古くなりますが、思い出して頂きたいのは、いわゆる大学紛争、大学闘争の頃、一九六七―六九年あたり、要するに七〇年安保以前の頃のことです。『明治学院一五〇年史』では、やはりそこに触れないといけませんので、この際、先生にもう少し思い出して頂きながら、ご自分のお話を自由にお聞かせ頂けますとありがたいです。

◆七〇年安保以前の明治学院

森井　はい。僕の中には、やっぱり、一九六八年のパリの「五月事件」というのがありますね。五月事件というのは、本当に大きな事件だったと思うんですよ。それで、当時の明治学院の学生たちが、五月事件から何を学んだのかというと、よくわかりません。あまり、ちゃんとは学んでないと思うんですけど。でも、若者からの問いかけ――つまり、五月事件の主張は、一応「我々は、羊でも、共犯者でもありたくない」というものなんですね。自由な人間でありたいという主張です。この問いかけを、どんな形で当時の学生が聞いたかは知りませんが、この問題は「俺たちも考えなきゃいけないな」という思いはあったと思うんですよ。やはり、あの五月事件の影響はすごい。

ルイ一四世が「朕は国家なり」と言ったという話があるでしょ？　それと同じように「ド・ゴールが国家なり」と言われていたんですよ。ところが、それに対して学生たちが「我々一人一人が国家なり」と主張したのが五月事件。つまり、他人に任せず、社会や国家に対し、俺たちが支配される側ではなく、「俺たちが主体なんだ」という主張なんですね。だから、学生も大学に支配されるのではなくて、「俺たちが主体なんだ」という主張をやはり認めろと。当時の明治学院の学生たちがその辺りをどの程度理解してい

たか、僕には分かりません。でも、とにかく立ち上がらなきゃいけないと思ったのではないでしょうか。

当時の僕は、本当に何も分からなくて。実は、あの頃、「新左翼」と「日本共産党」、この区別を知らなかったんですよね。ところが見ていると、新左翼は、共産党の批判をするでしょ？「あれぇ、これ？　どうして？」みたいな。どっちがどっちだか分からない。それほど僕は無知だったんですよ。でも、五月事件のことは多少知っていました。また当時、人間が人間を管理するのではなく、こういう人間をつくってやろうというのでもなくて、人間の主体性を重んずることが大事だということを考えていた時期だったものですから。学生の主張ははっきりしなかったんですけれども、言いたいことは、やはり言ったほうがいい、という気持ちでした。

ただ、学生も何を言っていいのかよく分からなかったんでしょうね。こちらから聞いてみても、よく分かりませんでした。セクトに入っていた者、例えば、あの「革マル」という連中は、本当に日本で革命が起こると思っていました。それは、無理なんだけれども。一般の学生には、そのセクトに入ってしまって、よく分からなくなってしまった者。それから日本共産党関係に入って、それなりに大人の思想の流れを受けていた者。色々いましたが、そういうのに一般の学生が、たくさん加わりました。人間は、自分として、自分を主張しなきゃいけないという思いを、パリ革命から直接学んだのかどうかは分かりませんけれども、どこかから学ぶんですね。あの時代はフランスから焚き上げたものが、世界中に伝わった時代。それがメッチャクチャな形でしたけれども、現れたんじゃないのだろうかと思います。

教師もどうしていいかよく分からなかったんですよ。僕なんか、本当に、分からなかった。だけど、学生は主張することがあれば、主張すべきだと思う。それで、教師はその主張を聞くべきだと思ったんです。

それで、僕もよく聞きました。でも本当に、何を要求しているのか、よく分かりませんでした。ただ、大学が体制側に立って、それに順応する人間をつくろうというのは反対だという主張は分かりました。これには僕も賛成です。僕は戦争を体験してきて、国家権力がどんなに恐ろしいものか、ということを知っていますから。だから、体制を批判するということは、大事なことだと思っていました。そして体制に順応する人間を教育するというのには反対でした。だから和田さんたちが、どの程度考えていたのか、僕には全然分からないけれども、やはり、体制側になっていたんじゃないんですか。学長になるとね、おのずからそうなる。人間というものは、本当に弱いんですから。僕は、先程から偉そうなことを言っていますけれども、あのときに学長だったら、分かりませんよ。自信ありません。それは、学長ともなれば、体制を守る側になりやすいと思うんですよ。

遠藤　ちょっと質問についでに、なぜこういう質問をしたいかというと、今年、定年でお辞めになった真崎先生が、若い頃に濱野一郎や、中山弘正とか、それから法学部の何人かで、若手教員による「若コン」と言われるものをつくっていた人たちがいて、この先生たちは、大学が荒れた時代に教員でありながら、森井先生がおっしゃる意味で学生たちに耳を傾けたと。この方たちが、皆さんもうそろそろ定年でお辞めになられてしまいます。私としては、当時の動きの中で、教員たちがどう見えるかというのを、明治学院の歴史の中でもう一度、見直していいかなと思っています。これについて久世先生、どうぞ。

◆「若コン」

久世　今、話が出た「若コン」の最後の生き残りが私です。私の知っていることをお話すると、紛争が起

きたときの学長は若林龍夫さん、法学部長は和田昌衛さん、文学部長は繁尾久さん、経済学部長は金井信一郎さん、それから、社会学部長の天達忠雄さん、学生部長が村上和男さん。それで、お話のように若林さんや学部長たちもどうしていいかわからなくて、連日、連合教授会でした。本当に連日でした。初めのうちは食事が出たんです。うな重も出ましたね。それが、連日だったもんだから、だんだんレベルが下がってしまいにはもう食事も出なくなりましたけれども。

そういう中で埒があかないというので、若手の我々がグループをつくって、若林さんに対して退陣要求を突きつけたんです。その若林さんを助けて一番力になっていたのが経済学部長の金井信一郎さん。私は、今は亡き工藤先生なんかと、金井信一郎さんにね、もう学部長を辞めなさいって、言いに行ったんです。そうしたら金井さんは「いや、今は学校の危機だから、これはやはり若林学長を助けてがんばる」と言って、こちらの言うことを聞かなかったんです。

ところが、ある日突然金井先生が「経済学部長を辞める」と言い出したんです。「どうしたんですか?」と聞いたら、当時、金井さんのお嬢さんが社会学部の学生でいたんです。ある日、東グラウンドで説明集会をやったことがあるんです。その時金井さんが奮闘したんですが、そこにお嬢さんが来ていて、家に帰ると、お嬢さんに「お父さん、あれは、何? ナンセンス!」と言われたんですって。それで、金井さんがガックリきて。それで、降りたんですよ。そして、金井さんが降りたもんで、若林さんもやってけなくなったんです。

それで、一時期、社会学部の天達さんが学長代行をしたんです。ところが天達さんも体が弱い人だもんだから、結局、和田昌衛さんが学長代行をやった。実は、和田さんは、いきなり学長になったんじゃなく

て、何ヶ月か学長代行をされていたのです。「肌色のヘルメット」なんて。森井先生、覚えてらっしゃいますか？

森井　知っていますよ。

久世　「肌色のヘルメット」って、皆さん、想像つきます？　そして和田さんは、非情に強硬な路線で、（学生を）抑えにかかったんです。

その「若コン」なんですけどね、けっして、いわゆるヘルメット学生に同調したわけではないんです。むしろ、まさに森井先生が言われるように、もっと学生に「立場」というものを真面目に考えなくてはダメだと教えることが目的であって、学生の言いなりになるのとは別だったんですよ。ある朝、「若コン」の連絡網に緊急連絡が入って、朝早く私もこの建物にきました。そしたら、武藤さんと若林さんががんばっていました。そして武藤さんが「ワシが頼んで、機動隊を入れた」と言ったんです。若林さんは横で黙っていました。その辺りから、我々は、若林さんではダメだと言って、退陣要求へ動いていったんです。

先程、播本先生は、当時を、明治学院の一番良い頃のイメージとして見ておられるとお話になりましたけれども、あの頃の明治学院は、酷かったんですよ。当時、応援団にいた体格のいい学生と、大阪の四天王寺高校でラグビーをやっていたというヘルメット学生がインブリー館の前で、バッタリ出会って殴り合いを始めたんです。それが、ちょうど私が学校に出てきたときに始まったんです。それで、目の前で、大男同士がやっているんですけど、私は教員ですから黙っているわけにはいかないから、二人の間に割って入って止めた、ということもありました。今から考えても、だらしないというかね…。

◆繁尾先生の思い出

久世　そうした中でね、執行部で一番しっかりしていたのは、繁尾さんでした。

森井　そうよ！

久世　文学部長の繁尾先生。あの先生は、学部長になった頃、なんと言いますか、比較的、体力的に元気だったんですね。ですから連合教授会をやって、それが終わると、皆さん引上げる。しかし、必ず執行部は誰か残る。繁尾先生が一番よく残って対応していました。例えば、私が頼まれて五反田の駅の近くで、ヘルメット学生のリーダー格に会って、これから先、彼らが何をやろうとしているのか、カマかけたりして聞き出したことがありました。

そうしたらね、彼らがよその学校の学生に頼んで、明治学院に押しかけて、乱入しようという計画を持っていたことがわかったんです。そのときは、夜中でしたけれども、「これは！」と思って、学院に戻ったときに、繁尾さんだけが残っていた。それで、繁尾先生に相談して、対応策を考えようと。結局、翌朝は門を開けないことにしたのを覚えていますけれども。

その当時、フランス文学科に、今はもう定年退職されましたけれども、天沢退二郎さんがいて、天沢氏はヘルメット学生にベッタリくっついちゃった。それで、「教授会は、犯罪者集団だ」とまで、よそで文章を書いたりしたんです。それで、私、橋本茂先生、中山弘正先生の三人で天沢退二郎さんを呼び出しまして、「あなたも教授会のメンバーじゃない？　それでいながら、教授会を犯罪者集団だと言うならば、あなたも犯罪者じゃないか。で、あなたは自分で、犯罪者だと名乗っているわけだから、それだったら、学校をやめなさい」と脅かしてやったんです。現場ではね、そういうこともありました。

当時の先生で、文学部長の繁尾先生と、それからフランス文学科の何人かの若い先生は、印象に残っています。その頃、まだ森井先生は、あんまり表面には出ていらっしゃらなかったですね。フランス文学科主任は、どなたでしたっけ？

森井　木越豊彦さん。木越さんが、ついに逃げちゃったのが一九六九年です。一九六九年の暮れかな？第一期の卒業生を出す直前かなんかに逃げちゃった。それで、僕に押し付けられた。でも、やっぱり繁尾さんは立派ですよ。つまり教員も学生と交渉しなきゃいけないでしょ？　平気でノコノコ行くのは、繁尾さんだけ。つまり、ほんとに殴られるかもしれないし、どんなことが起こるかもしれない。それなのに学生の集団のところへ「平気」な顔してノコノコ行って、しかも、ちゃんと交渉して。つまり、あの人は、相手を人間として扱うことができた人だと、僕は思うのよ。あれは立派だと思う。

遠藤　明治学院には代々、戦前からずっと連なる教員の方々がいらっしゃいます。今回の『明治学院一五〇年史』の枠組みの中には人物史がありますが、そうした先生方は、重要なファクターとなります。当時の混乱の時代に、例えば、私が初めて習った重田信一先生という方は、他者を押しのける意味ではなく、教師として、きちんと責任を負う方でした。この人だけではありませんけれども、そういう教師がいたことは、やはり記録として残す。そういう意味では、いまのお話は、とても頭に残りましたので、質問させて頂いたというわけです。『明治学院一五〇年史』の中に「若コン」が出るかどうかわかりませんが、しかし、確かな動きの中で、重要な役割を果たしたということは、我々としては書かなきゃいけないかなと思います。

久世　繁尾先生の姿を見て感心していたという点で、森井先生と私が一致したというのは、ホッとしまし

た。先程、お話しました金井信一郎さんが、経済学部長を降りて、その後、工藤先生が経済学部長になった。工藤さんもラグビーで鍛えた体力がありますから、学生たちに対して、随分、がんばりましたよ。工藤さんが、グリーン・ホール（当時）の前を歩いていたら、ヘルメット学生に捕まって、そこで糾弾された。彼が経済学部長になって、間もなくのことです。そうしたら、これもまた工藤さんのお嬢さんが、当時、やはり学生でいたんです。そのお嬢さんが、ヘルメット学生に向かって「あんまり、年寄りをいじめないで！」と一喝したんです。で、工藤さんは公衆の面前で、娘に「年寄り」と言われて、喜んでいいのか、悲しんでいいのか、と悩んでいました。

◆明治学院と国際交流

久世　色んな場面がありましたけれども、特に繁尾先生は、その紛争が終わった後、国際交流担当の副学長にもなりました。福田垂穂さんの後任です。それで、繁尾さんが国際交流担当の副学長のとき、ちょうどテネシーの学校をつくったんです。グランド・オープニングのとき、繁尾さんは、テネシーまで行ってくれたんです。私も、平出さんに頼まれて、創立委員になっていましたから、それで行ったんですよ。そこで、あちらの人とお付き合いをしていても、繁尾先生は立派なもんでした。ですから、繁尾先生がわりと早く亡くなられたのは、残念なことだと思います。

国際交流については、繁尾さんの後を新倉さんが引き継いで二年担当されました。ですから、国際学部との関係で、国際交流というお話ありましたけれども、国際交流センターは、森井先生の学長時代におつくりになったんじゃないですか？

森井　あとじゃないのかな、国際交流センターっていうんで、できたのは。よく覚えてないですね。

久世　これは、調べればわかることですけれども、でも、国際交流センターができて、先程、お話があったようにテネシーとか、色んな学校と交流がどんどん発展していって、これは、今や明治学院の特色の一つとなっています。

大西　UCが大きかったのではないですか？　カリフォルニア大学から三人も留学生が来るということで体制が整ってきたのではなかったですか？

久世　いや、むしろある程度、明治学院の国際交流の体制ができてきたので、それで国際学部の先生方が努力して、UCとの関わりができました。確かにUCとの関わりは、国際学部あっての話でした。横浜に国際学部の事務所があってUCとの関係はそこがやっていたんですね。そして白金にはすでに国際交流センターができていました。ちょっと、二本立てになっていたんですね。

実を言いますと、新倉さんの後、一九九六―九七年と国際交流担当の副学長を私がやったんです。その時にUCを国際学部だけのものではなくて、全学的なものにしようということで、国際学部と色々話をして、その時の国際学部長が宗教専門の阿満利磨さん。阿満さんと私でやりとりして、体制を整えていったんです。ですから、UCとの関わりが出てきたのは一九九〇年代の前半ぐらいだったと思います。

◆その他の質問

遠藤　ありがとうございます。まだ、発言してらっしゃらない先生方も、ぜひ、どうぞ。渡辺祐子さん、いかがですか？

渡辺　平出学院長の大学構想の中で、明治学院の大学の使命というのは何かということを平出学院長は三つ程あげられていたとお話になっておられました。その中で、「他の真似はしない」と、言っていたという事を私はとても印象深く伺いました。今の明治学院は、なんとなく、様子を見ながら、どっちの方向へ進むかと、決めている感じがするものですから。もちろん、色んな条件、環境も変わってきていますし、色々あるんですけれども、「他の真似はしない」という明治学院の筋が通ったところを、引き継いでいけたらと思いました。それから、二〇〇五年の「九条」の問題とも絡むんですけれども、私は、昨年の『教育基本法』改正・改悪のときに、結構、国会に行き、一人で、ものすごく憤慨していたんです。それで、あのとき、恵泉女学園大学は学長声明を出し、全学をあげて反対声明をきちんと出しているわけです。ところが、明治学院の場合は、有志はなさっていましたけれども、そういう動きはほとんどありませんでした。そうした中で勝俣先生は、やるべきだっておっしゃっていたと思います。私もそこは「どうしてやらなかったのかな」という思いが今でも残っているところです。

森井　いや、本当にひどいですよね？　あの『教育基本法』の改正なんてのはね？　だって、我々は戦争でね、「人間が、こんなに狂っていいのか？」という体験をしたわけです。人間をこれだけ抹殺できるほど人間は狂ったんですよ。その狂気からの脱出が、『教育基本法』であり、戦後なんですからね。それをまた否定するということは、また「狂気」に戻るのかってことですからね。本当に改正はすべきでないと、僕は思います。この歳で、怒ってんのよ。

遠藤　若い辻さん、いかがですか。

辻　私も、今日、森井先生のお話を伺うにあたって、家にあった本を少し色々片付けていたら、たまたま

森井先生と弓削先生の本を見つけまして。この本を入学する前のときに読んで、こういう精神が明治学院には生きているんだというのを、すごく感動しながら入学したのを覚えています。

私が、国際学部に在学したのは一九九三―一九九五年です。先生は、すでに一九九〇年に学長をお辞めになっていましたので、その後に習ったんです。当時は福田先生が学長で、武者小路先生もお元気でしたし、西川先生なんかも、教えに来られていたし、そういう意味では、まさに国際学部の最初の理念が生きている時代に、僕はそこに何年か、学生としていたんです。ですから、今日は、森井先生が先程おっしゃった理念があったということを改めて知ってすごく感動しました。そういう精神が、今、まだ生きているのかどうかは、最近、国際学部との関わりがないので、ちょっとわからないんですけれども、そういう理念を持って教育するということが、やはり大切だと思いました。私も「キリスト教主義教育とは、どういうことなのか？」ということを、すごく考えていたんですけれども、先生のお考えがよくわかりましたので、本当に有意義でした。

遠藤　丸山さんはいかがですか。

丸山　今のお話を聞きましてね、やはり昭和天皇が亡くなったときと、大嘗祭にね、明治学院がすごく世の中に取り上げられて、とにかく新聞にも出ましたね？　ですから、明学のあの時代のエピソードというのは、社会的に取り上げられたし、明治学院のキリスト教主義者の気持ちをよく表していると思います。

遠藤　森井先生、今日は長い間、お話をしてくださり、ありがとうございました。ただ、これでお終いではなくて、私どもが編集していく段階で、また色々とお手紙やお電話をするかもしれませんが、そのときは、色々とお教えください。よろしくお願い致します。それでは、ここで、一旦、終わらせて頂きます。

森井先生、今日はお忙しい中、本当にありがとうございました。

森井　どういたしまして。ろくな話もできませんでした。

【会の後で】

森井　西川君はね、本当は専任で来てくれるはずだったんですよ。ところがね、僕が辞めちゃってから、あの人、杉並かどこかに住んでるでしょ？　非常勤で横浜校舎まで通ってくれたんだよ。残念ながら、専任にはなってもらえなかったけど。それは、一つは、早稲田との関係でね。早稲田も大事な仕事でしたから、これは良いんだけれども。でも、今、高原孝生さん、それから、平和研の所長やっているアフリカ研究の勝俣誠さん、ちゃんとしているじゃないですか。ねえ？　僕、いや実は今日、国際学部ができる頃の話をしろと言われて、この間、あの連中と付き合ったんですよ。それで、高原孝生さんなんて久しぶりに会って、ちっとも変わってない。ちゃーんとしているの。それから勝俣さんは僕が動けなかった時で家に訪ねて来てくれて。立派だった。ああいう人たちがいれば大丈夫ですよ、国際学部は。

久世　先程、先生の国際学部をつくるときの話がありましたけれども、坂本義和さんは、いつお呼びしたのでしょうか？

森井　彼が東大を定年になってから、呼んできたの。坂本さんにも、平出君と二人で本郷に訪ねて行ってね、それで彼と会って「こういう学部なんだ」ということを話した。そしたら、「じゃあ、行く」と。

久世　でも、それは、初めからじゃなくて、ちょっと経ってから？

森井　そうですよ。彼はまさに初めから、来て欲しい方でした。だけど、東大の、やはり柱だから、ちょっ

とね。でも、早速、声かけた。だけど、逃げられちゃった。なぜか、ご存知？　あのね、国際学部は坂本さんを学部長に任命しようとしたの。すると、東大法学部というのは、選挙に選ばれたら、引き受けるか、職をやめるか、どっちかになっているそうです。辞職するか、引き受けるか。それで、彼は、学部長は、ちょっと無理だった。でもね、彼は、立派な人だったもの。

久世　それから、宮崎義一さんもいらっしゃいましたね？

森井　そう、そう。

渡辺　それと、いま、広島の平和研の所長の浅井基文先生も。

森井　ああ、そうね。

久世　でも浅井さんは、ちょっと後だったかな？　初めからというわけではなく。

渡辺　ああ、そうですか。

久世　私は学部長になる前に、色んな学内の委員会で、国際学部の方とお付き合いする機会があったんですけれども、特に親しくなったのは、豊田さん。

森井　ああ、豊田さん！　豊田さんは「平和を生むってのいいですねぇ」と言って、それで来てくださった。言い方は大袈裟だけれども、「平和を守る」じゃなくて「平和を生む」というのがいいですね、と。それ、聖書の言葉なんだよね。

久世　学部長のとき、ちょっとだけお付き合いしたのが、深作さん。深作さんと学部長会のとき、一年だけお付き合いしました。

森井　深作さん！　良い人でしたねぇ。

森井　少し、お役にたちましたか？

遠藤　もう、ありがとうございました。

久世　特に私は、自分の経験があるから、ずいぶん、思い出しちゃった。

遠藤　わからないことがありましたら、ご連絡させて頂くかと思います。その際は、何卒、よろしくお願い致します。あと五年間で、一冊作んなきゃいけない。みんな青い顔しているんですよ。

森井　どうぞ、どうぞ。

久世　森井先生、全然衰えていらっしゃらない。

森井　ボクぅ？　酷いのよ。もう、ねえ。

久世　これからもお元気でいてください。

森井　もう、今日、「生きている」ことが、可笑しくてしょうがないの。

久世　久しぶりに「森井節」を楽しませて頂きました。

金井信一郎　回顧談――戦前戦後の自分史

二〇〇七年一一月三日

遠藤　今日は『明治学院一五〇年史』の編纂にあたって、金井信一郎先生が大学の学長であられた、あるいは学部長であった、あるいは一教授であった、あるいはもう少し前に戻りますと、採用の時は助手ないし専任講師であった。今日は、さらにもっと前まで遡ったところから、先生にお話を伺いたいと思います。その「どこから」ということで、私どもキリスト教に縁のある者から申し上げますと、「金井」と言えば、どうしても「金井為一郎」という神学者の名前が思い当たります。先生は、そのお子さんでいらっしゃるということで、お父様や家庭的なお育ちの環境についてお話しして頂くところからはじめて、だんだんと大学の話に持ってゆきたいと思います。どうぞご自由にそのあたりを思い出していただきお話をお願いいたします。

金井　はい。ではそのことからお話を始めますが、私は大正六年、西暦で言いますと一九一七年七月一日に、父、金井為一郎、母、金井美賀の長男として、甲府市で生まれました。

父は、甲府の山梨教会の牧師でしたけれども、私が生まれてから間もなく、二年位して、東京の市ヶ谷教会（現、日本基督教団池袋西教会）、これは植村正久先生が建てた伝道所が後に教会になったんですが、この日本基督教会の市ヶ谷教会[1]の牧師に就任するんです。

ですから、私自身は甲府で生まれましたけれども、赤ん坊の時ですから甲府の時の記憶は全然ありません。市ヶ谷教会のすぐそばの牧師館で育ちました。洗礼は幼児洗礼ですね。その日取りは覚えていませんけれども、赤ん坊の時でしょう。そして、東京府立第四中学校（現、戸山高校）三年生のクリスマスの時に信仰告白をしまして、正式に教会員になったというわけです。

遠藤　その後は、学歴でいうと、高校、大学となるわけですが。

金井　ええ、中学は四中ですけれども、私は優秀な生徒ではなかったと思うんですよ。まあ、中のちょっと上位だったでしょうかね。四年の時に仙台の第二高等学校[2]を受験したんですよ。落ちました。それから、五年の時に再度受けたけれど、また落ちた。それで、一年、浪人をするわけです。浪人の間はですね、四中に補習科というのがありましてね、そこに一年、行って学びました。四中の補習科と言ったら、これは大変、進学率が良いんです。そこで一年勉強したものですから、一浪して受けて、二高の文科後期に合格したんです。それは、昭和一一年四月ですね。

遠藤　二高の頃で、何か思い出になるようなことはございますか？

金井　二高の頃はね、第一年次は、全寮制度なんです。つまり、学校が公認した寮に一年間は起居しなきゃいけない。二高の一番大きな寮は「明善寮」[3]と言ったんですが、そのほかにキリスト教関係の寮が、「忠愛ノ友倶楽部」という名を最初つけてたんですけども、後に「忠愛寮」というふうにした。それから仏教にも公認の寮、「道交寮」がありました。そのほか「武道寮」というのがあってね、これは柔道か、剣道か、弓道の部に入っている者は、そこに入れるんです。いずれかの公認の寮に一年だけは起居しなければならないというルールがありまして、私は「基督教青年會」の寮である「忠愛寮」に一年に入りました。

そして、ついに三年まで、この「忠愛寮」におりました。これは小さな寮でしてね、大体二〇名から二〇数名ですね。

遠藤　その頃の同級生か、先輩後輩で、我々の知っているような人物はいらっしゃいますか？

金井　そうですね。「忠愛寮」で、私より一年先に入っていた方で、根本正さん。この方は、二高の時に文芸部と言うかな、小説なんかを書くような部がありましてね、なかなか文章をよくした人で、小説なんかをよく書いてね、機関紙に載せていました。他に、大島敬義さん、渡辺清縄さんがいました。

遠藤　先生は、何かそういうものを、当時お書きになったとか、投稿するとか…

金井　書いたものはありましたが、もうほとんど残っていません。私は「忠愛寮」で、一年生の時は役員になりませんが、二年生以降、その役員の一人になりましてね。庶務幹事、会計幹事、炊事幹事とありまして、私は確か会計幹事を一年間やったと思うんですね。

遠藤　仙台にいらした時、教会は？

金井　仙台の教会はね、最初は、東北学院日本基督教伝道教会と言ってましたが、この教会は後に二回名前を変えまして、まず仙台南六軒丁教会と改称し、その後さらに仙台広瀬河畔教会となりました。今でも、そう言ってます。その教会に行ってました。

遠藤　先生は、大学も、当時の東北帝国大学ですか？　そうすると、仙台暮らしが続くんですか？

金井　そうですね。ざっくばらんに申しますとね、高等学校に入った時、文科の学生というのは、やっぱり、みんな東大を一番望むんだよね。みんな、東大に行きたがる。

私も家が東京にあったものだから、家の負担も考えますと東京大学に入りたいと思って、受験したんで

す。でも、落ちたの。長い英文の問題が二問出た。しかし、それに失敗したんだよね。出来たつもりだったんだけれども、英文の問題だけですから、それで落ちた。でも一浪するのは嫌だと思って、仙台の東北大学の法文学部の第二次試験を受けて入ったんです。法文学部ではね、九州大学でもそうでしたが、文科、法科、経済科、この三つの科があった。私は、最初、法科に入ったんです。

ところがね、法科に入るとみんな、もう六法全書と首っ引きの勉強をやるんですね。つまり今日で言えば、国家公務員上級試験を受けるための準備なんだよね。それを見てて、私、嫌になってね。大学に入ってまでも、受験勉強するつもりはないと。法科に入って、非常に悩みまして。それで、一年たった時に、法文学部の中の法科から、経済科に移ったんです。転科願いというのを出したんです。もう少し、大学にふさわしい勉強というか、学問をやりたかった。法科は、法令覚えて、受験勉強ばっかりでしょう？　それで嫌になっちゃって、転科しまして、二〜三年次は経済科で学んだんです。それで、非常に経済学に興味を持ちました。

遠藤　先生のいわゆる経済学者としての素地になる、大学時代の学問なり、あるいは、先生の思想形成とか、ちょっとそのあたりをお話頂けますか？

金井　そうですね。経済科の主な先生は、「経済原論」の和田佐一郎先生。あと有名な先生が一人いまして、「社会政策」の服部英太郎先生、それから東京から出張で「憲法」の講義に来ておられた講師の宮沢俊義先生、こうした授業は興味深く聞きましたね。それからもう一人、「農業政策」の木下彰先生、この先生が、まだ若い助教授だったんですがね、この先生のゼミが良い。それで、一生懸命、農業経済を勉強したんです。

遠藤　例えば、賀川豊彦の思想と、先生の思想は、どこかで共鳴しあっているのかなと思うんですね。それで先生は、生協の方にも関わられましたよね？　そういうところと経済学は、当然、賀川の中にも経済学はありますし、そのあたりは、先生の中で、どういう風になりますか？

金井　そうですね。まず、賀川先生と親しかったということは、賀川先生が明治学院の出身者ですしね。しかし学生の頃は、ほとんど賀川先生のお話を聞いたことがないのですが、私が明治学院に講師として職を奉じた時以降、よくお会いしたし、賀川先生は明治学院大学ができた当初、教授として、「協同組合論」と「経済心理学」という、二つの講義を持っていらしたんです。

遠藤　その二つとも言ってみれば、経済学ですよね？　で、先生は、経済学者でいらっしゃるから、専門が近いわけですよね？

金井　近いですね。私は、「社会政策」と「農業政策」に力を入れたんです。ですから「社会政策」は、服部英太郎先生。服部英太郎先生からは、もう一つ科目を聴いた。それはね、「社会運動史」。「社会政策」と「社会運動史」を服部先生から教えて頂いた。ですから、非常に興味を持った。それからもう一つは、木下彰先生の「農業政策」です。どうしてかって言うと、木下先生のゼミに入ったからね、農業経済学を一生懸命、学ぶようになったんですね。

遠藤　東北大学では、卒業論文に何をお書きになったんですか？

金井　卒業論文は、木下先生のゼミで、書きましたので、確か…「満州の農業」の問題についてですね。満州農業、つまり広域の大農方式に関する研究です。

遠藤　それは昭和何年になるんですか？

金井　経済科には、昭和一四年四月から昭和一六年一二月までおりましたから、卒業論文は昭和一六年一二月に提出です。

遠藤　卒業後は、どうなさったんですか？

金井　それからね、軍隊に取られちゃったの。昭和一六年一二月に、繰り上げ卒業。「最初の」繰り上げ卒業です。昭和一七年三月に卒業予定の者が、その前年の一二月半ばに卒業したんです。最初の「繰り上げ」組です。そして、一二月に就職試験を受けるんです。私はやっぱりこの頃から、だんだん「興亜思想」というか、「日本の将来は、満州にあり」と。当時の政府は、なんか国策的なスローガンを持っていましたので、私も農業経済をやり、ことに満州や北海道の大農を研究していたもんですからね、満州に行きたいと思いました。そして、満鉄[4]を受けるんです。そして受かったんです。ところが、勤めないんです。受かったと同時に軍隊に入ったんです。満鉄には入ったけれども、休職という形で、昭和一七年二月一日に軍隊に入りました。

遠藤　先生は、軍隊生活は何年ですか？　戦地はどちらですか？

金井　軍隊生活は、長いですよ。昭和一七年二月一日から、戦争が終わった翌年までですから、昭和二一年六月までです。戦地は中国です。その頃は「中支」と言って、「中支」の戦線で、その警備部隊に配属になった。第一作戦進行部隊ではなくて、分散して広範囲を警備する。そういう警備部隊に配属になりまして、最初は、上海の揚子江の対岸地域の山廠（さんしょう）、その地域の警備です。ただしね、山廠にはそう長くいませんでした。「中支」に派遣された我々の部隊の一番大きな師団は、徐州にあった。山廠に配属になって、その年の内にその徐州の師団司令部で、前線の部隊に受け入れる少年兵、補充兵、これを教育する任にあ

たり、三ヶ月ほど初年兵教育をやりました。それから転属命令が出てね、それは揚子江を船でずっと上りまして、武漢三鎮の武昌から岳州（現、岳陽）とか、漢寧、桂林の方へ出ている越漢線という鉄道が出ているんですが、その沿線の警備に当るようになったんです。ここが一番長くいたところです。大きな作戦はなかったんですが、小競り合いのような、小さな作戦はしょっちゅうありました。

遠藤　では、結構、命が危ない時とかありましたか？

金井　危ない時があったの！　それについては『私の戦時体験』という書いたものがありますから、今度、持ってきます。九死に一生を得た話もある。ほとんどもう死んでおった。警備部隊というのは、要は手薄ですからね、油断大敵なんです。うっかり変なところへ行くと、敵が潜んでいて、急にやられるなんてことが起こるんです。そのことの顛末をまとめた文章がありますので、これはお送りします。

遠藤　先生は、しばらく中国で抑留体験をなさったんですか？

金井　ええ、昭和二〇年に終戦になってからね、翌二一年の六月まで。蒋介石の統治下の前線で捕虜になったんだけれども、広い大陸ですから、ある日武昌の地域に囲われたところで揚子江を下る船を待っていたんです。そして、揚子江を上海まで下って、汽船がないもんだから帆前船、つまり木造船で半月位かかったな。昼間は船頭が帆を揚げて漕いで下るんですけども、夕方になると揚子江の川岸に舟をつけて、そこへあがってテントを張って露営するわけです。のんびりしていて、楽しい体験だったのを覚えています。

遠藤　ここからは先生が帰国なさった先を詳しくお願いできますか？　結局、明治学院との関係は、どんなきっかけでできるんですか？

金井　要するに、戦争にも行ってましたし、向こうで終戦をむかえて蒋介石に降伏したので、私が帰って

きましたのは昭和二一年の六月です。もう、就職口がないです。何にもない。ところが私は、軍隊を入る前に一人の女性と婚約をしておりました。そういうことを部隊長に言いましたら、本当に我々はいつ死ぬかわからないから、とりあえず結婚しろと。軍隊で、御講で、公の初年兵受領に日本へ一時帰った時に、婚約していた先妻の女性と結婚しました。またすぐ戦地に戻った。本当はそれは批判されるんですね、まだ生きて帰れるかどうかわからないのに結婚はどうかと。でも、部隊長は結婚してこいって、こういう命令だから。

遠藤　戦後は、その奥様のもとにお帰りになるんですか？

金井　戦後はねぇ、ずっと一緒に住んでおりました。先妻の父親は、北大医学部の内科主任教授で有馬英二と言いました。先妻は、その娘で三女です。軍隊から帰ってきて最初に住んだのは東京の牛込なんですけれども、それからすぐ家内の実家がある札幌へ行きまして、ご両親にご挨拶して、しばらくお世話になりました。もう、その時長女ができていました。

遠藤　先生は、昭和二三年に明治学院の専門学校時代の教授で、昭和二四年に新制大学となり、そのまま移籍というか、残られるわけで、その前後、明治学院とのつながりはどのような感じでしょうか？

金井　昭和二三年四月に明治学院専門学校の教授にいきなり任命されたんだよね。私の父、金井為一郎と富田満[3]は親しい友人関係にあった。富田満は日本基督教団の統理だった。富田先生は明治学院の理事長をしておったので、父が、息子を明治学院で採用してくれないかと頼んだようです。

遠藤　金井為一郎さんは、日本聖書神学校の校長でしたか？

金井　ええ、初代校長です。まだその時は校長じゃなかったかな。でも、まあ、富田先生とうちの父は親

しかった。そしたら、すぐ富田先生の命令で、その時の教務部長の齊藤茂夫先生のところに話が行って、それから私を採用してくださったんですね。

遠藤　それで、大学の専任になられてからの先生のお話を伺うんですが、思い出で、大事なところや面白いところは後でしょうから、その前のところの明治学院の教員生活で、何か思い出を少しお話頂けないでしょうか？

金井　これは、大いにあるんです。まず、いきなり明治学院の専門学校の教授に、パッと任命されるんですね。ところが、その翌年の昭和二四年に新制大学の明治学院大学ができました。文経学部の一学部です。その中に英文学科と、経済学科と、社会学科と。これが後に二つの学部になりますけれどね。それで私は専門学校の時は教授なんだけども、新制大学が認可された時には、文経学部の助手なんです。専門学校は教授であり、大学は助手なんです。厳しい審査があるからね。戦地から帰ってきて、業績もないですしね。だから、助手なんです。

遠藤　先生は、何を教えられたんですか？

金井　最初から「社会政策」「社会思想史」です。昭和二三年四月に明治学院の専門学校の教授になった時から「社会政策」と「社会思想史」を一貫して担当しました。昭和二四年に明治学院の新制大学ができた後も、しばらく専門学校は続くんです。同じ敷地の中で、専門学校の学生と大学生が一緒にいる時期があったんです。昭和二七年に専門学校がなくなるまで、私は、大学の文経学部の助手と、専門学校の教授を兼ねておりました。

遠藤　先生の「社会政策」と「社会思想史」の学風というか、先生のお考えと言いましょうか、学者とし

ての先生のご自分の研究の中身を、少しお話頂けますでしょうか。専門的な内容は、我々にはわかりませんが、学者としての「金井信一郎先生」を少し我々にもわかるように、ここで語って頂きたいのですが。

金井　私は、昭和二四年四月から昭和二五年三月までが、明治学院大学の助手なんです。それから、昭和二五年四月から三〇年三月まで、明治学院大学文経学部・経済学部の専任講師です。[6] その時に担当した科目は、「社会政策」と「労働問題」でした。これも服部先生のゼミを東北大学で受けたから、そういう担当になるわけですね。

遠藤　先生の学問は、経済、あるいは政策という分野では、一つのお立場を持ってらっしゃいますね。

金井　私の恩師の服部英太郎先生は、マルクス経済学者なんですね。私もやはりそれに影響を受け、感化を受けたけれども、私は、根っからのクリスチャンですから、マルクスと世界観を同じくするわけではありませんので、色々批判を持っていました。

ところが、（明治学院）大学の専任講師になってから、アメリカのウィスコンシン大学[7]の大学院に留学をする機会を与えられたんです。最初は一年という約束でね。明治学院は、アメリカの改革派教会と長老教会の二つの教派教会と関係があって、二つの教派から宣教師がきていた。それで留学のスポンサーは、明治学院と深い関係にあるアメリカのリフォームド教会、改革派教会でした。改革派教会から明治学院にL・J・シェーファーという宣教師がきていて、このシェーファーさんが、私の専門を非常に興味を持って考えられたんですね。「労働問題」とか「社会政策」とかは、今後、非常に大事だと。だから、その勉強をするためにスカラシップを出すから、一年という約束で留学をしたらどうか、と。

それで調べたところ、アメリカの大学で「労働問題」や「社会政策」や「労働運動史」に非常に造詣の

深い大学はウィスコンシン大学で、そこではJ・R・コモンズという有名な教授が、ウィスコンシン学派というのを作る頃の制度学派的な考え方を持った先生だったんです。それに大変、魅力を覚えまして、ウィスコンシン大学を志望いたしまして、最初一年という約束で留学許可をもらいました。

ところが一年たっても、語学のハンデがあるでしょう？　六週間に一回試験があるんだけども、ほとんどできない。一年たっても、十分な科目の単位も取れませんし、もう一年、どうしてもやらなきゃならないと思って、改革派教会のシェーファー先生に願い出たんです。もう一年留学を延長させて頂きたいと。それが聞き入れられまして、二年目もまたスカラシップを出して下さったんです。そして、二年目の終わりに、マスターの試験に合格したんです。マスターの試験の中心のものは、「労働運動史」、それから「社会保障」「社会政策」でしたね。

遠藤　そのあたりの学問は、先生の一生の研究の一番の基礎ができた時期なんでしょうか？　例えば、日本の労働運動や労働政策の中で、先生のお考えなり、お立場なりが、だんだん明確になってゆく。社会的にも「金井先生」というお名前は、そういう風な一つの評価を色んな角度から伺えるようになりますね。

金井　大変、それは大事な質問だと思うんです。私は東北大学で、「社会政策」や「社会運動史」を服部英太郎教授から教わったんです。ところが服部先生は、完全なマルキストです。マルクス経済学者です。私の頭の中にもその方法論は入ってきていたんですが、やはり元来、クリスチャンなものですから、どこかに違和感を覚えるんですね。

明治学院大学の時代になってから数名の助手グループが『資本論』研究会をやろうと『資本論』の読書会をやったこともありますけど、みんな『資本論』に傾倒したわけではないんだよね。これは大事だから

研究しようって。私も研究したんですけどね。その頃からね、服部先生の方法論に、そのままついてゆくことはできないと。

ウィスコンシン大学に留学した時に、もっと新しい経済学を学びたいと思って、経済理論の面では、「近経」というのに初めて接するんです。マーシャルとか、ケインズとか、初めてそういう流れをくむ近代経済学を学ぶようになるんです。それからウィスコンシン大学は「制度学派」っていう学派に属しているんです。主な先生がそうなんです。

「制度学派」は、“Institutional School”の訳語です。経済とか、社会運動とか、組合運動とかいうものを捉える場合に、社会と組織というものを累積的な進展の中から捉えなきゃならんというわけで、単なる階級間じゃないんですね。「制度学派」の思想が非常に強いのがウィスコンシン大学で、コモンズ先生がその中心なんです。これが、ウィスコンシン大学の労働問題に関わる中心的な教授ですね。

遠藤　先生は「制度学派」の影響を受けて、帰国後、研究なり様々な実践と関わりをお持ちになってくる、その基本となるのが今のそのお話になるわけですね。

金井　そうですね。初めてアメリカに行った時、経済学で「近経」というものを聞きましたよ。近代経済学。数式やグラフなんかを使う。その理論に関しては深入りしませんけども、マルクスを克服するためにはこういう見方もあるなと考えましたね。いつの間にか、マルクス理論から離れていった。経済理論は、どちらかというと私は「近経」の立場に立つんですけれど、労働問題や労働運動の歴史を研究する場合に、非常に実証的な「制度学派」的な方法論というものを使って研究する。

遠藤　「いつの間にか」とおっしゃいましたけれども、一見、近づかれるのと同時に、マルクスとキリス

ト教、そのあたりの先生の中での思想に葛藤はあったのでしょうか？

金井　ありました。やっぱりね、私の中にキリスト教信仰があるものですから、マルクスの唯物論と唯物史観というものに、そのまま与するわけにはいかない。方法としては、ひとつの方法論でしょうけども、自分の世界観と、マルクスの考えはマッチしないと思いました。そこに「近経」というものを初めて学ぶようになるわけ。それから「制度学派」的な、実証的な研究を、労働問題や社会政策についてやるようになる。で、いつの間にか、方法論的にはマルクスから離れてゆくんですね。

遠藤　先生はやがて学部長になられて、学長になられる。いわゆる明治学院におけるキリスト教育の責任者になられてゆくわけです。要するに、マルクスとキリスト教というのが、どこかで融和し、ひとつの教育理論となったのでしょうか？

金井　マルクスの方法論としてはね、相対的な実行性というのは考えられるね。マルクスの方法論というのは、そのまま彼の思想と結びついているわけ。革命論、資本主義崩壊、そして共産革命の理論と結びついてゆくでしょう？　その部分が私はついてゆけないものだから。そういう意味では、アメリカの「制度学派」的な、実証的な、それから経済理論については、「近経」というものを採り入れたものの考え方になっていった。

遠藤　先生のお考えと、賀川豊彦先生の経済思想とは、つかず離れずですか？

金井　そうですね。賀川先生とはピッタリ一緒じゃないですね。

遠藤　先生は、生協活動を通して、賀川先生とは近づいてゆくんですか？

金井　近づいてゆきます。私が明治学院大学に奉職をした頃、賀川先生は教授でした。といっても先生は

選挙活動や社会事業などでお忙しい方でしたから、そうたくさんの持ち時間はもってなかったけれども、明治学院では「経済心理学」「協同組合論」を担当しておられました。それには傾聴すべきものがあると思いましたね。

遠藤　賀川先生とは、必ずしもそこで一緒というわけではないんですね？

金井　バッチリ一緒というわけでないけれども、賀川先生の思想を理解できましたね。

遠藤　賀川先生の考え方を継承したという形ではなさそうですね？

金井　「継承」はちょっと言い過ぎかもしれませんね。でも、影響を受けたね。

遠藤　今度は先生が学長になるあたりの、先生が一番苦労なさって、ある意味では明治学院にこれだけは言っておきたいというようなことと、色んな意味でご苦労なさった経験がありますね、そのあたりの話に移りたいと思います。

金井　私は昭和三七年四月に明治学院大学経済学部教授になっておりまして、その四年後の昭和四一年四月に経済学部長になります。同年四月に大学院経済学研究科ができて、「社会政策特論」というのを教えました。それから昭和四三年四月に、特論のほかに「演習」も担当しました。学園紛争が激しくなる前です。

私の前任者は和田昌衛学長ですから、この方の時からすでに大変でした。和田昌衛学長の前の若林龍夫学長の時からもう始まっていました。というわけで、もう紛争が始まっていましたから、学長のなり手がいないというような状態で、和田さん、その時若かったけれど手を挙げて、「私なら学長やります」と言ったの。自分で自薦をしたのね。そしたら、やって欲しいということになってね。

これが一番大変な時期なの。紛争が始まっていた時期ですから。和田さんが学長になった時、昭和四九年二月から三月の二ヶ月間、私は和田さんの「学長補佐」という職務を与えられました。そして、昭和四九年四月から学長になるわけです。そして、昭和五三年三月までの四年間、学長ならびに大学院の委員長になりました。

遠藤　その頃は、今、思い出して、色々なことがあったと思います。どのようなことがありましたか？

金井　ええ、色々ありました。私は、学長に就任するや早々、過激学生の大変な妨害を受けます。チャペルで入学式があるでしょ？　そこへ行ってみたらね、新入生が全部集まって、その父兄が集まっていましたが、その演壇をヘルメット学生が占拠しているんです。彼らがいたら式ができないので、「やめてくれ、どいてくれ」と言ったら、むこうはどかないんです。

チャペルの中の新入生や父兄たちが騒然と騒ぎ出して、「お前たちの話を聞きに来たんじゃない！　出てゆけ！」と、声が上がったんです。そしたら、彼らがいたたまれなくなって、そのまま退場したんです。それから私が式を始めたんです。学部ごとに入学式はありました。どれも、ヘルメット学生が最初は占領した。最初はいざこざがあった。そのうち新入生や父兄が騒ぎ出す。で、彼らはいたたまれなくなって、出てゆく。その時の私への捨てぜりふが、「大衆団交に出て来るか？」で、私は「それは条件による」と、曖昧に言ったんです。ともかく、いずれの学部も入学式はできました。まあ、幕開けの時から、大変な状態だったんですね。それからまだ続くわけですね。

遠藤　対学生対策でご苦労なさった話を少し伺って、その後に大学の経営上の難しさのようなことが多分色々おありになって、そのあたりの話を、ぜひお聞きしたいです。土地や建物、拡張など、大学では色ん

な問題が起こってきます。先生は立場上、責任者の立場にありましたから、そのあたりのお話をお願いいたします。

金井　大学の財産とか土地の問題は、大学の学長よりも、学院長の課題になります。当時の学院長は、武藤富男（当時、キリスト教新聞社社長）先生です。武藤さんは、なかなか能力のある方でして。東村山に高等学校の敷地を買われたのも、武藤先生です。武藤先生が、財産とか運営とか、経済的な経営に関しては大変敏腕を振るわれましたね。

遠藤　では、学長としてのご苦労といいますと、財政というよりは、教育の部分でしょうか？

金井　ええ、教育です。というのはね、私が学長を務めた昭和四九年四月から昭和五三年三月までの四年間、実は学院に学院長はおりませんでした。私は学長と「学院長代行」を兼ねた形でした。ところが、公に「学院長代行」と出すと過激学生の集中攻撃が強まると伺いまして、私の立場を考慮して、学部長クラスの人々が「学院長代行」というのを外に出さないと。だから、私の四年間は「学院長」が表向きには無いという状態が続いたんです。これは特異な時ですね。

遠藤　先生の学長時代には、学生運動はおさまっていたんでしょうか？

金井　まだ残っていました。和田学長の後も。私が学長に就任して間もなく、入学式のこともありましたが、色々、過激学生による違法行為がありました。校舎の占領とか、授業妨害、試験妨害、これがしょっちゅうです。

遠藤　先生個人として、危険を感じたことはありますか？

金井　ありますね。学長は狙われるわけです。学長を吊るし上げる座に何回か呼ばれましたよ。そのグリー

ンホールの前で。

遠藤　どのようなやりとりが行われたのでしょう？

金井　そりゃもう、無茶苦茶ですよ。むこうは話し合いなんてもんじゃないですよ。むこうは、「どうするか？」「こうするか？」という論調で、こちらは「ノー、ノー」。もう対立あるのみ。協調的な話し合いじゃない。ひどかったですね。で、その時に、これはインフォーマルなことですが、私は、体育会の合気道部の部長をかなり長い間やっていたんです。だから、私が過激学生に捕まって吊るし上げを受けている時に、合気道部の学生が遠巻きに見ておって、いざ私の体に手を出すような、あるいは暴力を振るうようなことがあったら、実力でもってそれを排除するという構えをしていました。それは、先輩から、現役の部員に密かに命令されていたんです。実際には大事には至りませんでしたが。

遠藤　それは良かったですね。それでは、本来の明治学院は「こう、あるべき」、あるいは「こう、なって欲しい」といった先生のお考えを踏まえて、今後の同僚、職員、後輩、教え子を含めた私どもへ、何か伺えたらと思います。

金井　どうしても言わなきゃいけないことと言えば、昭和二四年から始まった明治学院大学で、私は助手でした。その時、ほかにも助手がたくさんいたんです。一〇人ぐらい。「助手グループ」と呼んでいました。記憶でゆくと、一番近いところにいたのが、工藤英一、磯部浩一、それから大西亨邦君、佐々木淳寿君、それから、阿部志郎さん…。大山正春先生は、もう教授でしたね…加藤七郎先生は事務局長で、教授でした。平出宣道（後年、学長、学院長に任じられる。）さんは、私たちが助手の時、もう専任講師でした。というのも、彼は戦時中どこかの研究所のようなところにいて、ある程度の業績があったんです。だ

から私どもは助手から始まったんですけれど、彼はいきなり専任講師でした。私より二年位後に入ってきたんですけども。だから学内の序列からすると、彼の方が年齢は下だけれども、立場は上なんです。

遠藤　その助手のお仲間たちが、先生の中で思い出に残ってらっしゃるのでしょうか？

金井　「助手グループ」は、非常に団結が強くてね、これは、後の明治学院大学を作ってゆくための非常に大きな力になりました。「一生懸命、勉強したい」と思ってね、団結した。研究室を早く作って欲しいと、若林龍夫学長にせっついた。ところがなかなか返事をくれないものだから、このチャペルの向こう側にあった宣教師館に空き部屋があったので、実力で中に入り込んで、研究室を作っちゃったの。

遠藤　先生たちも、「過激」だったんですね。

金井　「過激」なのよ。この「助手グループ」は。一生懸命であらんがために「過激」だったのよ。我々の生命は研究だと。そのためには研究室が必要だと。宣教師館のあそこ、空いているじゃないかと。

遠藤　「占拠」しちゃったんですね？

金井　そう、「占拠」したんだよ。そこに入って使いだしたら、若林さんが怒ってね。それで「助手グループ」は、「危険視」されたね。でも、だんだん、それが認められるようになってね。

遠藤　その方たちが、明治学院のある時代を作っていったんですね？

金井　明治学院を作っていった、一番、大事なグループです。非常に研究意欲を持っていましたし、これからの、将来の明治学院は、「我々が、担うんだ」という使命感を強く持っていました。だから団結が非常に強かった。

遠藤　何か一緒に行動をなさったとか？　仕事をされたとか？

金井　ありました。定期的に研究会をやった。一週間に一回、ある特定の日に。これは自発的な研究会で、最初よく金曜日に行われたもんだから、「金曜研究会」と名前をつけていた。

幸いなことに、この若手グループの研究会に、外から自発的に来てくださった「大物」がいるんです。最初は、一橋大学教授の上田辰之助先生、社会思想の大家です。この方が、この若手グループに非常に興味を持って下さったんです。というのはね、上田先生のお弟子の一人で、磯部浩一さんが助手の一人だったんです。そういうこともあってね、上田先生が手弁当で、頼まれていないのに、「助手グループ」が研究会をやっているなら行って指導してやろう、というか、話を聞いてみたいと言って来て下さったんです。

遠藤　どの位その研究会は続いたんですか？

金井　二年か三年やりました。非常に熱心な研究会でした。そこで上田先生が、博学な先生だから、報告者に対してどんどん質問して、非常に活発な指導をして下さいました。

遠藤　阿部志郎さんは東京商科大学（現、一橋大学）のご出身ですね。

金井　そうですね。誰のゼミかは知りませんけども。

遠藤　先生が大学を離れられてずいぶん経ちましたが、『明治学院一五〇年史』にむけて、メッセージを残して頂けたらと思います。

金井　あの時の「助手グループ」の団結と友情、これは本当に強く、美しいものだった。将来の明治学院大学を背負うのは我々だという使命感があった。しかも多くはクリスチャンだった。工藤英一、磯部浩一、中島省吾、みんなクリスチャンですね。クリスチャンでない人もいました。合崎堅二とか、そのほかにもいましたけども。中桐宣也という英文学専攻の優秀な人がいましたけれども、若い時に亡くなりました。

遠藤　明治学院大学の創設期の教育を支えた若手というのは、今の「金曜研究会」のメンバーがやはり一番の中核になり、後にそれぞれの学部のいわば指導者になっていくわけですけども、今の大学は縦割ですが、最初は、やはり横につながっていたと？

金井　そうですね。横につながって固い友情を持って、親しみを持って、研究した。

遠藤　教員というのは、今は三〇〇人近くいますけど、その頃、全体で何人ほどいらしたのですか？

金井　そんなにいません。当時は、一〇〇人足らずでしょ。でも、この「助手グループ」には、非常に強い団結があった。使命感があった。

遠藤　ありがとうございました。今のお話は、きっと明治学院の歴史には記録がないでしょうから、先生は文字通り「生き証人」でいらっしゃって、その中の若手の中のメンバーだったわけですね。

金井　年齢的には一番、上だったの。でも軍隊生活を通ってきたもんだから、年齢はかさんでいました。だから、ガキ大将みたいなものでした。

遠藤　その頃の明治学院の歴史にとって大事なところについては、文章もありませんので、私なんかこうしてお聞きして初めてわかるんですが、もし何か書いたものがあれば、資料になるんですが。

金井　「金曜研究会」の最初の勉強をまとめた文集がありますよ。

遠藤　ぜひ、それは見せていただきたいです。

金井　ちょっと、探しますよ。

遠藤　ありがたいです。それは、明治学院大学草創期を知るうえで、とても重要なことだと思います。先生、ぜひお探しくださって、私どもに。

金井　ちょうど書斎を大改造してね。本なんか、あっちゃこっちゃいきまして、資料なんか見つけにくいものだからね。探します。最初の紀要が出ているはずです。

原　明治学院論叢の中の一部なんですかね？

金井　明治学院論叢とは、違ったなぁ…。

遠藤　では、自主的な同人誌みたいなテキストですか？

金井　そう、そう。「近代社会の諸問題」という題がついてましたよ。[8]

遠藤　出版社から出たものではないんですね？

金井　出版社じゃなくてね、明治学院の紀要を出していた印刷所です。

（質疑応答）

中島　先生、当時の宣教師でシェーファー先生が出てきましたが、ハナフォード先生あたりと接点はございましたか？

金井　ハナフォードさんも同時期におられ、親しくしていました。けれども私としては、留学させて下さった、スポンサーになって下さったのはシェーファーさんだからね。

中島　ハナフォード先生は、戦前にいて、戦後いち早く明治学院に戻ってきた宣教師なんですけれども、何か思い出みたいなものはありますか？

金井　ハナフォード先生については、あまり記憶に残っていませんね。シェーファー先生は、大変私の専門を理解して、労働問題や社会政策は今後大事な科目だと。で、アメリカなら、ウィスコンシン大学がい

いだろうと。「制度学派」の立場にたつコモンズが中心的な教授で、コモンズの後には、S・パールマンが後を継ぎました。コモンズ、パールマンのもとから、世界中に労働問題や労働運動史の研究家を輩出しているんです。

辻　私は、キリスト教学校教育同盟に関わりをもって、キリスト教教育のことを調べております。先生の時代、学生の紛争で非常に大変だったと思うんですけれども、その中で、先生ご自身は、キリスト教教育そのものは、どういうものかとお考えでしょうか？

金井　私は、やっぱりキリスト教の牧師の家に生まれたもんだから、明治学院は、キリスト教教育でなくてはならないという確信というか、そういう信念を持っていました。だから、後年、一番ショックを受けたのは、専任教授のクリスチャン・コードを外すという問題でした。

遠藤　そのあたりの先生のご意見を頂けますか。

金井　私は、これは「いけないなぁ」と思いました。学部長のクリスチャン・コードも外しましたね。これは、明治学院のキリスト教教育の後退ですよ。人が足らないためかね、外部からの批判も色々出たんでしょう。ノン・クリスチャンの先生方とかからもね。クリスチャン・コードを外しちゃったんだよね。学部長はともかく、後に学長のクリスチャン・コードも外しちゃったんでしょう？　これは、大変な堕落だと思うんです！　明治学院の大事なものを破棄してしまったと思いますね。でもノン・クリスチャンの先生が多くなると、そういう意見が強くなると思うんですよね。仕方がないですけれどもね。守って欲しかったです。[9]

遠藤　先生のご遺言ですかね？

金井　遺言です。学院長とか学長はね、クリスチャンであるべきですよ。福音主義のキリスト教信仰の持ち主でなきゃいかんと思いますね。

播本　先生は昭和四九年四月から学長になられているわけですが、昭和四四年頃が学生紛争の一番盛んな時期ですよね？　そうすると明治学院の紛争は時期がずれていると思いますが、それは何かあったんでしょうか？

金井　学園紛争が始まったのは、若林龍夫先生が学長の頃ですね。一番激しいのは、次の和田昌衛学長の時でしたね。

播本　では、逆に明治学院の紛争は長く続いているんですね？　一般には、昭和四六―四七年あたりになると、わりと沈静化していましたけどね。

金井　私の頃までずっと続いていたんです。私が学長に就任した時の決意というか、課題は何かというとね、それはまず学園紛争の終息。不法占拠や授業妨害、試験妨害はするべきではないので、違法行為に対して証拠がある場合には、これは必ず処罰をする。処罰は、学部教授会でやっていた。社会学部の学生だったら社会学部の教授会が処罰を決めるわけで、法学部の学生が違法行為をした場合には、法学部の教授会が処罰を決める。語弊があるかもしれませんが、経済学部なんかはずいぶんと固い学部ですよ。ところがわりと処分をしないのは、文学部や社会学部なんです。同じような違法行為をしていながら処分が異なるのでは、具合が悪いじゃないか。また、いつまでも授業妨害や試験妨害、それから校舎占拠、そういうことが続いているようでは学長としての責任が果たせないと私は就任早々に考えまして、非情な決意をしたんです。どういう決意かというとね、違法行為がはっきりとあって処分する場合、今までのように各学部

教授会ではなく、今後は、学長が直接処分を決める。どういう形でか？　それは処分委員会、つまり学部長会の議を経て、学長が直接処分をすることができるという暫定的な規約を作らなきゃいかんと思ったんです。それをどこが認定するのかといえば、やはり連合教授会に諮るしかない。そこで、連合教授会にそれを諮った。こういう状態が続く限り、私は学長の任務を果たすことができない。だから違法行為については、必ず処分をする。処分権は、学長が握る。そして、誰が、どのように処分を図るのかといえば、それは処分委員会。処分委員会は、学部長会議だと。こうまとめて、連合教授会に提案したんです。その時、私は非常に心配しました。というのも、教授会の中には過激学生に対するシンパの先生もいましたし、また逆に過激学生を恐れた先生もいましたから、そんなことを学長が提案した場合に、連合教授会で反対が出るんじゃないかとね。ところが、出したとたん、もうすぐパチパチと拍手が起こって「賛成！」。これには、驚きましたね。学長の提案を認めてくれた。で、以降、学長の処分ができやすくなったんです。大きいですよ、これは。

それから間もなく、秋のことかな？　「銀ヘル」が教室に入ってきて、ある試験を妨害した。試験の答案を全部盗ったという情報が入った。そこで、「それ行け」ってんで、学部長、事務部長クラスが、みんな飛んで行った。試験監督がいるんだけども何にもしていない。「止めろ」とか「そんなことするな」とも言わないし。私より先に行った学部長も、何にも言わないんですよ。

それで私も、少し齢をとってるから遅いんだけど辿り着いて、そこで未だかってあんな大きな声を出したことはなかったと思うんですが、「こんなとこで、何をしているんだ!!」と大喝したのよ。そしたら彼らは、キョトンとしてたね。今まで学校からそんな強いことを言われたり、叱責されたことがないもんだ

から、ビックリしたんですよ。次の瞬間、脱兎のごとく、逃げ出した。そこで、「待てぇ〜！」って追いかけたら、途中で転んじゃったんだよ。年齢をとってるせいか。そして彼らはもんどりを打って、グリーンホールの地下のアジト（部室）に逃げ込んだんだよ。

そこまでは追いかけて行かなかったけど、その翌日、明治学院大学学生新聞会のメンバーが多かったから名前は大体わかっていたので、東門の上に名前を書いて「以下の者、入構を禁ずる」と貼紙を出した。そこでさらに追い討ちをかけて処分をした。どういう処分か。「退学」という処分をしたかったけれども、それはちょっと行き過ぎかと思い、悔い改めて戻ってくれれば許してやろう、復学させてやろうと思って「無期停学」を命じた。それを決めたのが、さっきの処分委員会。で、「無期停学」と掲示に出した。結局、それ以来、過激学生の行動が収束してゆきました。

遠藤　それは面白いエピソードですね。『明治学院一五〇年史』のどこかに入れたいですね。

金井　採り入れてください。私、かつてあれほど大声を出したことがないんですから。

遠藤　「学長の一喝」という副題で。先生、色々とお話ありがとうございました。それで、「助手グループ」がまとめたものを資料としてぜひ参考にしたいので、よろしくお願いいたします。

金井　あると思います。これを指導したのは、上田辰之助先生。そして後には大塚金之助先生が、上田先生の亡くなった後にね。

遠藤　大塚先生もいらしたんですか？

金井　大学院を作るために、大塚先生を教授にお招きしたんです。大塚先生は、本当に一生懸命にやってくださいました。

遠藤　『明治学院一五〇年史』の中には、専任の教員と同時に、周りから支えてくれた人たちがいるはずです。その道の方々が。大塚先生、上田先生。ほかにも各学部にいらっしゃるはずなので、そこまでをカバーしないとやはり学院史にならないだろうというのが我々の見解なんです。

金井　そうですね。それから学生の父兄たちは、過激学生排除にはよく協力して下さいました。だから、私の学長就任四年目に、その時はまだ築地の東京一致神学校を起点に計算していましたから、その秋に日比谷公会堂で百周年記念の礼拝をいたしました。その時の式辞は、島村亀鶴理事長兼学院長が述べられていました。学院長がいなかったからです。私が事実上、学院長代行をやっていたんだけど、こういう大事な時期に学院長不在というのはおかしいから、急遽、私の提案で、島村理事長に学院長を兼務していただいた。だから、島村理事長兼学院長が、日比谷公会堂における百周年記念礼拝の式辞をなさった。二〇〇〇名以上の人が集まりました。

遠藤　島村亀鶴さんのような人も『明治学院一五〇年史』の中に出てこないといけないですね。色々なところで関係していますね。課題をお与えくださり、本当にありがとうございました。今後とも、よろしくお願いいたします。

金井　すみません。まとまらないことばかり、話しまして。

注

1　明治三七年一一月三日、植村の念願であった自主独立のための伝道者養成機関、東京神学社が、市ヶ谷教会において開校した。

2 中学校令に基づき、全国で八校のナンバースクールの一つとして設立。現、東北大学の前身校の一つ。
3 旧制第二高等学校にあった寮。ほかに科学寮・六如寮・誠之寮・忠愛寮・道交寮と称する寮があった。
4 正式名称は、南満州鉄道株式会社。明治三九年設立、昭和二〇年第二次世界大戦終結まで中国東北部（旧満州）に存在した日本の特殊会社。
5 日本基督教団芝教会牧師。
6 昭和二七年に文経学部は文学部と経済学部に分離独立した。
7 University of Wisconsin. 一八四九年に創設されたウィスコンシン州立の大学。
8 上田辰之助監修『近代社会の諸問題：経済発展と社会関係』明治学院大学経済学部編（東京：有信堂、一九五七年）
9 学長のクリスチャン・コードは一九九五年『「建学の精神」を再確認し、キリスト教主義教育を推進する中で、理事のキリスト者条項に弾力性を付与する決議』により廃止された。

二〇一〇年三月二十五日　印刷
二〇一〇年三月三十一日　発行

明治学院歴史資料館資料集【第七集】
―昭和三〇年・四〇年代の明治学院事情座談会―

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
編集代表　辻　泰一郎

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行者　久　世　了

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行所　明治学院歴史資料館
電話　〇三（五四二一）五一七〇

東京都豊島区東池袋五ノ四九ノ六
印刷所　株式会社　白　峰　社
電話　〇三（三九八三）二三一一